一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書６

京田遺跡２区
中上Ⅱ遺跡

２０２０年３月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書６

京田遺跡２区
中 上 Ⅱ 遺 跡

２０２０年３月

国土交通省松江国道事務所
島 根 県 教 育 委 員 会

1. 京田遺跡２区　遠景（北東から）

2. 京田遺跡２区　北西壁土層断面（南東から）

1．京田遺跡 2 区　SK01 検出状況（北から）

2．京田遺跡 2 区　5 層出土土器

1．中上Ⅱ遺跡　遠景（西から）

2．中上Ⅱ遺跡　遠景（南から）

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 遺物出土状況（南東から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面西壁セクション（東から）

序

現在、一般国道９号の出雲市知井宮町～湖陵町三部間は、現道では通過交通と、生活交通が混在し、幹線道路として支障をきたしているうえに、一般国道の代替路線がなく、交通事故等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしています。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、緊急時の代替路線の確保、地域経済の振興、救急医療の向上及び生活圏域の連携を促進することを目的として、出雲・湖陵道路を平成20年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分に留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、事業地内に所在する埋蔵文化財について島根県教育委員会の協力をもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成30年度に実施した「京田遺跡２区」「中上Ⅱ遺跡」の調査結果をとりまとめたものです。今回の調査では、京田遺跡から縄文時代の配石土坑が見つかり、中上Ⅱ遺跡からは弥生時代や古墳時代の集落跡や中世の大規模な盛土造成の痕跡が明らかになるなど、当時の人々の生活を考える上で貴重な成果となりました。

本報告書が島根県の歴史を伝える貴重な学術資料として、広く活用されることを願っております。最後に、本調査にご協力をいただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

令和２年３月

国土交通省中国地方整備局
松江国道事務所長　　鈴木　祥弘

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成30年度に実施した一般国道９号（出雲湖陵道路）改築事業地内に所在する京田遺跡（２区）と中上Ⅱ遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

京田遺跡では、縄文時代後期の土器や木製品が出土した他、縄文時代中期末の配石土坑が見つかりました。中上Ⅱ遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落跡が見つかり、川辺で祭祀が行われた痕跡も確認することができました。また、中世の大規模な盛土造成の様子も明らかとなり、隣接する神西城跡との関連が注目されています。

かつての出雲平野西部には『出雲国風土記』に記載される神門水海（かんどのみずうみ）が広がっており、両遺跡が位置する南岸部は縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在しています。今回の調査成果は、当時の集落の様子を知る上で重要であり、この地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。本書がふるさと島根の歴史や埋蔵文化財に対する理解を深めるために広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成にあたり、御協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、出雲市教育委員会、地元の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和２年３月

島根県教育委員会

教育長　　新田　英夫

例 言

1．本書は国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成30年度に実施した一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。

2．本報告書の発掘調査対象遺跡及び事業年度は下記のとおりである。

平成30（2018）年度　発掘調査

京田遺跡２区（出雲市湖陵町常楽寺500-2外）

中上Ⅱ遺跡（出雲市東神西町中村434-1外）

令和元（2019）年度　整理等作業・報告書作成

3．調査組織

調査主体　島根県教育委員会

平成30（2018）年度事務局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

椿　真治（所長）、石橋　聡（総務課長）、守岡正司（管理課長）

調査担当者　深田　浩（調査第一課長）、園山　薫（同課嘱託職員）、坂根健悦（同課臨時職員）、伊東　豊（同課臨時職員）、片寄雪美（同課臨時職員）

令和元（2019）年度事務局　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

椿　真治（所長）、和田　諭（総務課長）、守岡正司（管理課長）

調査担当者　深田　浩（調査第一課長）、園山　薫（同課嘱託職員）、阿部智子（同課臨時職員）、片寄雪美（同課臨時職員）

4．発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、島根県教育委員会が株式会社トーワエンジニアリングへ委託した。

5．発掘作業にあたっては、以下の方々から御指導いただいた。（五十音順、肩書は当時）

高屋茂男（島根県立八雲立つ風土記の丘学芸課長）、中村唯史（島根県立三瓶自然館学芸員）、平郡達哉（島根大学法文学部准教授）

6．発掘調査に際して、以下の方々、関係機関から御協力、御助言をいただいた。（五十音順、肩書は当時）

玉串芳一、西尾克己（元島根県古代文化センター長）、幡中光輔（出雲市文化財課主事）、三上年久、村田裕一（山口大学人文学部准教授）、矢野健一（立命館大学文学部教授）、山根正明（元松江市史料編纂室専門調査員）、山本茂生、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、湖陵コミュニティセンター、神西コミュニティセンター

7．挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系Ｘ軸方向を示し、座標系ＸＹ座標は世界測地系による。レベルは海抜高を示す。

8．本書で使用した第２・５・６図は国土地理院発行1/25,000地形図（神西湖）を、第３・７・28・30図は国土交通省松江国道事務所が作成した計画平面図1/1,000、第31図は国土交通省松江国道事務所・株式会社ワールド測量設計が作成したボーリングによる地層推定断面図を基に作成したものである。

9．本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人

日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。

10. 本調査に伴う石器類の石材鑑定については中村唯史氏に依頼した。また自然科学分析は次の機関に委託して実施し、その成果は第５章にまとめて掲載した。
樹種同定：一般社団法人文化財科学研究センター
自然科学分析（古環境復元・年代測定及び種実同定、堆積相観察）：文化財調査コンサルタント
ＡＭＳ年代測定：株式会社加速器分析研究所

11. 発掘調査に伴って、出土木製品の保存処理を次の機関に委託した。
平成30年度　（公財）大阪市文化財協会
令和元年度　（公財）大阪市文化財協会

12. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は深田・園山が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、各調査員・臨時職員・整理作業員が行ったほか、遺物の分類や鑑定等について埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。

13. 本書の執筆は、第１・２章は深田・園山、第３章は園山、第４章は深田、第６章は深田・園山が行い、第５章については各節ごとに執筆者を明記している。

14. 本書の編集は深田・園山が行った。

15. 註は各章ごとに連番を振り当該頁下に配置し、参考文献等は各章末にまとめて示した。写真、挿図及び表の番号は全体の通し番号により表示した。

16. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）にて保管している。

凡 例

１．本書で用いた土器の分類及び編年は下記の論文・報告書に依拠している。

（１）縄文土器

千葉豊編2010『西日本の縄文土器　後期』真陽社

幡中光輔2019「山陰中央部における縄文時代後期中葉の土器編年の再検討」『京田遺跡４区第６章第３節』出雲市教育委員会

（２）弥生土器・土師器

松本岩雄1991「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社

鹿島町教育委員会1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５ 南講武草田遺跡』

松山智弘2000「小谷式再検討-出雲平野における新資料から-」『島根考古学会誌』第17集

（３）須恵器

大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集

（４）土師質土器

広江耕史1992「島根県における中世土器について」『松江考古』第８号松江考古学談話会

２．本書で使用した遺構記号は次のとおりである。

Ｐ：ピット・柱穴状遺構、SD：溝状遺構、SK：土坑、SR：自然河道、流路跡

SX：性格不明遺構

本文目次

第１章　調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　1.　事業計画の概要 …… 1
　　2.　埋蔵文化財保護部局への照会と調整 …… 1
　　3.　法的手続き …… 4
　第２節　発掘調査の経過 …… 4
　　1.　京田遺跡２区 …… 4
　　2.　中上Ⅱ遺跡 …… 5
　　3.　整理作業 …… 6
第２章　遺跡の位置と環境 …… 7
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 8
第３章　京田遺跡２区の調査成果 …… 15
　第１節　京田遺跡２区の概要 …… 15
　　1.　遺跡の立地と既往の調査等 …… 15
　　2.　発掘調査区の設定 …… 16
　第２節　京田遺跡２区の調査 …… 17
　　1.　調査方法 …… 17
　　2.　基本層序 …… 17
　　3.　検出遺構とその遺物 …… 20
　　4.　遺構外出土遺物 …… 24
　第３節　小結 …… 38
　　1.　遺構 …… 38
　　2.　遺物 …… 39
第４章　中上Ⅱ遺跡の調査成果 …… 49
　第１節　調査の概要 …… 49
　　1.　遺跡の立地 …… 49
　　2.　中上Ⅱ遺跡調査区外採集品 …… 50
　　3.　試掘確認調査 …… 51
　　4.　発掘調査区の設定 …… 51
　　5.　調査の方法 …… 51
　　6.　３区の調査 …… 54
　第２節　１区の調査 …… 56
　　1.　調査の概略と検出遺構 …… 56
　　2.　基本層序 …… 56
　　3.　遺物包含層出土遺物 …… 60
　　4.　遺構と遺物 …… 63
　第３節　２区の調査 …… 104
　　1.　調査の概略と検出遺構 …… 104
　　2.　基本層序 …… 104
　　3.　遺構と遺物 …… 104

第４節　小結 …… 108
1.　１区について …… 108
2.　２区について …… 109
第５章　自然科学分析 …… 119
第１節　京田遺跡における樹種同定 …… 119
第２節　京田遺跡発掘調査に伴う自然科学分析 …… 122
第３節　中上Ⅱ遺跡における堆積相観察 …… 133
第４節　中上Ⅱ遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）…… 141
第６章　総括 …… 147
第１節　京田遺跡２区 …… 147
1.　京田遺跡の様相 …… 147
2.　京田遺跡とその周辺 …… 149
第２節　中上Ⅱ遺跡 …… 151
1.　中上Ⅱ遺跡の遺構と変遷 …… 151
2.　まとめ …… 157

挿図目次

第 1 図　京田遺跡・中上Ⅱ遺跡の位置 …… 1
第 2 図　事業地内遺跡位置図 …… 2
第 3 図　掲載遺跡位置図 …… 3
第 4 図　遺跡周辺の微地形分類図 …… 7
第 5 図　京田遺跡・中上Ⅱ遺跡と周辺の遺跡（1）…… 9
第 6 図　京田遺跡・中上Ⅱ遺跡と周辺の遺跡（2）…… 10
第 7 図　京田遺跡２区　調査区周辺図 …… 15
第 8 図　京田遺跡２区　遺構全体図 …… 16
第 9 図　京田遺跡２区　基本層序（1）…… 18
第 10 図　京田遺跡２区　基本層序（2）…… 19
第 11 図　京田遺跡２区　杭列実測図 …… 21
第 12 図　京田遺跡２区　ピット、杭実測図 …… 22
第 13 図　京田遺跡２区　SK01 実測図 …… 23
第 14 図　京田遺跡２区　SK01 出土石器実測図 …… 24
第 15 図　京田遺跡２区　集石実測図 …… 25
第 16 図　京田遺跡２区　1・3・4-1 層出土土器実測図 …… 26
第 17 図　京田遺跡２区　4-2・4-3・5 層出土土器実測図 …… 28
第 18 図　京田遺跡２区　その他の遺構外出土土器実測図 …… 29
第 19 図　京田遺跡２区　木製品実測図 …… 30
第 20 図　京田遺跡２区　1・3 層出土石器実測図 …… 31
第 21 図　京田遺跡２区　4-1 層出土石器実測図（1）…… 32
第 22 図　京田遺跡２区　4-1 層出土石器実測図（2）…… 33
第 23 図　京田遺跡２区　4-1 層出土石器実測図（3）…… 34
第 24 図　京田遺跡２区　4-2 層出土石器実測図（1）…… 35
第 25 図　京田遺跡２区　4-2 層出土石器実測図（2）…… 36
第 26 図　京田遺跡２区　4-2 層出土石器実測図（3）…… 37
第 27 図　京田遺跡２区　その他の遺構外出土石器実測図 …… 38
第 28 図　中上Ⅱ遺跡位置図 …… 49
第 29 図　中上Ⅱ遺跡　調査区外採集品実測図 …… 50
第 30 図　中上Ⅱ遺跡　調査区配置図 …… 52
第 31 図　中上Ⅱ遺跡　土層断面模式図 …… 53
第 32 図　中上Ⅱ遺跡　調査区割図 …… 54
第 33 図　中上Ⅱ遺跡　３区調査区及び土層図 …… 55
第 34 図　中上Ⅱ遺跡　1 区遺構配置図 …… 57
第 35 図　中上Ⅱ遺跡　1 区南北縦断セクション土層図 …… 58
第 36 図　中上Ⅱ遺跡　1 区南壁土層図 …… 59
第 37 図　中上Ⅱ遺跡　1 区遺物包含層出土遺物実測図（1）…… 61
第 38 図　中上Ⅱ遺跡　1 区遺物包含層出土遺物実測図（2）…… 62
第 39 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SR01 実測図 …… 64
第 40 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SR02 実測図 …… 65
第 41 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SR03 実測図 …… 66
第 42 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SR01・03 出土遺物実測図 …… 68
第 43 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SR02 出土遺物実測図 …… 68
第 44 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 1 遺構面ピット群等遺構配置図 …… 69
第 45 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 1 遺構面遺物分布図 …… 70

第 46 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 1 遺構面 SK01・02・03 実測図 …… 71
第 47 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX01・02 配置図 …… 72
第 48 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX01 実測図 …… 73
第 49 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX01 遺物出土状況図 …… 74
第 50 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX01 出土遺物実測図（1）…… 76
第 51 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX01 出土遺物実測図（2）…… 77
第 52 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX01 出土遺物実測図（3）…… 78
第 53 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX01 出土遺物実測図（4）…… 79
第 54 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX02 実測図・遺物出土状況図 …… 81
第 55 図　中上Ⅱ遺跡　1 区 SX02 出土遺物実測図 …… 82
第 56 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面調査区配置図 …… 83
第 57 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面遺構配置図 …… 84
第 58 図　中上Ⅱ遺跡　1 区西壁土層図 …… 85
第 59 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 1・2 実測図 …… 88
第 60 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 1・2 土層図 …… 89
第 61 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 1・2 遺物分布図 …… 90
第 62 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 1 出土遺物実測図（1）…… 91
第 63 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 1 出土遺物実測図（2）…… 92
第 64 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 1 出土遺物実測図（3）…… 93
第 65 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 2 出土遺物実測図 …… 93
第 66 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 3 実測図 …… 94
第 67 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 3 遺物分布図 …… 95
第 68 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 3 出土遺物実測図 …… 96
第 69 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 4 実測図 …… 97
第 70 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 4 出土遺物実測図 …… 97
第 71 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 5 実測図 …… 98
第 72 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 5 遺物出土状況図 …… 99
第 73 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面加工段 5 出土遺物実測図 …… 100
第 74 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面遺物包含層出土遺物実測図 …… 101
第 75 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面土器溜遺物出土状況 …… 102
第 76 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面土器溜遺物実測図（1）…… 103
第 77 図　中上Ⅱ遺跡　1 区第 2 遺構面土器溜遺物実測図（2）…… 104
第 78 図　中上Ⅱ遺跡　2 区遺構配置図 …… 106
第 79 図　中上Ⅱ遺跡　2 区ピット群、SD01 ～ 05 実測図 …… 107
第 80 図　中上Ⅱ遺跡　2 区遺物包含層出土遺物実測図 …… 108
第 81 図　試料採取地点 …… 122
第 82 図　試料採取位置 …… 123
第 83 図　花粉ダイアグラム …… 126
第 84 図　花粉（含有量）ダイアグラム …… 126
第 85 図　植物珪酸体ダイアグラム …… 127
第 86 図　暦年較正結果 …… 129
第 87 図　暦年較正結果一覧 …… 131
第 88 図　トレンチの配置（1 区 層相観察地点）…… 133
第 89 図　トレンチの配置（2 区 層相観察地点）…… 133
第 90 図　土砂崩れ 1（ため池～滝間：左岸の小谷）…… 134
第 91 図　土砂崩れ 2（滝～発掘地点間：右岸　左：拡大　右：遠景）…… 135
第 92 図　2 区南側に認められた地滑り跡 1（左：遠景　右：拡大）…… 135

第 93 図　2 区南側に認められた地滑り跡 2（2 区 トレンチ 3　左：遠景　右：拡大）…… 136
第 94 図　トレンチ壁面観察結果 1 区北側墓地…… 136
第 95 図　1 区西壁断面図 (観察範囲：西地点の位置)　…… 137
第 96 図　1 区西地点 (詳細観察範囲)　…… 137
第 97 図　西地点 1 …… 137
第 98 図　西地点 2 …… 138
第 99 図　西地点まとめ …… 138
第100図　1 区中央トレンチ断面図 (観察範囲：1 区中央地点の位置)　…… 139
第101図　1 区中央地点 (トレンチ南壁)　…… 139
第102図　1 区 中央地点 (トレンチ西壁南側)　…… 139
第103図　1 区東トレンチ (詳細観察範囲：1 区東地点)　…… 140
第104図　1 区東地点 …… 140
第105図　暦年較正年代グラフ（参考）(1)　…… 145
第106図　暦年較正年代グラフ（参考）(2)　…… 146
第107図　京田遺跡 1 ～ 4 区遺構配置図　…… 147
第108図　縄文～弥生時代における京田遺跡と周辺の遺跡…… 148
第109図　中上Ⅱ遺跡 1 区遺構面模式図…… 152
第110図　堤跡の推定復元図…… 154
第111図　神西城縄張り・発掘調査区配置図…… 155
第112図　神西村地籍図（明治 22 年）　…… 157

表目次

第 1 表　一般国道 9 号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う発掘調査一覧 …… 3
第 2 表　京田遺跡 2 区と 3 区・4-1 区の土層対応関係 ……20
第 3 表　京田遺跡 2 区出土遺物観察表 ……41
第 4 表　京田遺跡 2 区出土非掲載石器一覧表 ……45
第 5 表　京田遺跡 2 区出土石器　石材・器種別集計表 ……47
第 6 表　京田遺跡 2 区出土縄文土器集計表 ……48
第 7 表　中上Ⅱ遺跡出土遺物観察表 …… 110
第 8 表　京田遺跡における樹種同定結果 …… 120
第 9 表　同定対象分類群 …… 124
第 10 表　種実同定結果 …… 125
第 11 表　微化石概査結果 …… 125
第 12 表　花粉化石組成表 …… 127
第 13 表　植物珪酸体化石組成表 …… 128
第 14 表　年代測定結果 …… 128
第 15 表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）…… 143
第 16 表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）…… 144
第 17 表　縄文～弥生時代における京田遺跡と周辺の遺跡消長表 …… 148
第 18 表　中上Ⅱ遺跡検出遺構一覧表 …… 151

本文写真目次

京田遺跡 2 区現地説明会…… 4
京田遺跡 2 区調査指導…… 4
第 1 回中上Ⅱ遺跡現地説明会 …… 5
第 2 回中上Ⅱ遺跡現地説明会 …… 5

写真目次

巻頭図版１ １.京田遺跡２区 遠景（北東から）
２.京田遺跡２区 北西壁土層断面（南東から）
巻頭図版２ １.京田遺跡２区 SK01 検出状況（北から）
２.京田遺跡２区 ５層出土土器
巻頭図版３ １.中上Ⅱ遺跡 遠景（西から）
２.中上Ⅱ遺跡 遠景（南から）
巻頭図版４ １.中上Ⅱ遺跡１区 SX01 遺物出土状況（南東から）
２.中上Ⅱ遺跡１区 第２遺構面西壁セクション（東から）
図版１ １.京田遺跡２区 遠景（南から）
２.京田遺跡２区 空撮（上部が南東）
図版２ １.京田遺跡２区 調査前状況（東から）
２.京田遺跡２区 調査区（南から）
図版３ １.京田遺跡２区 中央トレンチ（西から）
２.京田遺跡２区 杭列検出状況（南から）
図版４ １.京田遺跡２区 ３層検出状況（南から）
２.京田遺跡2区 5層上面検出状況（東から）
図版５ １.京田遺跡2区 5層上面検出状況（北から）
２.京田遺跡２区 P1半裁状況（南から）
３.京田遺跡２区 P2完掘状況（北東から）
４.京田遺跡２区 P3完掘状況（南から）
５.京田遺跡２区 杭１半裁状況（南から）
図版６ １.京田遺跡２区 SK01検出状況(東から)
２.京田遺跡2区 SK01完掘状況（南東から）
図版７ １.京田遺跡２区 集石検出状況（北から）
２.京田遺跡2区 5層上面調査状況（東から）
図版８ １.京田遺跡２区 1・3・4-1層出土土器
２.京田遺跡２区 4-1層出土土器
図版９ １.京田遺跡２区 4-2・4-3・5層出土土器
２.京田遺跡２区 5層出土土器
図版10 １.京田遺跡2区 その他の遺構外出土土器
２.京田遺跡２区 SK01出土石器
図版11 １.京田遺跡２区 SK01検出礫（標石）
２.京田遺跡2区 1・1-1・3・4層出土石器
図版12 １.京田遺跡２区 4-1・4-2層出土石器
２.京田遺跡２区 4-1層出土石器
図版13 １.京田遺跡２区 4-1・4-2層出土石器
２.京田遺跡２区 4-2層出土石器
３.京田遺跡2区 4-1・4-2層出土石器
図版14 １.京田遺跡2区 3層以下・4-2層・その他の遺構外出土石器
２.京田遺跡2区 4-2層出土石器
図版15 １.京田遺跡2区 4-1・4-2層出土石器
図版16 １.京田遺跡2区 出土木製品
図版17 １.中上Ⅱ遺跡 遠景（北から）
２.中上Ⅱ遺跡 遠景（南から）
図版18 １.中上Ⅱ遺跡 遠景（西から）
２.中上Ⅱ遺跡 遠景（東から）
図版19 １.中上Ⅱ遺跡1区 調査前（西から）
２.中上Ⅱ遺跡1区 調査前（東から）
図版20 １.中上Ⅱ遺跡3区 調査前（西から）
２.中上Ⅱ遺跡3区 調査区3完掘後（西から）
図版21 １.中上Ⅱ遺跡1区 表土掘削後（東から）
２.中上Ⅱ遺跡1区 表土掘削後（西から）
図版22 １.中上Ⅱ遺跡1区 北側岩盤検出状況(東から)
２.中上Ⅱ遺跡1区 SR01・02検出状況（東から）
図版23 １.中上Ⅱ遺跡1区 SR01検出状況（西から）
２.中上Ⅱ遺跡1区 SR01セクション（西から）
図版24 １.中上Ⅱ遺跡1区 SR01完掘状況（西から）
２.中上Ⅱ遺跡1区 SR01完掘状況（東から）
図版25 １.中上Ⅱ遺跡1区 SR02セクション（西から）
２.中上Ⅱ遺跡1区 SR02セクション（東から）
図版26 １.中上Ⅱ遺跡1区 SR02完掘状況（西から）
２.中上Ⅱ遺跡1区 SR01・02完掘状況（西から）
図版27 １.中上Ⅱ遺跡1区 SR03完掘状況（北から）
２.中上Ⅱ遺跡1区 南壁セクション（北から）
図版28 １.中上Ⅱ遺跡1区 SX01遺物出土状況（東から）
２.中上Ⅱ遺跡1区 SX01遺物出土状況（西から）

図版29 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX01完掘状況（東から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX01完掘状況（西から）
図版30 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX02遺物出土状況（西から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX02完掘状況（西から）
図版31 1.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面検出状況（南から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面検出状況（西から）
図版32 1.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面SK02セクション（西から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面SK01セクション（西から）
図版33 1.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面SK01・02完掘状況（南から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面SK03セクション（北から）
図版34 1.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面SK03完掘状況（南西から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面完掘状況（南西から）
図版35 1.中上Ⅱ遺跡1区 第1遺構面完掘状況（南から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面西壁セクション（東から）
図版36 1.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段1遺物出土状況（西から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段1遺物出土状況（東から）
図版37 1.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段1セクション（東から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段1完掘状況（西から）
図版38 1.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段2完掘状況（東から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段3完掘状況（西から）
図版39 1.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段3完掘状況（東から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段4完掘状況（西から）
図版40 1.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段5遺物出土状況（西から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段5セクション（東から）
図版41 1.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段5床面検出状況（東から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面加工段5完掘状況（西から）
図版42 1.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面土器溜遺物出土状況（西から）
2.中上Ⅱ遺跡1区 第2遺構面完掘状況（西から）
図版43 1.中上遺跡1区 第2遺構面完掘状況（東から）
2.中上Ⅱ遺跡2区 調査前（北東から）
図版44 1.中上Ⅱ遺跡2区 調査前（西から）
2.中上Ⅱ遺跡2区 調査前（東から）
図版45 1.中上Ⅱ遺跡2区 遺構面検出状況（西から）
2.中上Ⅱ遺跡2区 西壁セクション（東から）
図版46 1.中上Ⅱ遺跡2区 SD01完掘状況(西から)
2.中上Ⅱ遺跡2区 SD02・03完掘状況（西から）
図版47 1.中上Ⅱ遺跡2区 SD群、ピット群完掘状況（北東から）
2.中上Ⅱ遺跡2区 SD群、ピット群完掘状況（北西から）
図版48 1.中上Ⅱ遺跡2区 完掘状況（西から）
2.中上Ⅱ遺跡2区 完掘状況（東から）
図版49 1.中上Ⅱ遺跡 調査区外採集品
2.中上Ⅱ遺跡 調査区外採集品
3.中上Ⅱ遺跡1区 遺物包含層出土遺物
図版50 1.中上Ⅱ遺跡1区 遺物包含層出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 遺物包含層出土遺物
図版51 1.中上Ⅱ遺跡1区 遺物包含層出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 遺物包含層出土遺物
図版52 1.中上Ⅱ遺跡1区 遺物包含層出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 遺物包含層出土遺物
図版53 1.中上Ⅱ遺跡1区 遺物包含層出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SR02出土遺物
図版54 1.中上Ⅱ遺跡1区 SR01・02・03出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SR02出土遺物
図版55 1.中上Ⅱ遺跡1区 SR02出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
図版56 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
図版57 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物

図版58 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
図版59 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
図版60 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
図版61 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX01出土遺物
3.中上Ⅱ遺跡1区 SX02出土遺物
図版62 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX02出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SX02出土遺物
図版63 1.中上Ⅱ遺跡1区 SX02出土遺物
図版64 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
図版65 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
図版66 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
図版67 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
図版68 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1・2出土遺物
図版69 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段3出土遺物
図版70 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段3出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段1・3・5出土遺物
図版71 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段3・5出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段4出土遺物
図版72 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段5出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段5出土遺物
図版73 1.中上Ⅱ遺跡1区 加工段4出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 加工段4出土遺物
図版74 1.中上Ⅱ遺跡1区 土器溜出土遺物
図版75 1.中上Ⅱ遺跡1区 土器溜出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡2区 遺物包含層出土遺物
図版76 1.中上Ⅱ遺跡2区 遺物包含層出土遺物
2.中上Ⅱ遺跡1区 SR02、遺物包含層出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

1.　事業計画の概要

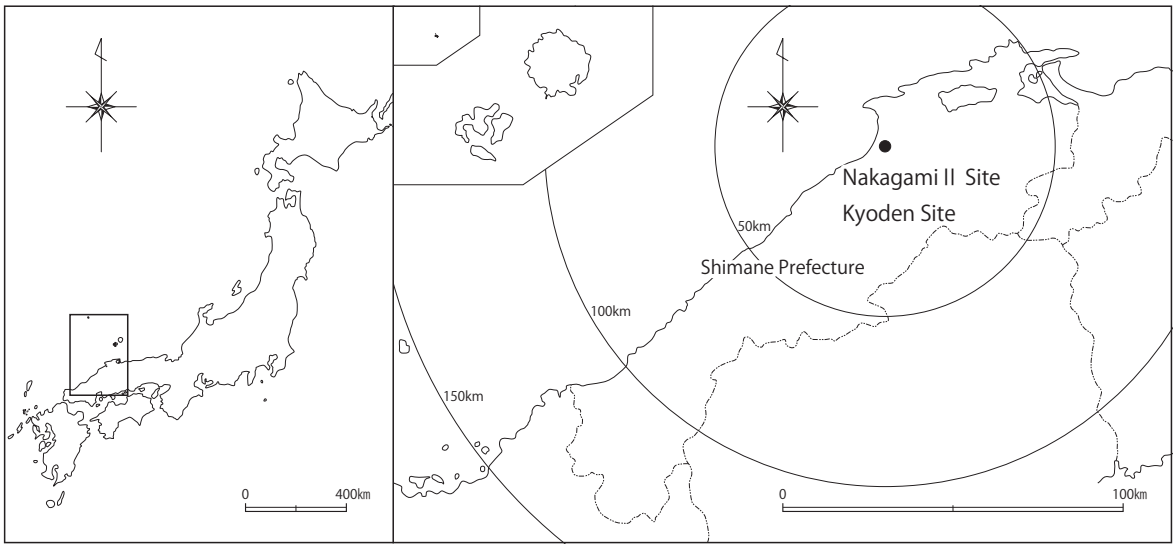
一般国道９号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長距離750㎞の、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。近年は都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は島根県下でも例外ではない。出雲市周辺においては、通過車両と生活車両が混在し、県中西部方面から出雲市中心部への流入部付近で交通混雑が発生しており、交通事故の多発や地域経済活動への悪影響が懸念されている。

こうした状況のもと、現道の渋滞対策や交通危険箇所を解消し、一般国道のバイパスとして高速道路の連続性をできるだけ早く確保するために、国土交通省により出雲湖陵道路の事業化が図られ、平成18年３月に出雲仁摩線として都市計画決定された。一般国道９号（出雲湖陵道路）は、出雲市知井宮の山陰自動車道出雲インターチェンジを起点として、同市湖陵町三部の湖陵インターチェンジ（仮称）までを延長4.4㎞の自動車専用道路として、平成20年度に事業が着手された。

2.　埋蔵文化財保護部局への照会と調整

計画策定の段階での重要遺跡の存否照会によって、尼子十旗に数えられる神西城跡がルート上にあることが判明した。島根県教育委員会と国土交通省は協議を重ね、トンネル工法に変更することで保存することが決まった。事業化に際して、国土交通省から島根県教育委員会に対して事業予定地内における埋蔵文化財の有無について照会が行われた。これを受けて島根県教育委員会では出雲市教育委員会の協力のもと、平成22年３月に分布調査を実施し、周知の遺跡に加えて試掘確認調査を要する要注意箇所を確認し、発掘調査及び試掘確認調査が必要な旨を平成22年５月25日付け島教文財第233号で回答した。その後も工事用道路や調整池整備等の付帯工事に伴う分布調査を数次にわたって行っている。

島根県教育委員会は国土交通省と協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を平成



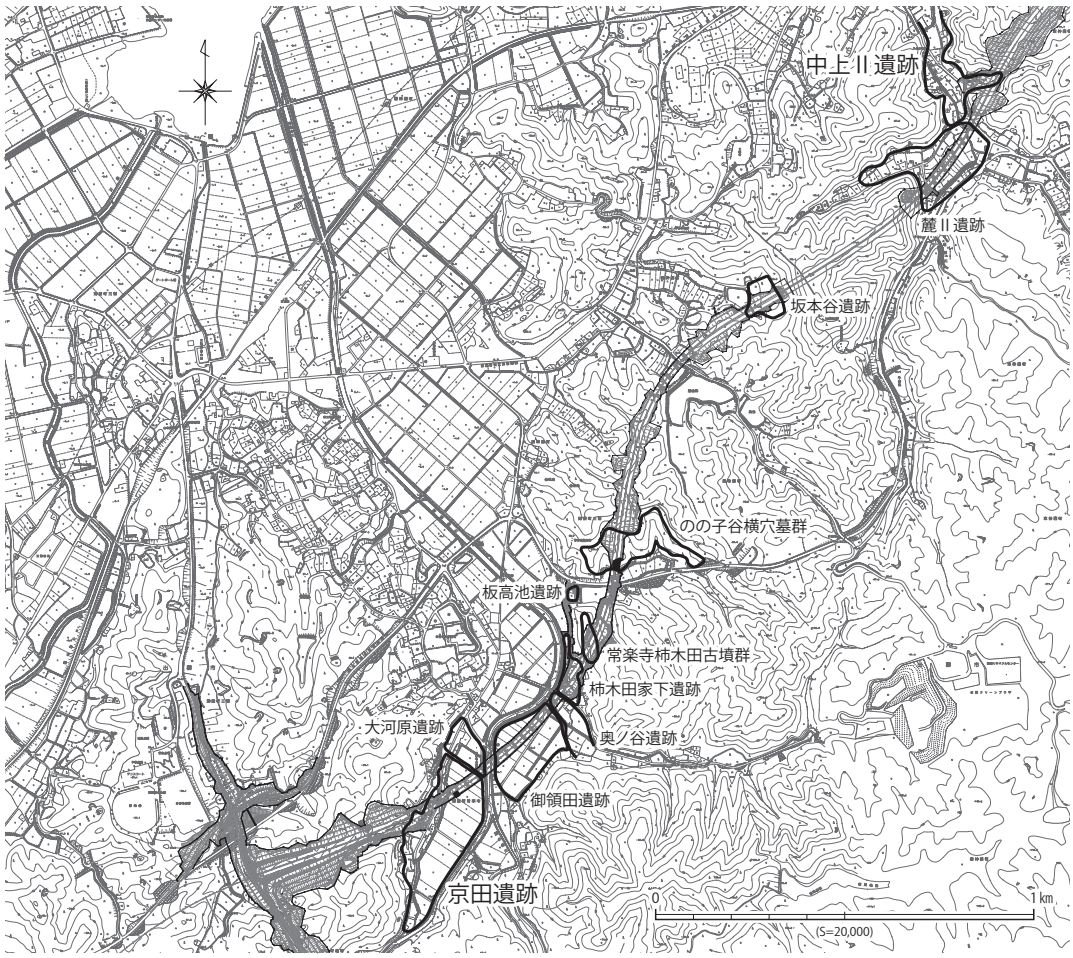
第１図　京田遺跡・中上Ⅱ遺跡の位置

番号	遺跡名	所在地	種別	本発掘調査
①	浅柄Ⅲ遺跡	出雲市知井宮町	集落跡	平成 28 年度
②	柳ノ内Ⅱ遺跡	出雲市知井宮町	古墳	（平成 24 年度試掘確認調査のみ）
③	玉泉寺裏遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26 年度
④	九景川遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26 年度
⑤	中上Ⅱ遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 30 年度
⑥	麓Ⅱ遺跡	出雲市東神西町	集落跡	平成 26・27 年度
⑦	神西城跡	出雲市東神西町	城跡	（工法変更）
⑧	坂本谷遺跡	出雲市西神西町	集落跡	平成 27 年度
⑨	のの子谷横穴墓群	出雲市湖陵町	古墳・横穴墓	平成 27 年度
⑩	板高池遺跡	出雲市湖陵町	集落跡	（平成 26 年度試掘確認調査のみ）
⑪	常楽寺柿木田古墳群	出雲市湖陵町	古墳	（一部工法変更）平成 29 年度
⑫	柿木田家下遺跡	出雲市湖陵町	散布地	（平成 28・29 年度試掘確認調査のみ）
⑬	奥ノ谷遺跡	出雲市湖陵町	散布地	（平成 29 年度試掘確認調査のみ）
⑭	御領田遺跡	出雲市湖陵町	集落跡・貝塚	平成 5 年度、平成 29・30 年度試掘確認調査
⑮	大河原遺跡	出雲市湖陵町	散布地	（平成 27 年度試掘確認調査のみ）
⑯	京田遺跡	出雲市湖陵町	集落跡	平成 27 ～ 30 年度

第２図　事業地内遺跡位置図（S=1:25,000）

第１表　一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う発掘調査一覧

調査年度	遺跡名	調査主体	シリーズ番号	報告書刊行年	遺跡の概要	主な出土遺物
平成 26 年度（2014）	麓Ⅱ遺跡（1~4 区）	島根県教育委員会	1	2017	縄文時代後期の土坑、古代から中世の溝	縄文土器、弥生土器、須恵器、石器、木器
平成 26 年度（2014）	坂本谷遺跡	島根県教育委員会	1	2017	古代末から中世の集落跡、柵列状のピット群	土師器、陶磁器、金属器、銭貨
平成 26 年度（2014）	玉泉寺裏遺跡（Ⅵ区・Ⅶ区）	島根県教育委員会	2	2017	弥生時代後期後葉の建物跡のほか、弥生時代後期から古墳時代中期の遺物が出土	弥生土器、土師器、須恵器、石器
平成 26 年度（2014）	九景川遺跡（Ⅴ区）	島根県教育委員会	2	2017	古墳時代後期から終末期の加工段	弥生土器、土師器、須恵器、石器、玉類
平成 27 年度（2015）	麓Ⅱ遺跡（5 区）	島根県教育委員会	1	2017	縄文時代後期の土坑、古代から中世の溝	縄文土器、弥生土器、須恵器、石器、木器
平成 27 年度（2015）	京田遺跡（1 区）	島根県教育委員会	1	2017	弥生時代から古代の集落跡	土師器、須恵器、陶磁器
平成 27 年度（2015）	のの子谷横穴墓群	島根県教育委員会	3	2017	古墳時代後期後葉に造られた横穴墓 6 基	須恵器、土師器、金属器
平成 28 年度（2016）	京田遺跡（3 区）	島根県教育委員会	3	2017	縄文時代後期の土坑、ピット等	縄文土器、石器、骨角器
平成 28 年度（2016）	浅柄Ⅲ遺跡	島根県教育委員会	4	2017	古墳時代後期後葉を中心とした集落跡、加工段、造り付け竈	須恵器、土師器、陶磁器、金属器
平成 28 年度（2016）	京田遺跡（4 区）	出雲市教育委員会		2019	縄文時代後期の土坑、ピット等	縄文土器、石器
平成 29 年度（2017）	常楽寺柿木田古墳群	島根県教育委員会	5	2019	弥生時代後期の竪穴建物跡 2 棟	弥生土器、石皿、土師器、須恵器
平成 30 年度（2018）	京田遺跡（2 区）	島根県教育委員会	6	2020	縄文時代中期末の配石土坑	縄文土器、石器
平成 30 年度（2018）	中上Ⅱ遺跡	島根県教育委員会	6	2020	弥生時代後期から古墳時代後期の集落跡の他、中世前半期の盛土跡	弥生土器、土師器、須恵器、石器
シリーズ番号：『一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』						



第３図　掲載遺跡位置図

22年度から国庫補助事業により実施し、以後、予定地内の各埋蔵文化財の調査・取り扱いについて具体的な検討が行われた。このうち常楽寺柿木田古墳群は、前方後円墳の可能性のある１号墳の一部が事業予定地に隣接する可能性があることが明らかとなり、平成22年６月～ 11月に取り扱いにかかる協議が行われた。この間、１号墳の試掘確認調査を実施したところ、前方後円墳と判断される要素をもち、築造が古墳時代前期と考えられるなど、湖陵町地内で最大かつ最古級の古墳であることが判明した。これを受け同年12月、１号墳について国土交通省に保存の協議を行っている。その後、設計変更などにより、１号墳の墳丘のほとんどを保存する方向で協議を継続することとなった。京田遺跡は平成27年５月と同年10月及び平成28年６月に、中上Ⅱ遺跡は平成26年９月に試掘確認調査を実施し、本発掘調査が必要な範囲等を定めている。

3.　法的手続き

京田遺跡は平成27年９月18日付け国中整松調設第65号で、中上Ⅱ遺跡は平成27年３月23日付け国中整松工第94号で文化財保護法第94条第１項の規定による通知が国土交通省から島根県教育委員会教育長あて提出された。それに対して島根県教育委員会は、試掘調査の結果を踏まえ、京田遺跡は平成27年９月18日付け島教文財第120号の89、中上Ⅱ遺跡は平成27年３月23日付け島教文財第35号の111で、それぞれ記録作成のための発掘調査の実施を勧告している。

各遺跡は埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなり、国土交通省と工程上の協議を経て発掘調査を実施した。文化財保護法第99条第１項の規定による通知は、京田遺跡２区は平成30年８月17日付け島教埋第216号、中上Ⅱ遺跡は平成30年６月４日付け島教埋第133号で島根県埋蔵文化財センター所長から島根県教育委員会教育長あてに提出した。

現地調査終了後、各遺跡の取扱いは記録保存することとなり、京田遺跡２区は平成31年１月30日付け島教文財第410号の７、中上Ⅱ遺跡は平成31年１月25日付け島教文財第410号の６で島根県教育委員会教育長から松江国道事務所長あて終了報告を提出した。

京田遺跡２区現地説明会

第２節　発掘調査の経過

1.　京田遺跡２区

今回調査を実施した２区は、暫定２車線で工事が行われる橋台・橋脚部整備箇所であり、前年度までに調査を終えた１区と３区の間に位置する丘陵裾部にあたる。発掘作業は、平成30年９月19日～ 12月27日にかけて実施した。調査区は丘陵裾の標高18ｍにある道路から標高13.5ｍの水田部まで大部分が法面に相当し、法面盛土の重機掘削を深度２ｍまで行ったが、包含層及び地山の検出に至らなかった。これを受け、協議の結果、懸案だった道路側への矢板打設工事と調査区内にあった農業排水路の移設工事を施工す

京田遺跡２区調査指導

ることとなった。工事完了後、重機掘削による法面盛土の除去を再開し、その後11月26日より人力掘削を開始した。

丘陵側からの浸水や周囲の水田からの湧水が著しいため、調査区周囲に溝を掘り、排水しながら掘り下げるという工程を繰り返して調査を進めた。遺物包含層の４層からは縄文土器や石器が出土し、遺構面では検出した土坑や小ピット等の半裁、写真撮影、測量等の記録作成を行った。標高12m以下で自然堆積と考えられる５層（暗灰青色）を検出するとともに湧水が激しくなり、壁面崩壊の危険が生じたため、トレンチにより下層の土層堆積状況を確認し、掘削を完了した。

調査中、12月20日に幡中光輔氏から検出した遺構・遺物について調査指導を受けた。

12月25日には空中写真撮影を行い、自然科学分析の土壌サンプリングに合わせて渡辺正巳氏から遺跡の環境や土壌堆積状況について知見を得､5層は自然堆積であるとの指導を受けた。12月26日には地元向けの現地公開を開催し、10名の参加を得た。完了協議は12月25日に実施し、地形測量等の記録作業を行った後、12月27日にはすべての作業が終了した。

2.　中上Ⅱ遺跡

調査対象地は、道路本線工事に伴う調整池整備が計画される箇所であり、神西湖に注ぐ九景川下流の沖積低地に面した小規模な谷間に立地する。発掘作業は平成30年７月24日から着手し、調査区は試掘確認調査の結果及び地形的な制約から３区に分けて調査を行った。

谷間の平坦地に設定した１区は、宅地開発による造成土が厚く堆積しており、試掘確認調査で判明している遺物包含層までは重機掘削を行い、その後人力による発掘作業を行った。造成土を除去したところ、かつて谷底部の中央付近を流れていた幅約７mの自然河道や水路跡を検出したが、埋没状況や出土品から、この自然河道は近代以降に平坦地造成のため埋め立てられたことが明らかとなった。この自然河道の北側には河岸段丘状の平坦面が広がっており、上面から中世とみられる多数の柱穴状遺構や焼土土坑を検出した。また、谷奥側の川岸では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が集中して出土する地点を２か所で検出し、状況から川辺での祭祀行為が行われた可能性もある。自然河道や河岸段丘状平坦面（第１遺構面）の遺構の調査を10月29日で終えたが、平坦面の下層の状況を確認するためトレンチ掘削を数か所で実施したところ、深さ約１mの地点で弥生時代後期の土器片や柱穴状の遺構（第２遺構面）を検出した。このため､11月５日に中間協議を行い、第１遺構面の調査完了と今後の調査方法について確認した。この間､11月２日には地元向けの現地公開を行い33名の参加があった。11月５日には幡中光輔氏の調査指導を受けた。

第１回中上Ⅱ遺跡現地説明会

第２回中上Ⅱ遺跡現地説明会

11月５日から再び重機により第２遺構面上面まで掘削を行い、その後は人力で遺構の検出作業を実施した。結果、弥生時代後期～古墳時代後期の加工段状遺

構を５か所で検出し、この谷間を流れる川岸の平坦面で継続的に集落が営まれていた様子が明らかとなった。11月15日は平郡達哉氏の調査指導を受け、11月18日には２回目の現地公開を実施し15名の参加があった。調査も終盤となった12月12・13日には渡辺正巳氏による遺跡の環境や地質について分析調査を受け、第２遺構面を厚く覆う堆積土は人為的な盛土である可能性が高いと指摘を受けた。12月７日にはすべての遺構を完掘し、空撮を実施。12月13日には記録作成作業を完了し、併せて３回目となる現地公開を行い20名の参加があった。12月17日に完了協議を行い、調査区の埋め戻しを行った。

２区は谷間奥の南側丘陵の急峻な斜面に形成された小規模な平坦地に設定した。調査は11月15日から着手したが、効率的に調査を進めるため事前に数か所のトレンチ調査を行い、遺構・遺物が確認された箇所について調査範囲を面的に広げた。調査の結果、地表下1.2ｍで曲輪状に広がる遺構面を確認し、中世頃とみられる溝状遺構や柱穴状遺構を多数検出した。12月７日にはすべての遺構を完掘した。

３区は谷間奥を流れる滝や渓流の周辺に設定した調査区である。付近に水辺の祭祀遺構が存在することも想定されたが、効率的に調査を進めるため、小規模な調査区を数か所で設定し、遺構・遺物が確認された箇所について面的に調査範囲を広げることとした。調査は８月17日から着手したが、遺構・遺物とも検出できなかったため、調査範囲の拡幅を行わず調査を完了した。

調査区の埋め戻しは、翌年の１月15日に完了し、国土交通省に引き渡しを行った。このほか、２区で検出した中世とみられる遺構面や、１区の大規模な盛土造成の性格を隣接する中世城郭神西城跡との関連で検討するため、１月17日に高屋茂男氏の現地指導を受けた。

3.　整理作業

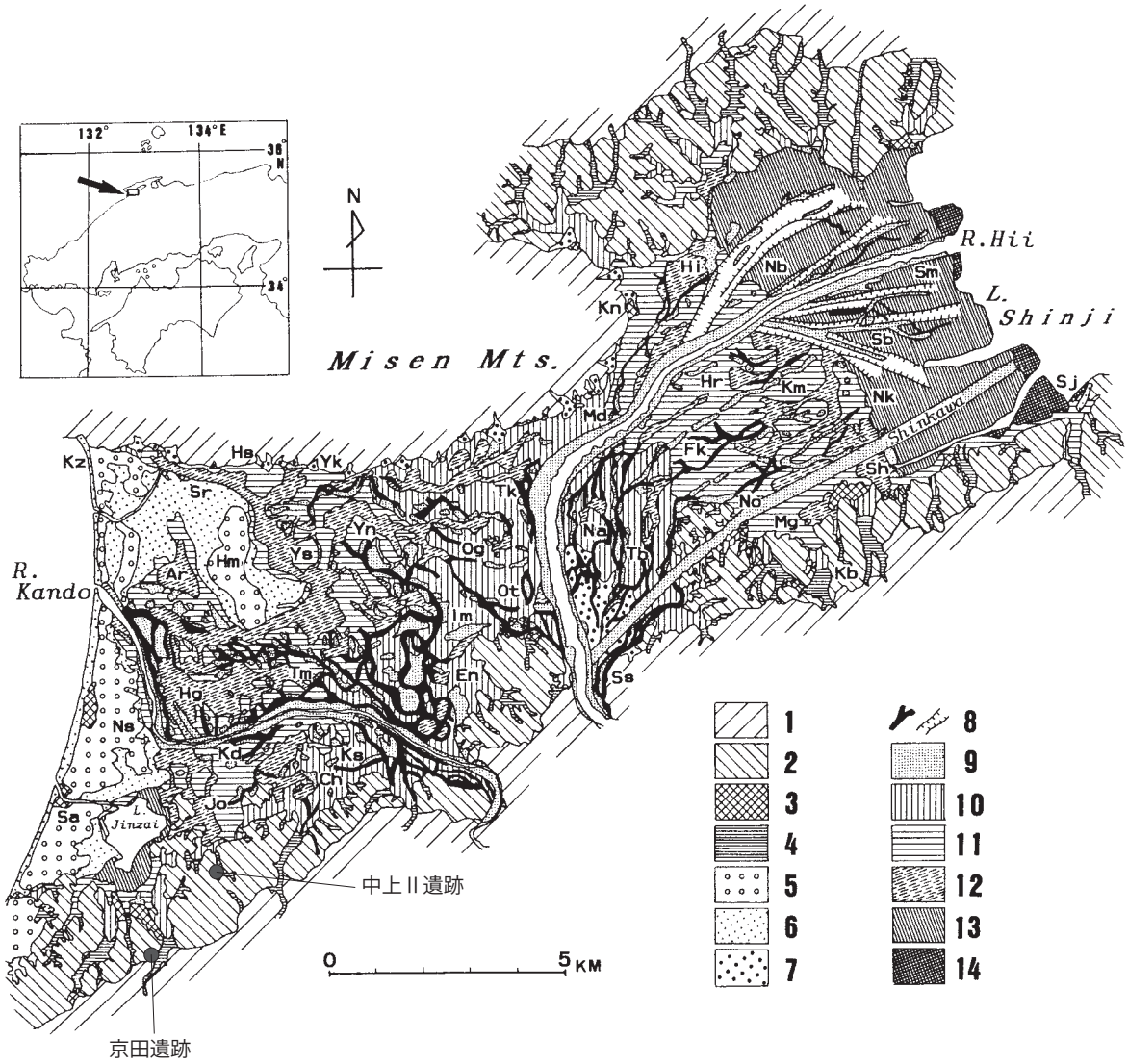
遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、冬季は埋蔵文化財調査センターにて復元・実測等の整理作業を行った。平成31年度は遺物の分類作業を進め、５月24日には中村唯史氏から京田遺跡２区出土石器の石材同定について調査指導を受けた。また、現地調査終了後に整理した図面・写真等の記録類についても総合的な整理検討を行い、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、割付、原稿執筆を行った。画像処理・図版作成・編集等にはAdobe社のソフトを使用した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

京田遺跡と中上Ⅱ遺跡は、出雲平野南西部の丘陵あるいは丘陵に挟まれた谷間に位置する。京田遺跡は出雲市湖陵町常楽寺に所在し、南から神西湖に注ぐ常楽寺川によってできた谷部にあって常楽寺川左岸の丘陵縁辺部に位置する。中上Ⅱ遺跡は東神西町中村に所在し、神西湖に注ぐ九景川の支流沿いにできた丘陵谷部に位置する。

出雲平野は、中国山地と北山山系（島根半島）に南北を挟まれ、斐伊川と神戸川の二大河川の沖積作用によって形成された沖積平野で、東西約20㎞、南北約５㎞にわたる県下最大の平野である。



1. 山地，2. 丘陵地，3. 段丘，4. 谷底平野，5. 砂丘地，6. 砂州，7. 扇状地・沖積錐，8. 旧河道，9. 微高地，10. 三角州Ⅰ面，11. 三角州Ⅱ面，12. 低湿地，13. 埋立・干拓地Ⅰ，14. 埋立・干拓地Ⅱ
Sm: 島村，Nb: 灘分，Hi: 平田，Kn: 国富，Md: 美談，Sj: 宍道，Sh: 荘原，Nk: 中洲，Sb: 三分市，Km: 黒目，Hr: 原鹿，Fk: 福富，No: 直江，Mg: 三絡，Kb: 神庭，Na: 名島，Tb: 富村，Ss: 出西，Ot: 大津，Og: 荻杼，Tk: 武志，Im: 今市，En: 塩冶，Yn: 矢野，Ys: 八島，Tm: 高松，Ks: 古志，Ch: 知井宮，Kd: 神門，Jo: 神西沖，Hg: 東園，Ns: 西園，Ar: 荒木，Kz: 杵築，Sr: 修理免，Hm: 浜山，Hs: 菱根，Yk: 遙堪，Sa: 差海

第４図　遺跡周辺の微地形分類図（1/150,000）（林1991から転載）

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、現在の出雲平野南西部から神西湖一帯は「神門水海」として水域が広がっていた。約6,000年前の縄文海進時には出雲平野から宍道湖周辺にかけて内湾（古宍道湖）が形成されて海域化し、現在の神西湖と周辺の低地帯はその一部であった。その後の海退期には河川の河口部で三角州の形成が進んで沖積平野が広がる。このような出雲平野の発達に大きな影響を及ぼしたのは三瓶山の火山活動であった。特に約5,500年前（縄文時代前期後葉）と約4,000年前（縄文時代後期前葉）の２回の噴火活動によって、三瓶山の火砕物が神戸川に多量に流れ込んで下流域の扇状地を発達させる膨大な土砂をもたらし、平野の原型を生み出したと考えられる。これ以降、斐伊川や神戸川などの沖積作用により内湾環境であった出雲平野の形成は進み、東側は現在の宍道湖、西側には神西湖の原型となる神門水海が形成されていく（旧河道と神門水海の推定域を第５図に示した）。神門水海は斐伊川や神戸川をはじめ常楽寺川や十間川、九景川等による河川の沖積作用により次第に埋められていった。それ以降も沖積により水域の陸化は進んでいくが、神戸川の堆積作用に伴う潮流口の閉鎖によって約1,000年前に再び淡水環境となる。

中世から近世にかけて山間部でのたたら製鉄に伴う鉄穴流しによって多量の土砂が斐伊川や神戸川に流れ、平野の地形発達に影響を与えた。神西湖は神戸川の堆積作用で水域が縮小し、300年前までにはほぼ現在の形となった。

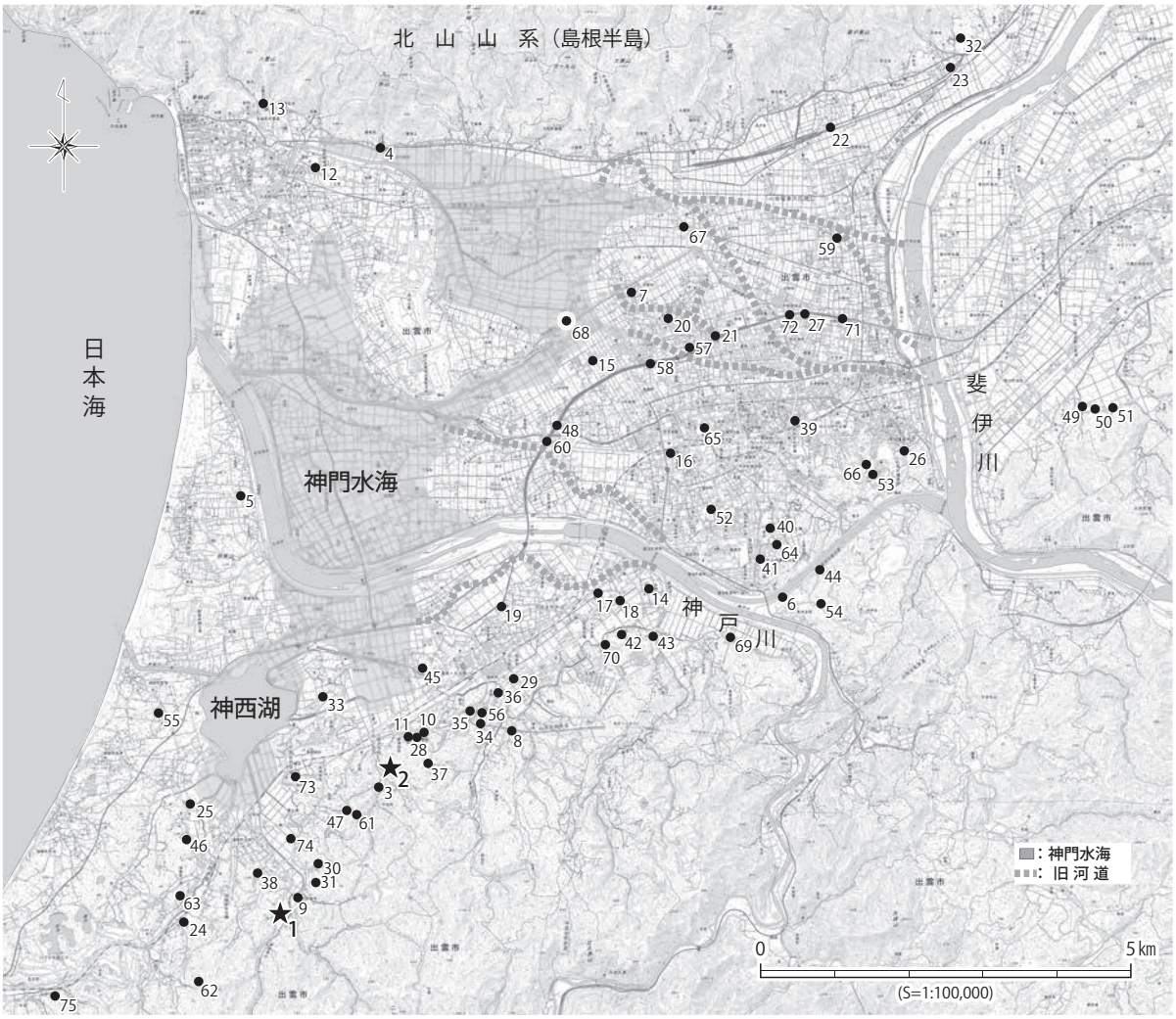
第２節　歴史的環境

縄文時代

出雲平野における遺跡の初現は早期の押型文が出土した山持遺跡（22）である。早期末から前期にかけては湖陵町内の板津焼山遺跡（55）のほか、北山南麓の菱根遺跡（4）や大社湾沿いの古砂丘上に立地する上長浜貝塚（5）などが知られている。菱根遺跡や上長浜貝塚では隠岐島産黒曜石製の石鏃が確認され、海を渡った交流があったと考えられる。

中期の遺跡は少ないが、中期後半から後期初頭になると遺跡が多く確認されるようになる。三田谷Ⅰ・Ⅲ遺跡（6）や築山遺跡（64）などがあり、三田谷Ⅰ遺跡では後期初頭から後期前葉の板状土偶が出土し、丸木船が出土している。また、奥ノ谷遺跡（86）、麓Ⅱ遺跡（3）で土器がまとまって出土している。周辺では、常楽寺川を挟んで対岸に位置する御領田遺跡（9）で出雲平野部では例のない後期前葉の竪穴建物が確認された。また、京田遺跡（1）では、３区で土坑やピット、4-1区で竪穴建物や配石土坑などとともに、多量の遺物が出土した。これらの多くは後期中葉に相当することから、御領田遺跡を含む谷部全体に集落が展開するものと考えられる。

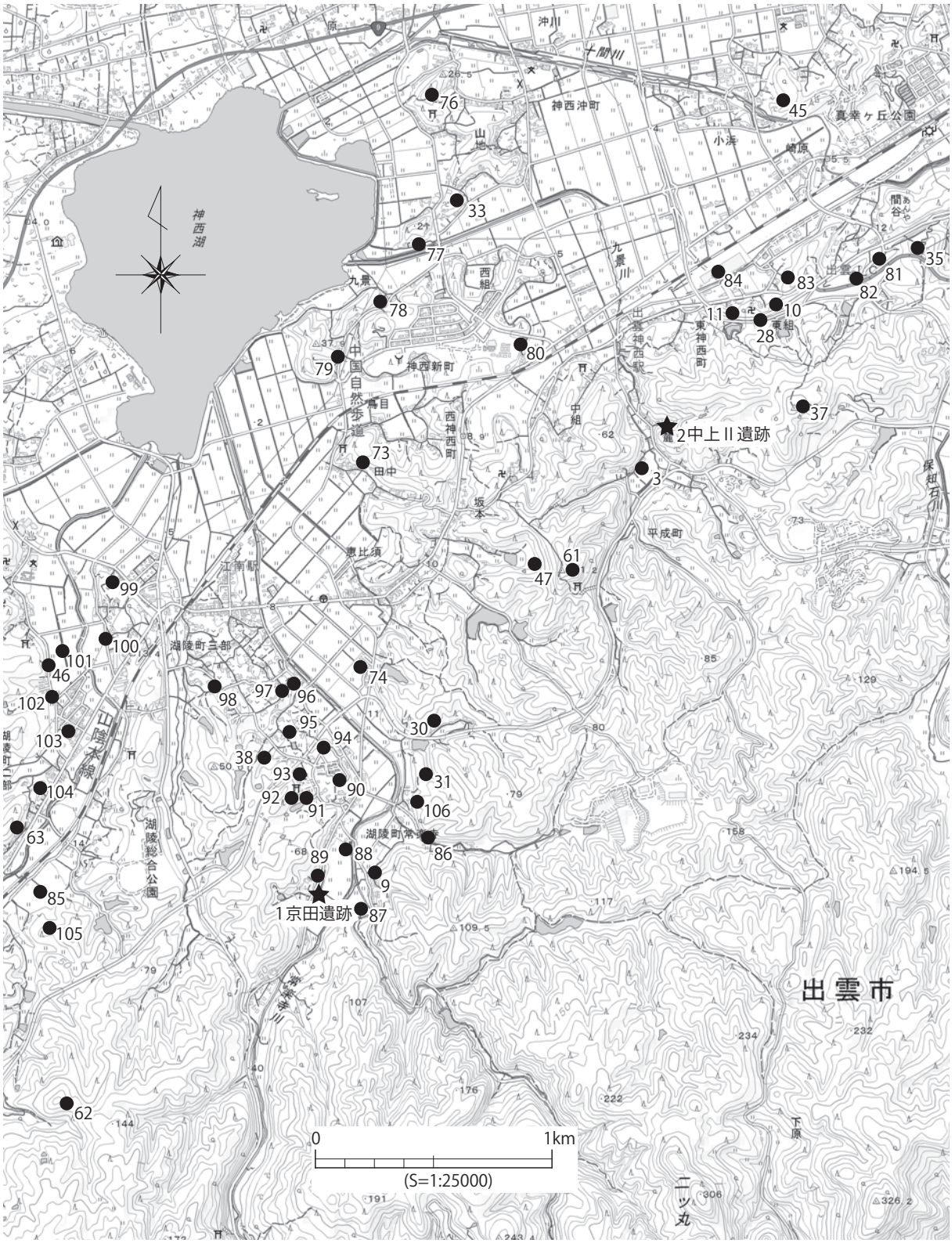
晩期には出雲平野の発達がさらに進み、平野部を中心に多くの遺跡が確認される。三田谷Ⅰ遺跡など以前から継続する遺跡のほか、平野中心部の矢野遺跡（7）では突帯文土器が出土する。湖陵町内では三部竹崎遺跡（74）や三部八幡下遺跡（101）、周辺では九景川遺跡（11）、保持石遺跡（8）、浅柄遺跡（29）などで晩期の土器や石器が出土することから、周辺一帯で集落が形成されていたことが窺える。



（島根県古代文化センター 2012 神門水海の推定湖岸線と出雲大川の推定河道図を合成）

1.京田遺跡	2.中上Ⅱ遺跡	3.麓Ⅱ遺跡	4.菱根遺跡	5.上長浜貝塚
6.三田谷Ⅰ・Ⅲ遺跡	7.矢野遺跡	8.保知石遺跡	9.御領田遺跡	10.御崎谷遺跡
11.九景川遺跡	12.原山遺跡	13.出雲大社境内遺跡	14.古志本郷遺跡	15.白枝荒神遺跡
16.天神遺跡	17.下古志遺跡	18.田畑遺跡	19.知井宮多聞院遺跡	20.小山遺跡
21.姫原西遺跡	22.山持遺跡	23.青木遺跡	24.高畦遺跡	25.西安原遺跡
26.西谷墳墓群	27.中野美保遺跡	28.玉泉寺裏遺跡	29.浅柄遺跡	30.のの子谷横穴墓群
31.常楽寺柿木田古墳	32.大寺1号墳	33.山地古墳	34.浅柄Ⅱ古墳	35.間谷東古墳
36.浅柄北古墳	37.北光寺古墳	38.雲部3号墳	39.今市大念寺古墳	40.上塩冶築山古墳
41.上塩冶地蔵山古墳	42.妙蓮寺山古墳	43.放れ山古墳	44.上塩冶横穴墓群	45.神門横穴墓群
46.八幡宮横穴墓群	47.坂本谷遺跡	48.白枝本郷遺跡	49.後谷Ⅴ遺跡	50.稲城遺跡
51.小野遺跡	52.神門寺境内廃寺	53.長者原廃寺	54.光明寺3号墓	55.板津焼山遺跡
56.浅柄Ⅲ遺跡	57.蔵小路西遺跡	58.渡橋沖遺跡	59.荻杼古墓	60.余小路遺跡
61.神西城跡	62.要害山城跡	63.姉谷城跡	64.築山遺跡	65.海上遺跡
66.菅沢古墓	67.高浜Ⅰ遺跡	68.井原遺跡	69.井上横穴墓群	70.地蔵堂横穴墓群
71.中野清水遺跡	72.中野西遺跡	73.田中谷貝塚	74.三部竹崎遺跡	75.久村鉱山跡

第５図　京田遺跡・中上Ⅱ遺跡と周辺の遺跡（1）（S＝1：100,000）



76.佐伯神社古墳　77.湖東屋山古墳群　78.正久寺横穴墓群　79.九景川横穴墓群　80.神待山横穴墓群
81.間谷西Ⅱ遺跡　82.間谷西古墳群　83.浜井場２号墳　84.丁之内古墳　85.姉谷柿木田遺跡
86.奥ノ谷遺跡　87.滝ノ尻遺跡　88.大河内遺跡　89.産の岩古墳　90.常楽寺遺跡
91.安子神社横穴墓群　92.高丸城跡　93.西蓮寺山古墳群　94.庭反Ⅰ・Ⅱ遺跡　95.雲部Ⅰ・Ⅱ遺跡
96.森の前古墳群　97.竹崎遺跡　98.倉道古墳　99.中島遺跡　100.中島下遺跡
101.三部八幡下遺跡　102.保知石谷遺跡　103.姉谷恵比須遺跡　104.只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡　105.柿木田古墳
106.柿木田家下遺跡

第６図　京田遺跡・中上Ⅱ遺跡と周辺の遺跡（2）（S＝1：25,000）

弥生時代

弥生時代になると出雲平野全体に集落の形成が進む。前期は平野西部の神戸川下流域や平野周辺の丘陵裾部に遺跡が点在し、原山遺跡（12）、矢野遺跡、蔵小路西遺跡（57）、築山遺跡など縄文時代晩期後半から続く集落が確認される。原山遺跡では北部九州に多くみられる配石墓とともに朝鮮半島系土器が出土し、当地の弥生墓制成立を考える上で重要である。湖陵町内では三部竹崎遺跡や三部八幡下遺跡、姉谷恵比寿遺跡（103）などが知られる。周辺では保持石遺跡や九景川遺跡で前期土器が散見されるものの、明確な集落としては把握できない。

中期になると湖陵町内の遺跡数は減少し、中島遺跡（99）などで土器が見つかっている程度である。対して、出雲平野では遺跡が急増する。神戸川沿岸部や平野中央部には古志本郷遺跡（14）、下古志遺跡（17）、知井宮多門院遺跡（19）、田畑遺跡（18）、天神遺跡（16）、海上遺跡（65）、白枝荒神遺跡（15）、中野清水遺跡（71）、小山遺跡（20）等が知られ、古志本郷遺跡や矢野遺跡などの拠点集落が出現し始める。また、中野美保遺跡（27）では方形貼石墓が築かれ、中期後葉に青木遺跡（23）で初段階の四隅突出型墳丘墓が認められるなど、墳墓の形成が目立つようになる。

後期では前代から継続する遺跡の他、確認される遺跡が増加する。湖陵町内では神西湖南の平野部から丘陵部付近において京田遺跡のほか、只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡（104）、西安原遺跡（25）、庭反Ⅰ・Ⅱ遺跡（94）、竹崎遺跡（97）などが確認される。周辺においても高畦遺跡（24）で竪穴建物が、田中谷貝塚（73）で貝塚が、麓Ⅱ遺跡で水路跡から木製品が検出され、平野部の開発とともに多くの集落が形づくられる。

墳墓では、平野低地部の中野美保遺跡や青木遺跡で四隅突出型墳丘墓が造営されるほか、南側の丘陵上に最大級の四隅突出型墳丘墓である西谷３号墓をはじめとする西谷墳墓群（26）が出現し、王墓が連綿と継承される様子をうかがい知ることができる。湖陵町内では玉泉寺裏遺跡（28）で終末期から古墳初頭の木棺墓が確認されるが、四隅突出型墳丘墓は今のところ確認されていない。

古墳時代

弥生時代から古墳時代を通して集落は営まれ続けるが、古志本郷遺跡や下古志遺跡では大溝に土器が廃棄されるなど、大規模な集落が衰退する様子がうかがえる。その要因はいかなるものか、解明が期待される。周辺では御崎谷遺跡（10）、玉泉寺裏遺跡、麓Ⅱ遺跡などで前期の遺物が一定量出土し、御崎谷遺跡からは中期を中心とする多量の遺物が出土することから、当時この地域ではある程度の規模をもつ集落が営まれていたと考えられる。前期後半から中期中葉になると、浅柄遺跡で建物が検出され、土器を伴う水辺の祭祀が行われた九景川遺跡などが確認される。出雲平野中央部でも弥生時代から断続的に継続する中野西遺跡（72）や中野美保遺跡で、まとまった遺物が出土し、中野清水遺跡や三田谷Ⅰ遺跡で建物などが見つかり、集落の活動があったことがわかる。

墳墓は、前期末から中期初頭には、大寺１号墳（32）、山地古墳（33）、浅柄Ⅱ古墳（34）、間谷東古墳（35）、浅柄北古墳（36）等、平野周辺部の丘陵上に古墳が出現する。北山南麓に造られた大寺１号墳は竪穴式石室を持ち、割竹形木棺が置かれていたと推定される。神門水海東岸では、礫敷きの主体部を有する古墳が出現する。山地古墳は礫敷きの箱形木棺に筒形銅器・鏡等の副葬品を有し、浅柄Ⅱ古墳は粘土槨と礫槨を持つ。間谷東古墳は奥才型木棺と称される棺内礫敷組合式木棺の埋葬施設を備える。この埋葬施設は北部九州から北近畿に分布するこから、当地域の地理的特性を生かした海上交易を中心とした広域的な地域間交流が想像される。中期中葉に御崎谷遺跡のすぐ

南の丘陵上に北光寺古墳（37）が築造される。この時期では出雲部最大級の前方後円墳である。そのほか、湖陵町内においては、常楽寺柿木田古墳（31）で前期の前方後円墳である可能性を持つ１号墳をはじめ、舟形石棺が出土した雲部３号墳（38）が知られ、周辺では浜井場２号墳（83）や丁之内古墳（84）が存在するなど、この時期、出雲平野南西部は古墳の集中する地域となっている。後期になると、神戸川下流域に集中して大型古墳が築造される。今市大念寺古墳（39）や上塩冶築山古墳（40）、上塩冶地蔵山古墳（41）といった有力首長層の巨大古墳が現れる。神戸川左岸地域には、妙蓮寺山古墳（42）や放れ山古墳（43）等が存在し、出雲平野の最高首長層に次ぐ有力者に位置付けられる。これらの古墳の存在は、神戸川下流域を中心とした出雲西部一帯における支配秩序の形成を意味している。そして、後期後葉頃から平野南部の低丘陵には横穴墓が造られ始める。上塩冶横穴墓群（44）、神門横穴墓群（45）は突出した規模を誇り、副葬品から被葬者層は地域の豪族・有力農民層と理解されている。神戸川左岸以西では、井上横穴墓群（69）、地蔵堂横穴墓群（70）が存在し、湖陵町内では、のの子谷横穴墓群（30）、家形石棺を有する横穴墓を持つ八幡宮横穴墓群（46）、石床が存在した記録が残る安子神社横穴墓群（91）等が知られている。

後期の集落は、中期から継続する中野美保遺跡や中野清水遺跡、三田谷Ⅰ遺跡など出雲平野中央部で引き続き確認できる。湖陵町内では、竪穴建物が確認された板津焼山遺跡や三部竹崎遺跡などで集落が存続しており、周辺でも浅柄Ⅲ遺跡（56）で掘立柱建物が確認されている。

古　代

奈良時代の律令制下では、出雲平野は出雲郡と神門郡からなり、神門水海南部域は神門郡滑狭郷に属する。官衙関連施設としては、後谷Ⅴ遺跡（49）周辺が出雲郡家に比定されている。後谷Ⅴ遺跡からは焼失した倉庫が検出され、その東に位置する呪符木棺が出土した稲城遺跡（50）や、瓦、鴟尾や木簡の出土した小野遺跡（51）が一連の郡家遺跡と考えられる。古志本郷遺跡は神門郡家に比定され、二時期の郡庁跡が確認されている。このほか神門郡内には、大型総柱建物や墨書土器、緑釉陶器等が検出された天神遺跡、官衙関連遺物が多数出土した三田谷Ⅰ遺跡等があり、郡家の出先機関と推定されている。寺院跡等については、朝山郷新造院と推定される神門寺境内廃寺（52）や、礎石等を検出した長者原廃寺（53）が存在する。神門寺境内廃寺は、瓦類の編年から７世紀後半に遡り、同じ瓦当文を持つ遺跡が出雲郡にまで及んでいる。また、備後北部を中心として分布するいわゆる水切瓦が出土することから、出雲国への仏教伝播ルートを考える上で重要な遺跡となっている。

この時代の墳墓では、出雲西部に火葬墓が集中して分布する。初期の火葬墓と考えられる光明寺３号墓（54）では、方形マウンドに火葬骨が入った石櫃が納められている。また、石製骨蔵器が出土した菅沢古墓（66）などが知られている。

湖陵町内では掘立柱建物などが確認された京田遺跡１区や常楽寺遺跡（90）、周辺では多数の建物や遺物が確認された九景川遺跡や多数の掘立柱建物が検出された浅柄遺跡が集落として挙げられる。また、御領田遺跡や庭反Ⅱ遺跡でも掘立柱建物が確認されており、姉谷柿木田遺跡（85）では、土器とともに土馬が見つかっている。出雲平野南縁部には古代山陰道の存在が想定されており、交通の要衝地として発展していたことを物語っている。

中　世

中世の集落遺跡としては、蔵小路西遺跡、渡橋沖遺跡（58）が挙げられる。蔵小路西遺跡では、大溝で区画された建物群が確認されて多量の陶磁器類が出土しており、古代有力豪族勝部氏の系譜を引くといわれる朝山氏、または出雲国守護職にあった佐々木氏（塩冶氏）の居館と推定されている。その他、大型建物や最古級の将棋駒が確認された高浜Ⅰ遺跡（67）も居館の可能性がある。湖陵町内では、建物や青磁が確認された庭反Ⅱ遺跡や常楽寺遺跡のほか、掘立柱建物や柵列が確認された三部八幡下遺跡が挙げられる。周辺でも麓Ⅱ遺跡や坂本谷遺跡（47）で建物が確認されており、この時期多くの集落が存在していた様子がうかがえる。

出雲大社境内遺跡（13）で発見された、巨大な柱からなる社殿跡は13世紀後半頃のものに比定され、当時の出雲大社（杵築大社）の本殿はかなり大きな掘立柱の構造であったことがわかる。

墳墓では、青磁の優品が副葬された荻杼古墓（59）や、木棺墓が検出された姫原西遺跡（21）、余小路遺跡（60）、蔵小路西遺跡等、多数が確認される。

神門水海周辺では、地域特性を生かした貝塚が形成されていて、上長浜貝塚、九景川遺跡、御領田遺跡等で確認している。中世の貝塚は全国的に少なく、その中でも上長浜貝塚の規模は全国屈指である。土師器や瓦質土器と共にヤマトシジミの貝殻や魚骨、漁撈具のほか、鹿角加工品やイノシシ等の獣骨も出土しており、漁撈だけでなく狩猟にも従事していた可能性が指摘されている。

室町時代から戦国時代には出雲平野周辺で多くの山城・居館が築かれる。鎌倉時代から続く神西氏代々の居城では、出雲十旗に数えられる神西城跡（61）が知られ、要害山城跡（62）や姉谷城跡（63）等が挙げられる。

近世・近代

近世の集落としては、湖陵町内で保持石遺跡や三部八幡下遺跡で墓や建物等が見つかっているが、集落全体の様相は不明瞭である。中世から近世にかけて、出雲地方の山間部でたたら製鉄が盛行する。近世初期には、奥出雲町の櫻井家から分家した田儀櫻井家によって、多伎町奥田儀を拠点としてたたら製鉄業が営まれる。姉谷鉱山（湖陵町）や赤松鉄穴（多伎町）で鉄流しを行っていたことが分かっており、田儀櫻井家のたたら場である越堂たたら（多伎町）への砂鉄供給地となっていた。なお、この地域は近代でも砂鉄の供給地であり、昭和初期に国内で鉄鉱資源の需要が高まったことから、1940（昭和15）年から近代的な設備を整えた久村鉱山（75）の操業によって多くの砂鉄が採取されたが、戦後まもなく操業を終えている。

以上、出雲平野中央部から神門水海周辺までを俯瞰して、その歴史的環境を述べてきた。縄文時代の２回の三瓶山噴火に起因する出雲平野の急速な発達によって、それ以降、出雲平野で多くの集落が形成され、様々な活動が展開していった。本書掲載遺跡の位置する出雲平野南西部に関しては、縄文時代や弥生時代における集落の動向や古墳時代前期末～中期初頭の古墳出現から中世の貝塚形成まで、陸域と水域の接する特異な地理的環境の中で人々が生活を営んだ痕跡を辿ることができる。

【引用・参考文献】

村上　勇・川原和人1979「出雲・原山遺跡の再検討」『島根県立博物館調査報告』第２冊
林　正久1991「出雲平野の地形発達」『地理科学』第64巻第１号
藤永照隆2005「遺跡の分布から見た出雲平野の古地理再考」『八雲立つ風土記の丘館報』No182
小林謙一・角田徳幸2006「三瓶火山の噴出物と縄文時代のAMS炭素年代測定」『島根考古学会誌』第23集　島根考古学会
中村唯史2014「縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」『山陰地方の縄文社会』 古代文化センター研究論集第13集　島根古代文化センター
出雲市教育委員会1996『上長浜貝塚』
出雲市教育委員会1997『遺跡が語る古代の出雲-出雲平野の遺跡を中心として-』
出雲市教育委員会2000『浅柄遺跡』
出雲市教育委員会2001『下古志遺跡』
出雲市教育委員会2006『西谷墳墓群-平成14 ～ 16年度発掘調査報告書』
出雲市教育委員会2018『京田遺跡４区』
斐川町教育委員会1996『後谷Ｖ遺跡』
湖陵町教育委員会1995『湖陵町誌研究４』
湖陵町教育委員会1995『神南地区担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（第３工区）只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡　三部八幡下遺跡　中島下遺跡』
湖陵町誌編纂委員会2000『湖陵町誌』
湖陵町教育委員会2000『湖陵町遺跡地図』
久村地区連合自治会2011『久村の歴史』
島根県教育委員会2000『三田谷Ⅰ遺跡vol. 3』
島根県教育委員会2008『九景川遺跡』
島根県教育委員会2009『御崎谷遺跡　間谷東遺跡　浅柄北古墳　間谷西Ⅱ遺跡　間谷西古墳群』
島根県教育委員会2017『麓Ⅱ遺跡　坂本谷遺跡　京田遺跡（１区）』
島根県教育委員会2017『玉泉寺裏遺跡（Ⅵ区・Ⅶ区）　九景川遺跡（Ⅴ区）』
島根県教育委員会2017『のの子谷横穴墓群　京田遺跡３区』
島根県教育委員会2019『常楽寺柿木田古墳群』
島根県古代文化センター 2012『出雲国風土記の研究Ⅳ　神戸水海南辺の研究（資料編）　島根県古代文化センター調査研究報告書46』
島根県古代文化センター 2012『解説出雲国風土記』
島根県古代文化センター 2015『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究　島根県古代文化センター研究論集第15集』

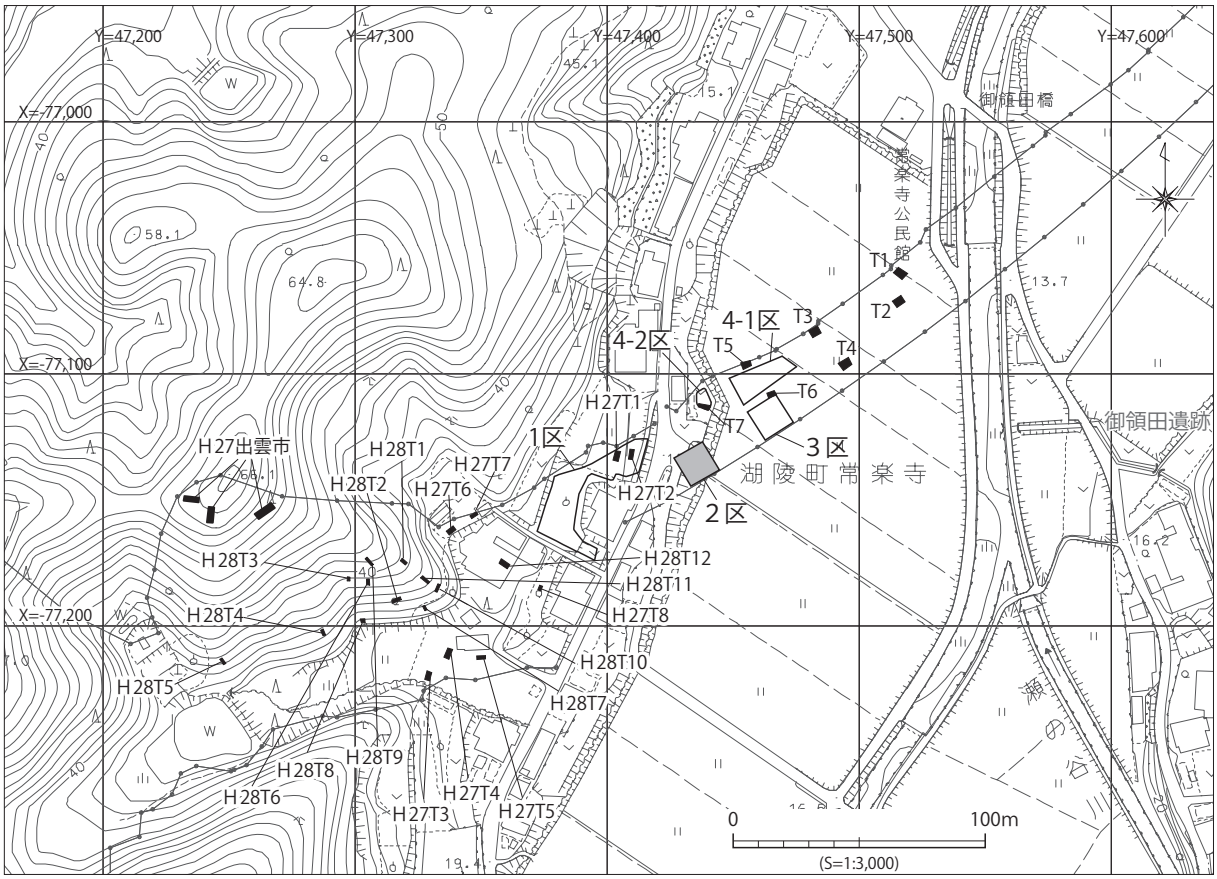
第３章　京田遺跡２区の調査成果

第１節　京田遺跡２区の概要

1.　遺跡の立地と既往の調査等

京田遺跡は、出雲市湖陵町常楽寺西上に位置する。神西湖に注ぐ常楽寺川の谷あいの西側に所在する。京田遺跡ではこれまで、平成27（2015）年度に１区、平成28（2016）年度に３区と４区（出雲市文化財課による）が調査された。１区は南北に走る市道から西の標高20 ～ 23ｍの丘陵上で、弥生時代後期の竪穴建物や古代の掘立柱建物のほか、中・近世までの遺構・遺物が確認されている（島根県2017）。丘陵部から下の常楽寺川左岸に広がる水田地帯における３区の調査では、縄文時代後期中葉の配石土坑やピットを確認するとともに多量の縄文遺物が出土している（島根県2017）。また、同年度に出雲市文化財課が実施した３区に隣接する側道部分の４区の調査では、縄文時代後期中葉の竪穴建物や配石土坑、集石遺構などが確認され、多量の縄文遺物が出土している（出雲市2019）。その他、平成５（1993）年には、京田遺跡から常楽寺川を挟んだ対岸の丘陵縁辺部に位置する御領田遺跡で、縄文時代後期前葉の竪穴建物が確認されている（湖陵町教育委員会（当時）による調査）。

上記の調査により、常楽寺川を挟んだ丘陵縁辺部の広範囲に、縄文時代後期をはじめとする集落遺跡が展開することが分かってきている。



第７図　京田遺跡２区　調査区周辺図

2.　発掘調査区の設定

今回調査した２区は、１区と３区の間に位置し、標高18ｍの丘陵裾部から標高13ｍの水田域にかけての調査区で、調査面積は150㎡である。なお、調査区が狭小なためグリッドは設定していない。

第８図　京田遺跡２区　遺構全体図

第２節　京田遺跡２区の調査

1.　調査方法

調査範囲は、出雲湖陵道路の橋脚部分にあたる。そのほとんどが道路法面であり、法面には矢板の設置が工事工程に含まれていた。また、水田部分には既存の農業排水路が通っており移設が必要であった。表土及び盛土を重機で掘削したが、深さ２ｍまで掘り下げても包含層及び地山の検出には至らなかった（1次掘削）。本調査区は圃場整備後に造成された道路の法面であることから、現水田面までは盛土と予想された。この時点で、矢板打設工事と農業排水路移設工事を行い、その後、再び重機によって盛土を掘りさげた。その結果、丘陵から水田域に向かって下る地山斜面を検出するとともに、現代の水田耕作土を標高13.5ｍ付近まで掘削し、旧水田耕作土の検出に至った（2次掘削）。以下、人力掘削により包含層を掘り下げながら、精査、遺構の検出及び掘削、記録を行った。

調査区壁面と調査区内に設定した中央トレンチの土層断面観察から包含層と遺構面の把握に努めた。湧水が激しいことから、調査区周囲に溝を掘り、排水しながら掘り下げるという工程を繰り返した。標高12ｍ以下になると、自然堆積と考えられる砂質土（5層）を検出するとともに湧水が著しくなり、壁面崩落の危険が生じたため以下の掘削を停止した。

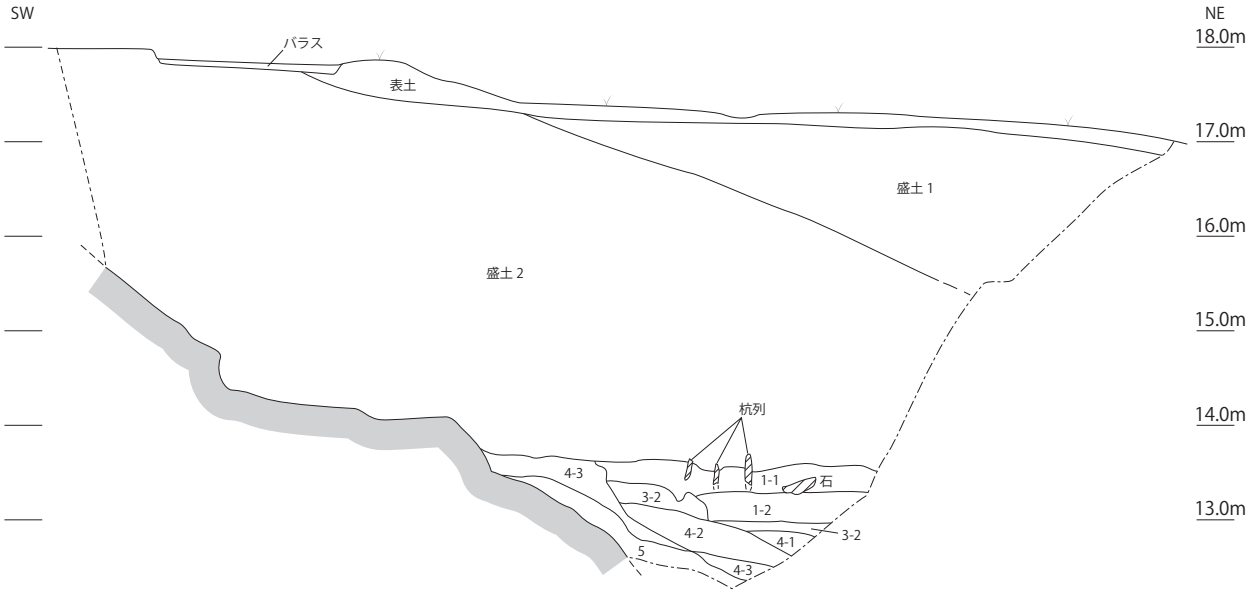
遺構の平面図等はコンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。遺構の写真は、原則として報告書に掲載すべきものは６×７判フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を行い、それ以外はデジタルカメラで撮影した。

2.　基本層序

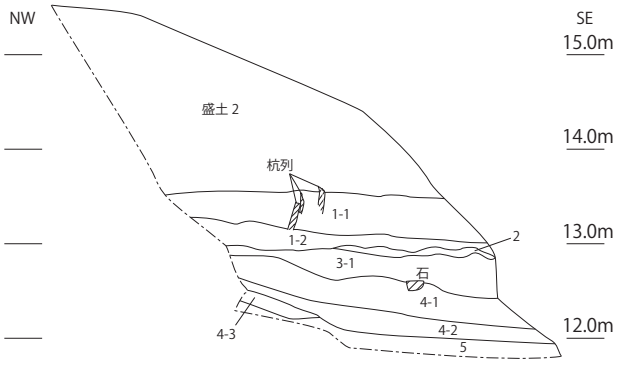
調査区西側にあたる現道路面の標高は18ｍで、東側にあたる現水田面の標高は13.6ｍである。調査区の大部分を占める法面は、元々の丘陵斜面に圃場整備時とそれ以後の道路敷設工事によって、厚いところで４ｍ以上盛土されていた。盛土以下には、1層：黒色～黒褐色粘土、2層：暗灰色砂、3層：灰青色砂質土～灰青色土、4層：暗灰色粘質土、5層：暗灰青色砂質土、6層：灰色砂礫層が堆積する。包含層の堆積は、東側に向かって緩やかに傾斜する様相を示す。

1層は古代から圃場整備前までの水田耕作土である。色合いと含まれる砂粒の多少から1-1・-2層と分けた。2層は部分的にみられる砂粒の堆積で、洪水砂と思われる。3層は細かな砂粒を含む砂質土で、含まれる砂粒の大きさや粘性の違いから3-1・-2層と分けた。縄文後期後葉以降の縄文土器を含み、3区の3-1・-2層、4区の6・11層に相当することから、洪水等による遺跡周辺を含む広範囲に及ぶ氾濫水による堆積層と考えられる。4層は縄文中期末～後期後葉の遺物包含層である。堆積の様相に相違がみられたため、4-1 ～ -4層と分けた。4-1層は縄文後期中葉以降の遺物包含層で、3区の4層、4-1区（出雲市調査）の12層に相当するものと考えられる。4-2層は縄文後期初頭以前と後期後葉の遺物を含むが、後期初頭の遺物は4-3層あるいは5層境界付近から出土したものである。層中に含まれる炭化物をAMS年代測定した結果、1,526 ～ 1,436calBCという値を得たことから、縄文後期後葉の堆積と考えられる（第５章２節を参照）。5層は細かい砂粒を含む砂質土である。縄文中期末の遺物を含むことから、縄文中期末までの堆積と考えられる。この5層上面（標高12ｍ付近）で遺構を検出したことから、この5層を基盤層とする生活面があったものと思われる。6層は大小の礫を多量に含む土石流堆積の様相を見せる。4-1区（出雲市調査）の4層と5層に相当する

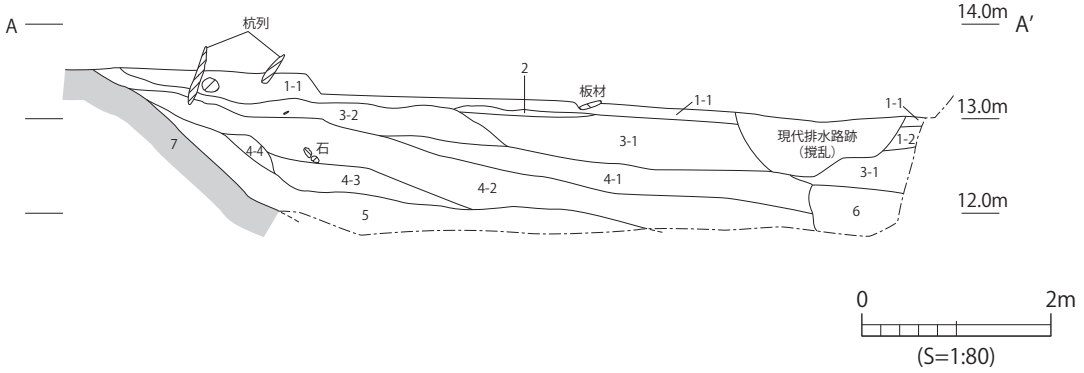
北西壁土層図



北東壁土層図

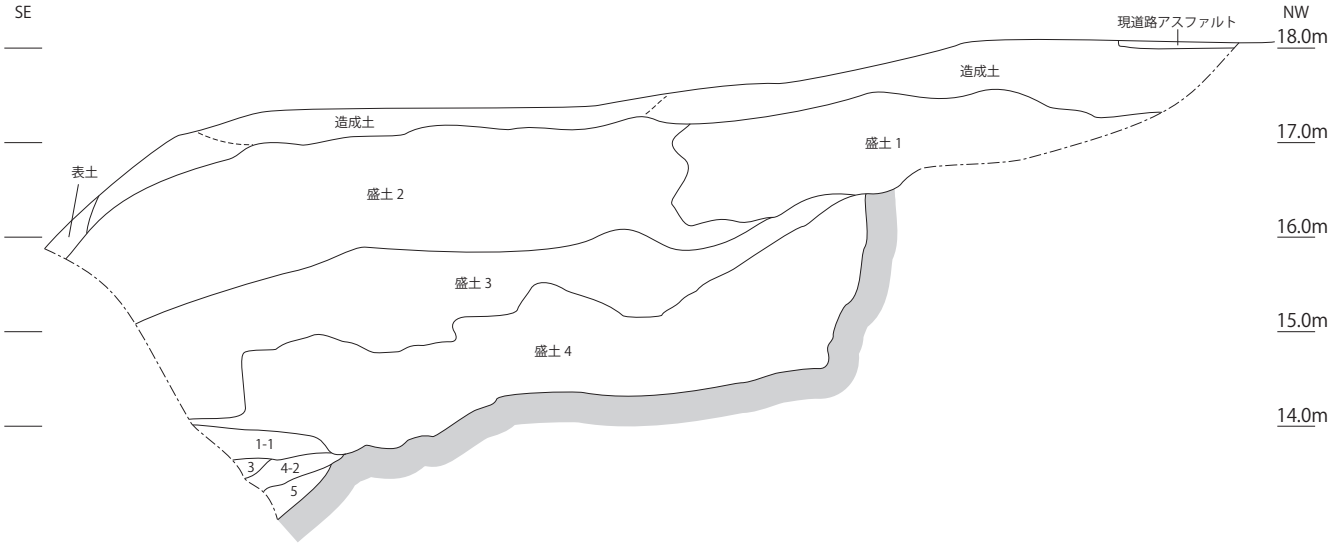


中央トレンチ土層図

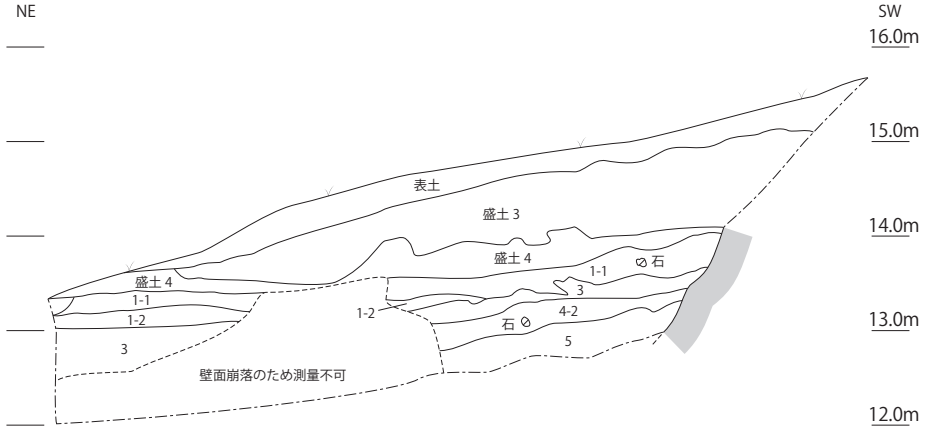


第９図　京田遺跡２区　基本層序（1）

南西壁土層図



南東壁土層図



盛土１　黒褐色混合土
盛土２　黒褐色粘質土
盛土３　黄色真砂
盛土４　黒褐色粘質土
1-1. 黒色粘土　ソフト　須恵器片、土師器片、弥生土器片を含む。陶磁器片含まず。
1-2. 黒褐色粘土　やや砂粒を多く含む。
2. 暗灰色砂　砂粒は均質。5 ㎜大の砂礫を混合する（洪水砂と思われる）。
3-1. 灰青色砂質土　細かく、均質な砂粒がほとんど。1 ～ 3 ㎜大の砂礫を少し含む。1 ～ 3 ㎝大の礫を若干含む。縄文土器片若干含む。
3-2. 灰青色土　3-1 と同じだが、3-1 よりやや暗く粘質で砂粒はさらに細かく均質。1 ～ 3 ㎝大の礫を若干含む。
4-1. 暗灰色粘質土　ソフト。1 ～ 3 ㎝大の礫を少し含む。拳大の礫（主に円礫）を若干含む。縄文土器片を含む。
4-2. 暗灰色粘質土　ソフト。4-1 と同じだが、4-1 より暗く粘性強い。1 ～ 5 ㎝大の礫をまれに含む。縄文土器片を含む。
4-3. 暗灰色粘質土　ソフト。4-2 より明るい。
4-4. 暗灰色粘質土　4-3 と同じだが、地山の崩壊ブロックを混合する。
5. 暗灰青色砂質土（粒子細かい）　自然堆積。田側になるほど砂分が多くなり、もろくなる。
6. 礫層　細砂礫・拳大から人頭大の礫が多数。
7. 灰青色シルト質土　硬い。地山。

0　2m
(S=1:80)

第10図　京田遺跡２区　基本層序（2）

ものと考えられる。３区では確認されていないことから、丘陵際でみられる小規模な土石流の痕跡と考えられる。３区の５層と4-1区の22層に相当する多量の礫を含む洪水堆積層は検出していない。これは、本調査区が丘陵裾際に位置することと関係するものと思われる。７層は丘陵を形成する地山で、硬いシルト質土である。この地山は、丘陵部へ向けて30°前後の斜度をもって立ち上がっていく。地山は東に向かって緩やかに下る勾配を示すが、上記のように５層以下の掘削を停止したため、平坦部における地山の検出には至っていない。

京田遺跡の土層については、第２表に対応を示した。

第２表　京田遺跡２区と３区・4-1区の土層対応関係

２区土層	土層の性格	出土遺物	推定時期	３区土層	4-1 区土層
盛土	現代の盛土		現代		
1-1 層	耕作土		中世以降	１層	１層、２層
1-2 層	耕作土	弥生土器、土師器 須恵器、木製品	古代以降か	２層	３層
６層	洪水堆積層				４層、５層
3-1 層	洪水堆積層	縄文土器	縄文後期末以降	3-1 層	６層
3-2 層	洪水堆積層	縄文土器	縄文後期末以降	3-2 層	11 層
4-1 層	遺物包含層（縄文）	縄文土器	縄文後期後葉～末頃	４層	12 層
4-2 層	遺物包含層（縄文）	縄文土器	縄文後期後葉	４層	12 層
-	遺物包含層（縄文）	縄文土器	縄文後期中葉頃		21 層
-	遺物包含層（縄文）	縄文土器	縄文中後期中葉以前	５層	22 層
4-3 層、５層	遺物包含層（縄文）	縄文土器	縄文中期末以前		

3.　検出遺構とその遺物

遺構は丘陵斜面から下り、平坦部に続く境界付近で検出した。旧水田面で杭列を、５層を基盤とする遺構面で土坑１基、集石１基、ピット３基、および杭１本を確認した。

杭列（第 11 図）

標高13.5ｍの１層を掘り下げる段階で検出した。丘陵斜面と水田域の境界に沿って南北方向に並び、長さ約８ｍを測る。境界際から水田内に1.2ｍの範囲で、杭の間隔は0.2 ～ １ｍを測り、部分的に幅0.8ｍ前後で並行するように打たれているところもある。杭は径５ ～ 15㎝、長さ20 ～ 80㎝を測る。主に芯持ち材が使用されているが、施設部材を転用したものもみられる。いずれも下端部は鋭く削られている。

１層は古代から近代までの水田耕作土に相当することから、杭列は圃場整備以前の旧水田に付随するものと考えられる。水路の補強あるいは水田区画における土留めとして打たれた可能性が考えられる。

ピット（第 12 図）

P1 ～ ３は、丘陵斜面から降りた標高12.5 ～ 12.8ｍの緩やかな斜面に位置し、５層面上で検出した。P1は径0.16ｍ、深さ0.12ｍを測る。P2は径0.20 ～ 0.24ｍ、深さ0.18ｍを測る。P3は径0.18ｍ、深さ0.18ｍを測る。いずれもピット内の埋土は4-2層に準ずるものであった。

これらのピットのうち、P2とP3は標高12.8ｍの同一レベルで、2.5ｍの間隔をもって南北方向

に並ぶことから、何らかの構造物の一部の可能性が考えられる。

いずれのピットからも遺物は出土していない。

杭１（第 12 図）

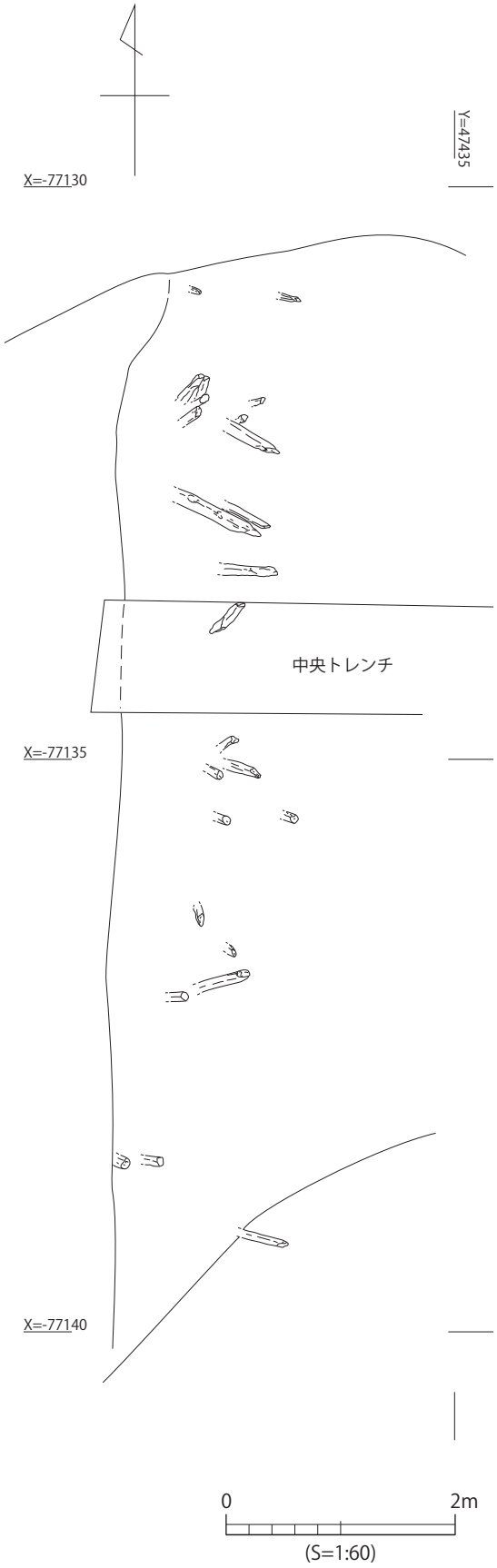
P1から0.7ｍ東に位置する。4-2層を掘り下げながら５層面に至る段階で検出した杭である。径8㎝、長さ42㎝の芯持ち材を利用した杭である。５層内に30㎝ほど埋まっていた。下端部が加工されているが、腐食が著しい。樹種はカヤ材で、AMS年代測定したところ、1632 ～ 1511年calBCという値を得た（第５章第１節を参照）。縄文時代後期の後半代に打たれたものと考えられる。

SK01（第 13 図）

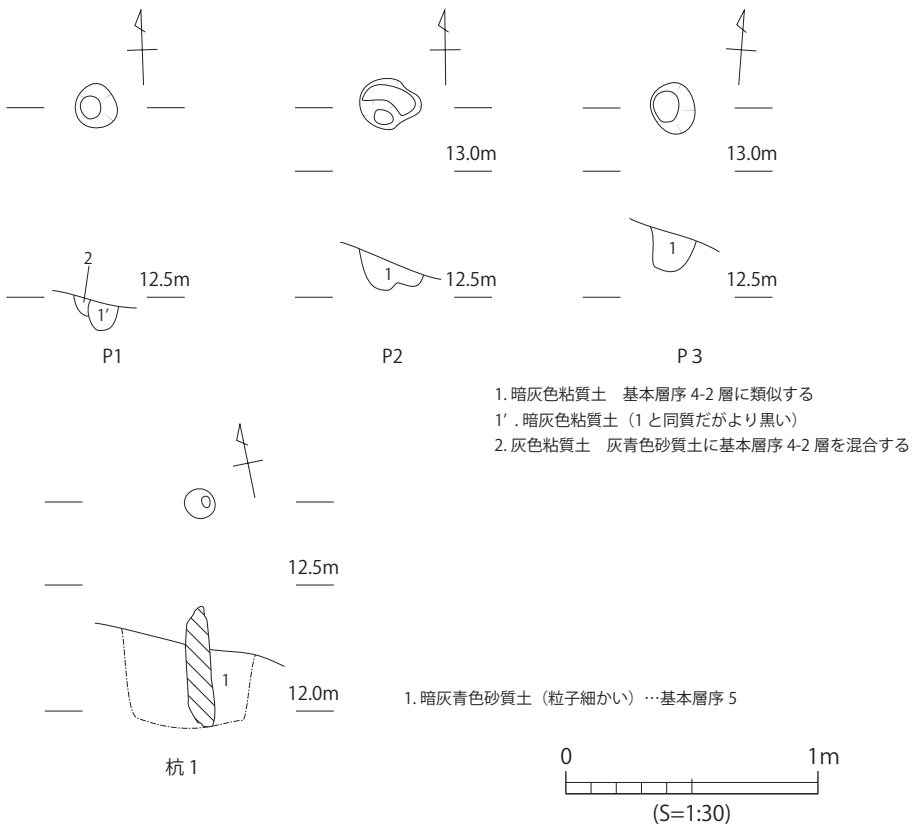
SK01は標高12.2ｍの５層上面で検出した、配石土坑である。調査区の南壁付近に位置する。平面形は長軸1.6ｍ×短軸1.1ｍの楕円形状をなし、西北西―東南東に主軸をもつ。深さ20 ～ 30㎝を測る底面はフラットであるが、長軸の北西部がピット状に落ち込む。土坑の縁辺に径20 ～ 40㎝を測る礫が点在し、径10 ～ 30㎝の礫が上面と土坑内に沈降するように検出される。また、長軸の北西の肩部には長さ60㎝、最大径40㎝、重さ84㎏を測る大形の円礫が乗っている。この円礫は卵形をなし、外面には、自然にできたものか人為的にできたものかはっきりしないが、円形の剥離痕が１か所認められる（図版11-1）[1]。その大きさと形状から標石として据えられたものと考えられる。以上の状況から、本遺構は配石墓の可能性が高いものと考えられる。

土坑内からは縄文土器の破片が若干出土したが、実測に耐えないものであったため

（1）石材は安山岩で、この大円礫は遺跡周辺で採取されたものと考えられる。中村唯史氏の御教示による。



第11図　京田遺跡２区　杭列実測図（S=1:60）



第12図　京田遺跡2区　ピット、杭実測図

掲載していない。石器は砥石や凹石、瑪瑙の石核などが出土している。また、埋土には炭化したトチの種実が含まれていた（第５章第２節を参照）。

埋土に含まれていた炭化物の一部をAMS年代測定したところ、2876―2639calBC ～ 2881―2678calBCという値を得た（第５章第１節を参照）。この測定結果に基づくと、本遺構の時期は縄文時代中期後葉と捉えられる。

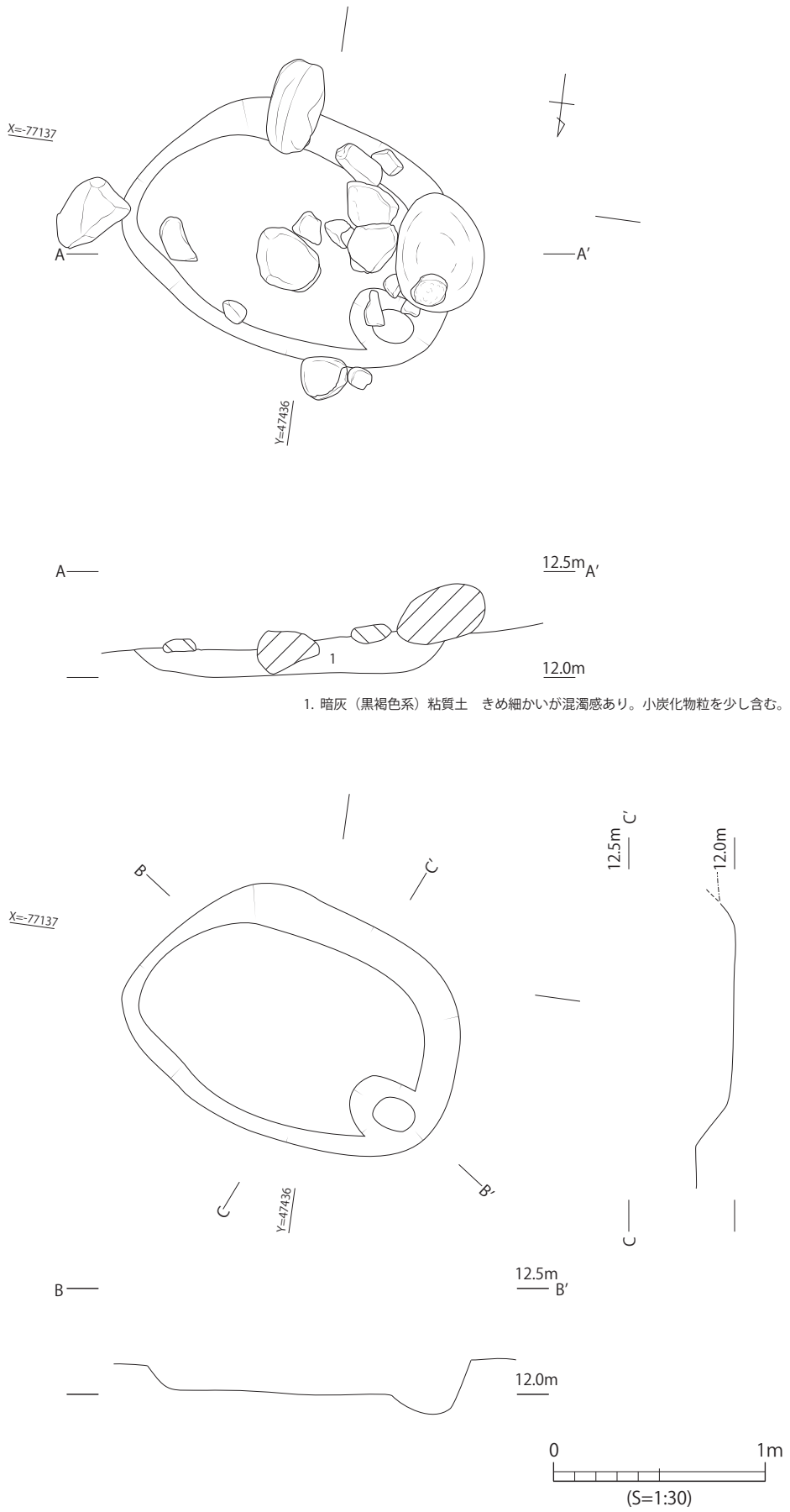
SK01 出土遺物（第 14 図）

1 は瑪瑙の石核である。部分的に剥離の敲打痕がみられる。2 は小型の砥石で、1 面には円筒状の使用痕が認められる。3 は凹石で、擦痕のなかに楕円形状の凹みがあり、一方向から穿ったような痕が認められる。

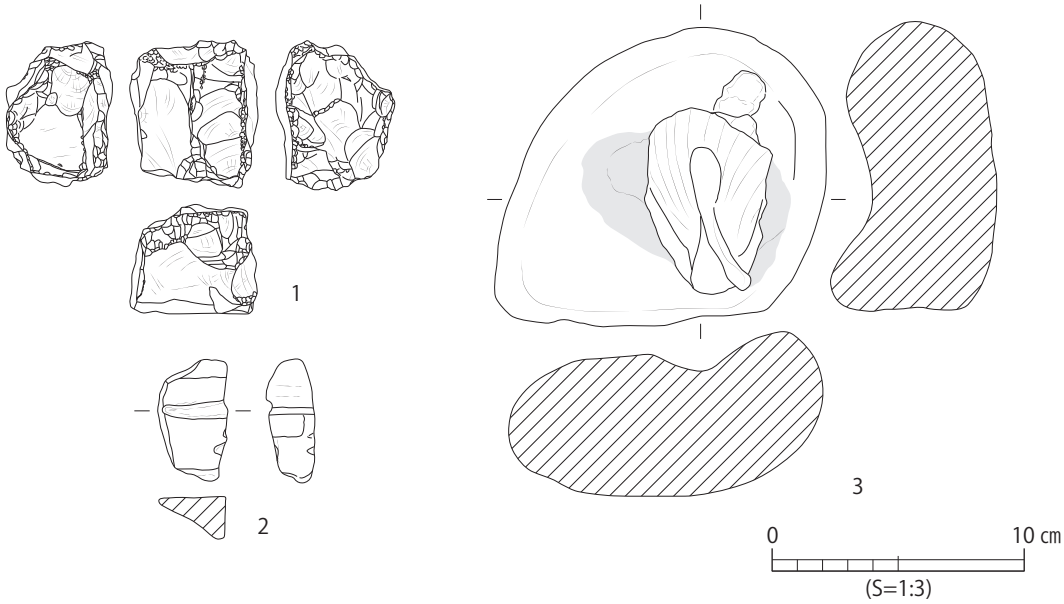
集石（第 15 図）

集石は、標高12.3ｍ付近の緩やかな斜面に位置し、５層面上で検出した。中央トレンチから北側で礫が集石している。その範囲は1.5×2.5ｍで、中央トレンチより南側にはみられず、調査区外の北側に広がる可能性がある。集石の構成は拳大の自然礫が主体だが、人頭大もしくはそれ以上の石もみられる。これらの石は主に安山岩やデイサイト、玄武岩など遺跡周辺で採取される礫であり、持ち込まれ積み置かれた可能性が考えられる。東西方向にサブトレンチを設定し、下層の状況を確認したが、礫の下で土坑などは検出していない。

時期を明確にする遺物を伴わないため断定は難しいが、基盤となる５層が中期末までの堆積であることから、縄文中期末以降～後期初頭という時期が推定される。



第13図　京田遺跡２区　SK01実測図



第14図　京田遺跡２区　SK01出土石器実測図

4.　遺構外出土遺物（第 16 ～ 27 図）

遺物は、縄文土器を主に土器がコンテナ５箱、木製品１箱、石器は12箱ほどが出土した。それぞれを層位別に記述していく。

1 層出土土器（第 16 図）

第 16 図 1 は弥生後期後葉の甕である。2 は土師器の高坏で、脚と坏の接合部である。外面と坏部内面に赤彩が施される。古墳時代後期に相当する。3 は須恵器の蓋坏身である。出雲 4 ～ 5 期。4 は土師器の甑把手部である。

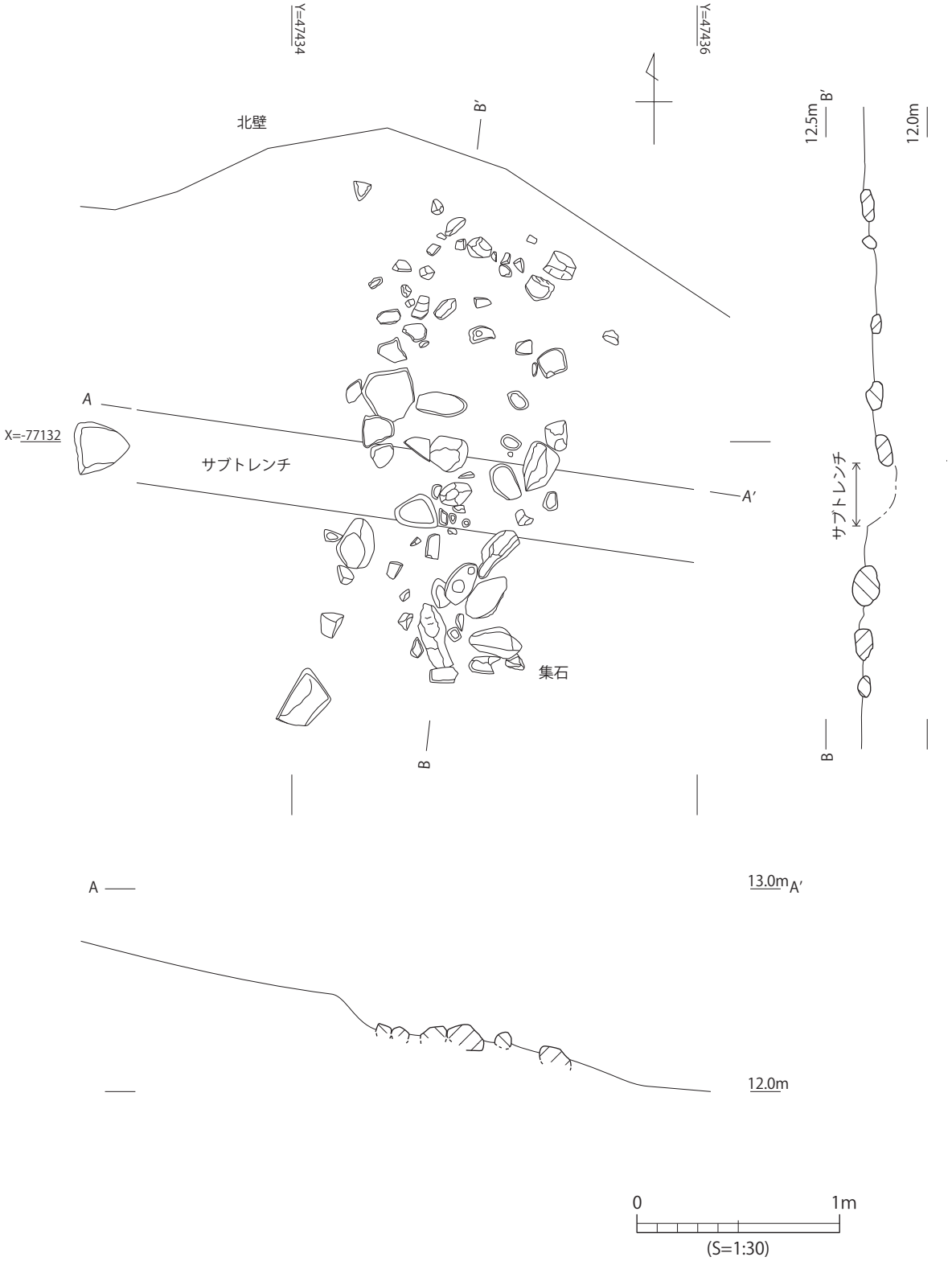
3 層出土土器（第 16 図）

第 16 図 5 ～ 10 は縄文土器である [(2)]。5 は無文の粗製深鉢で、口縁下 3.5㎝のところへ径 1㎝の修繕孔が穿たれている。縄文後期。6 は深鉢の体部で、凹線間に二枚貝による刻みを施すもの。元住吉山Ⅱ式併行。7 は口縁が緩く外反する深鉢の口縁部で、巻貝条痕に調整された内外面に凹線様の沈線が巡る。滋賀里Ⅰ式併行。8 は浅鉢の口縁部である。外面には凹線と貝殻による刻みが施される。元住吉山Ⅱ式併行。

4-1 層出土土器（第 16 図）

第 16 図 9 ～ 20 は縄文土器である。9 は口径 31㎝を測る無文の深鉢である。内面は巻貝条痕、外面は磨き調整され、鉢の可能性がある。後期後葉に相当しよう。10 は口縁が内側に屈曲する鉢で、口縁外面には 2 条の直線文間に連弧文が対峙するように巡り、直線文付近には縄文が施される。一乗寺 K 式期併行。11 は波状口縁をなす浅鉢の口縁部である。内面は巻貝条痕の調整で、外面には凹線が巡り、二枚貝による刻目が凹線間と口縁端部に施される。元住吉山Ⅰ式併行。12 は浅鉢の口縁部である。巻貝による刺突が外面に 4 か所、内面頂部に 1 か所みられる。元住吉山Ⅰ式の後期中葉に比定される。13 はやや内傾する口縁の鉢で、外面には凹線と貝殻による刻目の組み合わせで施文し、端部にも刻目する。元住吉山Ⅰ式併行。14 ～ 16・18 は体部に凹線文を施す鉢である。16 は内外面とも巻貝条痕調整で、凹線内を再調整している。17 は凸帯に巻貝による扇状圧

(2)　縄文土器については、幡中光輔氏、柳浦俊一氏の御教示を得た。



第15図　京田遺跡2区　集石実測図

第16図　京田遺跡２区　1・3・4-1層出土土器実測図

痕が施される。これらのうち、14・15 は元住吉山Ⅱ式併行、16 ～ 18 は宮滝式併行に比定される。19 は無紋の深鉢で、内外面に二枚貝調整される。後期後葉に相当しよう。20 は浅鉢の底部である。

4-2 層出土土器（第 17 図）

第17図１は弱い波状口縁の深鉢で、SK01 周辺で出土した。外面に深い沈線文が描かれ、間は磨消しではなく縄文が施される。中津式の古段階と思われ、後期初頭に相当する。２は端部がやや肥厚する深鉢の口縁で、外面に半裁竹管状の工具で押し引いたような刺突文が施される。五明田遺跡（Ⅲ）で同様の土器が出土している（飯南町 2010）。中期末に相当しよう。３は磨消し縄文の深鉢破片である。４は巻き貝条痕調整される浅鉢の肩部と考えられ、２条の凹線が認められる。いずれも後期初頭に相当する。５は深鉢の口縁で、巻き貝条痕調整された端部近くに凹線が施される。元住吉山Ⅱ式併行。６は粗製の深鉢で内外面は二枚貝による条痕調整である。７は鉢の口縁で、端部内面に幅 4㎜ほどの凹線が巡る。滋賀里Ⅰ式併行か。８は浅鉢の底部で、やや上げ底状のもの。

4-3 層出土土器（第 17 図）

第 17 図９は直線的に開く口径 22.6㎝を測る深鉢で、口縁に弱い段を有す。口縁端部に押圧による刻みを施す。縄文はなく、矢部奥田式に併行するものと考えられ中期末に相当する。

5 層出土土器（第 17 図）

第17図10 ～ 12は集石下の５層内でまとまって出土したものである。10は胴部に弱い抉れを持つ深鉢で、全体的に緩い「Ｓ」字状のプロポーションをなす。口径 19㎝弱を測る。潰れた状態で出土し、底部を除く約３分の２近くが復元できた。口縁端部は粘土を折り返して段を作り、貝殻による沈線状の条痕を施す。頸部にも段を有し、胴部はやや膨らみを呈す。内外面とも二枚貝による条痕調整され、口縁部には彫刻刀のような鋭い工具で削ったような連弧文が巡るように施される。連弧文は５～６本の弧線が山型の扇状に重なるのを単位として、８単位で外周するように施文される。連弧文の向かって左側の弧の端が隣の連弧文に切られることから、右から左に向かって施文されたものと考えられる。口縁端部下には天地を逆にした小形の弧文が前記の連弧文の間を埋めるように巡る。こちらは１または２本を単位として７単位が確認されるが、欠損部を合わせると８単位になるものと思われる。このような土器は県下では類例がないが、岡山県の長縄手遺跡では同様の文様形態をもつ土器が出土している（岡山県 2005）。長縄手遺跡出土の土器は矢部奥田式併行の中期末とされていることから、この深鉢も中期末と考えられる。11は口径 16.2㎝を測る深鉢である。内湾気味に立ち上がる口縁は段を有し、下端に刻目を施す。また、円形の凹みと半円形の凹線からなる文様がみられる。内面は二枚貝による条痕調整である。北白川Ｃ式期併行であるが、里木式系に近く中期末の中でも古い段階に入るものと思われる。12は深鉢の底部で、10の底部になる可能性がある。

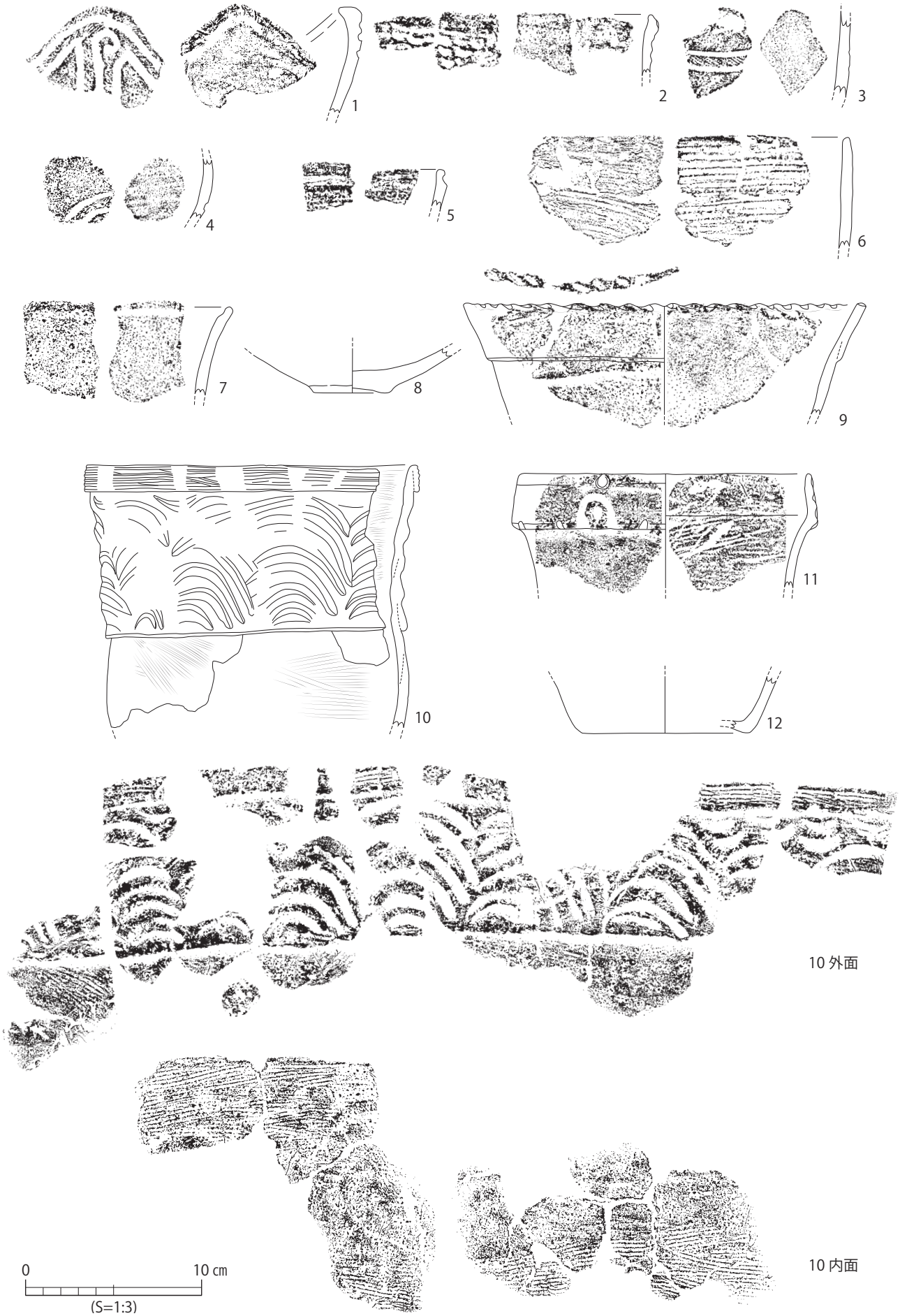
なお、これらの土器とともに安山岩の小剥片（チップ）が少量出土している。

その他の出土土器（第 18 図）

トレンチ掘削時や側溝掘り下げ時に出土した土器である。

第18図１・２は縄文土器、３は弥生土器、４～７は須恵器、８～ 10は土師器である。

１は深鉢の口縁で、巻き貝による凹線が外面に２条、内面に１条巡る。元住吉山Ⅱ式併行または宮滝式併行。２は浅鉢の口縁部で、端部外面に巻き貝による凹線文が施される。宮滝式併行。３はＶ-1様式の甕で、３条の凹線が巡る。４は口径 13㎝を測る坏蓋で、肩部に弱い稜をもつ。出雲５～６期



第17図　京田遺跡２区　4-2・4-3・5層出土土器実測図

に相当しよう。5は坏身の口縁部破片である。6は坏の底部で回転糸切りされるもの。7は高台付坏で、底面に回転糸切り痕が残る。6は8世紀前葉、7は8世紀半ば頃に相当する。8は口縁が「く」の字状に屈曲する古代の甕である。9は古墳後期の高坏の脚部である。裾部に向けて弱い段をもつ。全容が不明であるが、脚部に段をもつこのような形態の高坏が、築山遺跡（出雲市2009）や大田市の大西大師山遺跡（島根県2016）で確認されている。10は甑の把手部分である。

木製品（第 19 図）

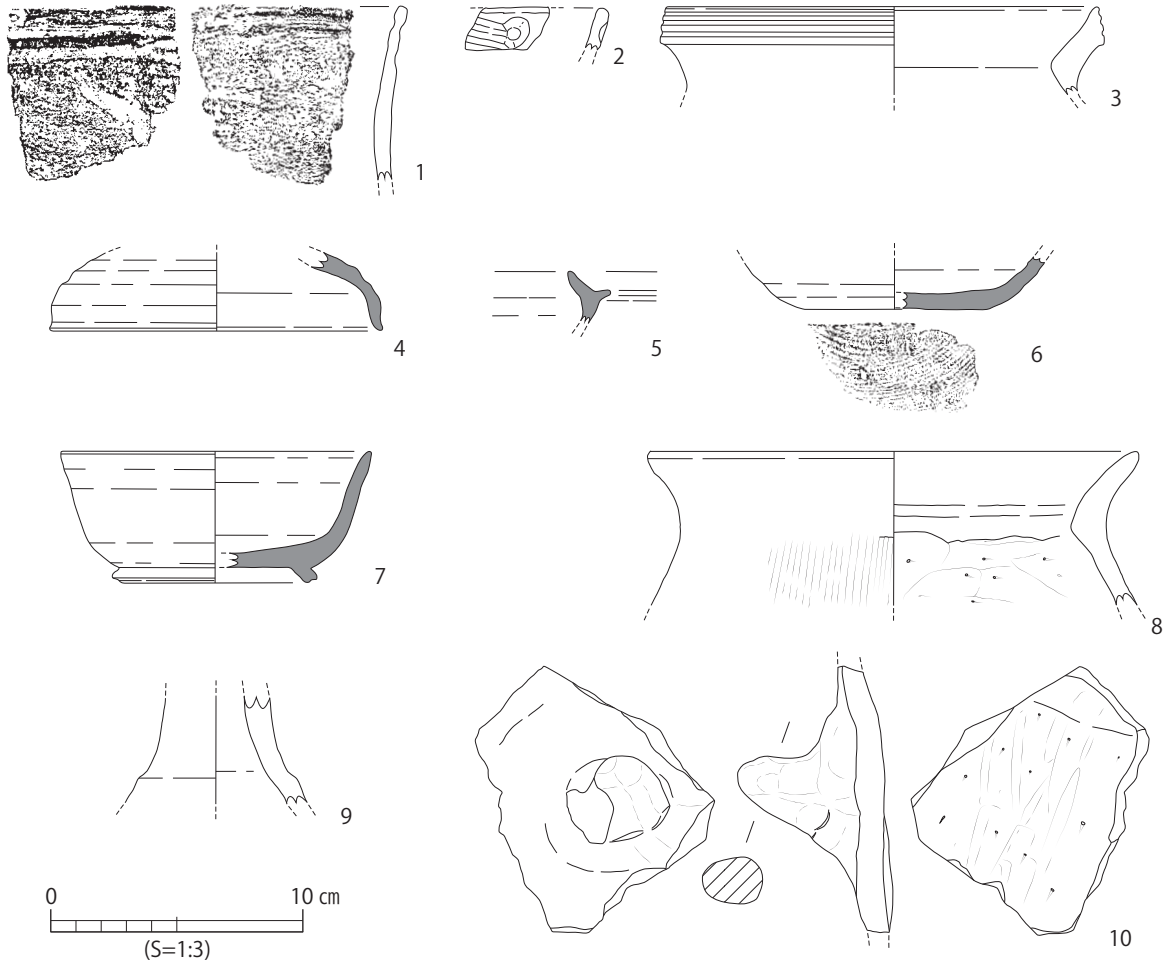
第19図1・2は1層から出土した。1は幅11.5㎝、長さ35㎝を測る田下駄である。樹種はスギである。2は33㎜ほどの方形の穴をもつスギの板材である。「L」字状に抉りを入れ臍部分を作っている。施設部材からの転用と考えられるが、破損もあり用途は不明。3は杭で、5層内まで打ち込まれていたものである。径8㎝、長さ42㎝のカヤの芯持ち材を利用している。下端部が加工されているが、全体に腐食が著しい。AMS年代測定の結果、1632 ～ 1511calBCという値が示された（第5章第1節参照）。

1 層出土石器（第 20 図）

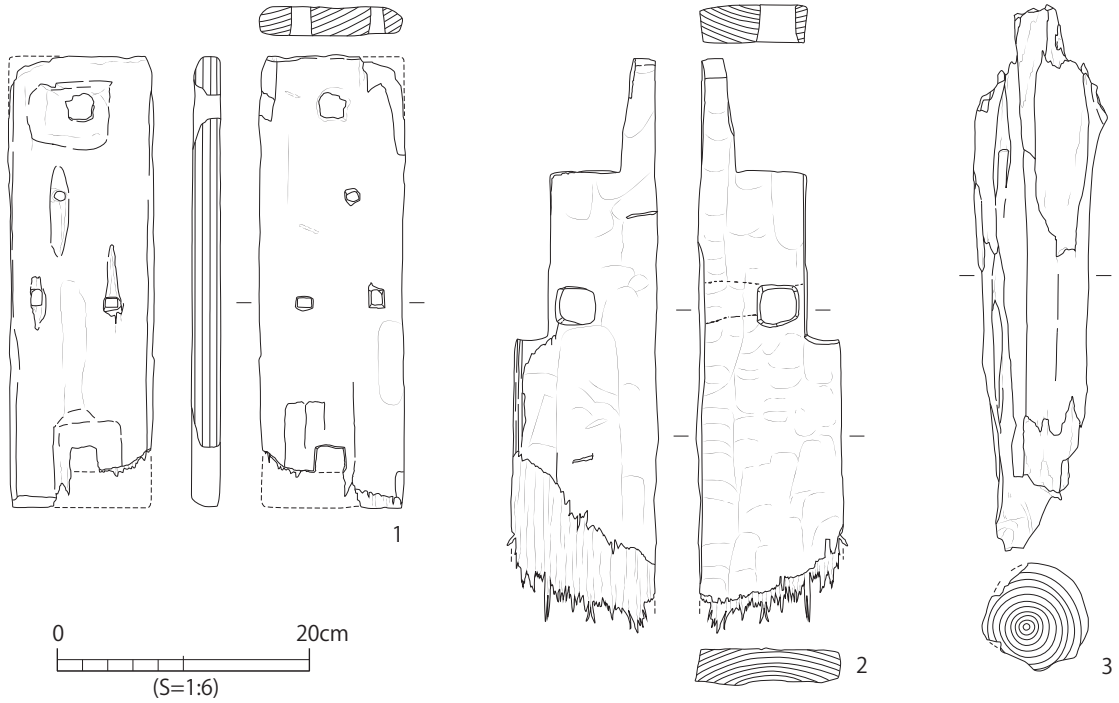
1は玄武岩の敲・凹石である。表裏と側面に敲打による凹みがあり、上・下部に敲打痕が認められる。堅果類の加工に使用された可能性がある。2は石皿である。安山岩製で、表裏を使用している。

3 層出土石器（第 20 図）

3は安山岩（サヌカイトに近い）製の石鏃である。4は凝灰岩の礫で、上方は窪み、下方に潰れ痕



第18図　京田遺跡2区　その他の遺構外出土土器実測図



第19図　京田遺跡２区　木製品実測図

がみられる。敲石と思われるが、側面の一部に鋭い線状痕が認められる。

4-1 層出土石器（第 21 ～ 23 図）

第21図１は打製石斧の刃部破片である。土堀具の可能性がある。安山岩製。２は玄武岩製の敲・凹石である。表裏に凹み、側面と上・下方に敲打痕が認められる。堅果類の加工に使用された可能性がある。３は敲石である。表面には楕円形状の敲打痕があり、裏面には磨痕が認められる。凝灰岩製。４は敲･凹石である。４面の同円周上に敲きによる凹みが認められる。この凹みはクルミ核を割る際にできた可能性がある。

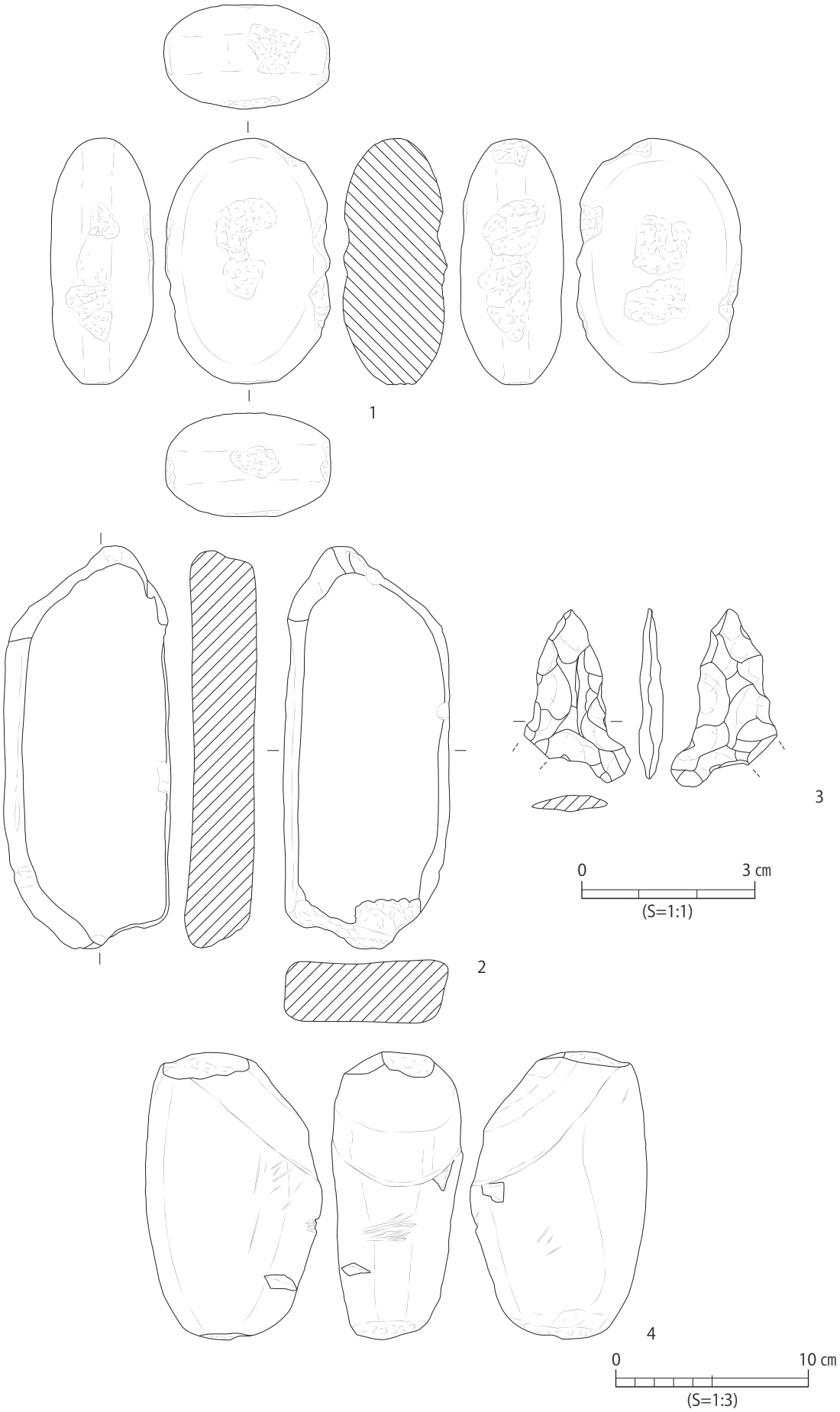
第22図１は磨・敲石である。表裏と側面に磨り痕があり、表裏には敲打による凹みが認められる。安山岩製。２は磨石である。磨面に線状の擦痕が認められる。凝灰岩製。３・４は砥石である。３には短く鋭い使用痕が認められる。デイサイト製。４は砂岩製。５は加工痕のある礫である。用途は不明ながら、デイサイトの板状の材を用い矢板状に成型している。６は安山岩製の台石である。側面から下端部に使用による敲打痕と剥離痕が認められる。

第23図１･２は石皿で、１は２面、２は３面を使用している。１は玄武岩製、２はデイサイト製。３･４は安山岩製の台石で、３の表面には敲打痕が部分的にみられる。

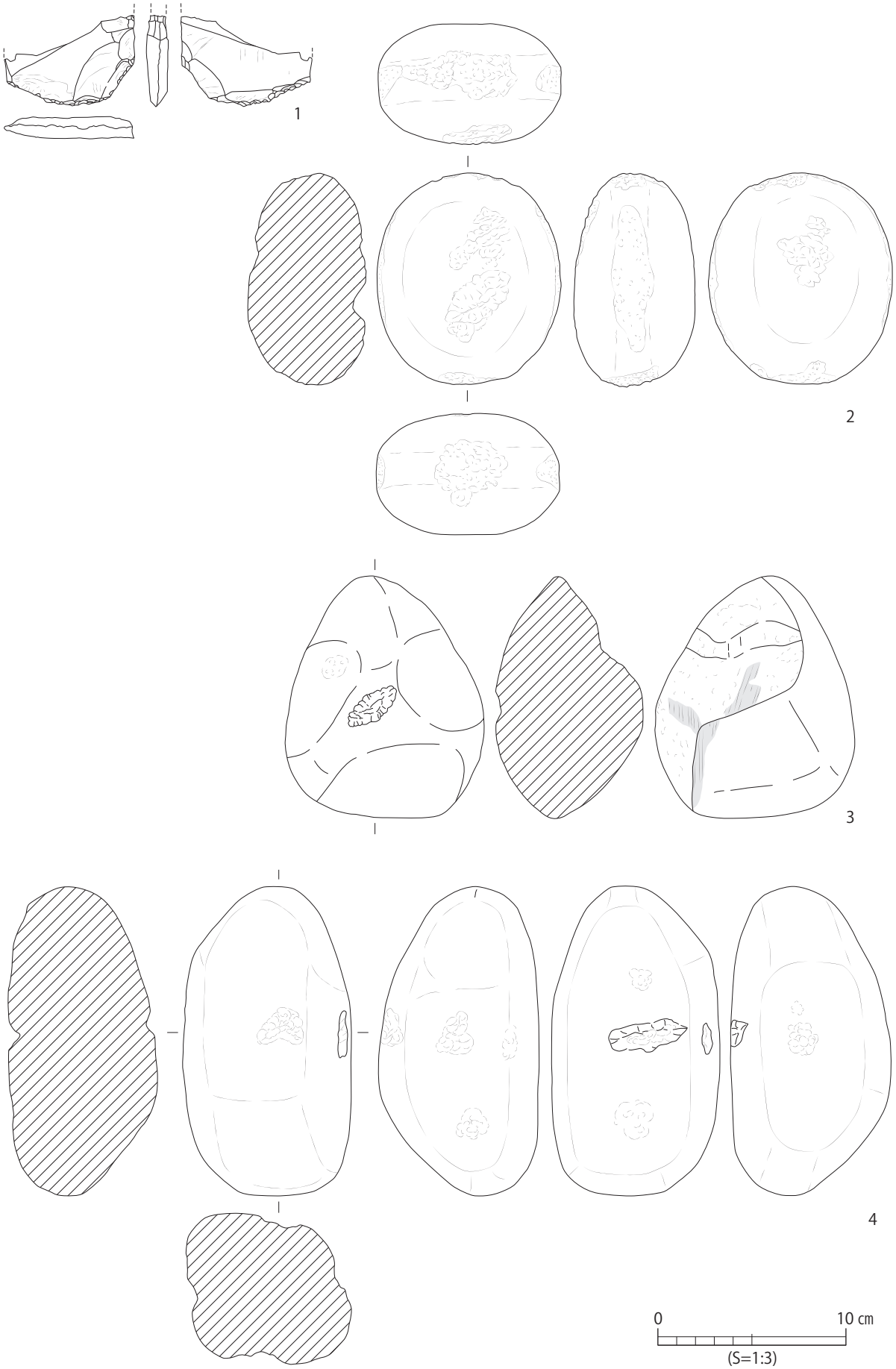
4-2 層出土石器（第 24 ～ 26 図）

第24図１～３は安山岩製の石鏃である。４は小型のスクレイパーで、腹縁に細かな剥離がみられる。安山岩製。５は加工痕のある安山岩の剥片である。欠損しており、用途は不明。６は磨製石斧の刃部破片である。安山岩製。７は玄武岩製の石斧の未成品である。全面に成型時の細かな敲打痕が認められ、粗割から形を整えていく段階のものである。下端（刃部）側のほうがより敲打痕が多く成型が進んでいるが、約３分の１のところで折れ破棄されたものと思われる。８は楔形石器である。頭部に敲打痕が認められる。安山岩またはデイサイト製。９は打製石斧である。デイサイトの板状の礫を使用している。

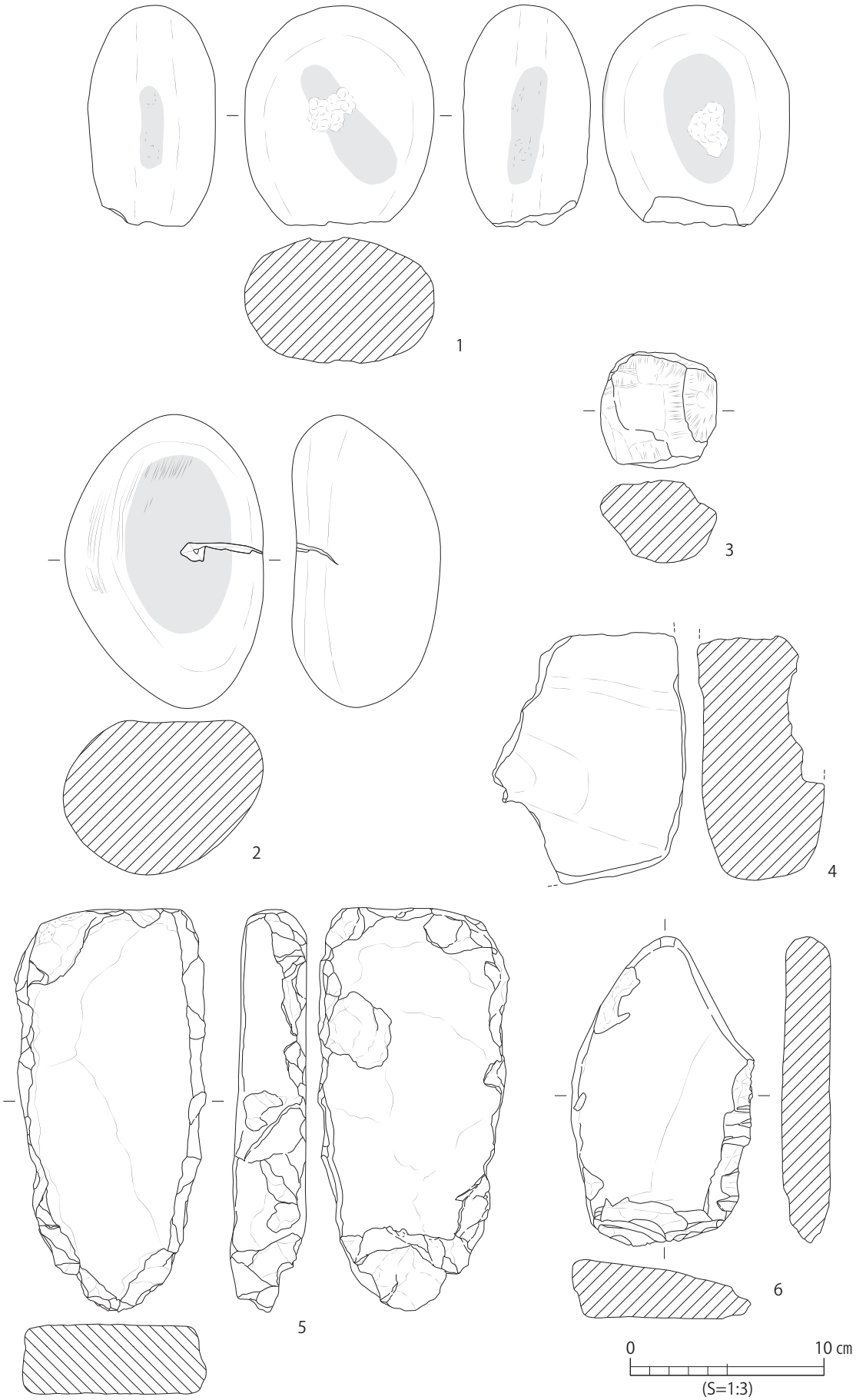
第25図１～３は敲石である。１・２は両端がよく敲打され平坦に潰れ、表面には敲打による凹み



第20図　京田遺跡２区　１・３層出土石器実測図



第21図　京田遺跡２区　4-1層出土石器実測図（1）



第22図　京田遺跡２区　4-1層出土石器実測図（2）

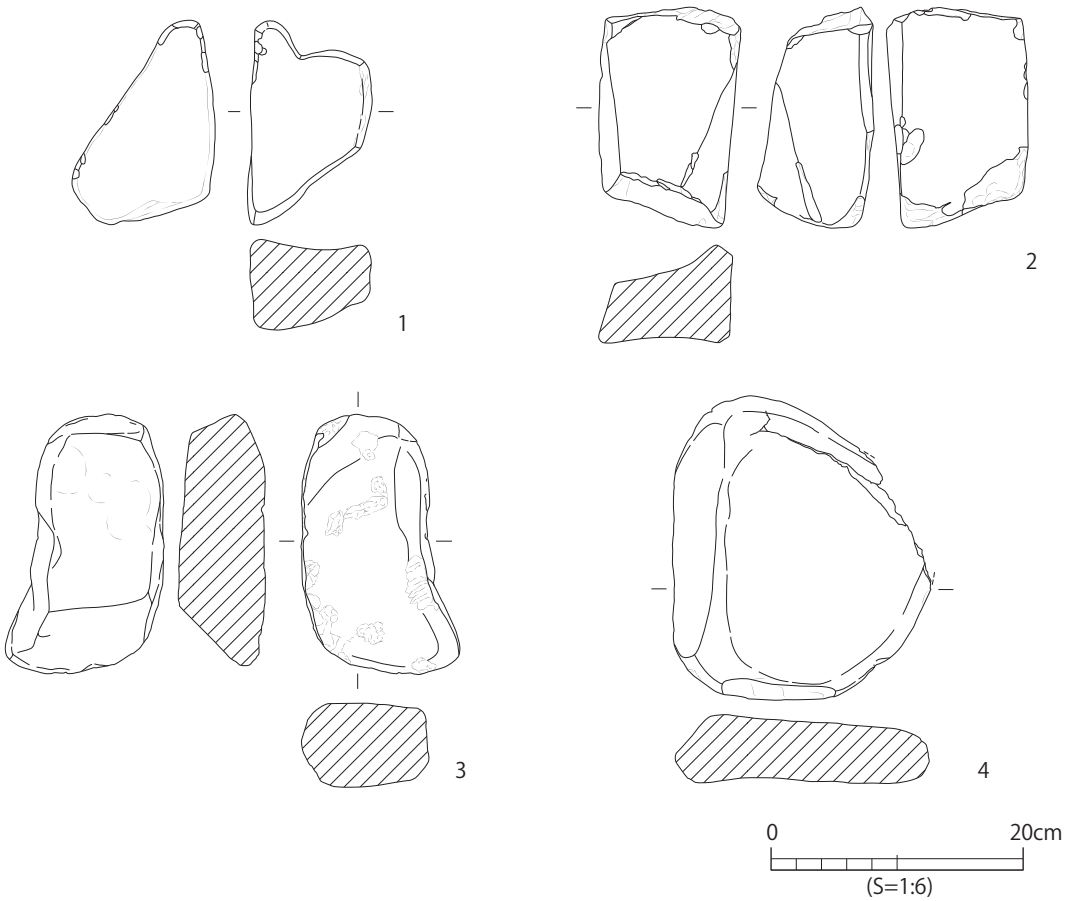
が認められる。いずれも安山岩製。３はデイサイト製の敲石で表裏と側面を使用しているが、実測図網掛け部分が淡黄色に変色している。４は磨・敲石である。表裏を磨りに使用し、表面と下端部に弱い敲打痕が認められる。デイサイト製。５は砥石である。ほぼ全面を使用し、細かな線状痕が認められる。

第26図１は長さ31㎝、幅23㎝、厚さ22㎝、重さ16.5㎏を測る玄武岩の礫で、被熱しており、側面の一部に剥離がみられる。表面の平坦面には筋状の溝が多数認められる。40本以上確認されるこの筋状の溝はほぼすべて長軸に対して約45°の角度で刻まれており、それぞれ１本は１回によってできたものと思われる。筋溝の断面形は逆三角形をなしており、鋭角な物を当ててできたものと考えられる。以上から、器種として砥石が考えられ、凸部を地面に埋めるように固定して使用したものと思われる。ただし、側面にも線状痕が認められ、線刻石の可能性も考えられる。２～６は台石である。２は扁平な円礫で、表面に弱い敲打痕が認められる。安山岩製。３・４はいずれも扁平な安山岩の礫を使用したものだが、３は２か所、４は１か所で破損している。人為的に打ち割った可能性が考えられる。５は凝灰岩の礫を使用したもので、側縁の数か所に小さな凹みが認められる。６はデイサイトの礫を使用したもので、表面の磨痕の中央に弱い凹みが認められる。

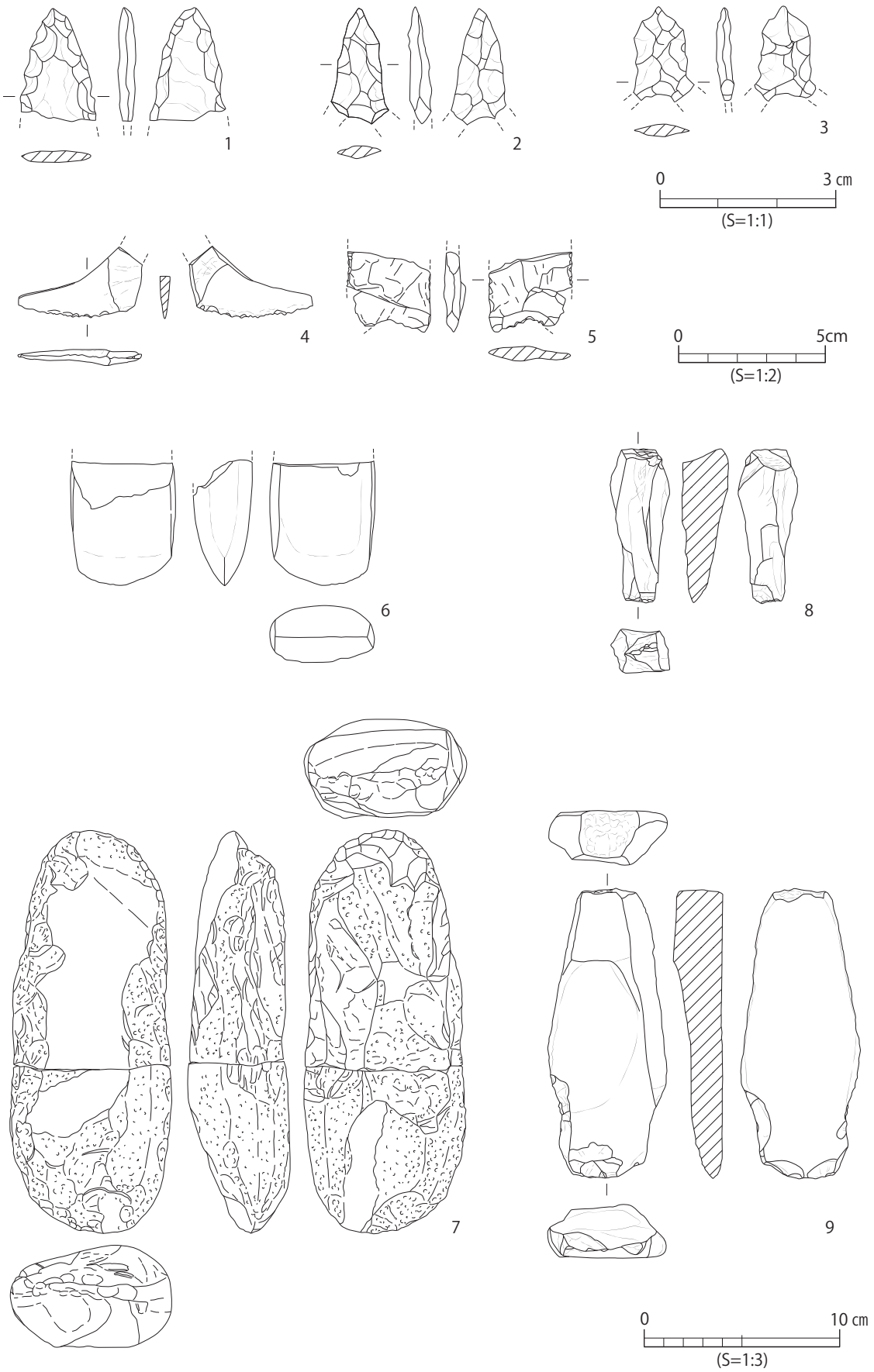
その他の出土石器（第 27 図）

トレンチ掘削や側溝掘り下げ時などで出土した石器である。

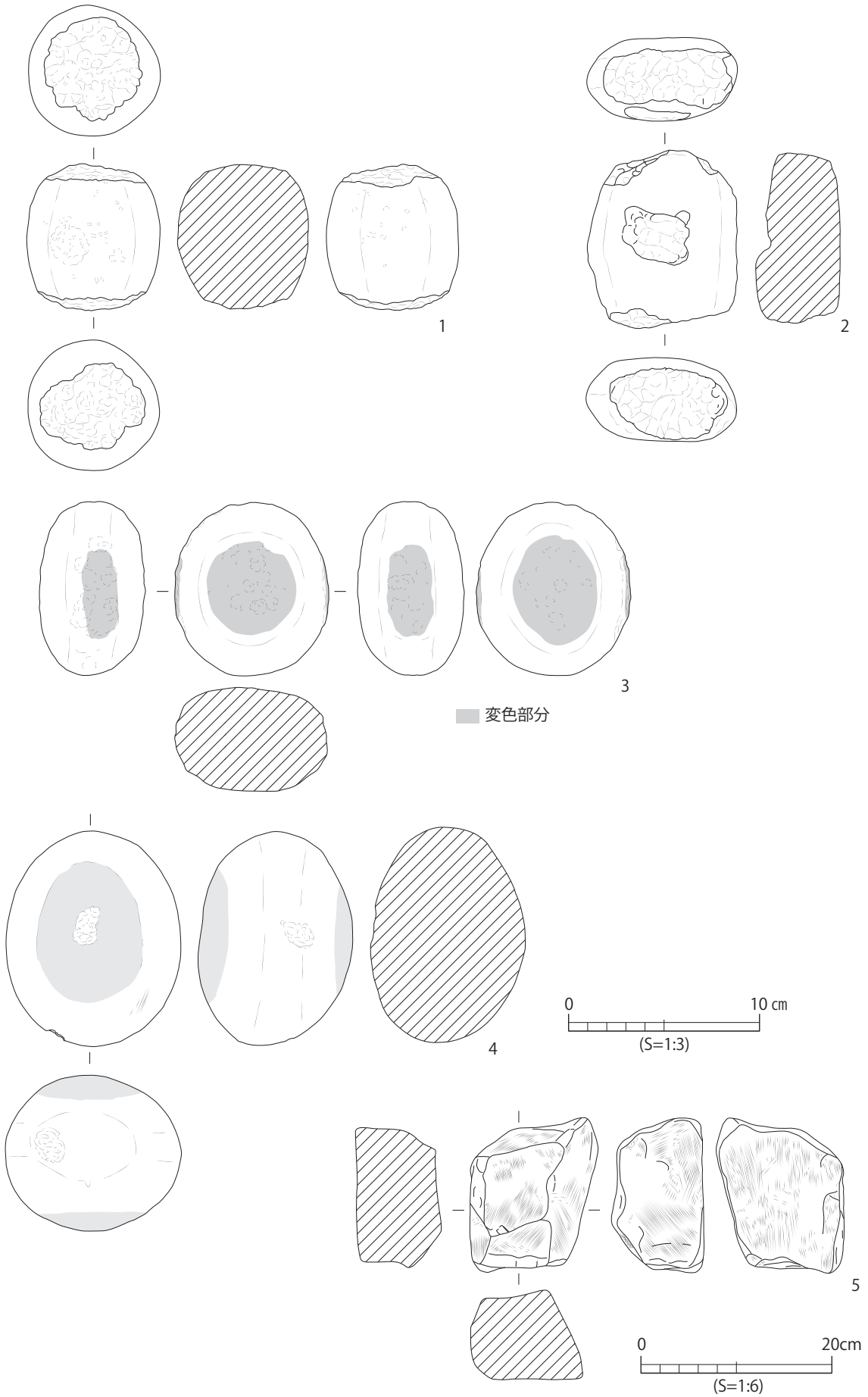
第27図１は磨・敲石である。表裏と側面に弱い敲打痕が認められる。２は磨石である。いずれも凝灰岩製。



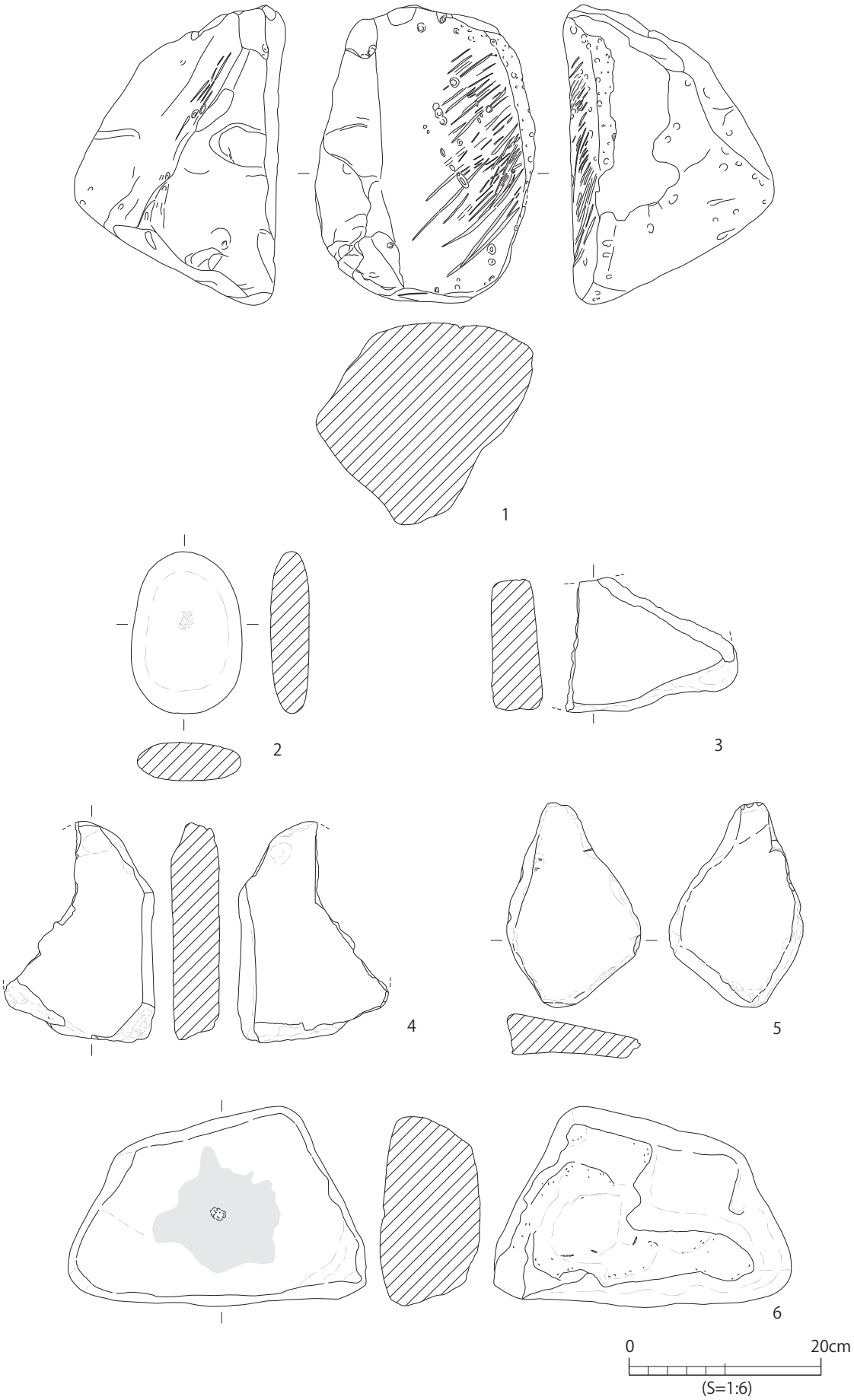
第23図　京田遺跡２区　4-1層出土石器実測図（3）



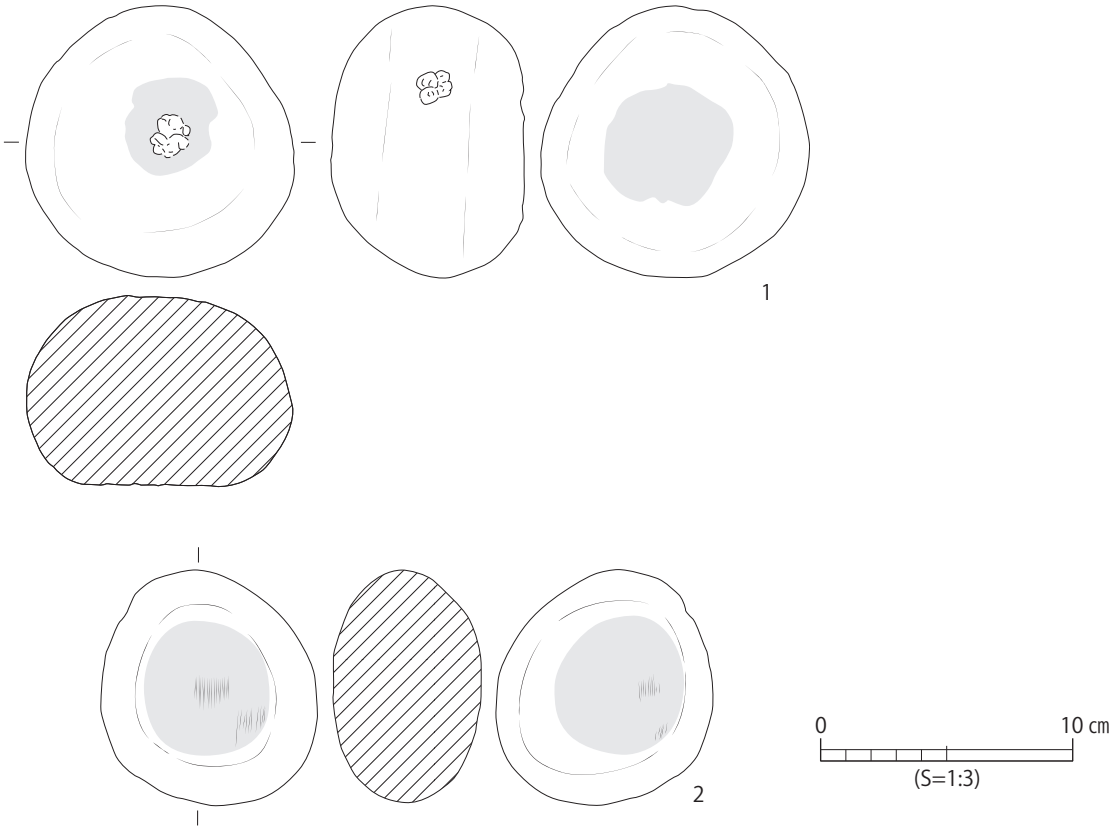
第24図　京田遺跡２区　4-2層出土石器実測図（1）



第25図　京田遺跡２区　4-2層出土石器実測図（2）



第26図　京田遺跡２区　4-2層出土石器実測図（3）



第27図　京田遺跡２区　その他の遺構外出土石器実測図

第３節　小結

京田遺跡２区では、既往の調査で把握できなかった丘陵裾部の斜面から平坦面に至る部分の状況を確認することができた。斜面から平坦面に下りた標高約12ｍ付近で、土坑１基、ピット３基、集石１基、杭１本を検出した。遺物は、縄文時代後期後葉の土器を主体に石器類などが出土した。

1.　遺構

丘陵裾の斜面下から約３ｍ東に位置するSK01は、配石する形態と標石に比定される大石を伴うことから、配石墓の可能性が考えられる(3)。時期を判別する出土遺物は小片のみであったが、層中炭化物の中期後葉とされるAMS年代測定（第５章第２節参照）と、中期末までに形成された５層を基盤層として掘り込まれることから、中期末の時期が考えられる。また、３基のピットはいずれも径20㎝に満たない小ピットである。このうち、P2とP3は2.5ｍ間隔で南北方向に並び、何らかの構造物が推測されるが、性格を特定するには至らなかった。ピットからは遺物が出土せず時期も判然としないものの、５層面で検出されことから中期末以降の可能性が考えられる。また、SK01とは２ｍ以内と接近することから何らかの関係性も指摘できよう。５層面で検出した集石については、拳大から人頭大の礫が丘陵斜面と平地部との境界に集まっていた。斜面からの自然崩落の可能性も考えられたが、礫は２ｍ前後の範囲に集約しており人為的な作用による可能性が高いものと考える。

(3) 京田遺跡では３区の配石遺構SK05、4-1区の配石土坑ST1601が墓の可能性と指摘されている(出雲市2019)。

このような様相から、中期末以降～後期初頭にかけて丘陵裾際において葬送に関係するような活動があった可能性が考えられる。

2.　遺物

京田遺跡２区からは縄文土器を主に、弥生土器、須恵器、土師器、木製品と石器が出土した。

縄文土器は、遺構内からの出土はほとんどなかったが、包含層からは中期末～後期末までの土器が出土している。縄文土器について第６表に集計している。それによると、縄文土器は総計1,048点、12,764g出土し、そのうち型式がわかるものが93点、2,011g、無文土器を含む型式不明な土器が955点、10,753gであった。型式的には、4-3層、５層で北白川Ｃ式または矢部奥田式併行の土器（第17図10）などの中期後葉が69点、1,200g出土している。4-2層で中津式古段階（第17図1）や磨消縄文を持つ土器（第17図3）などを含む後期初頭が３点、70g。後期前葉から後期中葉の北白川上層式３期がみられないが、元住吉山Ⅱ式や滋賀里Ⅰ式（第17図7）等を含む後期後葉～末が２点、25g出土している。4-1層では後期中葉の一乗寺Ｋ式、元住吉山Ⅰ式併行を４点、54g含みながら、第16図14・16のような凹線文を有する元住吉山Ⅱ式～宮滝併行（第16図17）の後期後葉に比定される土器が５点、187gと比較的多く見られる。型式不明な土器はおおよそ後期の範疇に収まるものと考えられ、口縁部95点、1,612g、胴部844点、8,356g、底部16点、764gであった。型式を判別できた土器を重量比からみると、中期後葉が59％、後期初頭～前葉が４％、後期中葉が３％、後期後葉が12％となる。比率からみると中期後葉が59％と圧倒しているが、これは３分の２近くに復元できた深鉢（第17図10）の影響と考えられる。また、出土量は、多量の遺物が出土した３区、4-1区と比較すれば少ない[(4)]。これは、本調査区が丘陵裾部に位置しており、生活域の縁辺部にあたるためと推測される。

以上から、出土土器の様相を捉えると、中期後葉～後期初頭に一時期があり、３区と4-1区の主体時期である後期中葉は引き続き継続するものの数量的には少なく、逆に、３区と4-1区ではほとんど見られない凹線文を主体とする後期後葉から末に優位になることが特徴と言える。

なお、５層内から出土した連弧文を施された深鉢（第17図10）は出雲地方では出土例の稀な土器である。中期末の矢部奥田式併行に比定されるこの土器は、林ヶ原遺跡（鳥取県教育文化財団1984）や長縄手遺跡（岡山県2005）に類例を求めることができることから、これらの地域との交流が考えられる。

石器については、124点、総重量186,706gが出土した。原石素材・礫・剥片を除いたその組成は、磨石や敲石（凹石を含む）が13点（30％）、砥石が６点（14％）、石皿や台石が10点（23％）で、堅果類の加工を主とする生業に係る石器が67％と大方を占める。石鏃や石斧が石鏃４点（9％）、石斧４点（9％）と少ない（第５表を参照）。石材は、安山岩の割合が顕著である。この傾向は、３区、４区と同様である。また、僅かではあるが、安山岩や黒曜石の剥片（チップ）が検出されており、石斧未成品（第24図7）の出土とともに、集落内で石器製作が行われていたことを示している。

4-2層の掘り下げ中に検出した杭１から得られた1,632 ～ 1,511年calBCというAMS年代測定値（第５章第１節を参照）は、層中に含まれる炭化物のAMS測定年代値（1,526 ～ 1,436calBC）と矛盾しないものであった。このことは、土器の様相でもふれたように、後期後葉に生活活動があった

（4）土器の出土総数量は、３区：11,923点、87,921g、4-1区：20,365点、150,762gである。

ことの裏付けとなる。

その他、今回の調査では、１層や側溝掘削中などで弥生時代後期や古墳時代後期、８世紀代の土器が数点出土している。しかし、当該期の遺構は確認されなかったため、これらは弥生時代後期の竪穴建物や８世紀代の掘立柱建物が確認された西側の丘陵上（１区）からの流れ込みと考えられる。なお、１区の調査（島根県2017）においては縄文時代の遺構・遺物とも検出されていない。

以上から、縄文時代中期後葉～後期初頭と後期後葉において、丘陵裾際にあたる本調査区が生活域にあったことが確認された。

【参考文献】

鳥取県教育文化財団1986『久古第３遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書』
湖陵町教育委員会1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　御領田遺跡　三部竹崎遺跡』
大川　清・鈴木公雄・工楽善通編1996「縄文土器」『日本土器事典』　雄山閣
柳浦俊一2003「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性－とくに「中津式」の小地域性について－」『立命館大学考古学論集Ⅲ』　立命館大学考古学論集刊行会
岡山県教育委員会2005『長縄手遺跡』
島根県教育委員会2006『原田遺跡（２）－２区の調査－』
飯南町教育委員会2010『五明田遺跡（Ⅲ）』
幡中光輔2011「山陰地方山間部の縄文遺跡群と地域社会の変容―島根県志津見・尾原地区からの分析―」『島根県考古学会誌』第28集　島根考古学会
幡中光輔2014「縄文時代の集団領域と地域社会の輪郭―山陰地方の遺跡動態から集団領域を読み解く―」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集第13集　島根県古代文化センター
千葉　豊2014「縄文後期土器研究の現状と課題－山陰地方の前半期を中心に－」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集13　島根県古代文化センター
柳浦俊一2014「貝類による土器の器面調整と施文」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集13　島根県古代文化センター
島根県教育委員会2017『麓Ⅱ遺跡　坂本谷遺跡　京田遺跡（１区）』
島根県教育委員会2017『のの子谷横穴墓群　京田遺跡３区』
出雲市教育委員会2018『京田遺跡４区』

第３表　京田遺跡２区出土遺物観察表

土器

図	番号	写真	地点 層位	種別	器種	遺存	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色　調	胎　土	焼成	調整・文様	時期 （併行型式）	備考
16	1	8	1層	弥生土器	甕	口縁部 1/4以下	（24.6）		残6.0	外:橙色 内:にぶい黄橙色 灰色	1mm大の長石含む砂粒多量	良	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ ヘラケズリ	弥生後期 V-4	
16	2	8	1層	土師器	高坏	接合部～脚部			残5.7	外:明赤褐色 灰黄色 内:明赤褐色 灰黄色	2mm以下の長石、1ミリ以下の砂粒多量	良	外:回転ナデ 内:しぼり痕	古墳後期～奈良	坏部内外面、脚部外面に赤色塗彩
16	3	8	1層	須恵器	坏身	1/6	（12.4）		（3.7）	外:灰色 内:灰色	3mm大長石1個、微細砂粒微量	良	外:回転ナデ 回転ヘラケズリのち弱いナデ 内:回転ナデ	古墳後期 出雲4~5	やや扁平
16	4	8	1層	土師器	甑	把手部			残7.8	外:灰白色 内:にぶい橙色	2～3mmの白色土塊少量、2mm以下の砂粒少量	良	外:ハケ目 内:ヘラケズリ		
16	5	8	3層	縄文土器	粗製深鉢	口縁部破片			残5.3	外:灰白色 内:灰白色	微細石英少量、1mm以下の砂粒多量	良	外:巻貝条痕 内:巻貝条痕	縄文後期	穿孔あり
16	6	8	3層	縄文土器	深鉢	小片			残1.9	外:灰黄色 内:灰黄色	2mm大の黒色剥片1片、1mm以下の長石多量、微細雲母少量	良	外:ナデ 二枚貝刻目凹線 内:ナデ？	縄文後期後葉 元住吉山Ⅱ	口縁部または胴部
16	7	8	3層	縄文土器	深鉢	口縁部破片			残4.3	外:暗灰黄色 内:暗灰黄色	2mm以下の長石、1ミリ以下の砂粒少量	良	外:3条凹線 ナデ 内:2条凹線 ミガキ様（巻貝条痕？）	縄文後期後葉 滋賀里Ⅰ	
16	8	8	3層	縄文土器	浅鉢	口縁部破片			残2.7	外:浅黄色 暗灰色 内:灰黄色	2mm以下の長石多量	良	外:2条凹線 二枚貝刻目 内:巻貝条痕？	縄文後期後葉 元住吉山Ⅱ	外面黒斑
16	9	8	4-1層	縄文土器	深鉢	口縁～体部 1/5	（31.0）		残13.0	外:灰黄色 内:にぶい黄色	1mm以下の長石少量、0.5mm大の雲母	良	外:ミガキ（横位） 内:ミガキ（横位）	縄文後期後葉	精製土器 鉢の可能性
16	10	8	4-1層	縄文土器	鉢	口縁部破片			残4.2	外:にぶい黄橙色 内:橙色 黄灰色	長石含む2mm以下の砂粒多量	良	外:凹線 沈線 縄文 ミガキ様 内:不明	縄文後期 一乗寺K	
16	11	8	4-1層	縄文土器	浅鉢	口縁部小片			残3.8	外:褐灰色 内:黒褐色	0.5mm以下の長石	良	外:二枚貝刻目 凹線 内:巻貝条痕（ミガキ様）	縄文後期中葉 元住吉山Ⅰ	口縁端部に刻目
16	12	8	4-1層	縄文土器	浅鉢	口縁部小片			残3.4	外:にぶい黄橙色 内:褐灰色	3mm以下の長石、1mm以下の砂粒少量	良	外:ナデ 3ケ所巻貝による刺突 内:ナデ 1条沈潜	縄文後期中葉 元住吉山Ⅰ	
16	13	8	4-1層	縄文土器	鉢	口縁部小片			残2.9	外:灰黄褐色 内:灰黄色	2mm大の雲母、1mm以下の砂粒	良	外:凹線 貝殻刻目 内:ナデ	縄文後期中葉 元住吉山Ⅰ	外面炭化物付着 口縁端部に刻目
16	14	8	4-1層	縄文土器	深鉢	体部破片			残3.5	外:にぶい黄橙色 黒色 内:にぶい黄橙色 褐灰色	1～3mmの砂礫多量、雲母少量	良	外:3条凹線 ナデか貝殻条痕 内:ナデか貝殻条痕	縄文後期後葉 元住吉山Ⅱ	外面炭化物付着
16	15	8	4-1層	縄文土器	浅鉢	体部破片			残2.8	外:灰色 内:灰色	4mm以下の長石、微細雲母少量、1mm以下の砂粒少量	良	外:1条凹線 ナデ？ 内:ナデ	縄文後期後葉 元住吉山Ⅱ	
16	16	8	4-1層	縄文土器	深鉢	体部破片			残6.8	外:灰黄色 灰色 内:灰黄色 灰色	2,3mmの白色土塊少量、長石含む1mm大の砂粒少量	良	外:3条巻貝条痕？（ミガキ様） 内:巻貝条痕？（ミガキ様）	縄文後期後葉 宮滝	
16	17	8	4-1層	縄文土器	深鉢	体部破片			残6.5	外:灰白色 内:灰黄褐色	長石含む3mm以下の砂礫多量	良	外:凸帯 巻貝扇状圧痕 内:不明	縄文後期後葉 宮滝	
16	18	8	4-1層	縄文土器	浅鉢	体部破片			残6.6	外:灰黄褐色 暗灰色 内:灰褐色	3mm以下の雲母少量、長石多量	良	外:ナデ 3条凹線 内:ナデ	縄文後期後葉 宮滝	
16	19	8	4-1層	縄文土器	深鉢	口縁～体部 1/4	（16.0）		残8.2	外:灰白色 内:褐灰色 灰色	3mm以下の長石	良	外:二枚貝条痕 内:二枚貝条痕のちナデ	縄文後期後葉	
16	20	8	4-1層	縄文土器	浅鉢	底部		5.4	残2.0	外:にぶい黄橙色 内:灰黄色 黄灰色	2mm以下の雲母少量、長石含む1mm以下の砂粒多量	良	外:ナデ 内:ハケ状工具によるナデ	縄文後期	平底
17	1	9	4-2層	縄文土器	深鉢	口縁部破片			残6.0	外:浅黄橙色 内:灰黄褐色	2mm以下の長石、黒色砂粒	良	外:ナデ 沈線 渦巻文 縄文帯 内:ナデ	縄文後期初頭 中津（古）	
17	2	9	4-2層	縄文土器	深鉢	口縁部小片			残3.4	外:灰白色 内:灰白色	2mm以下の砂粒、4mm大の砂礫少量	良	外:半裁竹管状工具による刺突文 内:ナデ？	縄文中期後葉 船元Ⅲ	口縁端部に刺突
17	3	9	4-2層	縄文土器	深鉢	体部破片			残4.5	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	長石含む2mm以下の砂粒少量	良	外:凹線 磨消縄文 内:ナデ	縄文後期初頭	
17	4	9	4-2層	縄文土器	浅鉢	体部破片			残3.4	外:橙色 内:灰黄褐色	1mm以下の雲母少量、2mm以下の長石多量	良	外:凹線 ナデ？ 内:巻貝条痕（ミガキ様）	縄文後期初頭	肩部か
17	5	9	4-2層	縄文土器	深鉢	口縁小片			残2.4	外:にぶい褐色 内:黒褐色	長石含む1mm以下の砂粒少量	良	外:1条凹線 巻貝条痕 内:ナデ？	縄文後期後葉 元住吉山Ⅱ	
17	6	9	4-2層	縄文土器	深鉢	口縁部破片			残6.3	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	3mm大の白色土塊、4mm大の石英、長石含む3mm以下の砂礫少量	良	外:二枚貝条痕 内:二枚貝条痕	縄文後期	

図	番号	写真	地点 層位	種別	器種	遺存	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色　調	胎　土	焼成	調整・文様	時期 （併行型式）	備考
17	7	9	4-2層	縄文土器	鉢	口縁部 破片			残5.0	外:にぶい黄橙色 内:灰黄褐色	長石、石英を含む1㎜以下の砂粒多量	良	外:不明 内:不明	縄文後期末 滋賀里Ⅰ	
17	8	9	4-2層	縄文土器	浅鉢	底部1/2		4.0	残2.5	外:灰黄色 内:黄灰色	長石含む3㎜以下の砂礫、2㎜以下の炭化物少量	良	外:不明 内:ナデ	縄文後期	上げ底
17	9	9	4-3層	縄文土器	深鉢	口縁部 破片	(22.6)		残6.3	外:にぶい黄橙色 淡赤橙色 黄灰色 内:褐灰色	長石含む3㎜以下の砂礫多量	やや良	外:圧痕？ 内:巻貝条痕？	縄文中期末 矢部奥田	口縁端部に押圧刻み
17	10	9	5層	縄文土器	深鉢	底を欠く	18.8		残14.9	外:にぶい黄橙色 内:黒色	1㎜以下の砂粒多量、2㎜大の長石、石英微量	良	外:二枚貝条痕のち上部重弧文 胴部に段を持つ 内:二枚貝条痕	縄文中期末 矢部奥田	外面に連続重弧文
17	11	9	5層	縄文土器	深鉢	口縁～体部破片	(16.2)		残6.4	外:にぶい橙色 内:灰黄褐色	長石、石英を含む1㎜以下の砂粒多量	良	外:凹線 沈線状のナデ？ 丸形の凹み　段に刻み 内:二枚貝条痕	縄文中期末 最古段階	扁平化
17	12	9	5層	縄文土器	深鉢	底部破片		(9.4)	残3.2	外:褐灰色 内:にぶい黄橙色	長石、石英を含む1㎜以下の砂粒多量	良	外:ナデ？ 内:不明	縄文中期～後期か	上げ底 17-10と同一か
18	1	10	中央 トレンチ	縄文土器	深鉢	口縁～体部破片			残6.8	外:褐灰色 内:灰黄褐色	長石含む5㎜以下の砂礫少量	良	外:2条凹線 巻貝による調整のちナデ 内:1条凹線 巻貝による調整のちナデ	縄文後期後葉 元住吉山Ⅱまたは宮滝か	内外綿とも凹線に巻貝のら肋痕あり
18	2	10	中央 トレンチ	縄文土器	浅鉢	口縁部 小片			残2.0	外:灰黄色 内:灰黄色	0.5㎜大の雲母、長石含む3㎜以下の砂礫多量	良	外:凹点 2条凹線 内:不明	縄文後期末 宮滝	
18	3	10	東側溝	弥生土器	甕	口縁部 小片	(16.0)		残3.5	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	長石、石英を含む2㎜以下の砂粒少量	良	外:3条凹線 ナデ 内:ナデ	弥生後期前葉 Ⅴ-1	
18	4	10	東側溝	須恵器	坏蓋	口縁部 破片	(13.0)		残3.1	外:灰色 黒色 内:灰色	2～4㎜の長石微量　0.5㎜以下の長石少量	良	外:回転ナデ 内:回転ナデ	古墳後期 出雲5~6	外面炭化物付着
18	5	10	中央 トレンチ	須恵器	坏身	口縁部 小片			残2.1	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	長石含む0.5㎜以下の砂粒多量	やや不良	外:回転ナデ 内:回転ナデ	古墳後期	
18	6	10	西側溝	須恵器	坏身	底部1/2		(7.2)	残2.0	外:灰色 内:灰色	2～4㎜の長石少量　1㎜以下の長石多量	良	外:回転ナデ 回転糸切 内:回転ナデ	8ｃ前葉 国府第2	
18	7	10	東側溝	須恵器	高台付坏	1/3	(12.2)	(7.4)	5.2	外:灰色 内:灰色	2㎜以下の長石微量	良	外:回転ナデ 回転糸切 内:回転ナデ	8ｃ半ば頃 出雲8	貼り付け高台
18	8	10	側溝	土師器	甕	口縁～体部破片	(19.2)		残6.1	外:黄灰色 内:灰白色	長石、石英含む2㎜以下の砂粒多量	良	外:ナデ ハケ目 内:ナデ ヘラケズリ	古墳後期～奈良	外面炭化物付着
18	9	10	東側溝	土師器	高坏	脚部1/2			残4.2	外:灰黄色 内:浅黄橙色	0.5㎜以下の雲母微量、長石含む1㎜以下の砂粒多量	良	外:不明 内:ヘラケズリのちナデ？	古墳後期	段を持つ
18	10	10	東側溝	土師器	甑	把手部			残10.5	外:灰白色 内:灰黄褐色	長石、石英含む2㎜以下の砂粒多量	良	外:ナデ 内:ヘラケズリ	古墳中・後期	

石器

図	番号	写真	地点 層位	器　種	石　材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備　　考
14	1	10	SK01	石核	玉髄	5.8	5	4.3	149.63	方形　打ち欠き剥片を採っている　部分的に敲打痕あり
14	2	10	SK01	砥石	玄武岩	4.8	2.8	1.7	22	横方向の擦痕あり（棒状のものを研いだか）
14	3	10	SK01	凹石	玄武岩	11.7	5.6	13.05	1250.95	磨痕あり　縦方向の線状痕あり
20	1	11	1 層	敲・凹石	玄武岩	12.7	8.5	5.3	872	6 面に敲打痕、 部分的に擦った痕、一つの面に繋がったような二つの大きな凹みあり
20	2	11	1-1 層	石皿	安山岩	20.9	8.6	3.2	1148	表、裏面を利用　凹状に磨り減っている
20	3	11	3~4 層	石鏃	安山岩	3	3	1.9	1.29	サヌカイトに近い
20	4	11	3 層	不明石器	凝灰岩	14.9	6.7	9	1029	縄文後期 ~ 弥生後期 表、裏、側面に線状痕（側面は強く深い）あり　砥石に転用か
21	1	13	4-1 層	打製石斧	安山岩	残 4.8	6.9	1.1	35.88	土堀具か
21	2	12	4-1 層	磨・敲・凹石	玄武岩	11.1	9.8	6.4	935	6 面に敲打痕あり　表、裏面は鋭角気味に凹む
21	3	12	4-1 層	敲石	凝灰岩	12.8	10.5	8.8	1308.32	裏面に擦れた線状痕あり　表面中央に楕円形状、斜め横に弱い敲打痕あり
21	4	12	4-1 層	敲・凹石	安山岩	16.3	8.6	8.0	1497	4 面（中央部の同心円上）に敲打痕あり　くるみ核を割る際に使用か
22	1	12	4-1 層	磨・敲石	安山岩	11.4	9.7	6.5	1060	4 面に擦痕あり
22	2	12	4-1 層	磨石	凝灰岩	15.1	10.3	8.0	1750	滑らかな円礫
22	3	13	4-1 層	砥石	デイサイト	6.0	6.0	4.2	166.95	2 面を使用　短く細く鋭い線痕
22	4	12	4-1 層	砥石	砂岩	12.8	10.0	6.4	982.33	
22	5	12	4-1 層	矢板状礫	デイサイト	20.8	9.7	3.5	1300	扁平な材の片端を鋭角に加工　表、裏面は自然面
22	6	12	4-2 層	矢板状礫	安山岩	15.7	9.3	3.1	580	扁平な材　加工痕あり
23	1	13	4-1 層	石皿	玄武岩	16.2	11.4	9.8	1464	2 面を使用
23	2	13	4-1 層	石皿	デイサイト	17.5	11.2	9.2	2060	3 面を使用　凹状をなす
23	3	12	4-1 層	台石	安山岩	20.5	10.0	7.0	2240	表面敲打痕あり　側面滑らか
23	4	13	4-1 層	台石	安山岩	24.0	20.3	5.5	4140	
24	1	13	4-2 層	石鏃	安山岩	2.0	1.2	0.2	0.64	
24	2	13	4-2 層	石鏃	安山岩 （ガラス質）	2.0	0.9	0.2	0.48	凹む基
24	3	13	4-2 層	石鏃	安山岩	1.8	1.0	0.2	0.36	五角形を呈す
24	4	13	4-2 層	スクレイパー	安山岩 （ガラス質）	4.2	2.4	0.5	3.0	刃部は弧状をなす
24	5	13	4-2 層	剥片	安山岩 （ガラス質）	2.7	2.8	0.7	4.0	加工痕あり　鏃の未製品か
24	6	13	4-2 層	磨製石斧	安山岩	6.3	5.3	3.0	156.94	

図	番号	写真	地点 層位	器　種	石　材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備　　考
24	7	15	4-2 層	石斧未製品	玄武岩	20.5	8.2	5.0	1303.97	表、裏、側面両端部に細かな敲打痕あり　刃部側がより敲打痕多し　粗割から成形が進む
24	8	13	4-1 層	楔形石器	安山岩か デイサイト	7.8	3.0	2.6	61.49	
24	9	13	4-2 層	打製石斧	デイサイト	14.7	5.9	2.7	290.5	板状の礫を使用
25	1	15	4-2 層	敲石	安山岩	7.6	6.9	6.6	529	両端部に敲打痕　側面 1 か所に弱い敲打痕
25	2	14	4-2 層	敲・凹石	安山岩	9.3	7.8	4.4	421	表面に敲打痕あり凹む
25	3	15	4-2 層	敲石	デイサイト	9.1	8.0	5.4	531	中央部分淡黄色に変色
25	4	14	4-2 層	磨・敲石	デイサイト	11.2	8.0	7.9	1002.41	表、裏面磨痕あり　3 面に弱い敲打痕
25	5	15	4-2 層	砥石か石皿	安山岩？	16.1	9.7	9.3	2846	
26	1	14	4-2 層	砥石	玄武岩	31.2	23.2	21.9	16540	使用痕の筋溝あり　被熱　線刻石の可能性
26	2	14	4-2 層	台石 (円礫)	安山岩	16.9	11.4	4.0	1217.87	片面に小さな敲打痕
26	3	14	4-2 層	台石	安山岩	18.9	14.0	5.3	1967	被熱
26	4	15	4-2 層	台石	安山岩	22.5	15.7	5.0	2302	意図的に打ち欠いた可能性
26	5	15	4-1 層	台石	凝灰岩	21.3	13.9	4.2	1212	線状痕あり（紐か縄で縛った痕か）
26	6	14	4-2 層	台石	デイサイト	30.9	15.9	10.0	9500	空洞にメノウが入るデイサイト
27	1	14	3 層以下	磨・敲石	溶結凝灰岩	10.7	10.6	7.6	1150	弱い敲打痕の周りに磨痕あり
27	2	14	4 層以下	磨石	凝灰岩	9.3	8.6	5.9	663.84	表、裏面に磨痕あり
写真		11	SK01	標石	安山岩	54.5	42.5	28.5	84760	卵形　円形の剥離痕あり

木器

図	番号	写真	層位	品目	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	その他	木取り	樹種	備考
19	1	16	1-1 層	田下駄	36	11.6	2.3		板目	スギ	3 か所の穿孔あり　大足用田下駄
19	2	16	1-1 層	施設部材	45.7	11.6	2.9		板目	スギ	1 か所方形のくりぬきあり
19	3	16	4-2 層	杭	43.4			径：8.6~9.7	芯持	カヤ	先端と片側だけ削って杭としている

第４表　京田遺跡２区出土非掲載石器一覧表

番号	出土地点	器種	石材	重量 (g)
1	4-2 層	原石・素材・自然石等	安山岩	1577.74
2	4-2 層	原石・素材・自然石等	花崗岩	1701.66
3	4-2 層	原石・素材・自然石等	安山岩	732.00
4	4-2 層	原石・素材・自然石等	砂岩	26.86
5	4-2 層	原石・素材・自然石等	珪質岩	15.27
6	4-2 層	原石・素材・自然石等	石英	6.97
7	側溝排土（4 層以下）	剥片	不明	3.88
8	側溝排土（4 層以下）	原石・素材・自然石等	瑪瑙 その他玉髄	15.38
9	側溝（4 層以下）	原石・素材・自然石等	珪化木	58.49
10	側溝（4 層以下）	原石・素材・自然石等	デイサイト	452.92
11	側溝（4 層以下）	原石・素材・自然石等	安山岩	308.21
12	集石	原石・素材・自然石等	デイサイト	393.00
13	集石	原石・素材・自然石等	デイサイト	358.15
14	集石	原石・素材・自然石等	安山岩	444.48
15	集石	原石・素材・自然石等	凝灰岩	888.76
16	集石	原石・素材・自然石等	流紋岩	109.55
17	集石	原石・素材・自然石等	安山岩	772.93
18	5 層集石トレンチ	原石・素材・自然石等	デイサイト	132.51
19	5 層集石トレンチ	原石・素材・自然石等	安山岩	235.90
20	5 層集石トレンチ	原石・素材・自然石等	デイサイト	193.34
21	5 層集石トレンチ	原石・素材・自然石等	安山岩	354.18
22	5 層集石トレンチ	原石・素材・自然石等	凝灰岩	171.93
23	4-1 層	原石・素材・自然石等	玄武岩	503.15
24	4-1 層	原石・素材・自然石等	安山岩	1473.62
25	4-1 層	原石・素材・自然石等	安山岩	1015.45
26	4-1 層	原石・素材・自然石等	安山岩	156.50
27	4-1 層	原石・素材・自然石等	安山岩	197.67
28	4-1 層	原石・素材・自然石等	安山岩	2455.00
29	4-1 層	原石・素材・自然石等	凝灰岩	271.30
30	4-1 層	原石・素材・自然石等	デイサイト	465.75
31	4-1 層	原石・素材・自然石等	玄武岩	663.21
32	東側溝	原石・素材・自然石等	安山岩	440.69
33	表土掘削（暗灰色粘土）旧田耕土	原石・素材・自然石等	流紋岩	1138.10
34	重機掘削 3 層排土（灰青色質土）	原石・素材・自然石等	不明	111.58
35	表土掘削（第 2）	原石・素材・自然石等	安山岩	54.67
36	中央トレンチ（崩落土）	原石・素材・自然石等	珪質岩	131.27
37	1-1 層（黒色粘土）	原石・素材・自然石等	デイサイト	17.07
38	SK01	原石・素材・自然石等	流紋岩	10760.00
39	SK01　1 層	原石・素材・自然石等	不明	36.25
40	SK01　1 層	原石・素材・自然石等	流紋岩	26.87

番号	出土地点	器種	石材	重量 (g)
41	SK01（下層）	原石・素材・自然石等	流紋岩	175.49
42	SK01　1 層	原石・素材・自然石等	デイサイト	235.82
43	SK01（選別土内）	原石・素材・自然石等	凝灰岩	46.10
44	SK01	原石・素材・自然石等	デイサイト	11.15
45	SK01	原石・素材・自然石等	花崗岩	29.95
46	SK01（下層）	原石・素材・自然石等	デイサイト	6.54
47	SK01（下層）	原石・素材・自然石等	デイサイト	32.14
48	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	黒曜石	0.25
49	側溝（4 層以下）	剥片	黒曜石	4.95
50	P3	原石・素材・自然石等	安山岩	11.59
51	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	安山岩	19.97
52	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	安山岩	5.39
53	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	安山岩	5.43
54	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	安山岩	2.10
55	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	安山岩	1.50
56	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	安山岩	2.42
57	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	安山岩	3.40
58	4-2 層土器ひとかたまり土	剥片	安山岩	4.16
59	5 層集石トレンチ石片 A	原石・素材・自然石等	流紋岩	16.54
60	集石石片 B	原石・素材・自然石等	流紋岩	44.60
61	集石石片 B	原石・素材・自然石等	流紋岩	64.31
62	4-1 層	原石・素材・自然石等	玉髄	55.68
63	4-2 層	原石・素材・自然石等	流紋岩	249.81
64	4-2 層	原石・素材・自然石等	砂岩	273.62
65	4-2 層（下層）	原石・素材・自然石等	珪質岩	38.54
66	4-2 層	原石・素材・自然石等	安山岩	12.78
67	4-2 層	原石・素材・自然石等	不明	16.58
68	4-2 層	原石・素材・自然石等	デイサイト	229.66
69	4-2 層	原石・素材・自然石等	デイサイト	448.44
70	4-2 層	原石・素材・自然石等	デイサイト	1139.05
71	4-2 層	原石・素材・自然石等	安山岩	400.80
72	4-2 層	原石・素材・自然石等	凝灰岩	179.52
73	4-2 層	原石・素材・自然石等	安山岩	778.08
74	4-2 層	原石・素材・自然石等	凝灰岩	1303.83
75	4-2 層	原石・素材・自然石等	凝灰岩	1182.37
76	4-2 層（下層）	原石・素材・自然石等	石英	5.25
77	4-2 層（下層）	原石・素材・自然石等	石英	1.48
78	4-2 層土器ひとかたまり土 (サンプル)	剥片	黒曜石	4.00
85	4-2 層（SK01 周辺）	原石・素材・自然石等	玉髄	85.03
86	1 層	原石・素材・自然石等	瑪瑙 その他玉髄	251.28

第５表　京田遺跡２区出土石器　石材・器種別集計表

	安山岩	流紋岩	デイサイト	玄武岩	砂岩	凝灰岩	花崗岩	黒曜石	瑪瑙 玉髄 その他	石英	珪質岩	珪化木	不明	上段点数 下段重量 （g）
凹石				1 1,251										1 1,251
石皿	1 1,148		1 2,060	1 1,464										3 4,672
楔形石器	1 61													1 61
スクレイパー	1 3													1 3
石鏃	4 3													4 3
打製石斧	1 36		1 291	1 1,304										3 1,631
台石	5 11,867		1 9,500			1 1,212								7 22,579
敲石	1 529		1 531			1 1,308								3 2,368
砥石	1 2,846		1 167	2 16,562	1 982	1 1,029								6 21,586
加工痕のある剥片	1 4													1 4
加工痕のある礫石器	1 580		1 1,300											2 1,880
磨石						2 2,414								2 2,414
磨石・敲石	1 1,060		1 1,002			1 1,150								3 3,212
敲石・凹石	2 1,918			1 872										3 2,790
磨・敲凹石				1 935										1 935
磨製石斧	1 157													1 157
剥片	8 44							3 9	1 56				1 4	13 113
石核									1 150					1 150
原石素材自然礫	18 11,422	9 12,585	14 4,116	2 1,166	2 300	7 4,044	2 1,732	0 0	3 352	3 14	3 185	1 58	3 164	67 36,138
点数 重量	47 31,678	9 12,585	21 18,966	9 23,554	3 1,283	13 11,157	2 1,732	3 9	5 557	3 14	3 185	1 58	4 168	123 101,946

上段点数
下段重量（g）

※図版 11-1　SK01 検出礫（標石）を除く

第６表　京田遺跡２区出土縄文土器集計表

	有文土器（型式が判別できたもの）													小計	無文土器（型式不明を含む）			小計	合計
	中期			後期															
				初頭			中葉			後葉									
出土地点	船元Ⅲ式	北白川C式	矢部奥田式	中津（古）式	五明田	前葉	北白川上層式3期	一乗寺K式	元住吉山Ⅰ式	元住吉山Ⅱ式	宮瀧式	滋賀里Ⅰ式	後期		口縁部	胴部	底部		
SK01																5 21		5 21	5 21
2 層															1 36	4 48	1 29	6 113	6 113
3 層										2 19		1 15		3 34	33 668	238 2,416	3 122	274 3,206	277 3,240
4-1 層								1 27	3 27	2 41	3 146		3 341	12 582	32 431	338 3,149	5 257	375 3,837	387 4,419
4-2 層	1 15			1 41	2 29					1 5		1 20	1 42	7 152			1 73	1 73	8 225
4-3 層			15 289											15 289					15 289
5 層	16 149		37 747											53 896		3 15	1 17	4 32	57 928
トレンチ廃土										1 43	1 6		1 9	3 58	29 477	256 2,728	3 266	290 3,471	293 3,529
合計	17 164		52 1,036	1 41	2 29	0 0	0 0	1 27	3 27	6 108	4 152	2 35	5 500	93 2,011	95 1,612	844 8,356	16 764	955 10,753	1,048 12,764

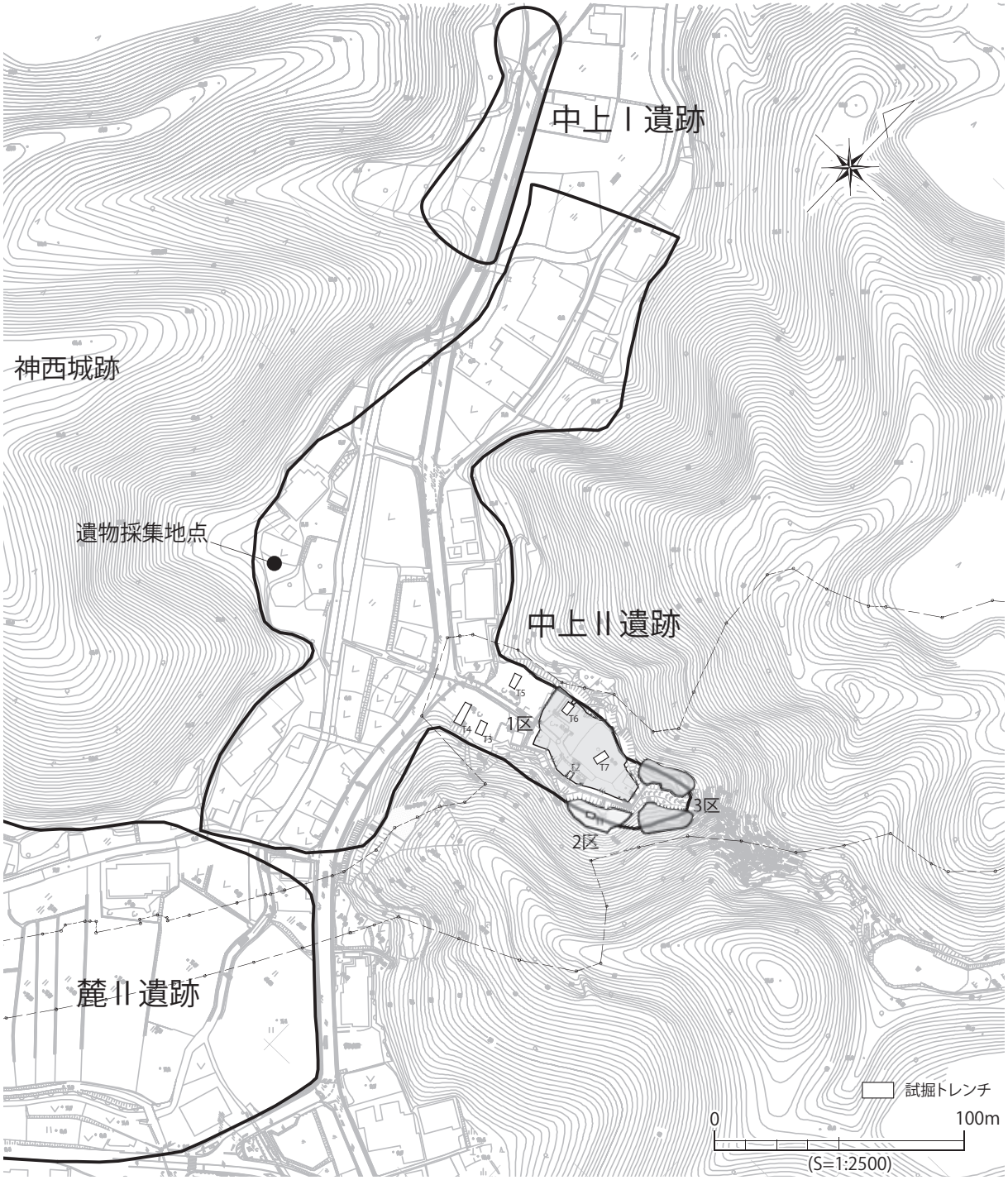
上段点数
下段重量（g）

第４章　中上Ⅱ遺跡の調査成果

第１節　調査の概要

1.　遺跡の立地（第 28 図）

調査対象地は、出雲平野南西部の神西湖に注ぐ九景川下流の右岸に開けた狭隘な谷間にあたる。この九景川の沖積地に面した谷間の三方は標高約80ｍの急峻な丘陵に囲まれているが、谷低地は現状で宅地として人工的に改変・造成されており、幅約20 ～ 30ｍ、奥行き約90ｍの平坦面が標高８



第28図　中上Ⅱ遺跡位置図

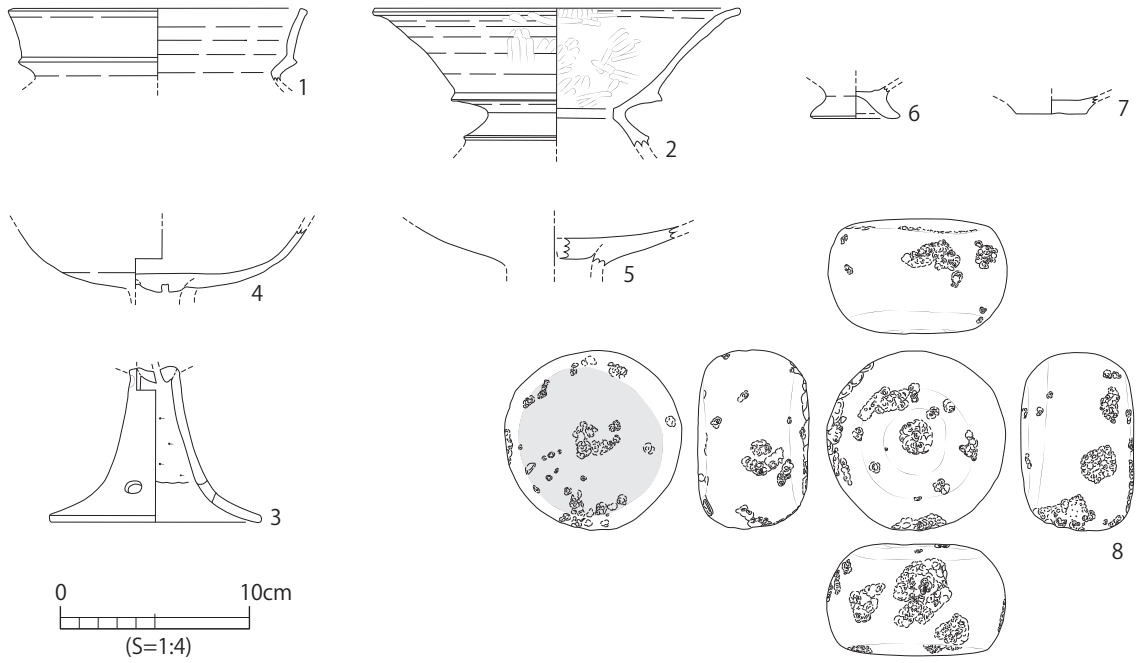
～13ｍの間で段状に広がる状況にあった。谷低地には丘陵奥地に設けられた溜め池に端を発する渓流が流れており、丘陵奥地から谷間に至る境目付近では比高差約20ｍの滝となって平坦部に流れ出る。この渓流は平坦部の手前でコンクリート製の堰堤で受け止められ南に流れを変え、その後は平坦部を迂回するようにコンクリート水路となって南側丘陵の山際を流れて九景川に流下する。

中上Ⅱ遺跡の周知の遺跡としての範囲は、今回の調査対象となった谷間と九景川下流域沿いの沖積地まで含めた広域なもので、後述するように実際に九景川沿いでも遺物が採集されている。本遺跡の九景川を挟んだ西側の丘陵には中世城郭の神西城跡があり、神西城跡東麓の丘陵斜面や水田部には縄文時代後期から中世にかけての遺構や遺物が数多く出土した麓Ⅱ遺跡が存在する。

2.　中上Ⅱ遺跡調査区外採集品（第 29 図）

中上Ⅱ遺跡では、今回の調査区外であるが、九景川西岸の麓で遺物が採集されている（第28図）[1]。

１は複合口縁を呈する土師器甕の小片である。器壁は薄手で口縁は外反気味に立ち上がり、口唇部に面をもつ。２は鼓型器台で脚部を欠く。３～５は土師器の高坏である。３は脚部で円形の透かし孔をもつ。４・５は坏部の底面で、４は口縁が湾曲気味に立ち上がる。いずれも坏部との接合に円盤が充填されている。６は土師器の低脚坏の脚部である。７は土師質土器皿の底部であり、糸切の痕跡が僅かに確認できる。８は磨石である。石の表面には磨面の他ほか側面にかけて敲打痕が多数認められる。これらのうち、１は少なくとも草田６期以降、２は草田５～６期、３・４は小谷３式と



第29図　中上Ⅱ遺跡　調査区外採集品実測図

(1)　中上Ⅱ遺跡の調査中に、近隣住民の方から、九景川西岸の麓で農作業中に出土した遺物を保管しているとの連絡を受けた。出土した現地と採集品を確認したところ、明らかに古代以前に遡る遺物も含まれており、遺跡の実態を解明する上でも重要な資料なので、採集者のご厚意により遺物を県に提供していただいた。今回、図化できたものは８点となる。

思われ[2]、遺物の時期は、弥生時代終末期～古墳時代初頭、古墳時代前期、中世に大別でき、時期的に今回の調査区出土遺物と整合的といえる。

3.　試掘確認調査（第 28 図）

本発掘調査の対象範囲は、平成26年度に実施した試掘確認調査の結果に基づいて決定した。調査は谷奥南側の丘陵斜面の小規模な平坦地に１箇所（Ｔ１）と、谷間の宅地跡である平坦地に６箇所（Ｔ２～Ｔ７）のトレンチを設定して実施した。

Ｔ１では、地表下50㎝で検出した地山上面で土師器片が出土した。Ｔ２～Ｔ５では明確な遺構は検出できなかったが、谷間北側の中央付近に設定したＴ６では、厚さ約40cmの造成土の下層から弥生時代末～古墳時代初頭の土師器片やピットを検出し、谷奥の中央付近に設定したＴ７では地表下１ｍの黒色土層から底部糸切の土師器片、その下層の褐色土層から弥生時代末～古墳時代初頭の土師器片を検出した。

以上のように、谷間の開口部付近では遺構・遺物の広がりを確認できなかったが、谷間の奥側のＴ１・Ｔ６・Ｔ７で弥生時代末～古墳時代初頭と古代～中世の遺物包含層や遺構面が確認された。また、谷の最奥部には滝があり、付近には同時期の祭祀跡が存在することも想定されたので、谷間の奥側を中心とした約2,000㎡を本発掘調査の対象範囲とした。

4.　発掘調査区の設定（第 30・32 図）

今回の発掘調査区は、前述した地形の特徴と試掘確認調査の結果に基づき、谷低地の平坦部を１区、谷間奥の南側丘陵斜面の小規模な平坦部を２区、谷間最奥部の滝や渓流の周辺部を３区とした。

調査区が比較的広域な１区の調査にあたっては、座標系に基づく座標軸を合わせたグリッドを設定した。調査区が狭小な２区については、グリッド設定を行わず、出土層位を記載して遺物の取り上げを行った。

5.　調査の方法

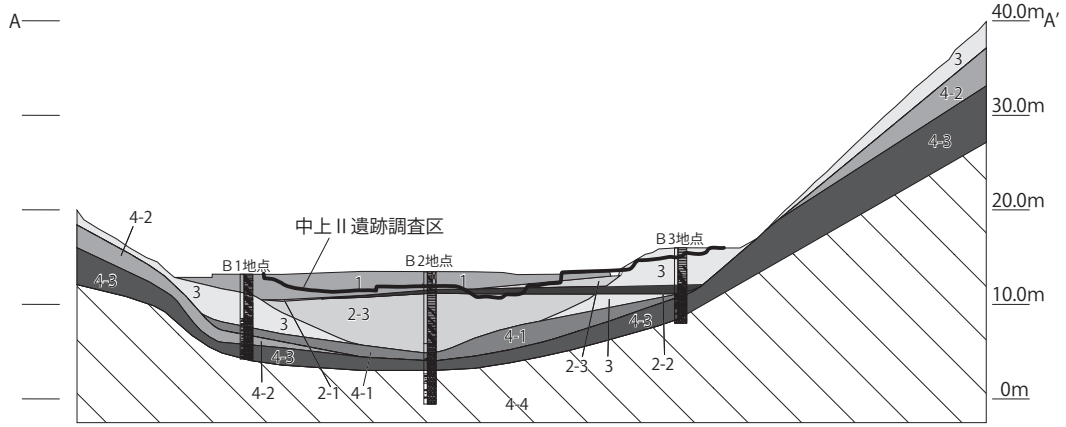
調査前の現地の状況について、１区とした谷低地の平坦面は宅地跡であり、家屋移転後も建物の基礎や石垣、舗装道路等が残存する状況にあった。加えて谷の奥側では直径２～５ｍ、深さ１ｍ以上の撹乱坑が５箇所以上で確認され、後の遺構検出作業を困難にした。また、平坦面の造成土も厚く堆積していることから、遺物包含層や遺構面までバックフォーを用いて構造物や造成土を取り除く必要があった。重機掘削はバケットに平爪を装着し、少しずつ漉き取るようにして面的に掘り下げた。併せて土層観察を行いながら、包含層・遺構面まで余裕を持たせて掘削を停止した。

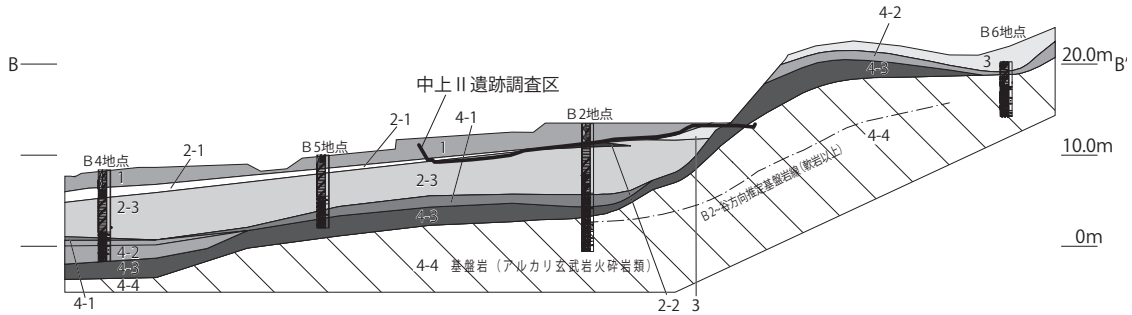
その後はベルトコンベアーを設置し、スコップ・ジョレンを用いた人力による掘削を行った。遺物包含層についてはスコップを用いて人力で掘り下げたが、出土する遺物の粗密に応じて適宜移植ゴテ等の道具を併用し、取り上げに際しては地点と層位の記録のみを行った。遺構検出にはジョレン・草削りを使用した。

遺構の埋土掘削には移植ゴテ・草削りを使用した。掘削にあたっては基本的にベルトを設定するか半裁をし、土層観察を行いつつ掘り下げた。土層断面については写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。遺構からの出土遺物については、出土状況を記録した後、取り上げ№を振って

(2)　弥生時代後期～古墳時代前期の土器の編年や分類については、松山智弘氏の御教示を得た。

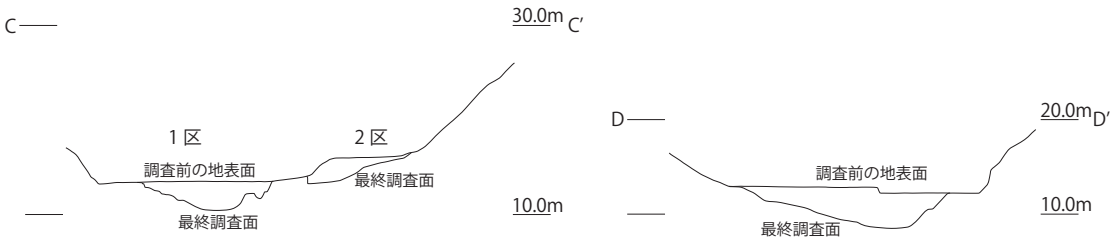
第30図　中上Ⅱ遺跡　調査区配置図





ボーリング調査を基にした
土層断面模式図

土層番号	地　質	記号	土質・岩質	岩級区分
1	人工改変土(盛土・埋土相当)主体	Bc	礫混り粘性土主体	―
2-1	谷底未固結堆積物主体 (崖錐・崩積土堆積物含む)	Ag	礫質土主体	―
2-2		Oc	有機質土主体	―
2-3		dt(Ac)	礫混り粘性土主体	―
3	表土・崖錐・崩積土堆積物主体 (風化土含む)	dt(Ac)	粘性土～砂礫質粘性土主体 (礫質土含む)	―
4-1	新第三紀 中新世(神西層) アルカリ玄武岩火砕岩類 （火山礫凝灰岩相）	Jbp	礫質土状主体～砂質土・粘性土状	DL主体～DM
			礫質土状主体	DM～DH
4-2			軟岩Ⅰ主体(固結土状含む)	DH～CL
4-3			軟岩Ⅱ主体(軟岩Ⅰ～Ⅱ含む)	CM～CL (CL～CM,CH)
4-4			中硬岩主体	CH～CM,CH



調査区断面図

0　20m
(S=1:800)

第31図　中上Ⅱ遺跡　土層断面模式図

取り上げた。

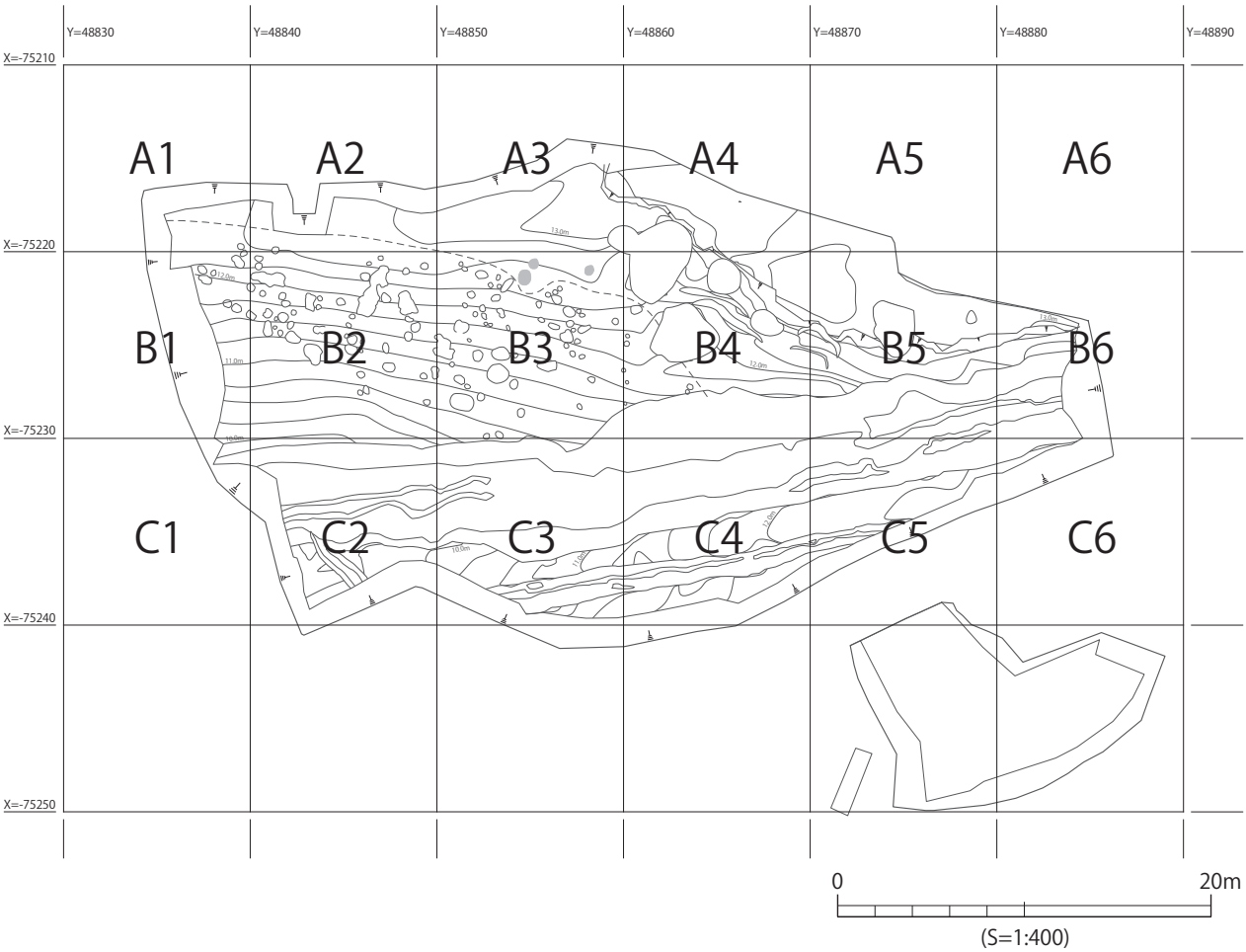
遺構の平面図は、コンピュータシステム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量を行い、高低差のある壁面については平面図と同様に調査システムを用いた記録作成を行った。遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものは６×７判フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）による撮影を行い、それ以外はデジタルカメラで撮影した。

現地調査期間は平成30年７月24日から12月17日、最終的な調査面積は1,200㎡、調査体制は調査員１名、調査補助員３名である。

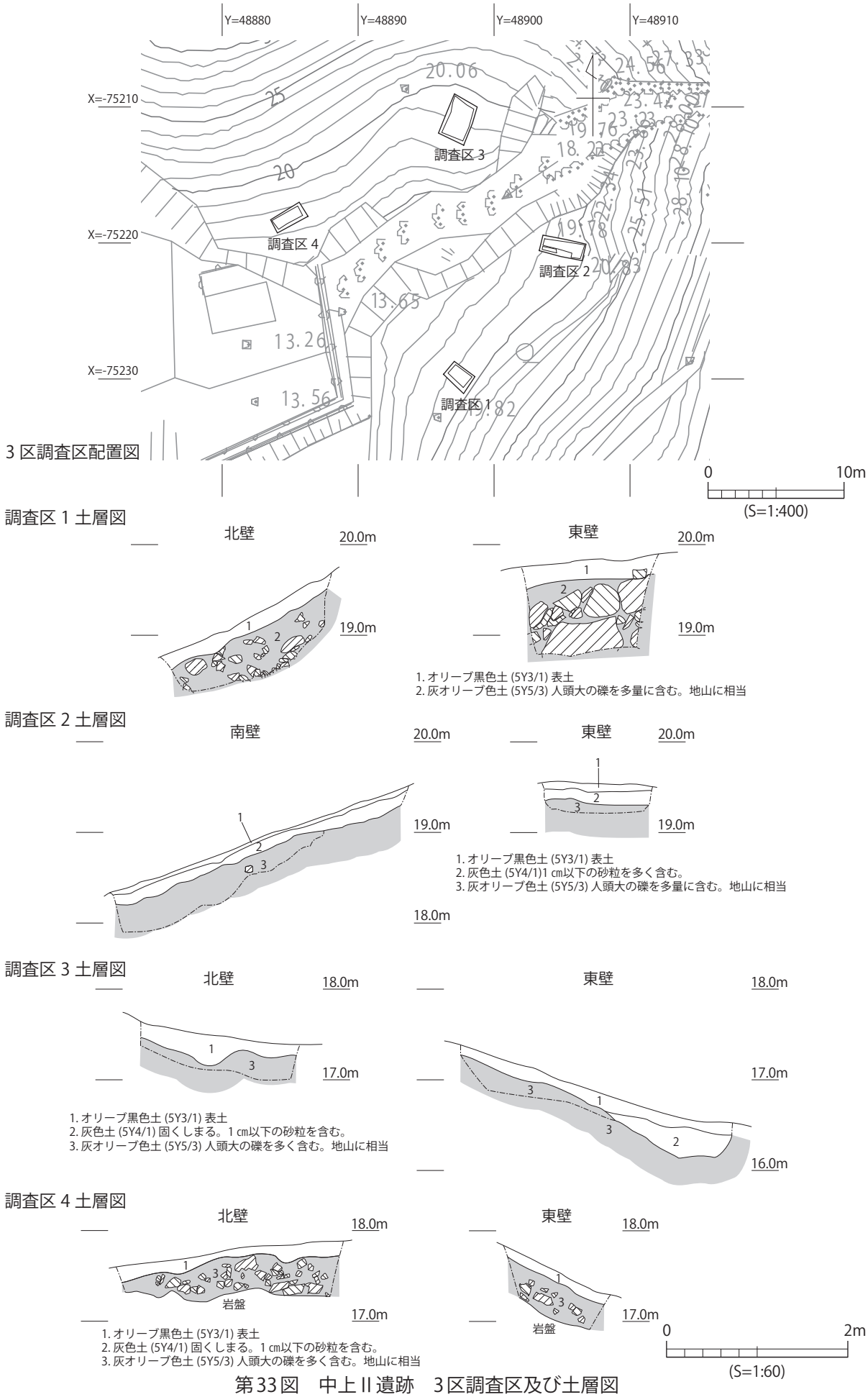
6.　3区の調査（第35図）

前述したとおり、３区は谷奥部にある滝や渓流の周辺部に設定した調査区である。今回３区を設定したのは、滝の眼前の渓流両岸に比較的緩やかな傾斜地形が広がっており、滝や渓流の沿岸に水辺の祭祀跡が存在する可能性が想定されたことによる。しかしながら、周辺には表層が崩壊した痕跡や、岩塊を含む崖錐性堆積物が認められるなど、遺構が残存していないことも考慮されたため、まずはトレンチ状の小調査区をいくつか設定して下層や地盤の状況を確認した上で、遺構・遺物を検出した箇所について調査範囲を拡大し、面的に調査を進める方法を採用した。

小調査区は渓流の両岸に２箇所ずつ設定した。調査の結果、各調査区とも表土下約20㎝で大型の



第32図　中上Ⅱ遺跡　調査区割図



第33図　中上Ⅱ遺跡　3区調査区及び土層図

礫や岩塊を多量に含む堆積土や地山面を検出し、さらに掘り進むと表土下50㎝で火山由来の岩盤面に到達した。いずれも遺物は出土せず、遺構が存在する痕跡も確認できなかったことから、この渓流両岸の緩斜面に遺構が残存する可能性は低いと思われ、これ以上の面的な調査は取りやめた。

第２節　１区の調査

1.　調査の概略と検出遺構（第 34 図）

１区は前述のとおり、九景川下流の沖積地に面した狭隘な谷間低地の標高12 ～ 13ｍの平坦部に位置する。元々宅地であったため、盛土造成による平坦面が段状に形成されていたが、造成土を除去したところ、平坦部の中央部で谷奥から谷の開口部にかけて貫流する自然河道（SR02）を検出した。また、SR02のすぐ南側でSR02と並行して延びる水路跡（SR01）を検出し、SR02下流側の南岸でSR02に向かって注ぐ水路跡（SR03）を検出した。

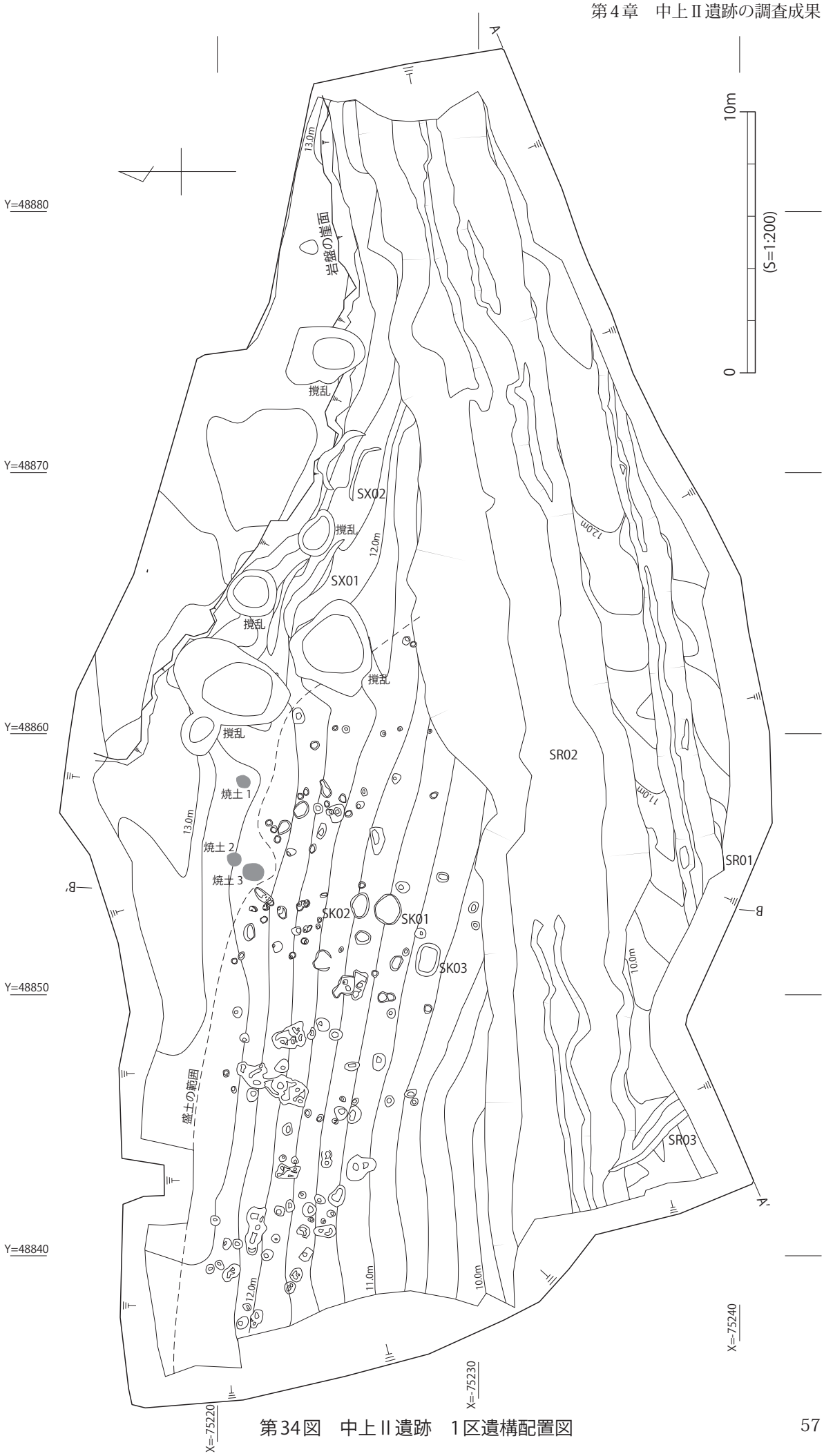
SR02の北側には河岸段丘状の平坦面が緩やかに広がっており、精査したところ、平坦面の西側で多数のピット群や焼土土坑を含む土坑を３基（SK01 ～ 03）、焼土面を３面検出した（第１遺構面）。また平坦面の東側の山際は削平された岩盤面が露出し、そのため平坦面は谷奥部に向かって三角形状に狭まっていたが、岩盤面の際で弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器群が集中して出土する箇所を２箇所で検出した（SX01・02）。

当初はこの遺構面が遺跡の地山面と認識していたが、下層の状況を念押しで確認するためサブトレンチを入れたところ、下層から弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が出土し、さらに約１ｍ下の地層面（第２遺構面）で柱穴状の遺構を検出した。そのためサブトレンチで遺物が出土した範囲を面的に掘り下げたところ、弥生時代後期～古墳時代後期の加工段状遺構（加工段１ ～ 5）を５箇所で検出した。なお、詳細は後述するが、この第２遺構面を厚く覆う第１遺構面以下の地層は堆積相観察（第５章第３節）の結果、人為的な盛土の可能性が高いことが明らかとなった。従って、この谷間低地の平坦面は、少なくとも古墳時代後期以降、数度にわたり谷を埋める大規模な造成が行われていたと考えられる。最終的な調査面積は1,000㎡である。

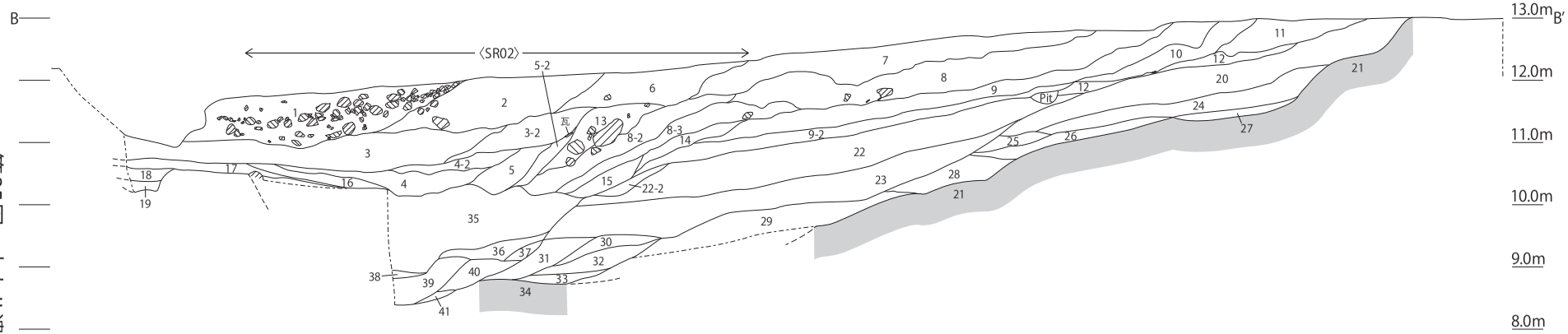
2.　基本層序（第 35・36 図）

平坦面を広く覆う造成土を除去した後、この谷間の平坦面を南北に横断する土層観察用ベルト（第35図）を設置して断面を観察しながら掘り下げを行った。SR02の上層ではまだ約２ｍの厚さで人頭大の礫を含む造成土（1 ～ 6層）、が堆積しており、また造成土内からは近代以降の陶磁器が大量に出土することからも、この時期に山際の斜面を削平して川をほぼ一気に埋め立てた様子がうかがえる。その下層から、青灰色砂礫層（35層）であるSR02の川底が姿を現し、SR02北側の平坦面では中世前半期を下限とする遺物包含層（8 ～ 11層）を検出した。この遺物包含層（8層）は緩やかにSR02に向かって傾斜しており、また8-2層は上面で直径50㎝以上の礫が多数検出されたことから、ある時期には川の護岸になっていたこともうかがえる。

その遺物包含層の下層から、多数のピット群や土坑群（SK01 ～ 03）を検出した地層面（第１遺構面、12・20・22層）が現れた。当初はこの面が遺跡の地山面と認識していたことは前述したとおりだが、下層の20層内から弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が出土し、さらに約１ｍ下層の地層面（第２遺構面、21層）で加工段状遺構（加工段１ ～ 5）を５箇所で検出した。この第２遺構



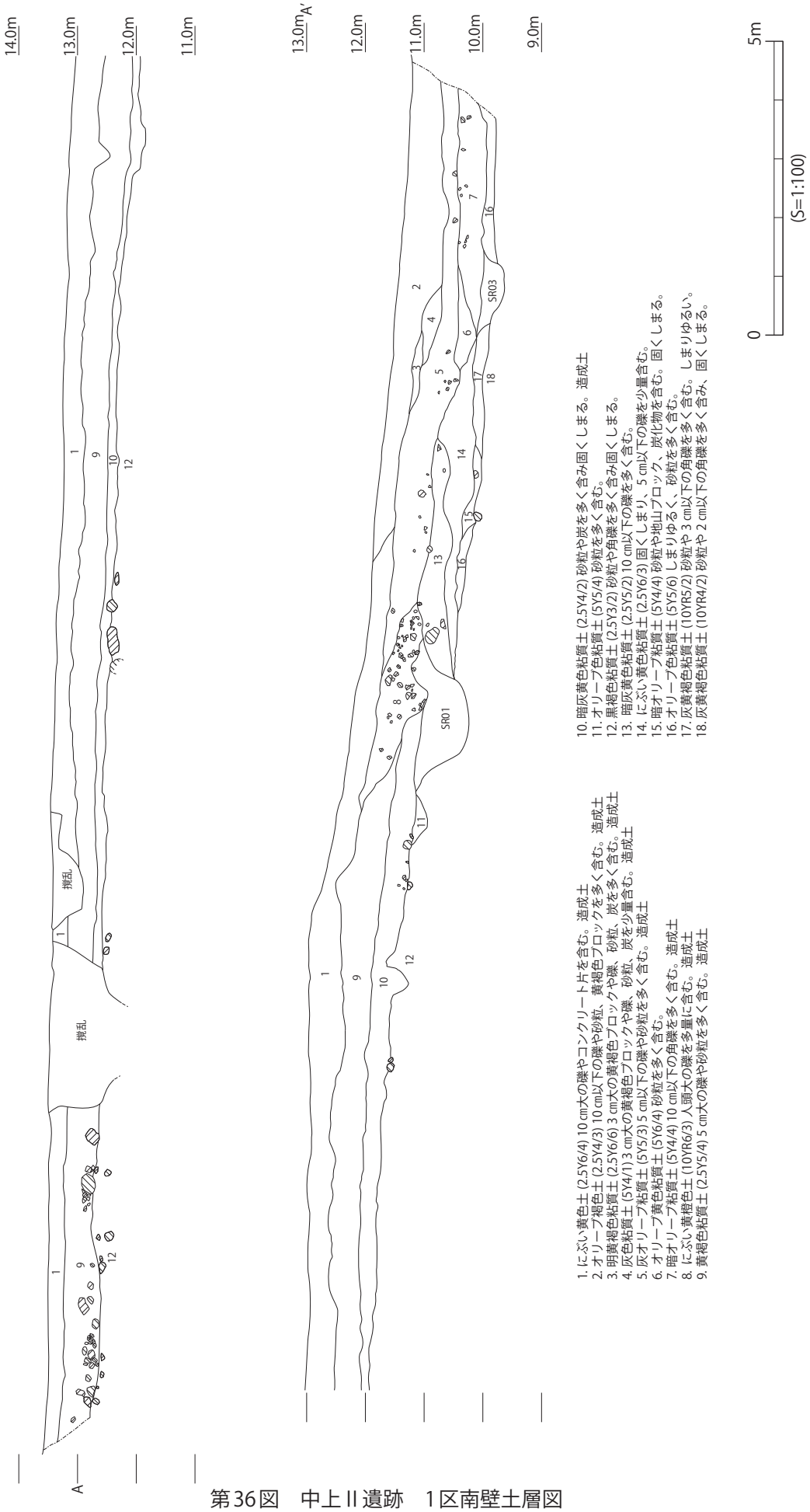
第34図　中上Ⅱ遺跡　1区遺構配置図



1.　にぶい黄橙色土 (10YR6/3) 人頭大以下の礫を多量に含む。近現代の造成土。
2.　明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6) 拳大以下の礫や砂粒、地山ブロックを多量に含む。近現代の造成土。
3.　オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/4) 粘性強く、炭化物や砂粒を含む。近現代の造成土。
3-2. 暗オリーブ褐色粘質土 (2.5Y3/3)10 ㎝以下の角礫を多く含む。近現代の造成土。
4.　黄褐色粘質土 (2.5Y5/6) 粘性強くよくしまる。砂粒を少量含む。近現代の造成土。
4-2. 黄褐色粘質土 (2.2Y5/3) 固くしまり、砂粒を含む。近現代の造成土。
5.　暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 粘性強く、炭化物を多く含む。近現代の造成土。
5-2. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 固くしまり、炭化物や砂粒、地山ブロックを多く含む。近現代の造成土。
6.　にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) 拳大の礫や砂粒、炭化物、黄色ブロックを多く含む。近現代の造成土。
7.　にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 砂粒や炭化物、黄色ブロックを多く含む。近現代の造成土。
8.　褐色粘質土 (10YR4/4) よくしまり、砂粒や黄色ブロックを少量含む。
8-2. 灰黄色粘質土 (10YR5/2) 固くしまり、砂粒や地山ブロックを含む。
8-3. 灰黄色粘質土 (10YR5/2) 固くしまり、きめ細かい。砂粒をあまり含まない。
9.　黒褐色粘質土 (10YR3/1) 炭化物を多く含む。旧表土か。
9-2. 黒色粘質土 (10YR2/1) 固くしまる。黄褐色の砂粒や炭化物を含む。
10.　オリーブ黄褐色粘質土 (2.5Y4/4) 固くしまる。砂粒を含む。
11.　暗灰黄色土 (2.5Y5/2)5 ㎝以下の砂礫層。風化した岩盤が堆積か
12.　明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6) 固くしまり、1 ㎝以下の砂粒をまばらに含む。
13.　灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 人頭大の角礫を多く含む。
14.　灰オリーブ色粘質土 (7.5Y5/2) 固くしまり、黄褐色の砂粒を多く含む。
15.　暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 細かな砂粒を多く含む
16.　褐色粘質土 (10YR4/4) 砂粒や粘土ブロック、細かな角礫を含む。
17.　にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) 砂粒を多く含む。
18.　黄褐色粘質土 (10YR5/6) しまりゆるく粘性強い　砂礫を含む。SR01 の覆土
19.　青灰色砂質土 (10BG5/1) 砂粒や角礫を多く含む SR01 の覆土
20.　オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/4) 砂粒や地山ブロックを含む。固くしまる。盛土
21.　にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/3) 固くしまり、10 ㎝以下の角礫や地山ブロックがつまる。地山
22.　オリーブ黄色粘質土 (5Y6/4) 固くしまり、地山ブロックを少量含む。盛土
22-2. 緑灰色粘質土 (10GY5/1) 固くしまり、グライ化が進んだ土壌。盛土
23.　灰オリーブ色粘質土 (5Y5/3) 固くしまり、地山ブロックを少量含む。22 層よりグライ化進む。盛土
24.　灰オリーブ色粘質土 (5Y4/2) 地山ブロックや拳大の礫を含む。盛土
25.　灰オリーブ色粘質土 (5Y5/2) 固くしまり、地山ブロックや礫を多く含む。盛土か
26.　灰色粘質土 (5Y4/1) 固くしまり、地山ブロックを含む。
27.　暗オリーブ色粘質土 (5Y4/3) 固くしまり、地山ブロックや炭化物を含む。
28.　オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/3) きめ細かく、砂粒や黄色ブロックを含む。
29.　黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) きめ細かく固くしまる。砂粒や黄色ブロックを多く含む。
30.　灰黄色粘質土 (10YR5/2) 固くしまり、黄色ブロックや 3 ㎝以下の地山ブロックを含む。
31.　黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) 固くしまり、グライ化進む。黄色ブロックや炭化物、砂粒を多く含む。
32.　にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3) しまりゆるく、粘性強い。砂粒を多く含む。
33.　緑灰色粘質土 (10GY6/1) 粘性強い。黄色ブロックや砂粒を含む。
34.　オリーブ灰色粘質土 (10Y6/2) 固くしまり、10 ㎝以下の礫を多く含む。地山
35.　青灰色砂質土 (10BG6/1)10 ㎝以下の礫や砂粒の層 SR02 内堆積土
36.　青灰色砂質土 (5BG5/1) 粘性があり、砂粒や礫を含む。SR02 内堆積土
37.　緑灰色粘質土 (10G5/1) 固くしまり、砂粒や黄色ブロックを含む。SR02 内堆積土
38.　オリーブ黒色粘質土 (5Y3/2) 腐食土を多く含む。オモカス層。SR02 内堆積土
39.　暗青灰色砂質土 (10BG4/1) 固くしまり、粘性強い。黄色ブロックや砂粒を含む。SR02 内堆積土
40.　暗青灰色砂質土 (5BG4/1) 固くしまり、粘性強い。黄色ブロックや砂粒を含む。SR02 内堆積土
41.　オリーブ黒色粘質土 (5Y3/2) 腐植土を多く含む。オモカス層。SR02 内堆積土

0　5m
(S=1:100)

第35図　中上Ⅱ遺跡　1区南北縦断セクション土層図



第36図　中上Ⅱ遺跡　1区南壁土層図

面である21層を覆う第１遺構面以下の地層は、堆積相観察の結果、人為的な盛土の可能性が高いことが指摘されたのは前述したとおりである。

この他、調査にあたり調査区南側の壁面も土層観察を行いながら掘り下げた（第36図）。この調査区南壁セクションは谷底部平坦面の山際にあたり、自然河道SR02や水路跡SR01の南側に位置する。表土下には厚さ約50 ～ 80㎝の造成土（1・2層）が堆積し、その下層には川や水路を埋め立てた際の造成土（3 ～ 10層）が約１mの厚さで堆積する。また自然河道や水路跡の基盤層となっているのが12 ～ 18層に相当するとみられ、固くしまった土壌に砂粒や角礫を多く含んでいるのが特徴的である。この基盤層は川の北岸に広がる平坦面の地山面（第２遺構面）とは様相が異なっているが、これらの基盤層は古い時代に南側の丘陵斜面からの崖錐性堆積物、もしくは谷奥の渓流から流れ込んできた土石流が堆積したものと考えられる。

なお、発掘調査に先立って実施された事業地内のボーリング調査（第31図）では、厚さ1.5m前後の人工改変土の下層に崖錐・崩積土堆積物が厚く堆積することが確認されている。

以上のように、これらの土層断面は、この谷間の形成過程を如実に物語っているといえる。

3.　遺物包含層出土遺物（第 37・38 図）

これらは、調査区の南北横断セクションに対応する土層から出土した遺物である。第１遺構面の上層（8・9層）と下層（20・22 ～ 24・27・29層）に区別できる。

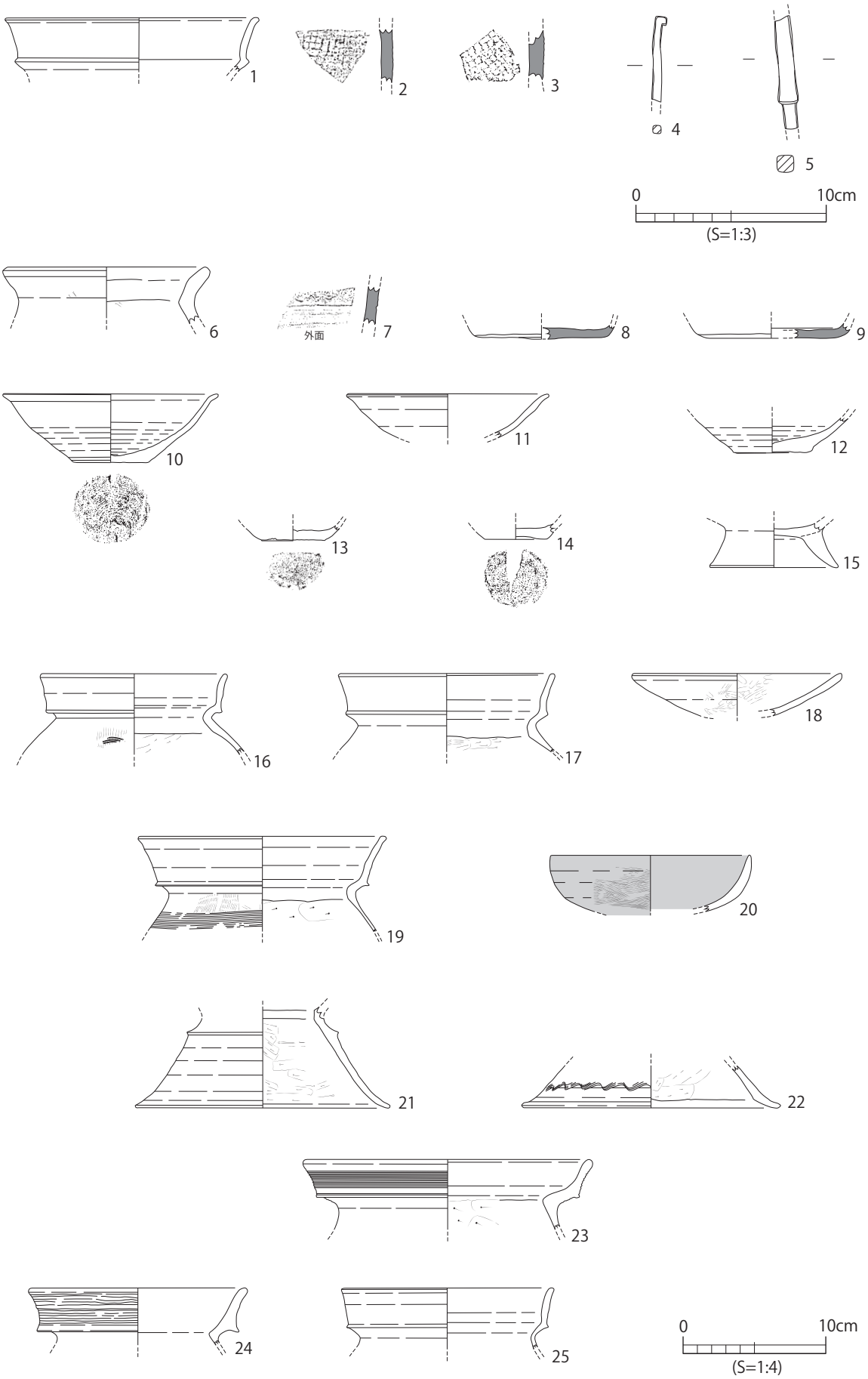
第37図１ ～ ５は８層出土遺物である。１は複合口縁を呈する薄手の土師器甕の口縁である。2・3は軟質焼成の中世須恵器の甕片である。外面に格子目の叩きが施され、2は内面にハケ目が残る。4・5は鉄製品である。4は先端部を欠くが頭折れの和釘とみられる。5は棒状鉄器で先端部と基部の端部を欠く。基部は中茎のような形状であるが器種は不明である。1は草田6期、2・3は鎌倉期の13世紀代のものとみられる。

6 ～ 15は9層出土遺物である。6は単純口縁の土師器甕の口縁である。7は須恵器の甕片とみられ外面に波状文がみられる。8・9は須恵器の坏底部であるが、いずれも風化が著しく調整は不明瞭であるが底面はヘラ切りとみられる。10 ～ 15は土師質土器である。10 ～ 13は坏であり、全形がわかる10は体部が底部から口縁にかけて丸みを帯びて立ち上がり、口縁は外反する。13・14は小型の坏か皿の底部である。15は大型の坏の高台である。高台は高さがあり、ハの字状に外反する。これらは6・7が古墳時代後期、8・9は奈良時代、10 ～ 14は鎌倉期の12世紀代とみられる。

16 ～ 18は22層出土遺物である。16・17は複合口縁の甕である。16は器壁がやや厚手で、口縁は直立気味に立ち上がり、口唇部は丸く収まる。肩部には波状文が確認できる。18は高坏または低脚坏の坏部とみられる。時期は16が草田3期、17が草田6期、18が草田5期とみられ、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に比定される。

19・20は23層出土遺物である。19は複合口縁の甕で、口縁が長めに逆ハの字状に立ち上がり、端部が肥厚する。20は土師器の坏である。体部は丸みをもち、外面にハケ目調整が施される。内外面とも赤色顔料が塗布される。時期は19が草田5期とみられ弥生時代終末期、20は同形態の坏が後述する第２遺構面の加工段1から出土しており、古墳時代後期に比定される。

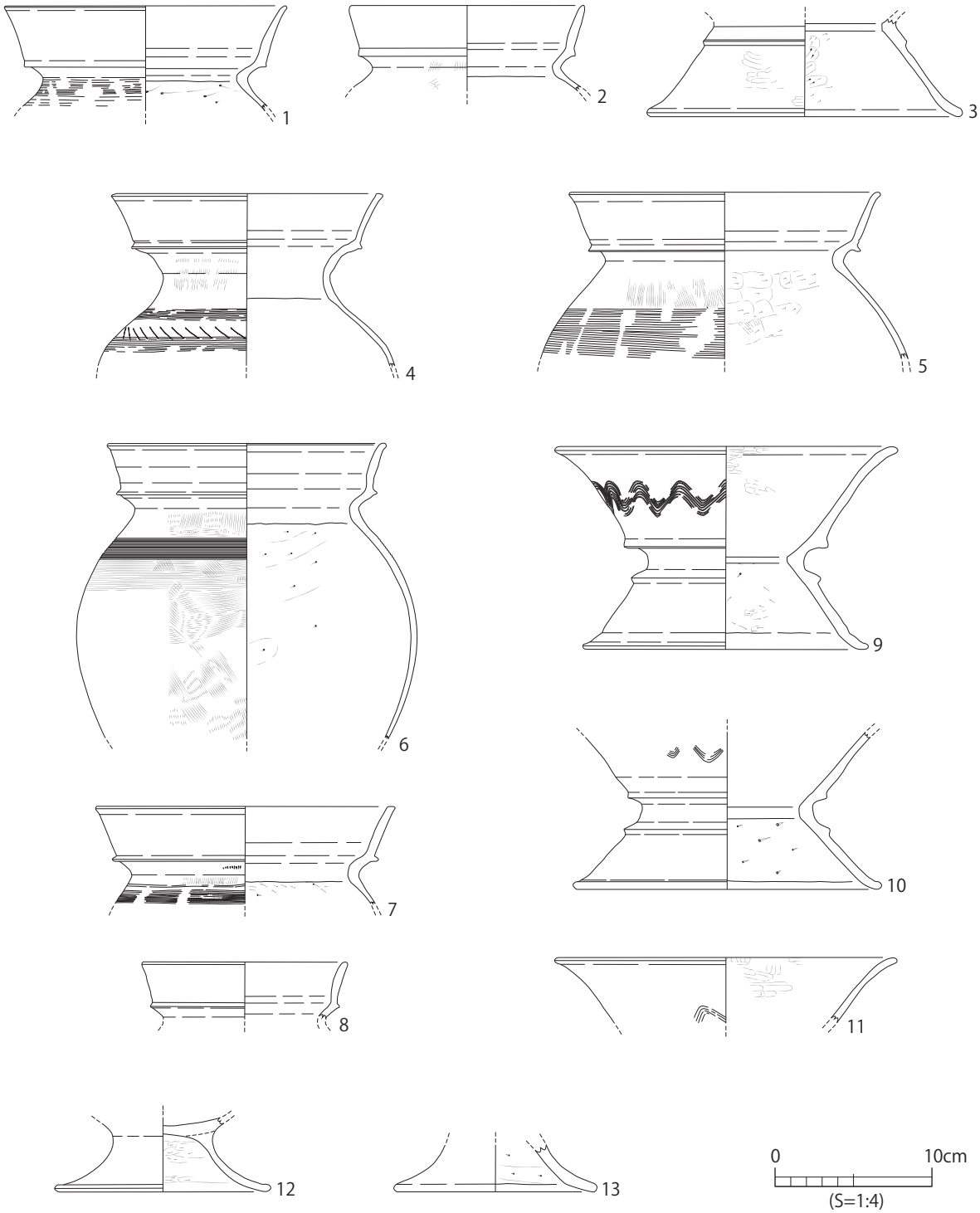
21・22は24層出土遺物である。いずれも鼓形器台の脚部で、21は器高に高さがあり、22は外面に波状文が施される。時期は21が草田4期、22が草田5期と思われ、弥生時代終末期に比定される。



第37図　中上Ⅱ遺跡　１区遺物包含層出土遺物実測図（1）

23は27層、24・25は29層出土遺物である。いずれも複合口縁の甕で、23・24は口縁外面に擬凹線が施される。25は口縁が短く直立気味に立ち上がる。時期は23・24が草田2期（24は草田3期か）、25は草田6期以降に相当するとみられ、23・24が弥生時代後期中葉、25が古墳時代初頭に比定される。

第38図1～13は20層出土遺物である。1～2、5～8は複合口縁の甕である。1は長めの口縁が外反して立ち上がり、先端は丸く収まる。2は口縁先端部が尖り気味に立ち上がる。5・6は肩部



第38図　中上Ⅱ遺跡　1区遺物包含層出土遺物実測図（2）

が張り出さず、口縁端部は屈曲して面をもつ。７は口縁が逆ハの字状に立ち上がり、端部に面をもつ。８は小片で、口縁端部は丸く収まる。４は壺であり、肩部は張り出さず貝殻腹縁とみられる刺突文が施される。口縁は端部が肥厚し面をもつ。３・９～11は鼓形器台である。３は脚部で立ち上がりに角度があり器高は高めとみられる。９は20層の上面で検出した焼土面の周辺で出土した（第45図）。全形が復元できた資料で、復元口径21.2㎝、器高12.9㎝である。風化が著しいが、受部外面に波状文が施される。10は11と比較してやや器高が低いとみられ、口縁端部を欠くが外面に波状文が確認できる。11は９と同一個体である可能性もある。12は高坏の高台とみられ、先端に向かって大きく外反する。13は台付甕の高台とみられる。時期は1･3が草田４期、２が草田５期、４～７･９が６期、10が草田６期もしくは７期とみられ、１～３が弥生時代終末期、４～７・９～11が古墳時代初頭、13が古墳時代前期に比定される。

以上のように、第１遺構面の上層である８･９層からは、古墳時代初頭から中世にかけて幅広い時期の遺物が出土するが、盛土の可能性のある第１遺構面下層の20・22～24・27・29層出土遺物は弥生時代後期～古墳時代後期の遺物が中心で、新しい時期の遺物は含まれないことが明らかである。特に20層以下で多数の弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物がまとまって出土しており、このことから、かつて調査区外の北側丘陵斜面に同時期の遺構が多数存在したことがうかがえ、それを後世に削平して谷部を大規模に盛土造成したことが土層の堆積状況から想定されるといえよう。

4.　遺構と遺物

（1）　自然河道・水路跡

SR01（第 39 図）

SR01は調査区南端の平坦面の際で検出された溝状遺構である。SR01のすぐ南側は急峻な丘陵斜面であり、SR01の北側約２ｍの位置には自然河道SR02が存在する。調査区内で遺構の全体を明らかにはできておらず、調査区を東西に貫流している状況にあるが、現状で長さ23.2ｍを検出し、幅は最大で1.8ｍ、深さは最大で90㎝を測る。ほぼ直線状に延びており、断面はＶ字状を呈する溝状遺構である。

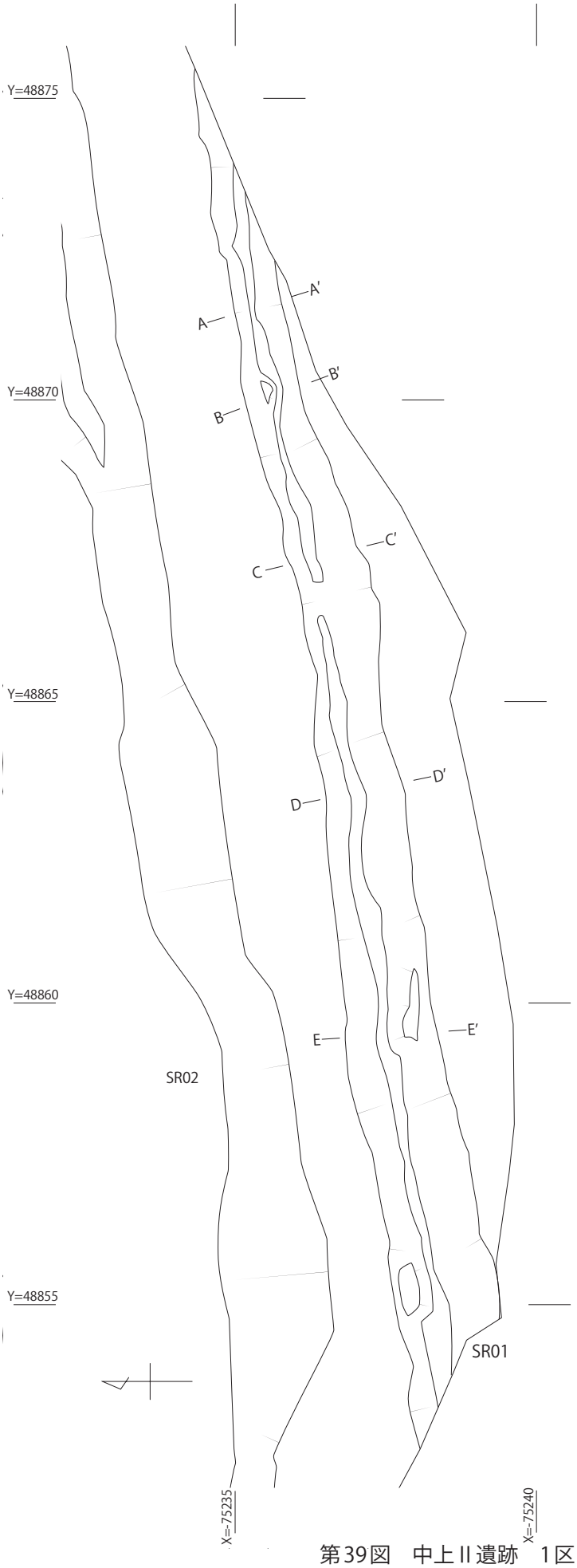
SR01はSR02とほぼ平行して谷奥から出口に向かって流れており、また溝底の高さがSR02の底高より0.5～１ｍほど高い位置にある（第40図）。また、SR01の埋土からは多数の近現代の陶磁器が出土することもSR02と共通している。このことから、SR01は自然流路とは考えにくく、谷奥の渓流から分水して人工的に掘られた農業用の水路であったことが想定される。現状でも、谷奥の渓流はコンクリート堤防に堰き止められて丘陵山際を流れる水路に流れ込んでおり、近代以降にSR01・02を埋め立てると同時に、水路をさらに南側に付け替えたものと考えられる。

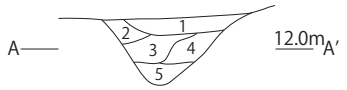
SR01 出土遺物（第 42 図）

前述したように、図化していないがSR01からは近現代の陶磁器類が多数出土しており、これらがSR01を埋め立てた時期を示しているものと考えられる。このほか、古代に遡るものとして須恵器片が１点出土している。１は坏の底部で、底部をヘラ切り後ナデ消している。時期は奈良時代に比定される。

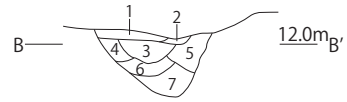
SR02（第 40 図）

SR02は調査区の南側半分で検出された自然河道である。谷奥の渓流から谷の出口に向かって貫

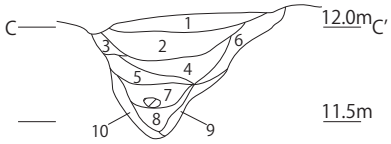




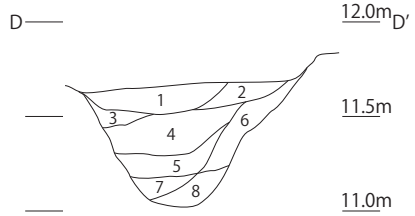
1. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/4) 固くしまり砂粒を含む。
2. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3) 砂粒を多く含む。
3. 灰黄褐色砂礫層 (10YR5/2) 砂粒や礫を含む。
4. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 砂粒や礫、腐食した木片を含む。
5. 青灰色砂礫層 (10BG5/1) 砂粒や礫を含む。



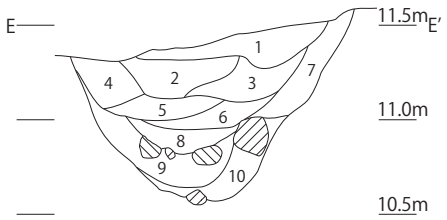
1. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/4) 固くしまり砂粒を含む。
2. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3) 砂粒や礫を多く含む。
3. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 砂粒や腐食した木片を含む。
4. 暗青灰色粘質土 (10BG4/1) 砂粒や炭化物を含む）
5. 青灰色粘質土 (10BG5/1) 砂粒や炭化物を含む。
6. 灰黄褐色砂礫層 (10YR5/2) 砂粒や礫、腐食した木片を含む。
7. 青灰色砂礫層 (10BG5/1) 細かな砂粒や礫を多く含む。



1. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/4) 固くしまり砂粒を含む。
2. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3) 砂粒や礫を多く含む。
3. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) しまりゆるい。
4. 青灰色砂質土 (10BG5/1) 砂粒を多く含む。
5. 暗青灰色粘質土 (10BG4/1) しまりゆるく腐食した木片を多く含む。
6. 青灰色粘質土 (10BG6/1) 固くしまり砂粒を含む。
7. 暗青灰色砂礫層 (10BG4/1)10 ㎝以下の礫や砂粒を多く含む。
8. 暗青灰色砂層 (10BG4/1) 細かな砂粒の層。
9. 灰オリーブ粘質土 (7.5Y5/3) 固くしまり砂粒や炭化物を含む。
10. 灰オリーブ粘質土 (7.5Y4/2) 固くしまり砂粒や炭化物を含む。



1. 灰オリーブ粘質土 (5Y6/2) 砂粒を含む。
2. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/4) 固くしまり砂粒を含む。
3. 灰オリーブ粘質土 (5Y5/2) 固くしまり粘性強い。
4. 灰オリーブ砂質土 (5Y5/2) 砂粒を多く含む。
5. 灰オリーブ粘質土 (5Y5/3) 砂粒と粘質土が互層状に堆積する。
6. オリーブ粘質土 (5Y6/6) しまりゆるく砂粒を含む。
7. 灰オリーブ砂質土 (5Y5/2) 砂粒や礫を含む。
8. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/4) 固くしまり砂粒を含む。

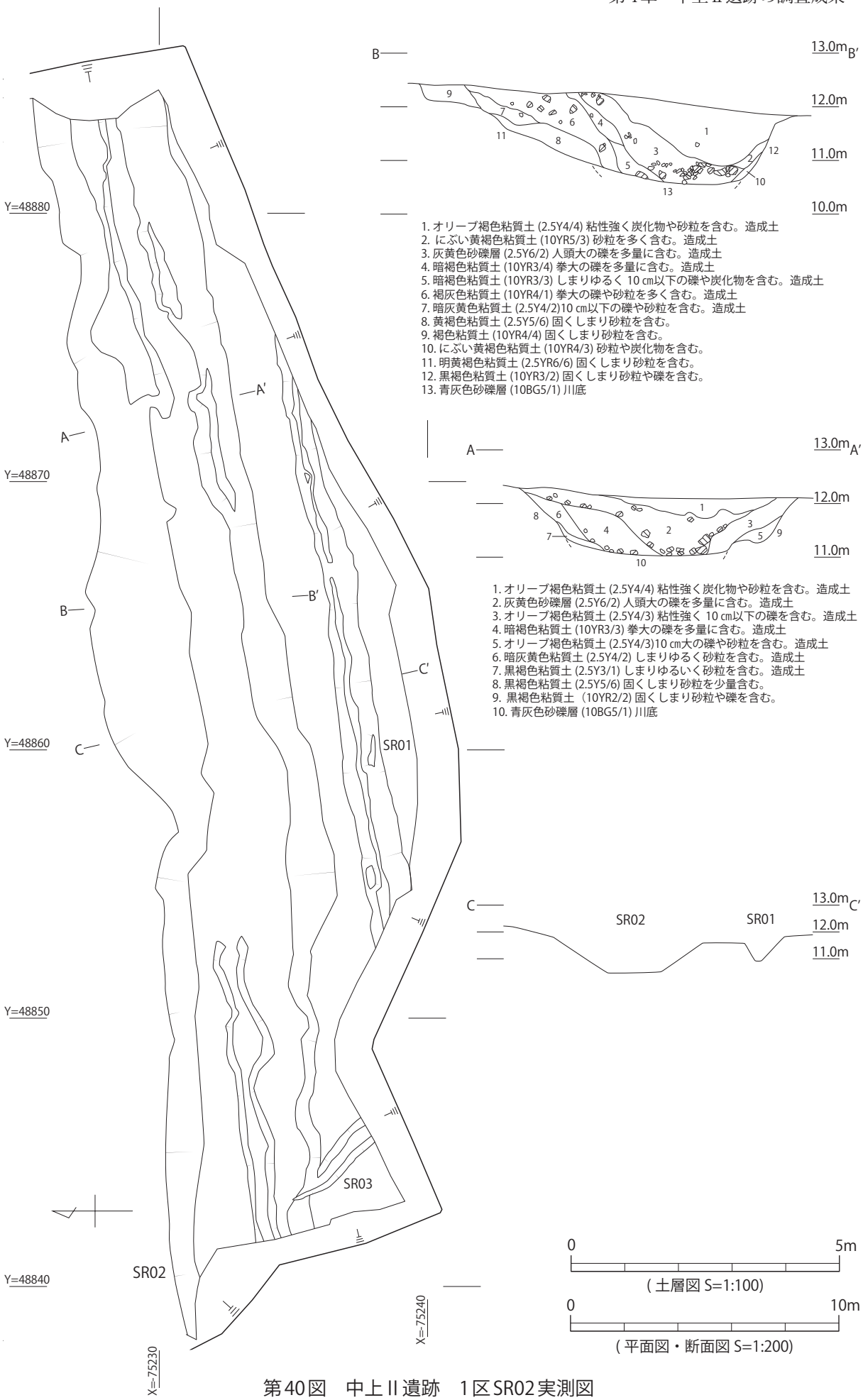


1. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/4) 砂粒を多く含む。
2. 灰オリーブ粘質土 (5Y6/2) 砂粒を含む。
3. 灰オリーブ砂質土 (5Y6/2) 砂粒と粘質土が互層状に堆積する。
4. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/4) 固くしまり砂粒を多く含む。
5. 灰オリーブ砂質土 (5Y5/2) 砂粒を多く含む。
6. 灰色粘質土 (5Y5/1) しまるゆるく砂粒を含む。
7. オリーブ黄色粘質土 (5Y6/3) 固くしまり砂粒を多く含む。
8. 浅黄色粘質土 (5Y7/4) しまりゆるい。
9. 灰色粘質土 (5Y5/1) 拳大の礫を含む。
10. 灰色粘質土 (5Y4/1) 固くしまり拳大の礫や砂粒を含む。

0　2m
（土層図 S=1:40）

0　5m
（平面図 S=1:100）

第39図　中上Ⅱ遺跡　1区SR01実測図



第40図　中上Ⅱ遺跡　1区SR02実測図

流しており、現状で長さ42ｍを検出し、幅は最大で７ｍ、深さは最大で1.5ｍを測る。ほぼ一直線に延びており、断面は逆台形を呈する。このように、かつてこの谷間には自然地形として谷奥の渓流から九景川に向かって注ぐ川があったことが明らかになったといえる。SR02の埋土の土層観察では、下層に人頭大の礫を多量に含む砂礫層が北側から流れ込んだように堆積し、その上層には周辺の地層をはぎ取ったとみられる褐色土が最大１ｍの厚さで堆積する様子がうかがえた。このような堆積状況は明らかに人為的な埋め立てによるものと考えられるが、埋土や川底から大量に近現代の陶磁器が出土しており、この時期に川を完全に埋め立てる大規模な開発行為が行われたことが想定される。

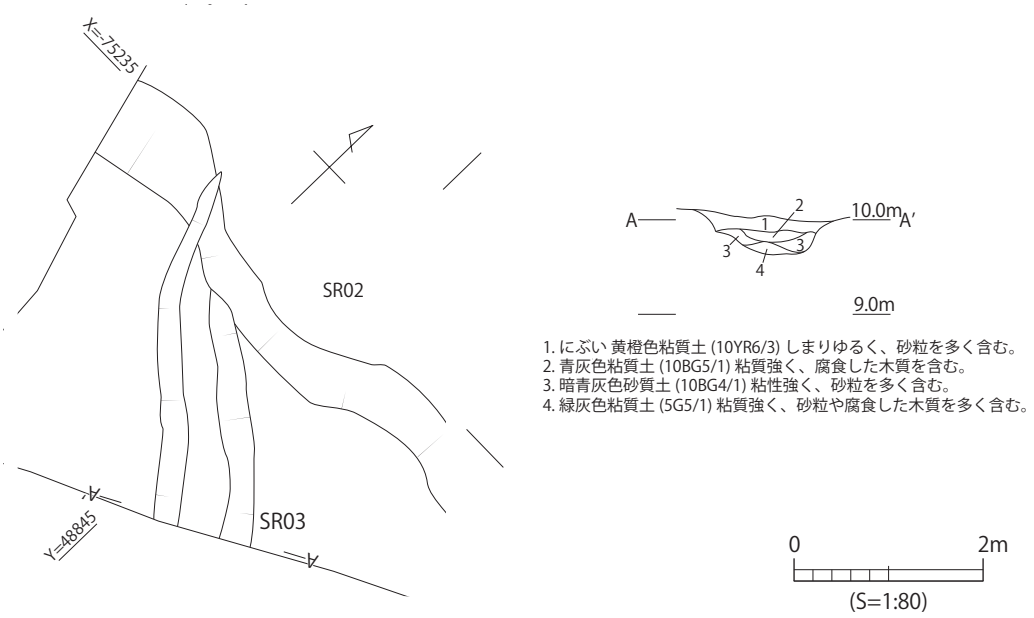
SR02 出土遺物（第 43 図）

SR02の埋土からは、大量の近世～近現代の陶磁器類に交じって、極めて少数ではあるが複数の時期にわたる多種多様な遺物が出土している。図化できたものを掲載した。

１は砂礫層の下層（第35図３層）から出土した鼓形器台である。全形がわかるほど復元できたもので、復元口径25.5㎝、器高13.7㎝を測る。草田５期に相当するとみられる。２は薄手の複合口縁甕の小片である。３は須恵器坏の蓋で口縁部を欠く。４・５・８・９は土師質土器の坏または皿の底部である。６・７は糸切底の土師質土器皿である。10は柱状高台付皿の台部である。皿部の中央に穿孔が認められる。

11 ～ 13は石器である。いずれも板石状の砥石とみられる。11は平滑な盤面に磨面が認められ、直線状の小口面には横方向の擦切痕が残るが、これは板材を施溝分割により割った痕跡とみられる。石材は頁岩である。12は左右の小口面に施溝分割による擦切痕が残る。石材は流紋岩である。13も表面に磨面があり、片側の小口面に施溝分割による擦切痕が認められる。石材は頁岩である。

14 ～ 18は金属製品である。14は簪であり、長さは16.8㎝を測る。頭部に耳かきが付く。15は用途不明の装飾品だが、桐の装飾の突端部に耳かきが付いている。簪の一部であろうか。16 ～ 18は頭折れの和釘である。同様のものが第１遺構面を覆う遺物包含層からも出土している。19・20は古銭である。19は寛永通宝、20は一銭硬貨で、発行年が大正七年と刻まれている。



第41図　中上Ⅱ遺跡　１区SR03実測図

これらの時期は、１が弥生時代終末期、２が古墳時代初頭、３が古墳時代後期、４～10がおおむね12～13世紀代に比定される。砥石類は施溝分割痕を積極的に評価すれば弥生時代とも想定されるが根拠に乏しい。金属製品は江戸時代以降のものと推測される。

この他、前述したようにSR02埋土からは近世～近現代の陶磁器類が大量に出土したが、一部をサンプルとして持ち帰り、時期が判別できるものを鑑定した(3)。結果、舶載系のものは認められず、最も古いものは16世紀に遡る備前の擂鉢や壺で、18世紀代の陶胎染付や肥前系の青磁や染付の碗類、唐津焼の甕などもみられた。一方、大半は明治期の磁器類で、最も新しいものは昭和10年代の磁器碗類であった。大正七年銘の一銭硬貨が出土していることからも、SR02が埋め立てられた年代を示す可能性が高く興味深い。

SR03（第41図）

SR03は調査区の南東隅で検出した溝状遺構である。調査区南壁からSR02に向かって直交するように注いでおり、現状で検出した長さは４ｍ、幅１ｍ、深さ40㎝である。流路元は調査区外にあり全体の形状は明らかでないが、俯瞰するとSR01からSR02に合流するように延びていると見受けられる（第40図）。SR01が全体的に「く」の字に折れ曲がってSR02に注いでいたとは考えにくいので、SR01から分水している流路と捉えれば、SR03はSR01の水口としてSR01の水量を調整する機能をもつ水路跡と考えられる。

SR03出土遺物（第42図）

古代に遡る遺物として土師器の甕片が１点出土している。２は口縁部の小片で、口縁が「く」の字状に屈曲する。古墳時代後期以降のものと想定されるが、流れ込みとみられ、SR03の時期を直接示すものではない。

（2）　第１遺構面の調査（第44図）

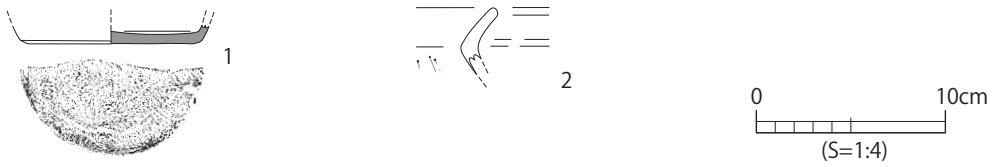
第１遺構面はSR02の北岸に広がる河岸段丘状の平坦面にあたる。長さ約36ｍ、幅約10ｍの平坦面は、谷奥の東側で弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構（SX01・02）が、谷出口側の西側で中世前半期とみられる遺構（ピット群･土坑群）が検出されており、東西で遺構の時期や様相が異なっていた。これは、平坦面の西側が厚く盛土で厚く覆われているためで、西側で検出された遺構の大部分は盛土の上面に形成されていることを示す。盛土の境目を検出するのは、平坦面東側の大部分が近現代の巨大な撹乱坑群で掘り返されていることから容易ではなかった。しかしながら、ピット群がSX01の手前で途切れていることや、３箇所の焼土面は炭化物の年代測定により弥生時代中～後期の年代を示すことから、SX01の西側及び焼土面とピット群の間が盛土の境目と捉えられる。また土器の分布状況もおおむねこの状況を裏付けるので（第45図）、第34・44図の破線の範囲が盛土の範囲と推定することができる。

以下、平坦面の西側・東側と分けて検出された遺構・遺物の詳細を述べる。

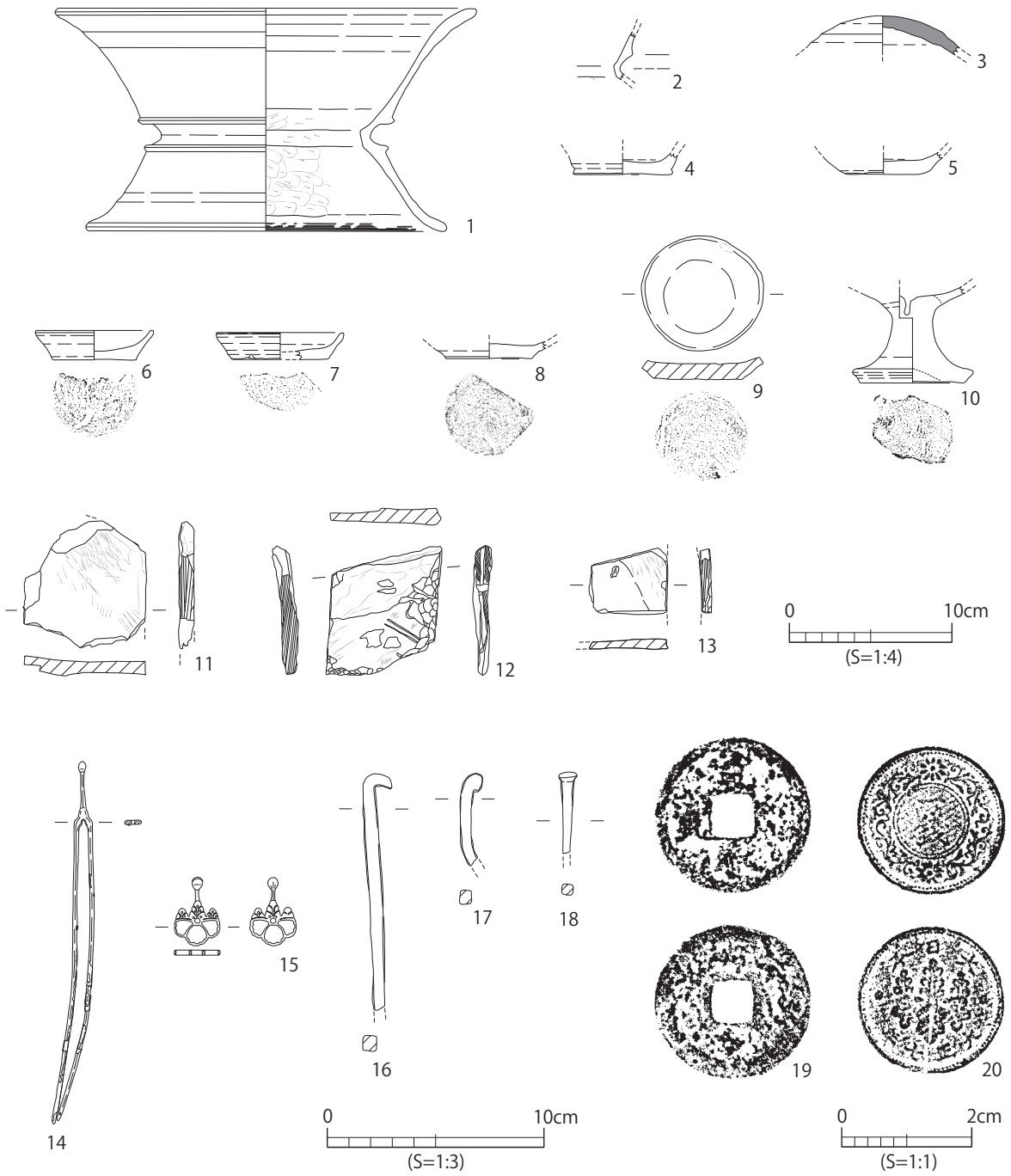
平坦面西側の遺構（第44図）

第１遺構面の平坦面西側には、調査区西壁から近現代の巨大な撹乱坑群までの長さ12ｍ、幅６ｍの範囲で標高10～13ｍの緩斜面が広がっている。この緩斜面の大部分は盛土により造成されたものとみられるが、ほぼ全面に広がるピット群が検出され、平坦面の北東で焼土面を３面、平坦面中央の標高11ｍの付近で土坑を３基検出した。

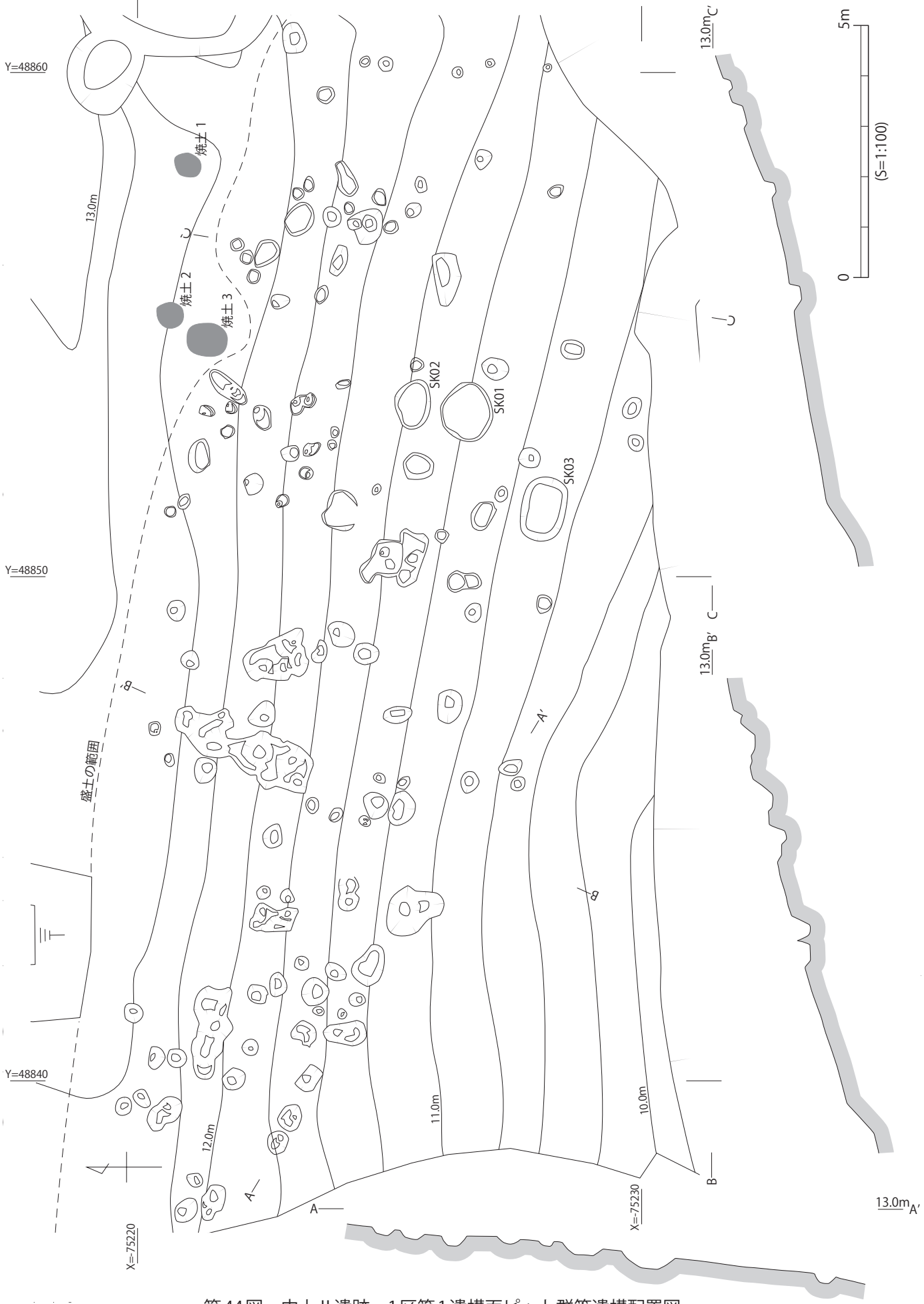
(3)　近世～近現代の陶磁器類の鑑定は、阿部賢治氏の御教示を得た。



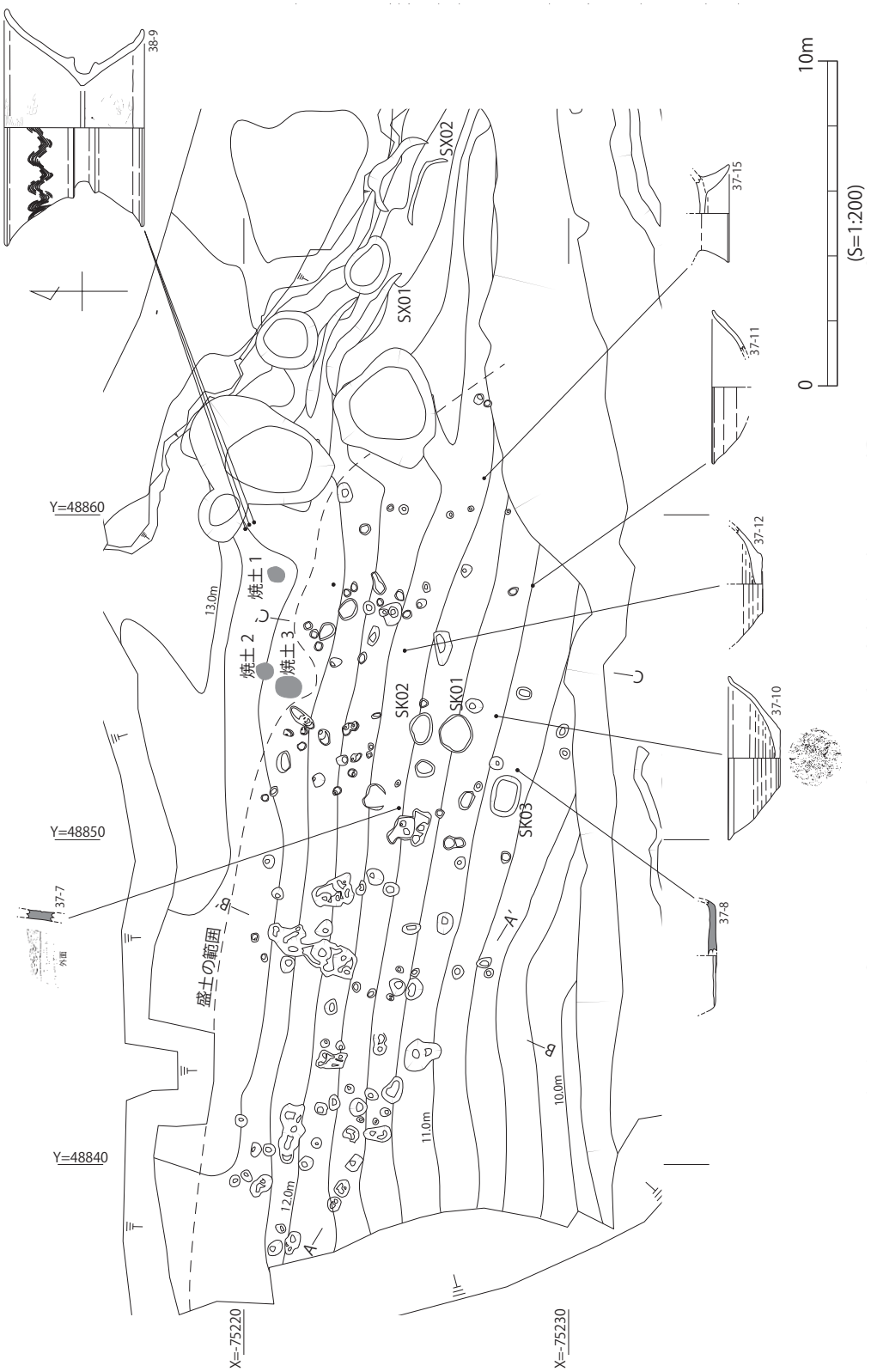
第42図　中上Ⅱ遺跡　1区SR01・03出土遺物実測図



第43図　中上Ⅱ遺跡　1区SR02出土遺物実測図



第44図　中上Ⅱ遺跡　１区第１遺構面ピット群等遺構配置図



第45図　中上Ⅱ遺跡　1区第1遺構面遺物分布図

ピット群（第 44 図）

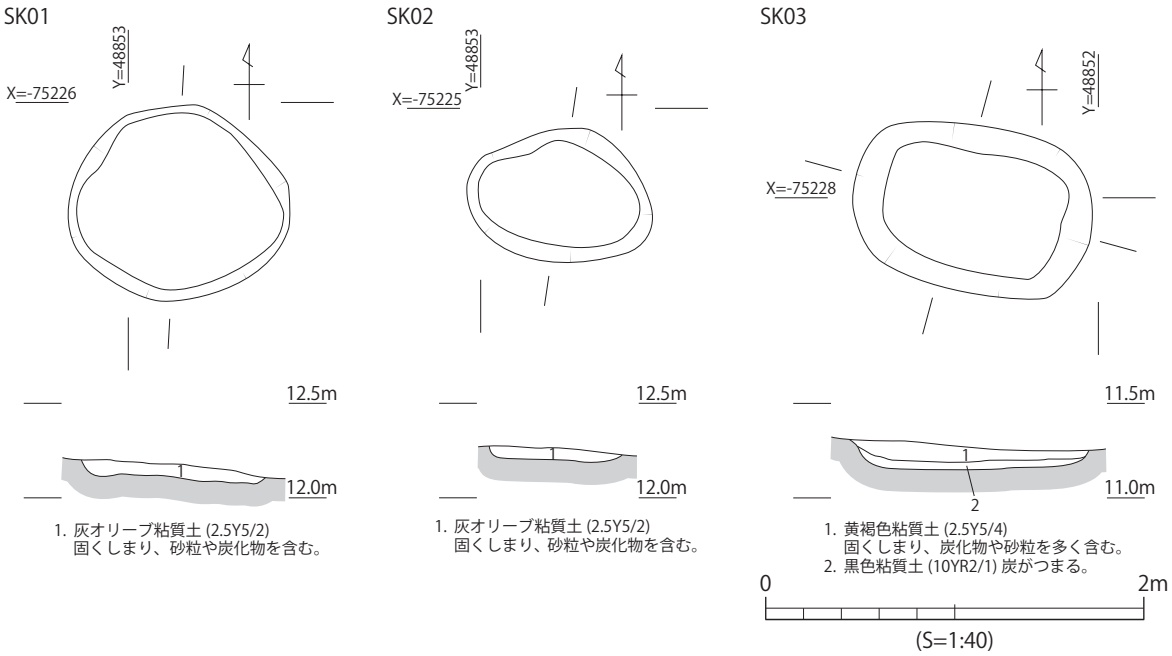
この平坦面では150点以上のピットを検出した。いずれも掘り込みの深さは最大でも30㎝程度であり、木の根跡も含んでいると思われ、現状で建物の柱穴列を示すような並びは確認できていない。一方で、平坦面の南西隅は三角形状にピットの空白地帯となっているが、この空白地帯に沿ってＡ－Ａ'のラインで直線状にピットが並んでいるようにも見受けられる。或いは杭列・柵列状遺構の痕跡とも見受けられるが、ピットの間隔や大きさ、深さも不揃いで、これらのピットの性格は不明と言わざるを得ない。またこのピット群の年代は、ピット内から遺物が出土していないが、ピット群が形成された遺構面を覆う遺物包含層である８・９層出土遺物の下限は中世前半期なので、相対的に遺構の時期は少なくとも中世前半期頃と推測される（第45図）。

焼土面１～３（第 44 図）

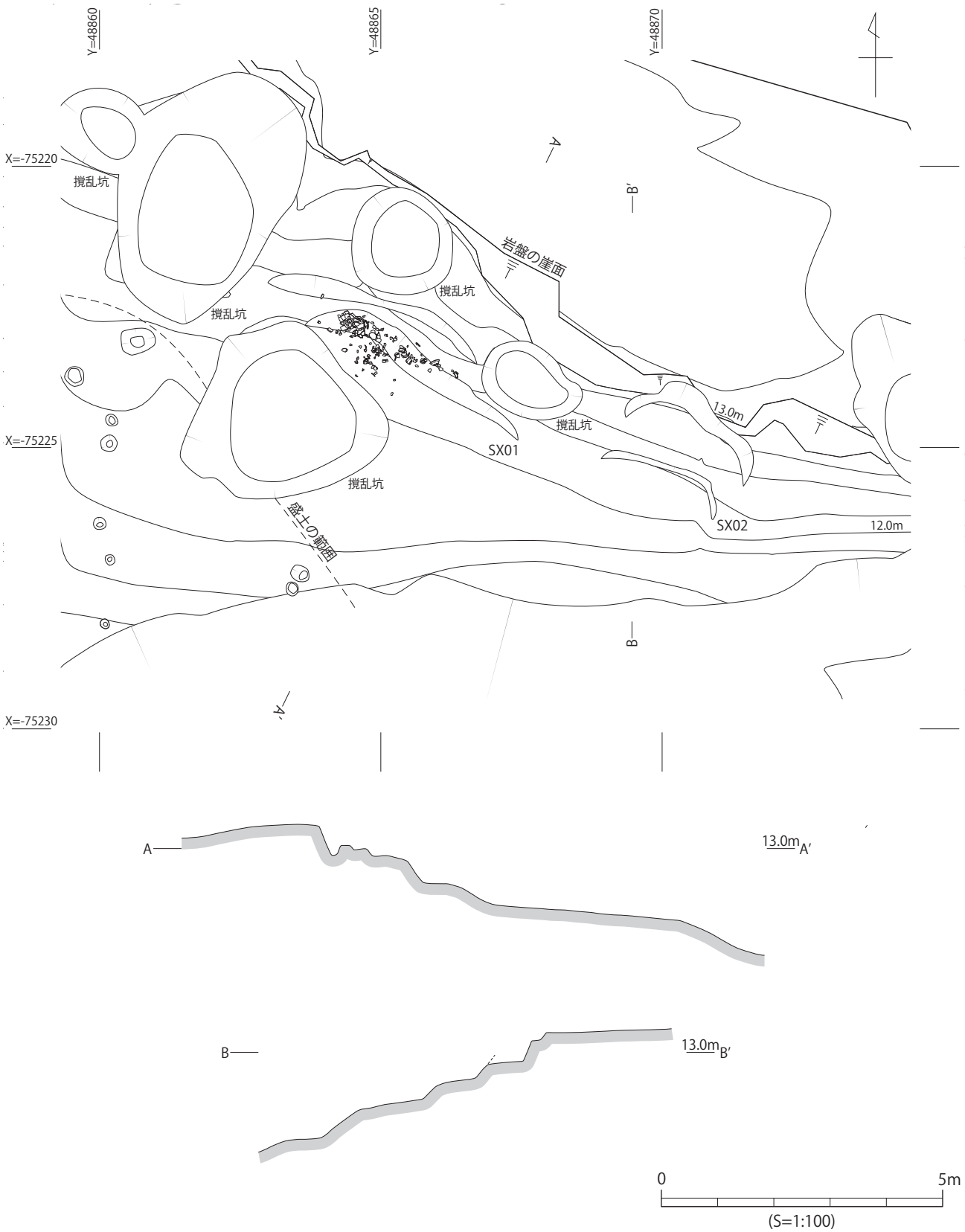
焼土面は平坦面の北東側上方で３面検出した。いずれも径20～40㎝程度のものである。焼土面の周辺からは弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器片が出土しており、焼土面から採取した炭化物の年代測定を実施した結果、３世紀代を下限とする年代が示された（第５章第４節参照）。よって出土遺物の年代とは整合的といえる。

土坑群 SK01～03（第 46 図）

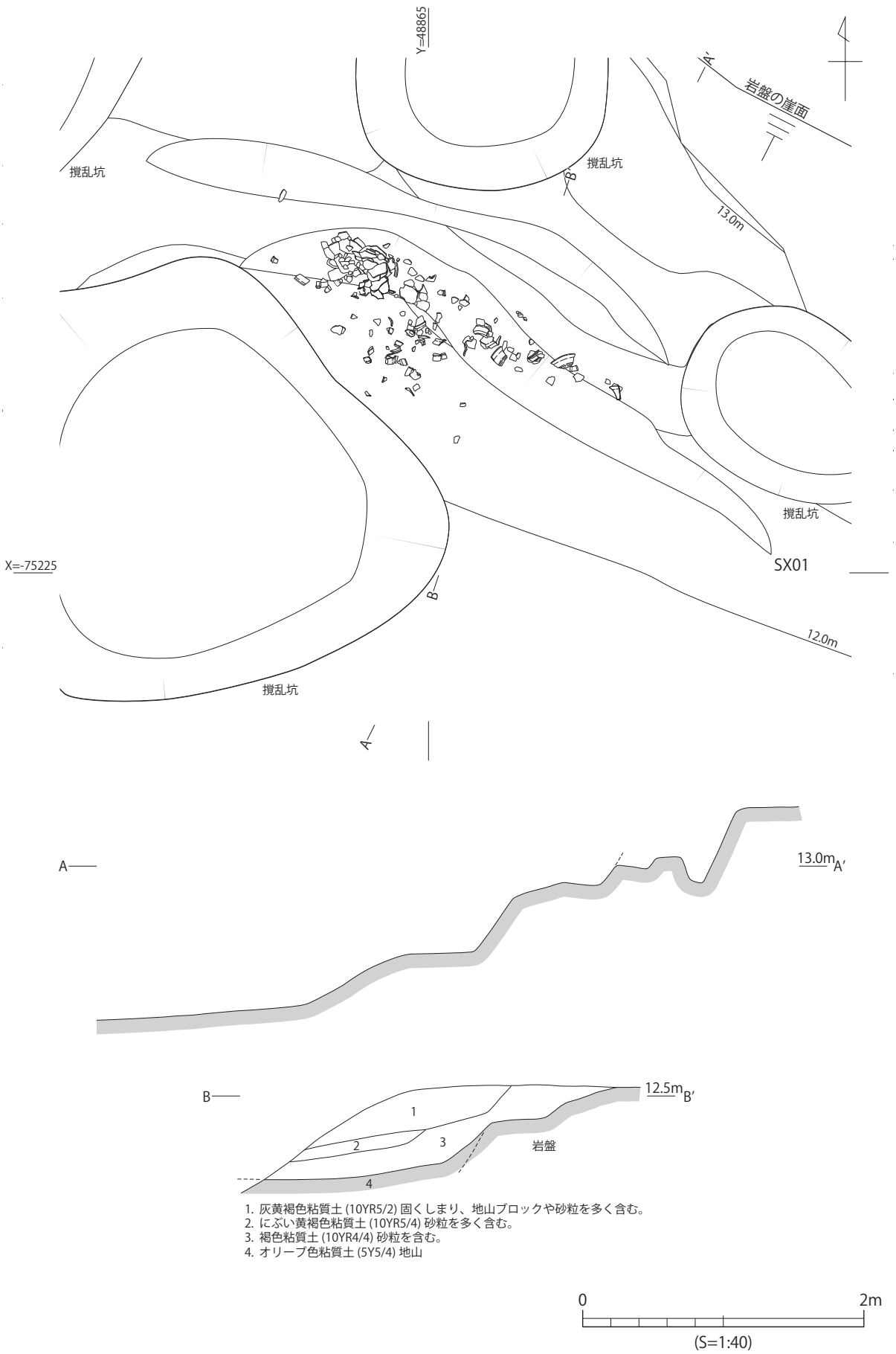
土坑群は平坦面の中央付近から下方にかけて検出した。北側に位置するSK02は楕円形に掘り込まれた土坑で、長さ１ｍ、幅74㎝、深さ7㎝を測る。遺物は出土していない。SK01はSK02に隣接して掘り込まれた円形の土坑で、長さ118㎝、幅102㎝、深さ10㎝を測る。遺物は出土していない。SK03はSK01から南西側1.5ｍの位置で検出した楕円形の土坑で、長さ130㎝、幅88㎝、深さ15㎝を測る。下層には炭が大量に堆積しており、床面～壁面は被熱を受けた痕跡も認められることから、SK03は小炭を焼成した窯跡とも考えられる。なお、この炭化物を採取し年代測定を実施した結果、13～14世紀代の年代値が示された（第５章第４節参照）。この年代は、遺構面を覆う遺物包含層出土遺物の下限年代と整合的であり、平坦面東側で盛土造成が行われた時期を検討する上でも興味深い。



第46図　中上Ⅱ遺跡　１区第１遺構面SK01・02・03実測図



第47図　中上Ⅱ遺跡　1区SX01・02配置図



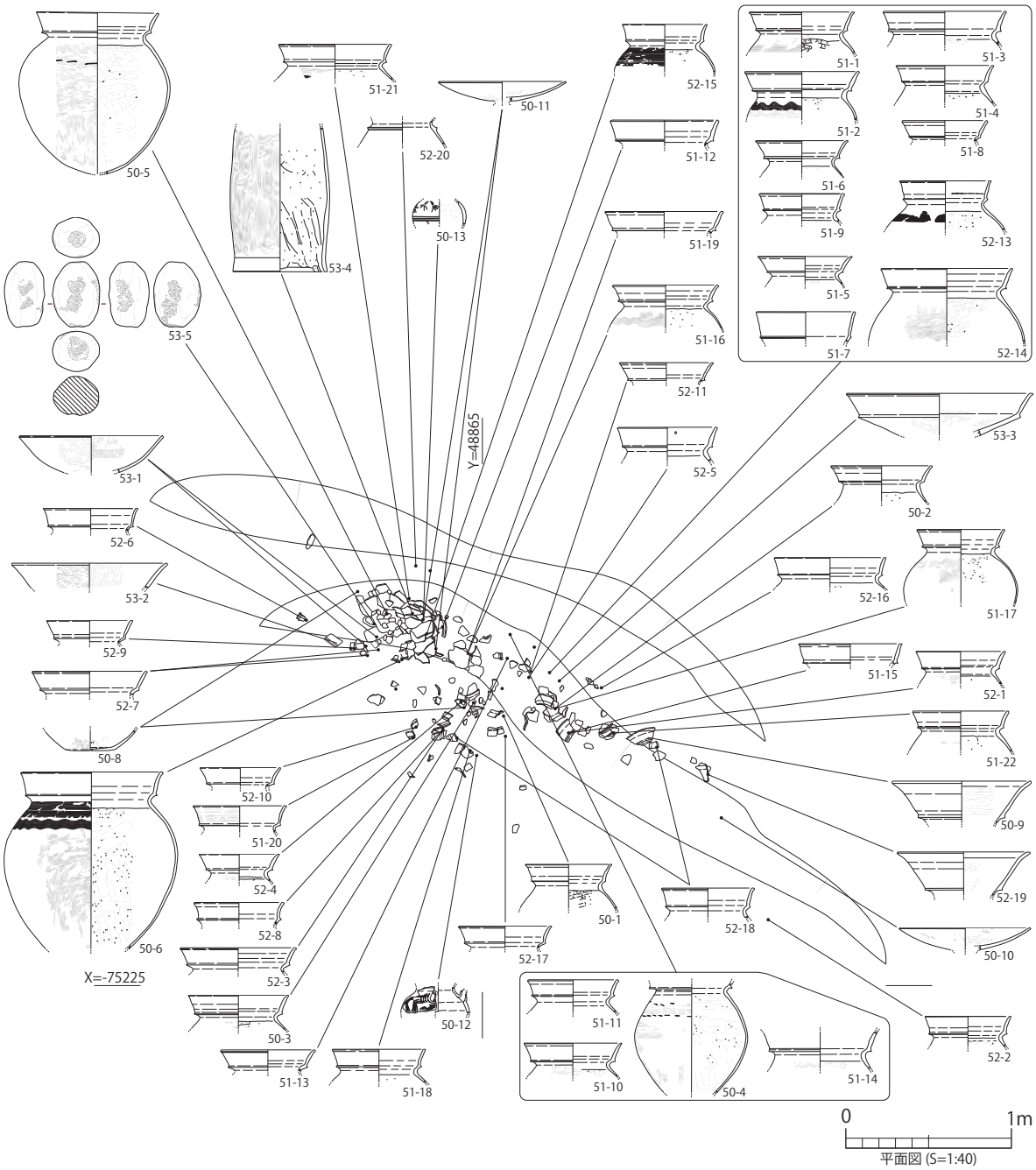
第48図　中上Ⅱ遺跡　1区SX01実測図

平坦面東側の遺構（第 47 図）

平坦面の東側は、北側に堅固な山塊の岩盤が奥行き最大３ｍの幅で平滑に広がっており、これは近現代に平坦面を造成する際に丘陵斜面を大規模に掘削した痕跡と考えられる。また平坦面の南側には自然河道SR02が流れており、このため平坦面の形状は三角形状に谷奥に向かって狭まっている。加えてこの平坦面には近現代の巨大な撹乱坑がいくつも穿たれており、遺構の検出には困難を極めた。しかしながら、遺物が集中して出土する地点があり、精査の結果、岩盤の際で加工段状の遺構であるSX01とSX02を検出することができた。

SX01（第 48 図）

SX01は、前述したように平坦面北側の岩盤の際で検出した遺構である。この付近で包含層を掘



第49図　中上Ⅱ遺跡　1区SX01遺物出土状況図

り下げている段階で、土器が集中的に出土する範囲が確認された。そのため、土器片を残しながら慎重に包含層を掘り下げ遺構の検出に努めたが、最終的に岩盤との境目で段状に加工されたとみられる平坦面を２段分検出することができた。上方の平坦面は幅２ｍ、奥行き最大30㎝、段の高さ20㎝、下方の平坦面は幅4.3ｍ、奥行き最大60㎝、段の高さ40㎝が残存する。一見すると上方の平坦面を下方の平坦面が掘り下げたようにも見受けられたが、土層観察では切り合いを確認することはできなかった。また平坦面の２ｍほど南にはSR02の川岸があり、本来の規模はそれほど広範囲には広がらないことも想定される。

この下方の加工段の埋土や平坦面の上面から土器片が折り重なるように多量に出土しており、大部分は周囲から流れ込んだものとみられるが、完形に近い状態に復元できるものもいくつか含まれていることから、この加工段に土器が直接廃棄されていた状況も想定される。

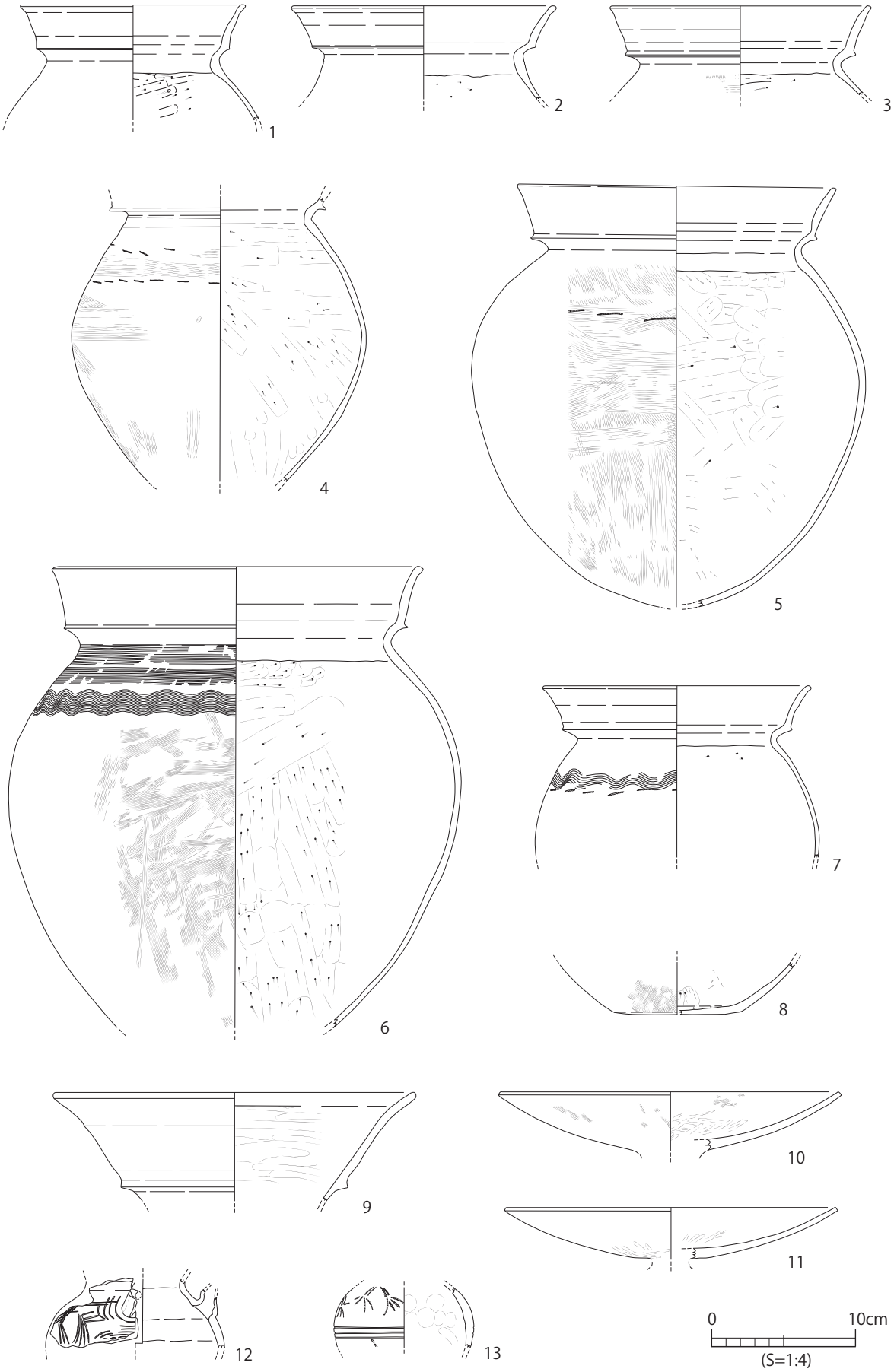
SX01はその残存状況から遺構の性格を想定することは難しいが、本来は急峻な丘陵斜面の際に加工段状に構築されたものであることや、目前には川（SR02）があり、通常の住居跡とは考えにくいこと。また数十個体分の土器片が出土しており、土器を直接廃棄したような出土状況も確認できることなどから、或いは川辺で行われた何らかの祭祀跡であることも想定される。なお、祭祀行為を裏付けるべく、埋土をすべて回収して水洗作業も行ったが、関連するような有機物等は確認できなかった。

SX01 出土遺物（第 50 ～ 53 図）

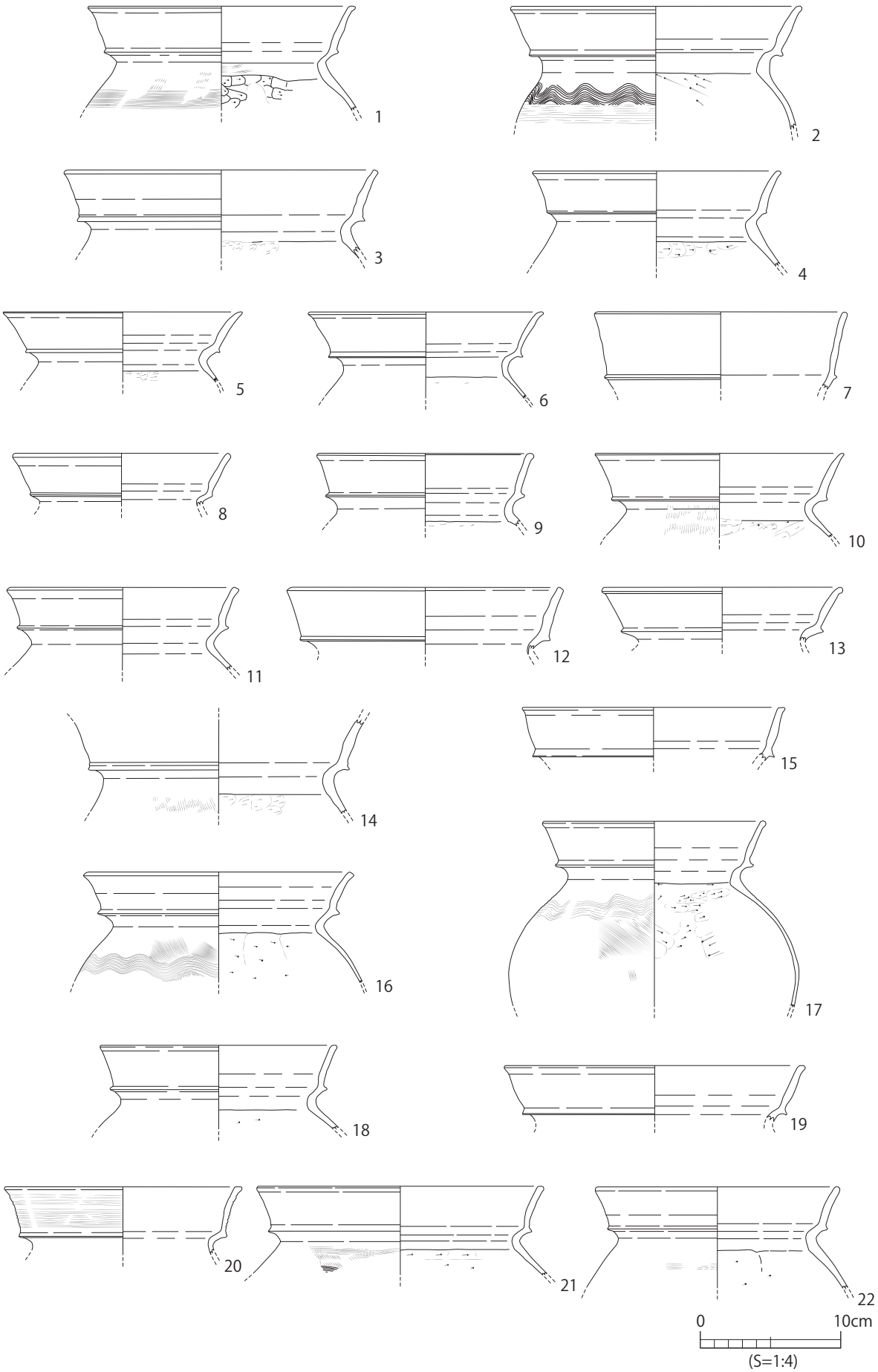
第50図１～７は複合口縁の甕である。１～３は口縁が逆ハ字状に立ち上がり、端部が丸く肥厚する。４は口縁部を欠くが、胴部がほぼ復元できた資料である。肩部は張らず、胴部中央に張り出しのピークがある。５・６は底部を欠くがほぼ完形に復元できた資料である。５は口縁端部が丸く収まり口径は22.2㎝を測る。肩部に貝殻腹縁による刺突文が施される。６は口径24.9㎝を測る比較的大型の甕で、口縁端部は外側に肥厚し面をもつ。ナデ肩気味の肩部に波状文が施され、胴部は倒卵形を呈する。７は外傾するように口縁が立ち上がり、端部が丸く肥厚する。８は底部資料で復元底径は8.8㎝を測る。器種は鉢とみられる。９は鼓形器台の受部で、口縁の立ち上がりが高めで端部は丸く収まる。10・11は低脚坏の坏部で、復元口径はいずれも約23㎝を測る。12は注口土器の肩部の小片で、中央は直立気味に立ち上がる。風化が著しく調整が不明瞭であるが、貝殻腹縁による刺突文が装飾的に施されている様が確認できる。13は小型の壺形土器の胴部とみられる小片である。器形は丸く、胴部下半に３条の沈線、肩部には貝殻腹縁による刺突文が装飾的に施されている。刺突文はあたかも鳥の足を模写したような絵画的な文様にも見受けられるが、全体の様子がわからないので定かでない。

これらの土器は、草田５期もしくは６期の特徴をもつ土器群とみられ、弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定される。また12・13は時期の比定が難しいが、注口土器は草田５期以降にはみられないことから、この時期の可能性があるものとした。

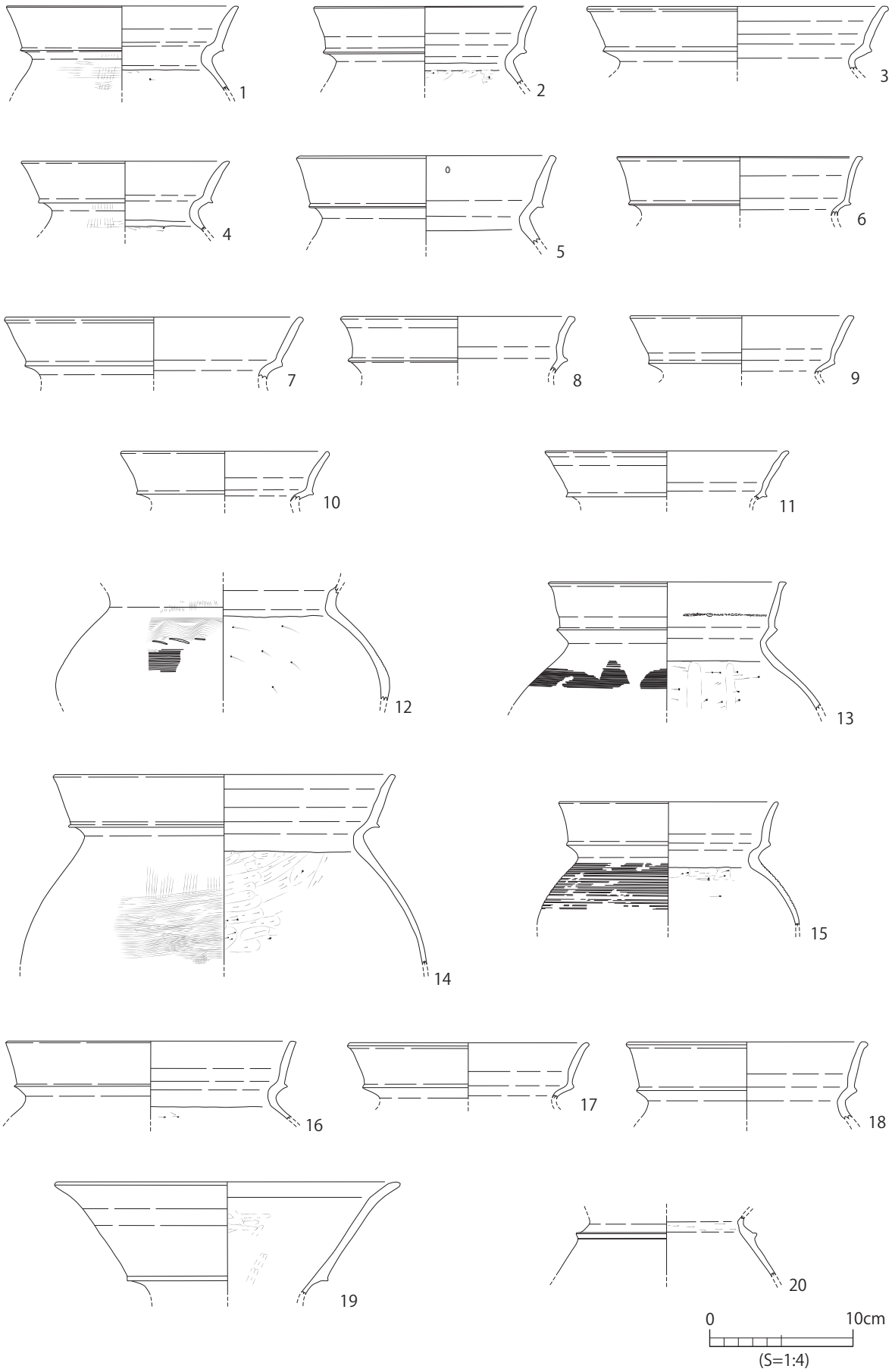
第51図は複合口縁の壺・甕類の口縁部である。７以外は甕とみられ口縁端部に様々なバリエーションがあるが、大雑把に分けると、口縁端部を折り曲げて水平な面をもつもの（1・2・6・9・13・15・17 ～ 21）、端部を肥厚させ水平気味な面をもつもの（22）、端部が尖り気味に収まり内面に面をもつもの（5・10）、端部に外傾斜する面をもつもの（3・4・8・11・12・16）に区別される。７は直口気味に長さをもって立ち上がる口縁をもつ。直口壺と考えられる。これらは草田６期



第50図　中上Ⅱ遺跡　1区SX01出土遺物実測図（1）



第51図　中上Ⅱ遺跡　1区SX01出土遺物実測図（2）

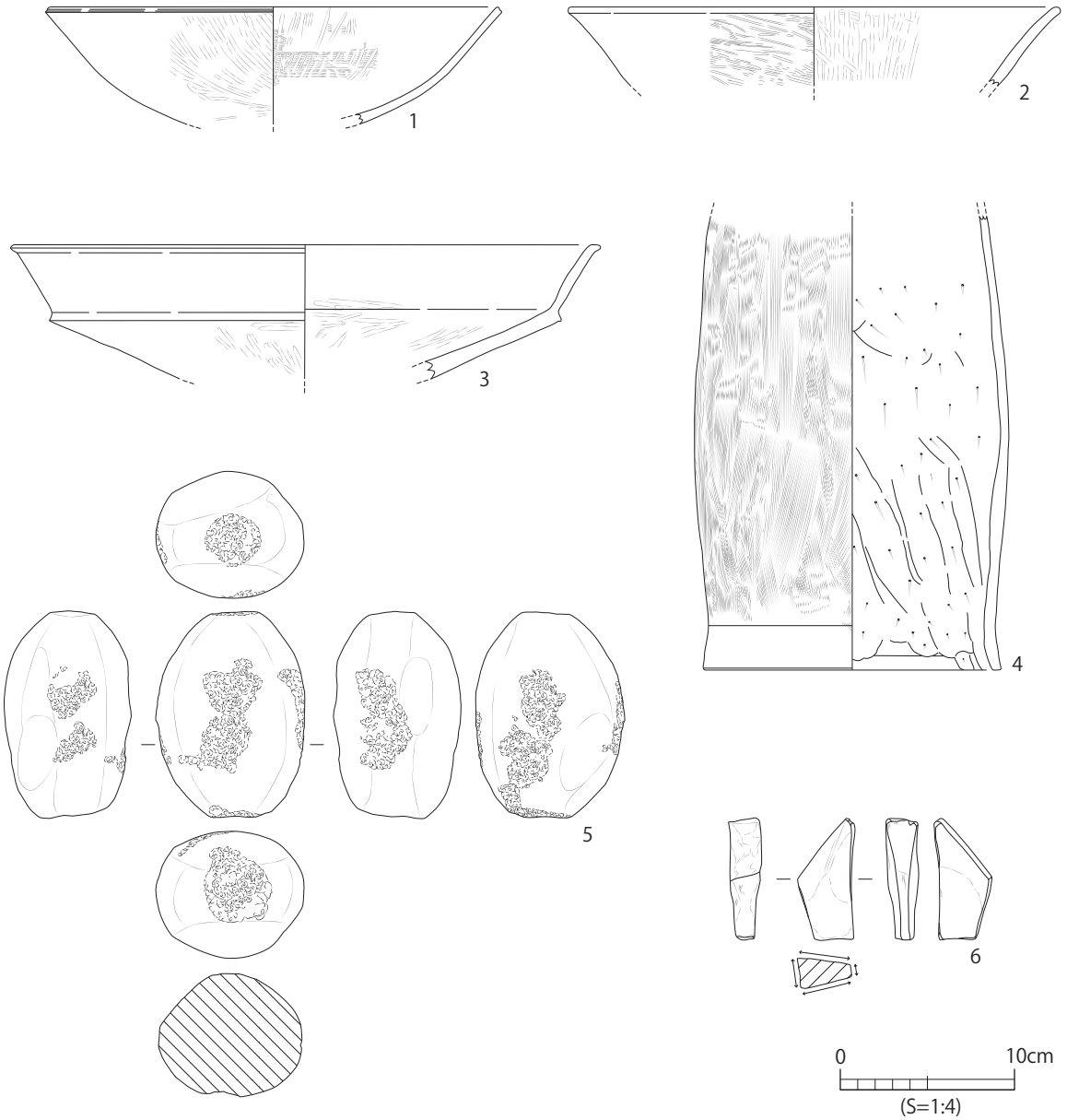


第52図　中上Ⅱ遺跡　1区SX01出土遺物実測図（3）

の特徴を持つ土器群とみられ、時期は古墳時代初頭に比定される。

第52図１～18は復合口縁の甕類である。第51図と同様に口縁端部の形態を大雑把に分類すると、口縁端部を折り曲げて水平な面をもつもの（3・6・7・9・11・13・17・18）、端部を肥厚させ水平気味な面をもつもの（1・16）、端部が尖り気味に収まり内面に面をもつもの（2・4・15）、端部に外傾斜する面をもつもの（5・8・10・14）に区別される。19・20は鼓形器台で19は受部、20は脚部である。いずれも高さをもって口縁が立ち上がる。これらは草田６期の特徴を持つ土器群とみられ、時期は古墳時代初頭に比定される。

第53図１～３は高坏である。いずれも坏部で、１は底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がり境に段を持たない。口縁端部は外傾斜する面をもつ２は口縁の破片で口縁は外反気味に開く。３は低脚高坏で、口縁と底部の境に明瞭に段をもち、口縁端部は折れ曲がり面をもつ。４は甑形土器で、底径は17㎝を測り筒状に胴部が砲弾型状に立ち上がる。５は敲石である。各面に敲打痕が残り、両端



第53図　中上Ⅱ遺跡　１区SX01出土遺物実測図（4）

面には磨面が認められる。石材は砂岩である。６は砥石である。砥面として利用された表裏面や側面が湾曲している。石材は安山岩である。これらについて、１～３は草田６期、４は小谷２～３式に属するものと思われ、１～３は古墳時代初頭、４は古墳時代前期に比定される。

以上が、図化できた遺物となるが、おおむね草田５～６期の範疇に収まるものとみられ、大多数が遺構内の埋土や平坦面に流れ込んだ状態で出土している（第49図）。中には第50図５・６のようにほぼ完形に復元できる資料も含まれており、遺構内や近辺で繰り返し土器が廃棄された様子がうかがえる。第50図12・13のような装飾に富む小型土器も含まれているのも特徴的といえるだろう。

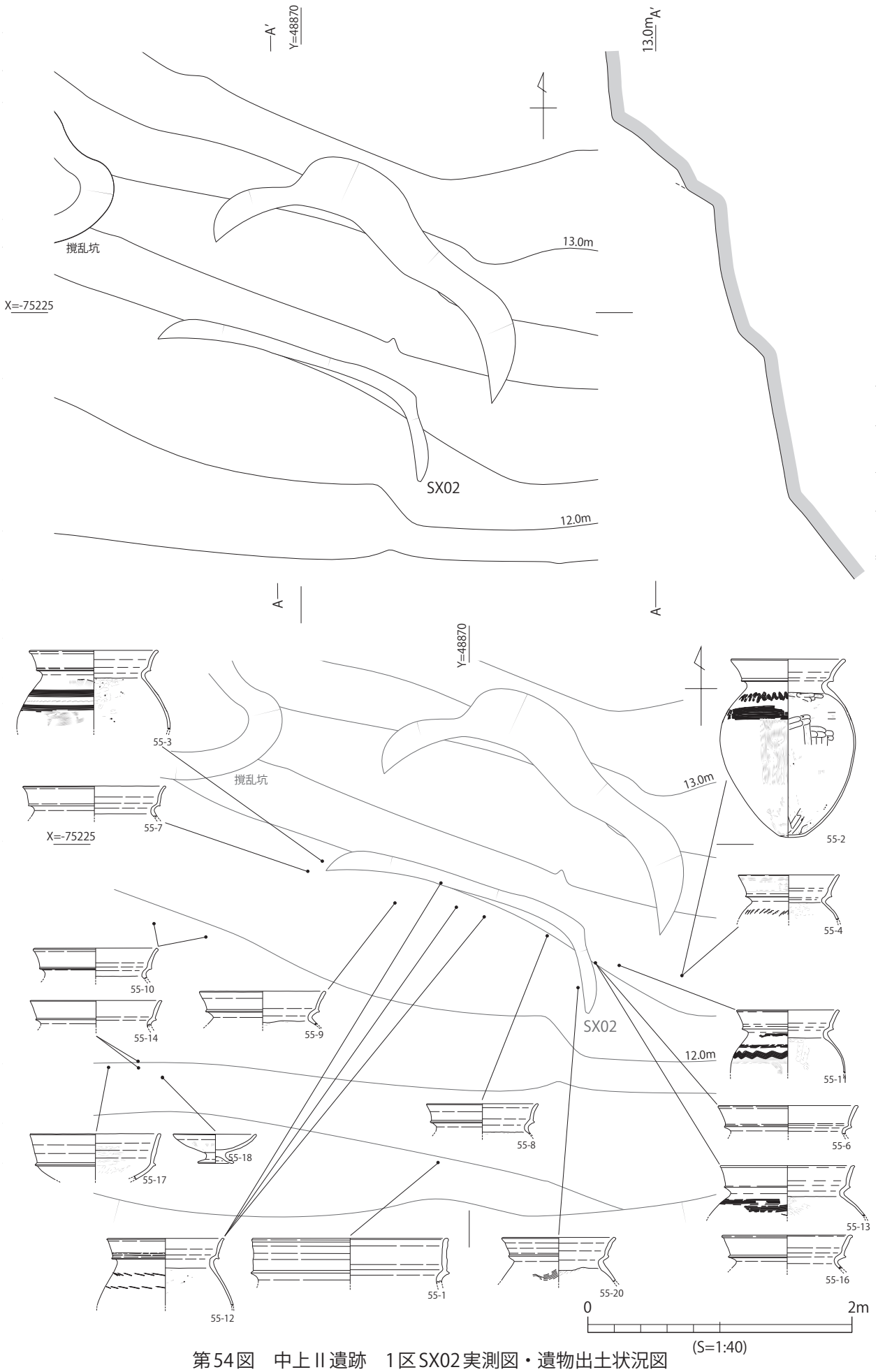
SX02（第 54 図）

SX02は、第１遺構面の平坦面最奥部のSX01の東側２ｍで検出した遺構で、遺構の立地や形状、規模はSX01と類似する。山際の岩盤と自然河道SR02の間に土器片が集中して分布する箇所があり、慎重に精査した結果、SX01と同様に上下２段に掘り込まれた加工段状の平坦面を検出した。上方の平坦面は岩盤の際に隅丸方形状に掘り込まれており、幅2.4ｍ、奥行き１ｍ、段の高さ20㎝が残存する。下方の平坦面は幅2.2ｍ、奥行き１ｍ、段の高さ20㎝が残存する。両者の切り合い関係は明確にできなかったが、遺物は主に下方の平坦面の埋土や平坦面及びその周辺から出土した。SX02の性格として類似するSX01と同様の機能が想定されるが、埋土を水洗いした結果、祭祀に関連するとみられる有機物等は確認できなかった。

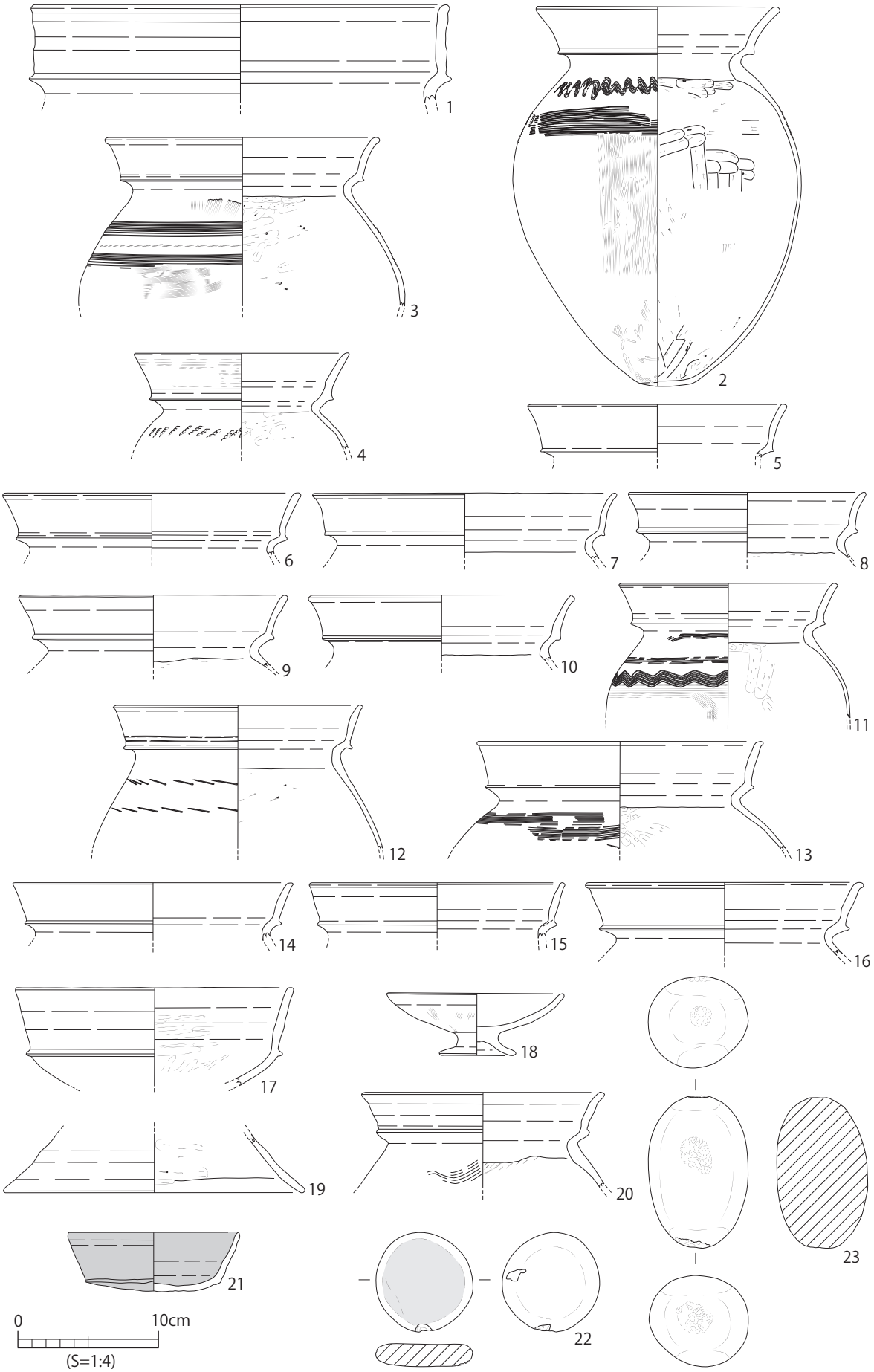
SX02 出土遺物（第 55 図）

１～16は複合口縁の壺・甕類である。１は復元口径29.7㎝を測る大型の壺で、口縁は垂直に立ち上がり端部は丸く収めている。２はほぼ完形に復元できた平底の甕で、口径17.2㎝、器高27.0㎝、底径4.0㎝を測る。胴部は上方が大きく張る倒卵形を呈し、頸部の直下に波状文が施される。口縁は厚手で大きく外反し、端部は丸く収まる。３は胴部中央が張り出し、口縁端部は折れ曲がり丸く収まる。４は口縁端部が尖り気味に丸く収まり、口縁外面に擬凹線を巡らせた痕跡が僅かに残る。５～10は口縁端部が肥厚せず丸く収まるもので、11～16は口縁端部が屈曲させ面をもつものである。17は高坏の坏部とみられ、底面は丸く、口縁は直立気味に高く立ち上がる。内面は磨きで丁寧に仕上げられている。同タイプのものが出雲市・天神遺跡（出雲市1997）や中野清水遺跡（島根県2006）で出土している。18は完形に復元できた低脚坏である。口径は12.3㎝、器高4.4㎝を測る。19は鼓形器台の脚部、20は複合口縁の甕である。21は遺構の西側で出土した土師器の坏である。ほぼ完形に復元できたが、平底で全体の形状は歪んでおり、底面をヘラ切りで切り離したような痕跡が残る。内外面とも赤色顔料が塗布され、口径は12.0㎝、器高は4.2㎝、底径9.5㎝を測る。形状から古代のものとみられる。22・23は石器である。22は磨石とみられ、片面に面的な磨面が認められる。石材は流紋岩である。23は敲石で、両端部に明瞭な敲打痕が残る。石材はデイサイトである。

これらの時期は、２が草田３～４期、４が草田４期、５が草田４～５期、１・６～10・17が草田５期、11～16が草田６期、20が小谷３式に相当するとみられ、おおむね弥生時代後期後葉～古墳時代前期に比定される。弥生時代終末期～古墳時代初頭の時期が中心とみられるが、形式的にはその前後の時期の土器も含まれている。また遺構には直接伴っていないが、21のような古代とみられる土器も付近から出土することから、或いは複数の時期にわたり遺構の周辺で土器の廃棄行為が行われたことも想定される。



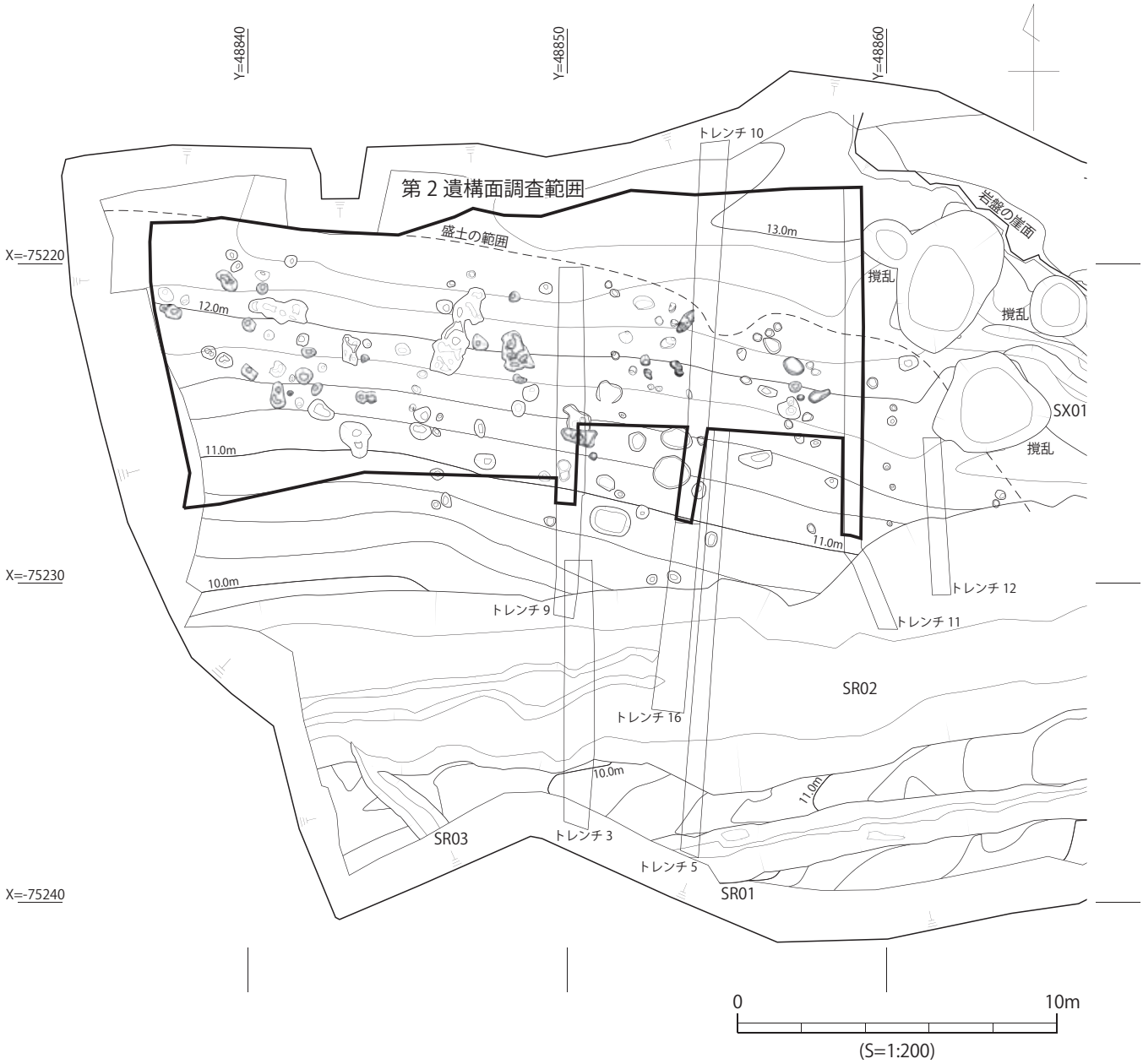
第54図　中上Ⅱ遺跡　1区SX02実測図・遺物出土状況図



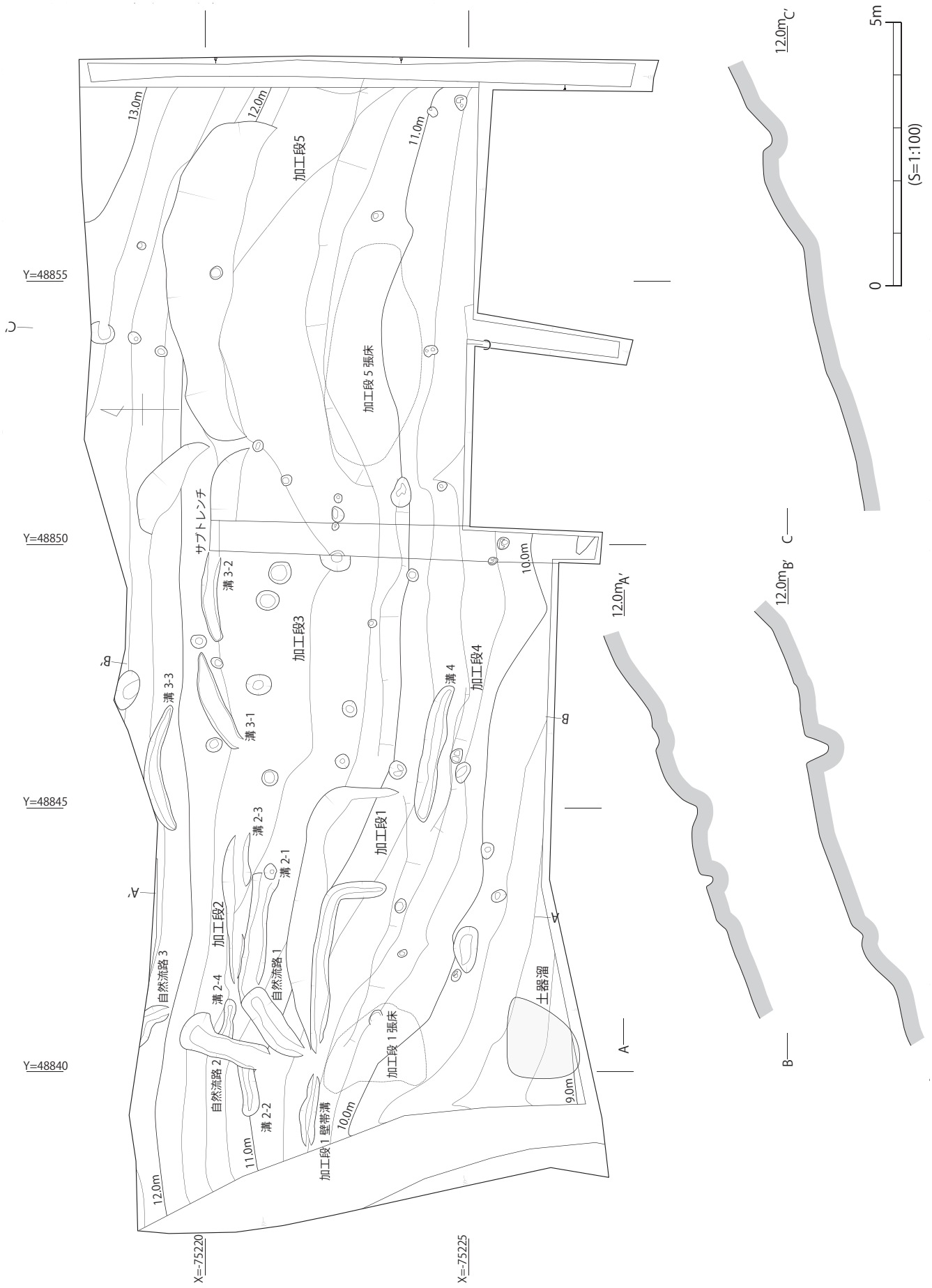
第55図　中上Ⅱ遺跡　1区SX02出土遺物実測図

（3）　第２遺構面の調査（第56図）

第１遺構面の調査が終了した際、当初はこの遺構面が遺跡の地山と認識していた。しかしながら、平坦面の東西で遺構の時期や性格が大きく異なることや、平坦面の西側では焼土面周辺で弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土するが、同時期の遺構の痕跡が全くないのに違和感があった。そのため、平坦面に縦長のサブトレンチを５箇所で設置して、下層の堆積状況や地盤面を確認すべく１m以上掘り下げた。その結果、トレンチ９～11で土層内から弥生時代末～古墳時代初頭とみられる土器片が出土し、さらに地盤面で柱穴状のピットを検出した。これにより、下層にさらなる遺構面が存在することが明らかとなったので、遺物が出土したトレンチを面的に広げるように新たな調査区を設定し掘り下げた。最終的に５箇所で加工段状の遺構を検出することができた。調査区は長さ22ｍ、幅７～９ｍ、調査面積は180㎡である。



第56図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面調査区配置図



第57図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面遺構配置図

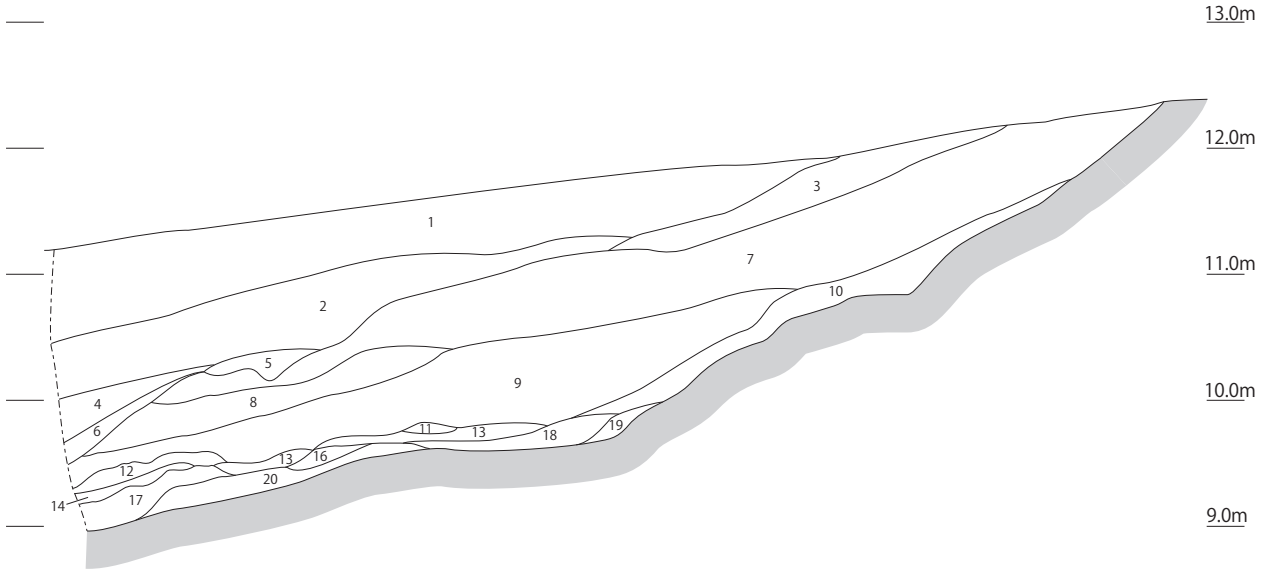
第２遺構面の層序（第 58 図）

前述したように、第２遺構面は第１遺構面の直下で検出した遺構面で、厚さ１m以上の堆積土で覆われている。第58図は調査区西壁の土層図であるが、１～３層は近世～近現代とみられる造成土で、その下層の７層が第１遺構面の基盤層にあたる。地層の堆積相観察（第５章第３節参照）の結果、厚く堆積する７～10層が人為的な盛土層である可能性が高いと指摘を受けた。また黒色の粘土層である６層は水性堆積層の可能性があり、一時期盛土層の端部が水に浸かっていたことを示すものとして注目に値する。

10層の下面が遺構を検出した地山面となるが、調査区西壁付近では急な傾斜となっている。そのため11層以下は斜面の流出土の堆積層とみられ、中でも16・17層は特徴的な黄色粘質土層で、加工段１の張床粘土が流出したものと見受けられた。

第２遺構面の遺構（第 57 図）

第２遺構面の地山面の高低差は約３mで、約20度の傾斜が広がる状況にある。そのため遺構の残存状況は明瞭でなかったが、遺構は斜面を平滑に加工して構築されており、溝状遺構やピットの検



1. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) しまりゆるい。砂粒をまばらに含む。近世以降の造成土
2. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) しまりややゆるい。砂粒や地山ブロックをまばらに含む。近世以降の造成土
3. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) しまりややゆるい。砂粒をまばらに含む。近世以降の造成土
4. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 固くしまる。砂粒や地山ブロックをまばらに含む。
5. 褐色粘質土 (10YR4/4) 固くしまる。砂粒や黄色ブロックをまばらに含む。
6. 褐灰色粘質土 (10YR4/1) 固くしまり粘性強い。砂粒を少量含む。旧表土もしくは水性堆積の層
7. 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6) 固くしまる。砂粒や黄色ブロックをまばらに含む。盛土
8. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 固くしまり、砂粒や黄色ブロック、炭化物をまばらに含む。盛土
9. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/4) 固くしまり、砂粒や黄色ブロック、炭化物をまばらに含む。盛土
10. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/4) 固くしまり、砂粒や黄色ブロック、炭化物をまばらに含む。盛土
11. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) 黄色ブロックを多く含む。
12. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 砂粒や黄色ブロック、炭化物を多く含む。
13. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) 砂粒や黄色ブロック、炭化物を多く含む。
14. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) 砂粒や黄色ブロック、炭化物を多く含む。旧表土もしくは水性堆積の層
15. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 黄色ブロックがつまる。
16. 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/8) 黄色粘土ブロックや礫、炭化物を含む。加工段１張床の流出土か
17. 黄褐色粘質土 (2.5Y7/8) 黄色粘土ブロックや礫、炭化物を含む。加工段１張床の流出土か
18. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 砂粒や黄色ブロック、炭化物をまばらに含む。
19. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) 砂粒や黄色ブロックを多く含む。
20. 灰オリーブ色粘質土 (5Y5/2) 砂粒や黄色ブロック、礫、炭化物を多く含む。固くしまる。

0　2m
(S=1:60)

第58図　中上Ⅱ遺跡　１区西壁土層図

出状況、土器の出土状況や張床面の検出状況等を手掛かりにして５基の加工段状遺構（加工段１～5）を検出することができた。また調査区南西隅の斜面下方で土器溜が形成されており、第２遺構面を覆う遺物包含層でも同時期の遺物が出土することからも、本来の遺構及び集落の範囲は調査区北側の丘陵斜面にも広がっていたことが想定される。以下、検出順に遺構・遺物の詳細を述べる。

加工段１（第 59・60 図）

加工段１は調査区の西端の標高10.5ｍ付近で検出した遺構である。遺構の南側は流出しているとみられ残存状況は良好でないが、斜面に沿って横長の長方形状に掘り込まれていおり、幅５ｍ、奥行き最大1.6ｍ、段の高さ40㎝の範囲で平滑に整形された床面を検出することができた。北壁沿いには床面の壁帯溝とみられる幅30㎝の溝が掘り込まれており、自然流路により途切れているが、さらに西側に向かって延びていることから、本来の床面も幅５ｍ以上の規模があったと考えられる。壁帯溝は加工段東側の掘方の手前1.5ｍの位置で床面を分割するように屈曲しており、建て替えの痕跡とも思われたが、現状でこれ以上の詳細を明らかにすることはできなかった。また、平坦面の南で小型ピット（Ｐ１･Ｐ２）も検出しているが、壁帯溝に並行する位置にあることから、床面に何らかの建物があった可能性もある。この他、壁帯溝が途切れる位置から斜面下方に向かって黄色粘土が２×1.5ｍの範囲で堆積する様子が確認できたが、これは床面を平滑にするために敷いた張床の痕跡とみられ、流出した粘土が斜面下方に向かって広がっている。

加工段１出土遺物（第 61 ～ 64 図）

遺物は壁帯溝や床面上で多数出土した。大部分は床面から若干浮いた位置で出土することから、遺構の廃絶後に周辺から流れ込んだものと考えられる。

第62図１～４は複合口縁の甕である。１は口縁が内傾して短く立ち上がり、外面に凹線が施される。肩部は張り出さず胴部中央に列点文が施され、内面の調整は胴部下半がヘラケズリ、上半は頸部付近までハケ目が施される。２は厚手の口縁で、外面に擬凹線が施される。３も厚手の口縁だが、一次口縁の突出部は明瞭でなく外面は無文である。４は器壁が薄く、口縁は大きく外反して立ち上がり、端部を丸く収めている。５・６も薄手の口縁で、５は口縁端部を折り曲げて面をもたせ、６は外傾する面をもつ。７～９は鼓形器台の受部で、立ち上がりに角度があり端部を丸く収めている。

10～12は土師器の坏である。10・11は底部から口縁にかけて丸みをもち、内外面とも赤色顔料が塗布された痕跡が認められる。12は口縁が水平でなく波状となっており、上から見ると方形を呈する形状だったとみられる。13は復元口径17.0㎝、器高11.7㎝を測る鉢形の土器である。口縁はくの字状に緩やかに外反する。14～18は土師器の甕である。14は復元口径28.5㎝の大型のもので、頸部と口縁の境目に浅い沈線が１条施されている。15・16・18は口縁が緩やかに短く外反するもので、16は口縁外面に焼成前に剥離した部分を粘土で埋めたような痕跡が残る。19は口縁が逆ハ字状に長く立ち上がる。端部を尖り気味に丸く収めている。

第63図１～４は土師器の甕である。いずれも口縁が先端部にかけて逆ハ字状に大きく外反する。また４は胎土に径1㎝以下の赤色粘土の塊がまばらに含まれている。５・６は土製支脚とみられ、５は突起部、６は胴部片とみられる。７～９は甑である。７は復元口径27.2㎝、器高27.4㎝、底径14.3㎝を測る。口縁は緩やかに外反し、底部付近には穿孔痕も認められる。また、頸部の下方に縄目の圧痕が胴部を一周するように廻っており、焼成前についたのが明らかである。従って、器形を整形した後、焼成前に縄紐を頸部付近に巻いて保管する状況にあったことがうかがえる。８はほぼ完形

に復元できたもので、口径25.6㎝、器高26.3㎝、底径11.3㎝を測る。胴部の両側に把手が付き、底部付近に穿孔が３箇所確認できる。９は把手である。

第64図１～11は須恵器である。１は坏蓋の小片で、天井部と口縁の境に浅い凹線が施される。２・３は坏身である。２は完形のもので、口径は10.9㎝、器高は3.8㎝を測る。口縁は短く内傾して立ち上がり、底面はヘラ切り後、ナデ調整が施される。４・５は高坏の坏部とみられ、口縁端部はわずかに外反する。６・７は高坏の脚部で、７は三角形か四角形の透かしを入れた痕跡がある。８は直口壺の口縁、９は鼎の口縁である。10・11は壺形土器の破片と思われ、11は外面にヨコ方向にカキ目が、10は肩部にタテ方向のカキ目が施される。提瓶もしくは横瓶であろうか。12は敲石とみられ、側面に敲打痕が残る。石材はデイサイトである。

これらのうち、第62図１～９は遺構内埋土の上層から出土したもので、１は出雲Ⅳ－２様式、２・３は草田２～３期、４・７～９は草田５期、５・６は草田６期に相当するとみられる。１は弥生時代中期末、２・３は弥生時代後期中葉～後葉、４～９は弥生時代終末期～古墳時代初頭に比定される。また１は遺跡で出土した土器のうち最古となるもので、遺跡に人が定着した時期を示す資料といえる。第62図10～18図、第63・64図は床面上層からまとまって出土したものである。土師器の時期の特定は難しいが、共伴する須恵器の蓋坏は出雲編年５～６期の特徴を示すものであり、これらの遺物はおおむね古墳時代終末期に比定されよう。

加工段２（第59図）

加工段２は加工段１の北側上方では検出した遺構である。加工段１のように明瞭な掘方は確認できなかったが、溝状遺構を４箇所（溝2-1～4）で検出することができた。これらは北側丘陵斜面から流れる自然流路１～３により途切れているが、本来は溝2-1と溝2-2、溝2-3と溝2-4が同一遺構で、２条の溝が斜面に並行して掘り込まれていたと思われる。両者の切り合いは明らかにできなかったが、溝の規模はいずれも最大幅50㎝で、長さは溝2-1と2-2を一体として4.6ｍ分を検出した。この溝群の南側に平坦面が広がっていたものと推測されるが、出土遺物の検討から、加工段１によって平坦面が削平されたといえる。

加工段２出土遺物（第65図）

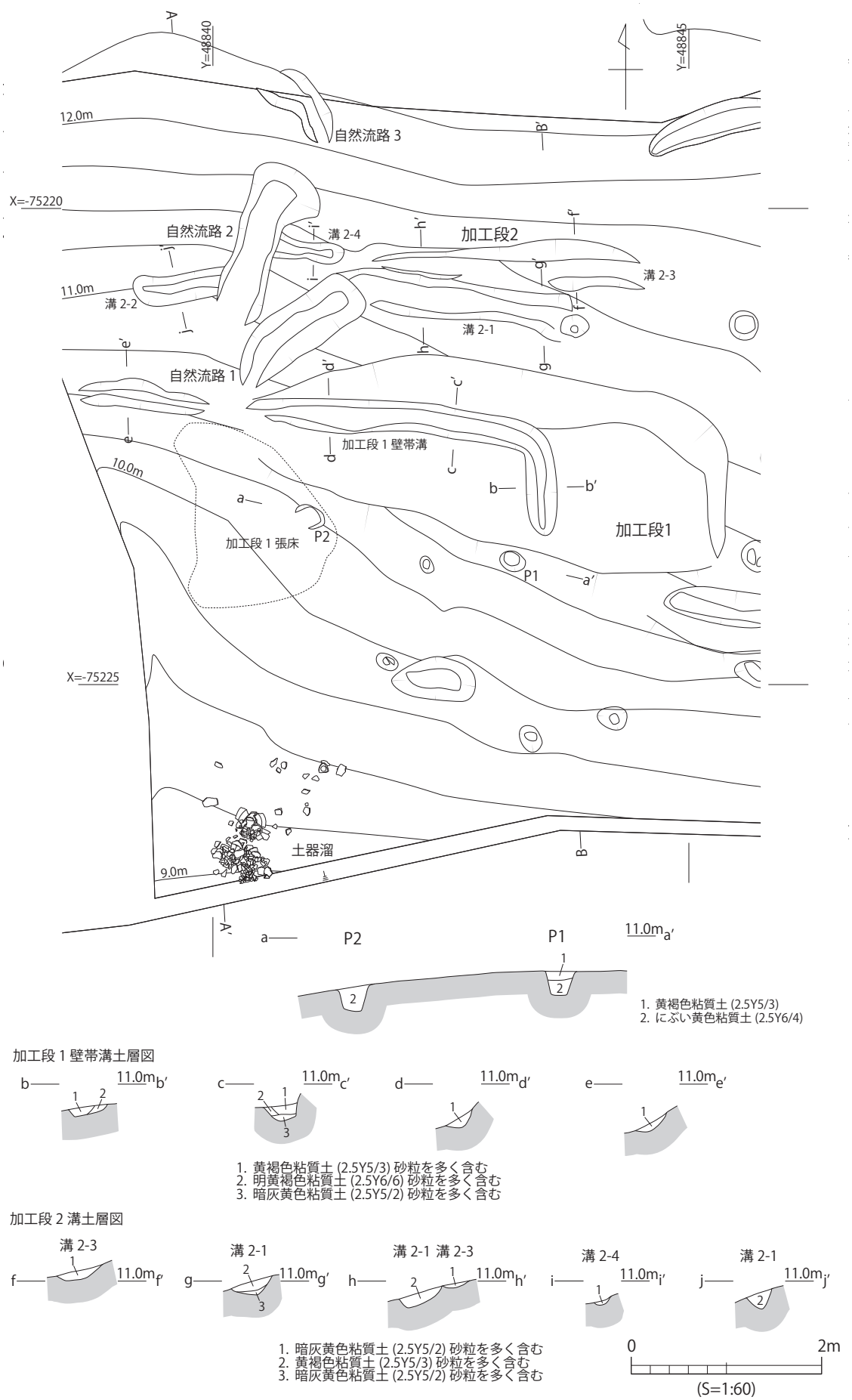
加工段２周辺から出土した遺物について２点を図化することができた。いずれも溝の付近で出土したが、原位置を保っているものではないと思われる。

１・２とも複合口縁の甕である。１は厚手の口縁で、直立気味に立ち上がる口縁の外面に擬凹線が施される。２は薄手の口縁で、端部に面をもつ。１は草田１～２期、２は草田６期に相当するとみられ、１は弥生時代後期前葉、２は古墳時代初頭に比定される。

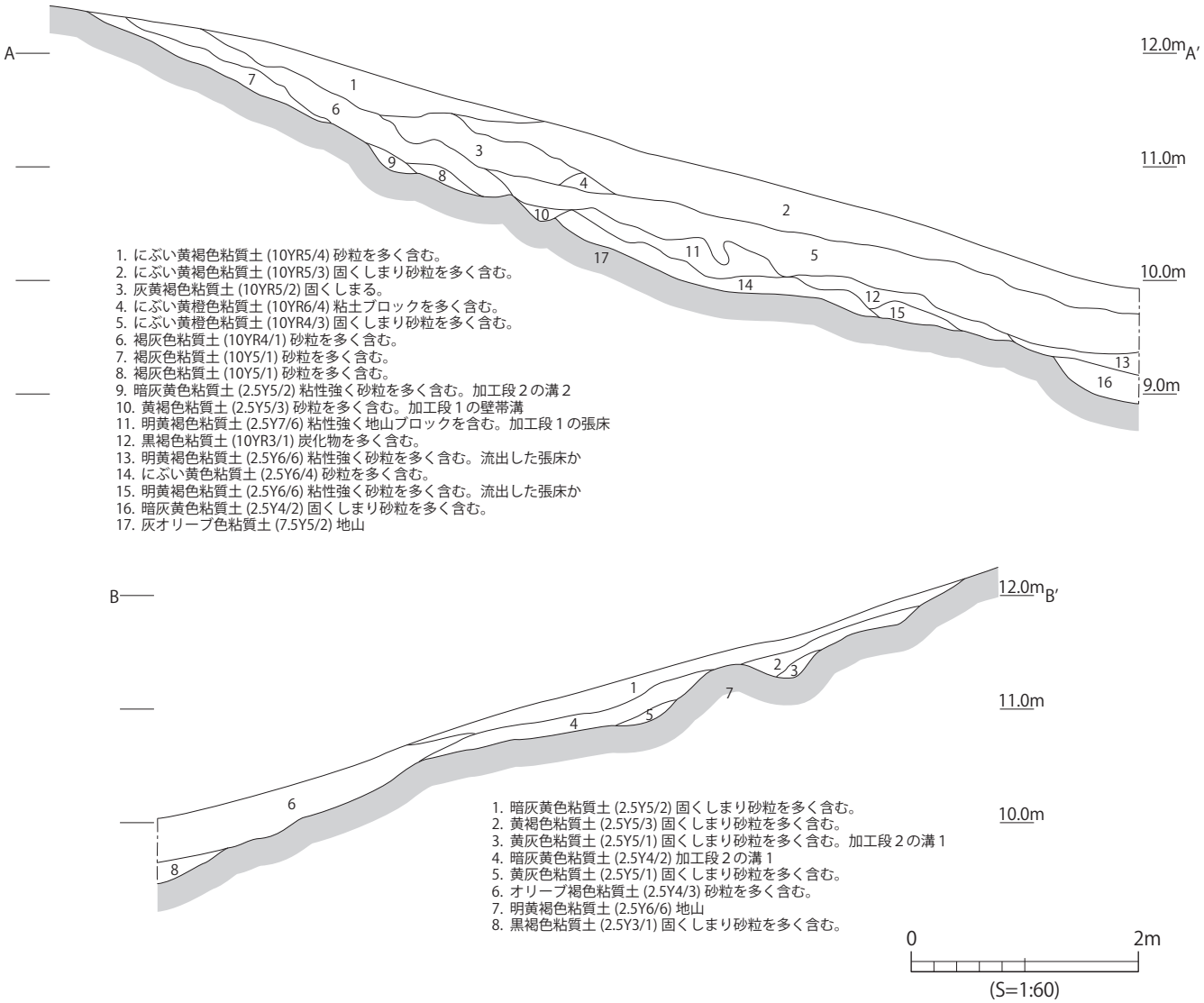
加工段３（第66図）

加工段３は加工段２の東側1.5ｍの位置で検出した。付近は標高11～12ｍの間で比較的広い平坦面が広がっており、北側の斜面と平坦面の際で溝状遺構（溝3-1～3）と段状の法面を２箇所で検出した。また平坦面の一部は上層からのサブトレンチで掘り込んでしまったが、柱穴とみられるピットをいくつか検出している。これらは本来一体的な遺構である可能性があると考えられ、一括して加工段３とした。

北側斜面の際で検出した溝群は、いずれも弧状に延び現状で繋がってはいないが、位置的に溝3-1と溝3-2、溝3-2の東側の段状法面は同レベルで縦列しており、本来一体的な遺構であった可能性が



第59図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段１・２実測図

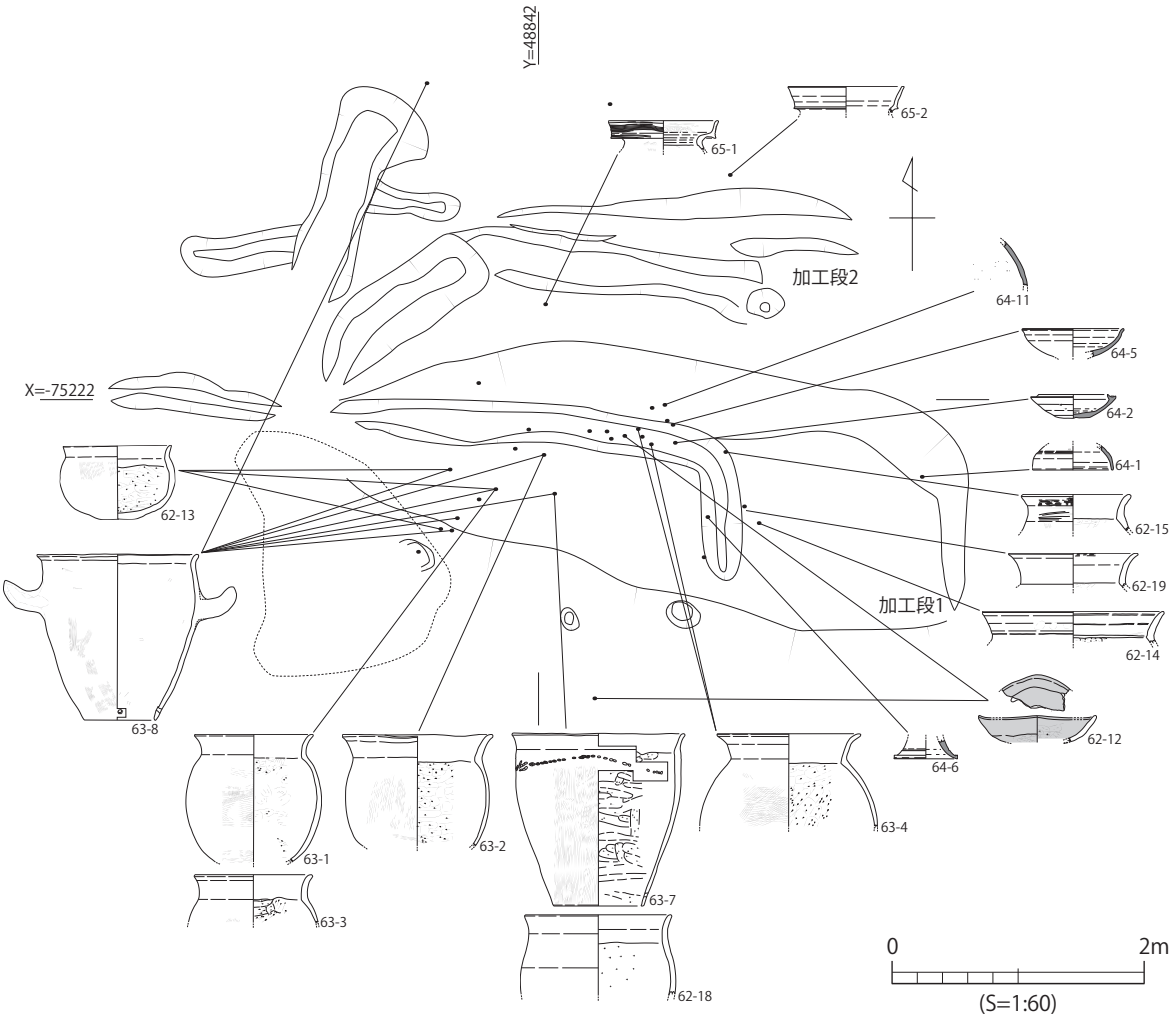


第60図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段１・２土層図

ある。この溝群の南側に幅５ｍ、奥行き2.5ｍの範囲で平坦面が広がっており、ピットがいくつか検出された。特にＰ１～７にかけては方形の配置が復元でき、中でもＰ２やＰ５は約40㎝の深さでしっかり掘り込まれていることから柱穴とみてよく、桁行3.3ｍ、梁間2.2ｍの掘立柱状建物が存在していた可能性も考慮される。また平坦面の土層観察では、平坦面の張床とみられる厚さ18㎝の黄褐色粘土層が堆積するが、床面に柱を立て柱穴の隙間を埋めた後に敷かれたことも明らかとなった。

加工段３出土遺物（第67・68図）

遺物は溝群の周辺や平坦面に点在する状況で出土した。1は弥生土器の壺口縁である。口縁はラッパ状に大きく外反し、内面に４条の凹線、口縁端部外面に３～４条の凹線が施される。２～14は複合口縁の甕である。２～５はやや厚手の口縁で、端部が尖り気味に丸く収まる。6・7は口縁端部をやや外側に屈曲して丸く収まり、９～13は端部が若干肥厚し面をもつ。14は一次口縁があまり突出せず、退化傾向が進んだ複合口縁とみられる。15～17は鼓形器台である。15は受部で、高さをもって立ち上がる。16・17は脚部で、16は口縁が大きく外反する。18はほぼ完形の低脚坏で、口径10.9㎝、器高3.8㎝、底径4.9㎝を測る。19は薄手で内面を丁寧に磨いており、脚付きの坏とみ



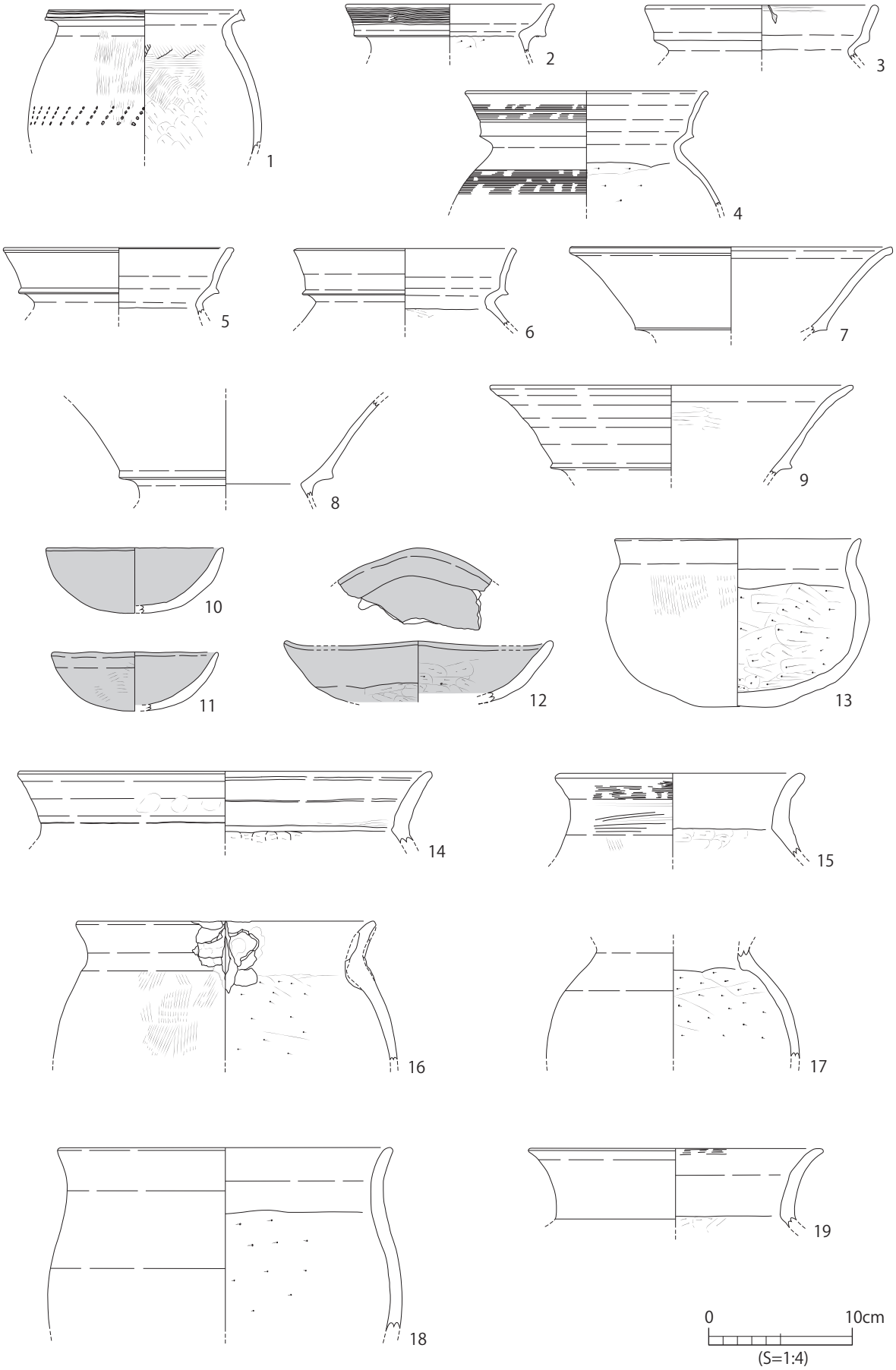
第61図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段１・２遺物分布図

られる。20は小片で器種の特定は難しいが、高坏と思われる。口縁端部に沈線が施される。21は小片だが小型の壺形土器とみられる。器壁は22と比較してやや厚手で、肩部に数条の沈線と沈線間に貝殻腹縁による連続刺突が施され、胴部下半はヘラミガキが施される。なお、これと同一個体とみられる小片が後述する加工段５からも出土している。22は台付の直口壺である。復元口径6.2㎝を測り、肩部に細かな沈線と刺突文が連続して施され、胴部の張り出した部分にも貝殻腹縁による連続刺突や沈線が施される。

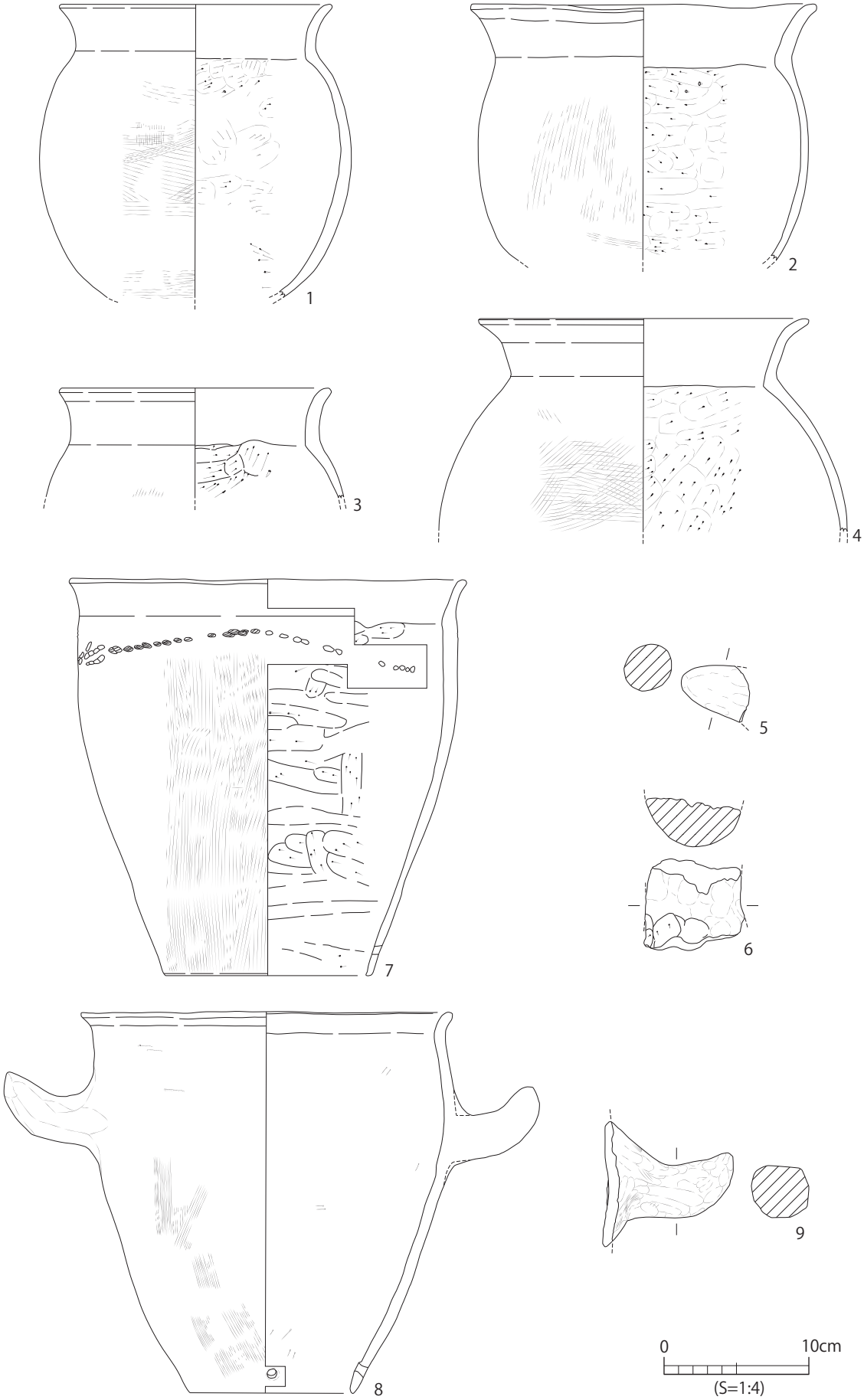
これらの時期は、１が出雲Ⅳ－２様式、２～５が草田４期、６～８が草田５期、９～13が草田６期、14が小谷３式、15・17が草田５期、16が草田４期、18～20が草田５期、21は草田２期、22は草田５～６期に相当するとみられる。従って、１が弥生時代中期末、21が弥生時代後期中葉、２～13・15～20・22が弥生時代終末期～古墳時代初頭、14が古墳時代前期後葉に比定される。

加工段４（第69図）

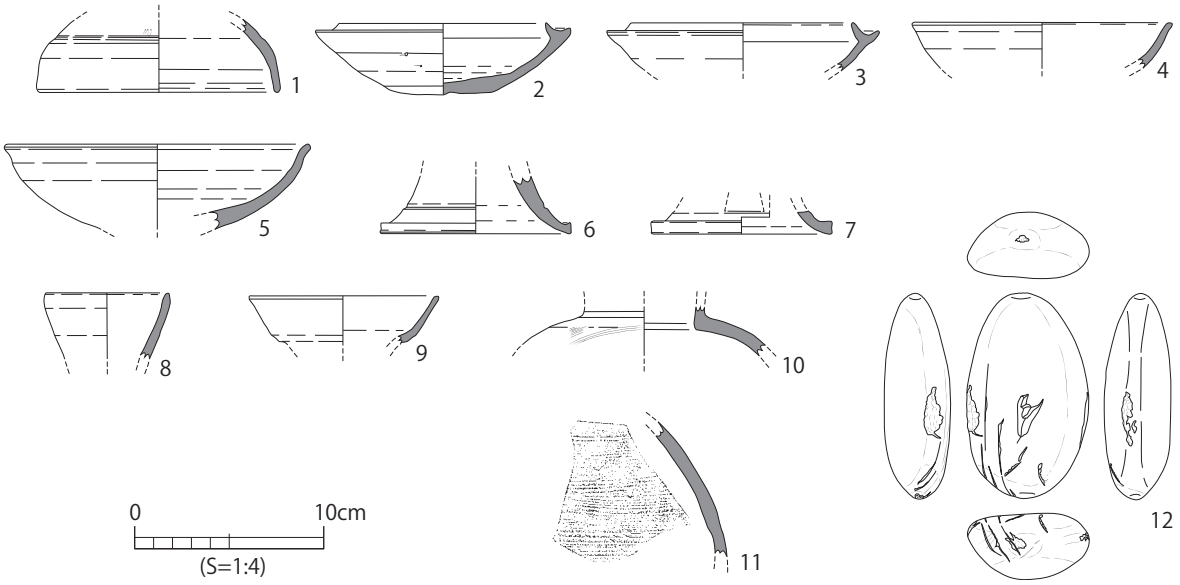
加工段４は、加工段１の南東側、加工段３の斜面直下、標高10.5ｍの位置で検出した。遺構の立地する斜面はかなりの急傾斜となっており、遺構の残存状況は良くないが、斜面に沿った溝状遺構（溝４）と幅20㎝程度の平坦面、ピットをいくつか検出することができた。溝状遺構はほぼ直線状に延び、長さ2.3ｍ、幅40㎝を測る。溝の南側は大きく流出しているとみられ、溝に隣接してピッ



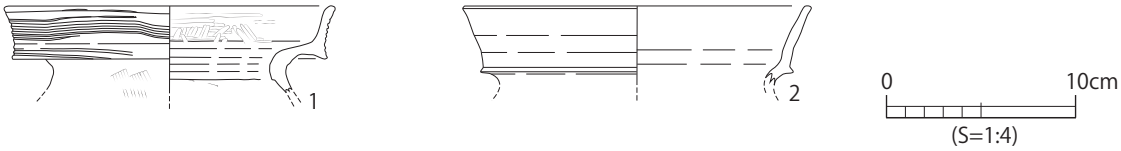
第62図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段１出土遺物実測図（1）



第63図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段１出土遺物実測図（2）



第64図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段１出土遺物実測図（3）



第65図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段２出土遺物実測図

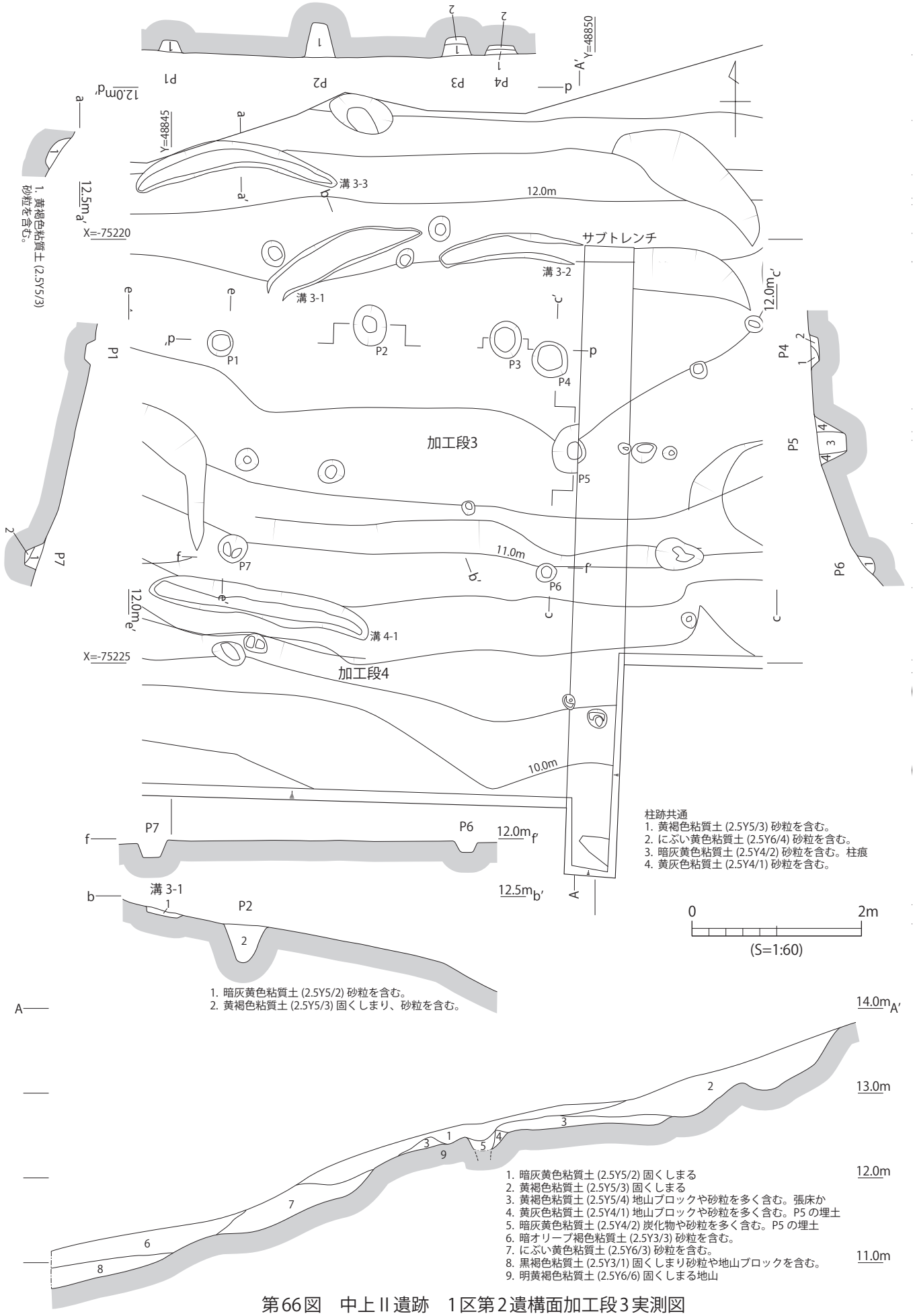
トを２基検出した。本来は溝の南側に平坦面が広がっていたことも想定されるが、ピットが溝に伴うものであるかは判別がつかなかった。

加工段４出土遺物（第70図）

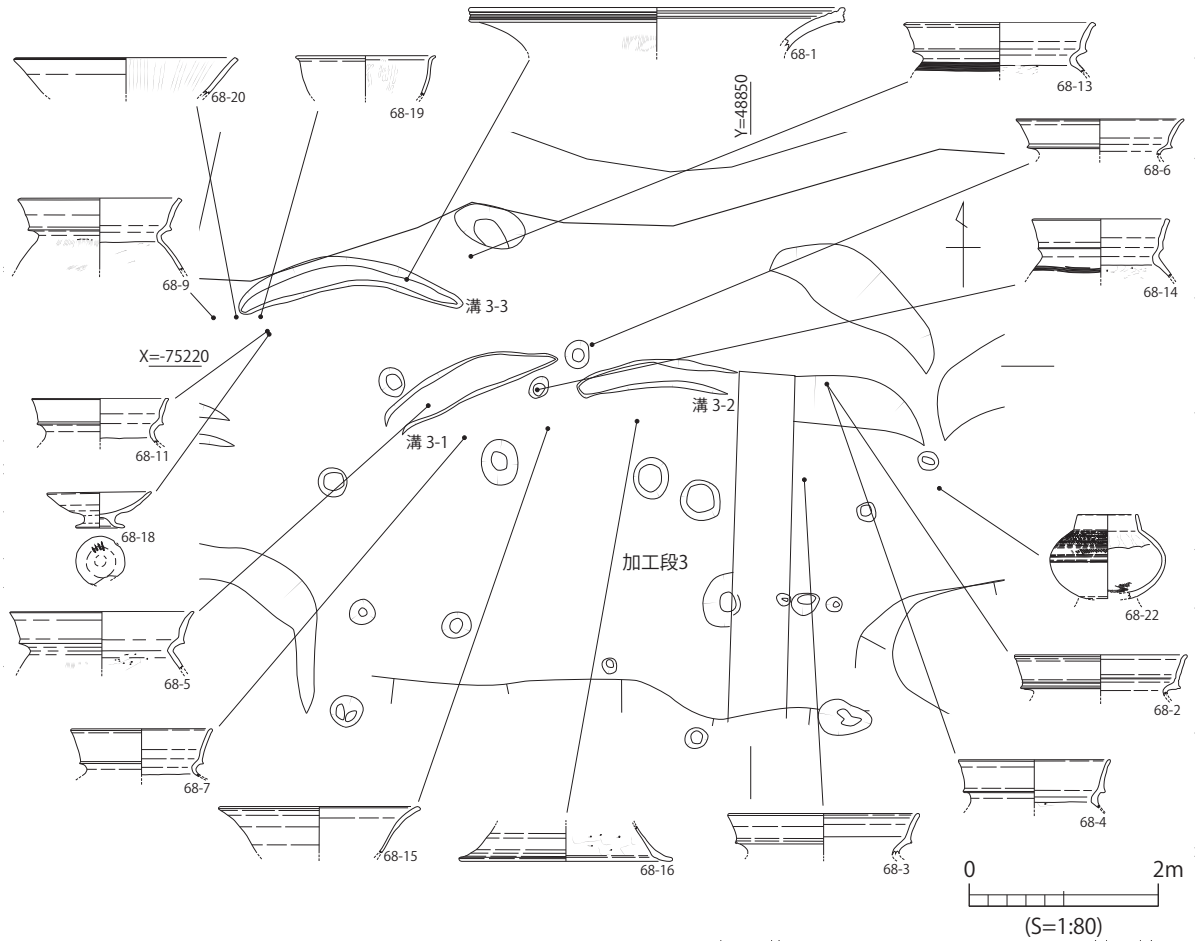
遺構の南側斜面で遺物がいくつか出土したが、厳密に加工段４に伴うものかは定かでない。１は鼓形器台の受部である。口縁は高さをもって立ち上がる。２は低脚坏の坏部である。坏の復元口径は21.8㎝と大型で、口縁端部に浅い沈線が施される。３は複合口縁の甕で、口縁先端を折り曲げ端部に面をもつ。これらの時期は、１が草田４期、２が草田５期、３が草田７期に相当するとみられ、１・２が弥生時代終末期、３が古墳時代前期に比定される。

加工段５（第71図）

加工段５は、加工段３の東側に隣接して検出した。北側斜面の際に段状に掘り込んだ法面が認められ、その南側に床面状の平坦面が広がっている。法面の幅は5.3ｍ、高さ60㎝を測り、これに伴う平坦面は幅約６ｍ、奥行き1.6ｍの範囲で広がっている。平坦面の南側は崖状に斜面が落ち込んでいるが、幅4.2ｍ、奥行き1.8ｍの範囲で黄褐色粘土が堆積しており、これは平坦面を拡大するための張床を敷いた痕跡とみられる。床面からは他の加工段でみられるような壁帯溝やピットは確認できておらず、従ってこの遺構の性格は不明瞭であるが、床面の中央付近で特徴的な土器がまとまって廃棄された状態で出土している。遺構内での祭祀行為の痕跡である可能性もあり、土器溜付



第66図　中上Ⅱ遺跡　1区第2遺構面加工段3実測図



第67図　中上Ⅱ遺跡　1区第2遺構面加工段3遺物分布図

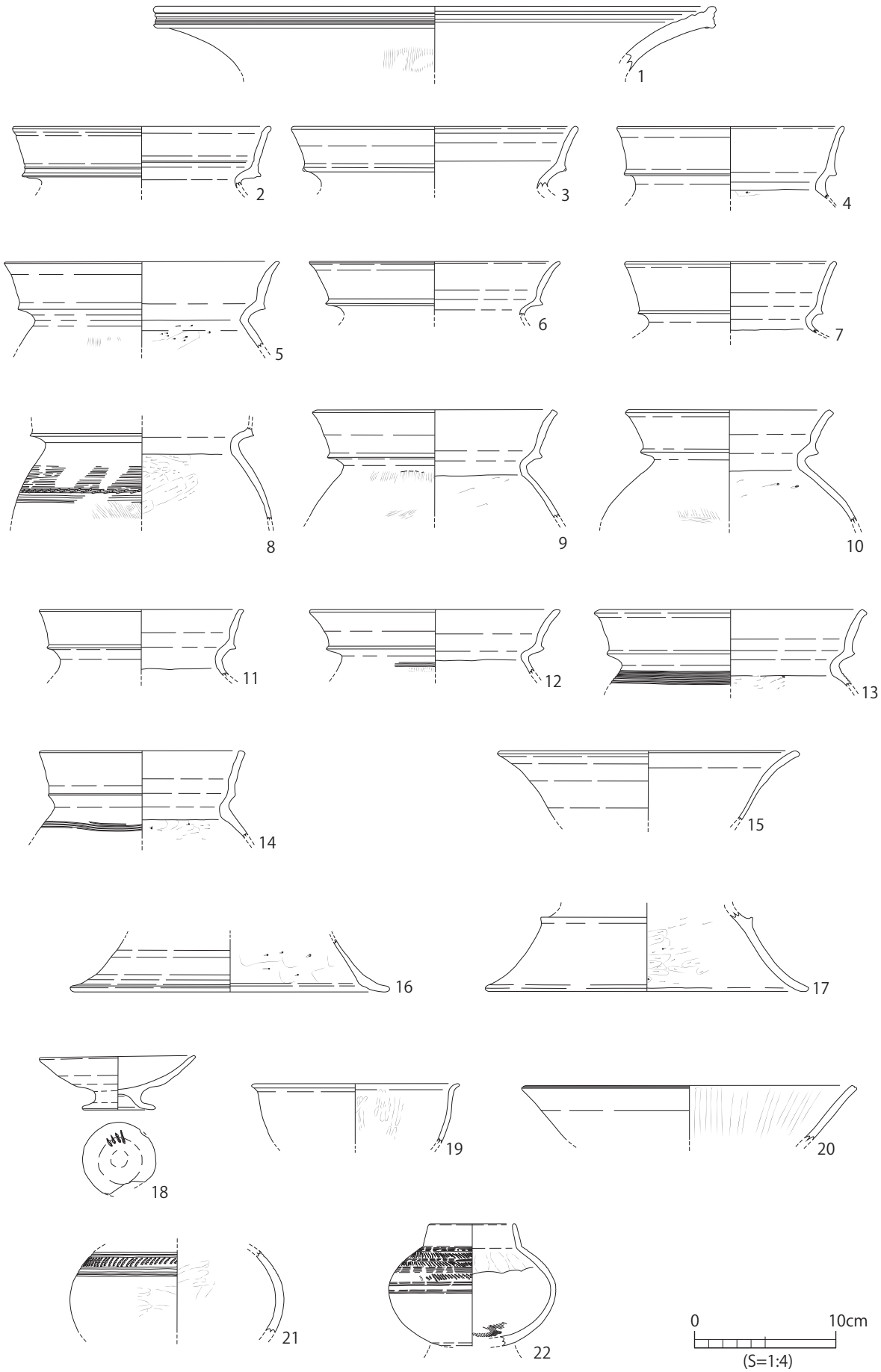
近の堆積土を回収して水洗したが、関連するような有機物等は検出できなかった。

なお、第1遺構面で検出した焼土面は加工段5の掘方の上方に位置することから、加工段5がある程度埋まった後に焼土面が形成されたことを示している。従って、加工段5と加工段2～4は一定程度の時期差が存在すると考えられる。

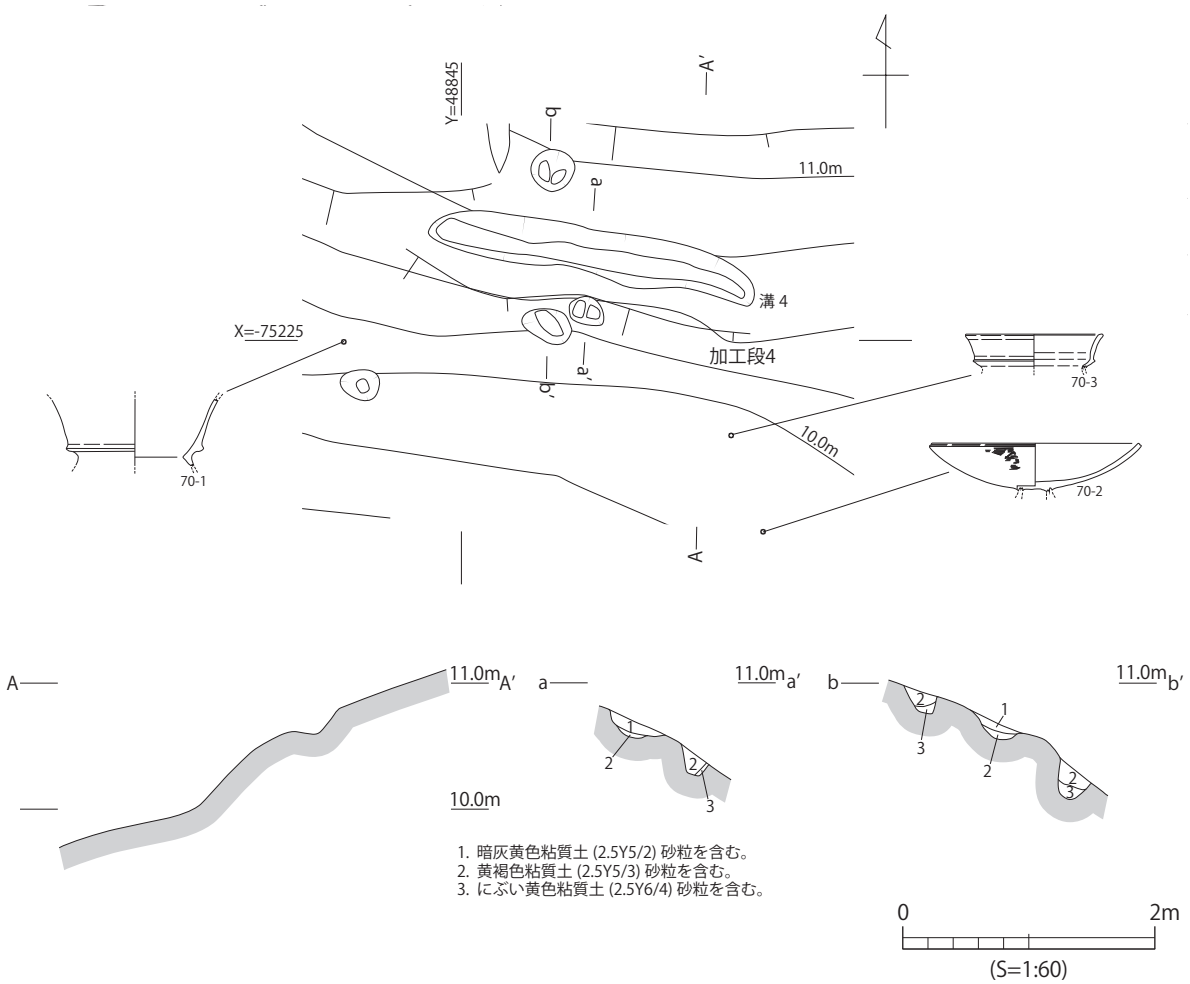
加工段5出土遺物（第72・73図）

遺物は前述したように、床面でまとまって出土したものと、遺構埋土上層から出土したものがあり（第72図）、前者は1～5・8、後者は6・7に区別できる。

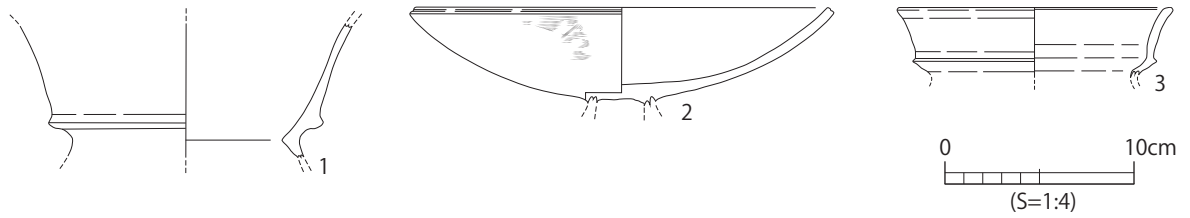
1は壺形土器の胴部である。頸部～口縁部を除きほぼ全体の形状が復元できたもので、残存部の高さは24㎝、平底の底径は4.3㎝を測る。肩部はナデ肩で胴部中央が張り出し、底部に向かってすぼまる。器壁は厚手で胎土は赤味をもち、肩部に竹管状のスタンプ文と貝殻腹縁による連続刺突が密に施され、肩部以下は底部にかけてハケ目が器壁を埋めるように施される。口縁部が欠落しており、共伴する口縁部2～4とも接合できなかった。あるいは別の場所で口縁を打ち欠いて持ち込まれたことも想定される。これと同時期とみられる類例としては、出雲市・三田谷Ⅰ遺跡（島根県2000）や鳥取県・青谷上寺地遺跡（鳥取県2002）で頸部を竹管文で装飾する壺形土器が出土している。2～4は複合口縁の甕である。いずれも器壁は厚手で、外面に擬凹線が施される。なお、3・4は2と類似するような赤味を帯びた胎土で、同一個体である可能性もある。5は小型の甕形土器



第68図　中上Ⅱ遺跡　1区第2遺構面加工段3出土遺物実測図



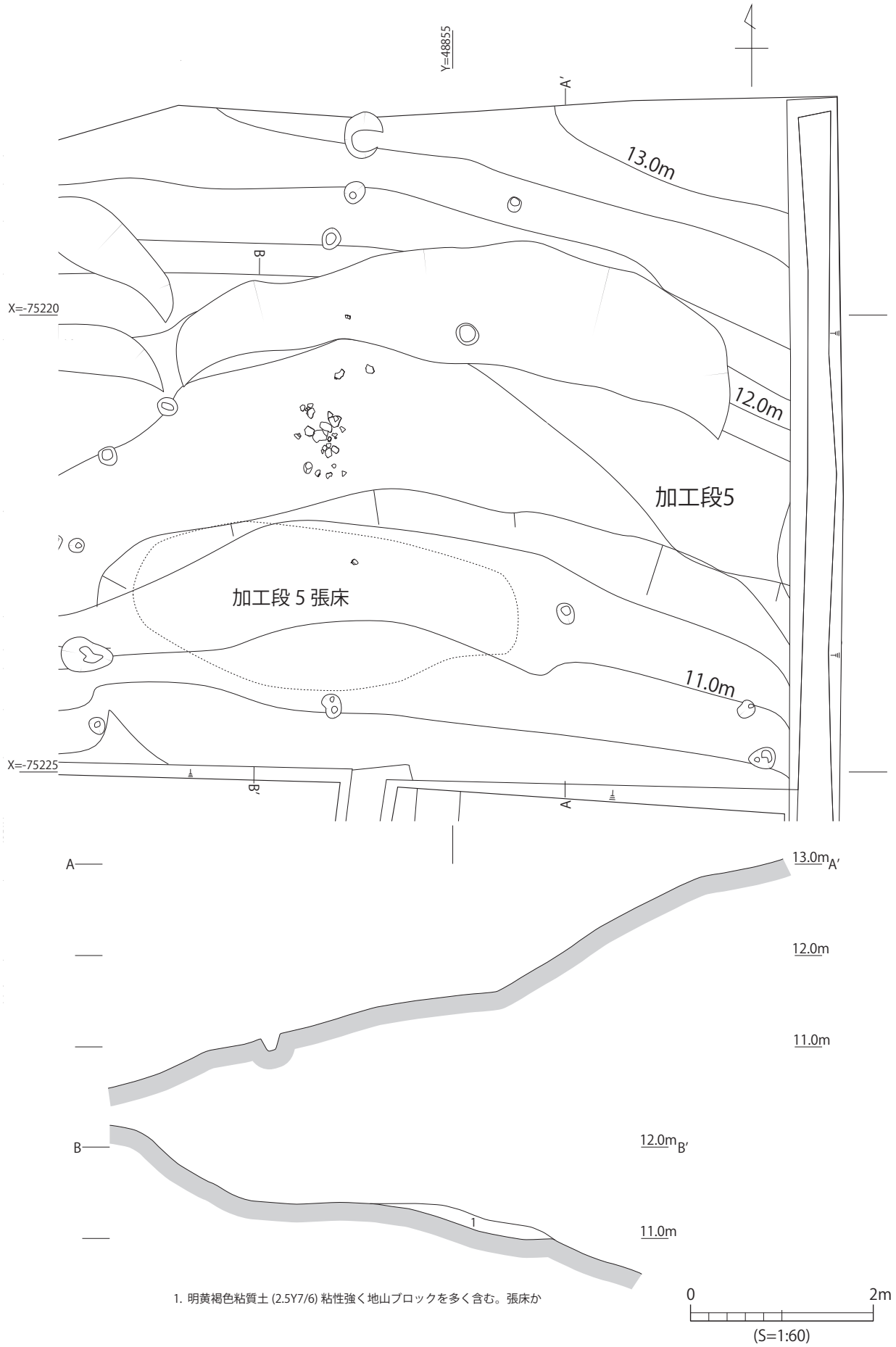
第69図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段４実測図



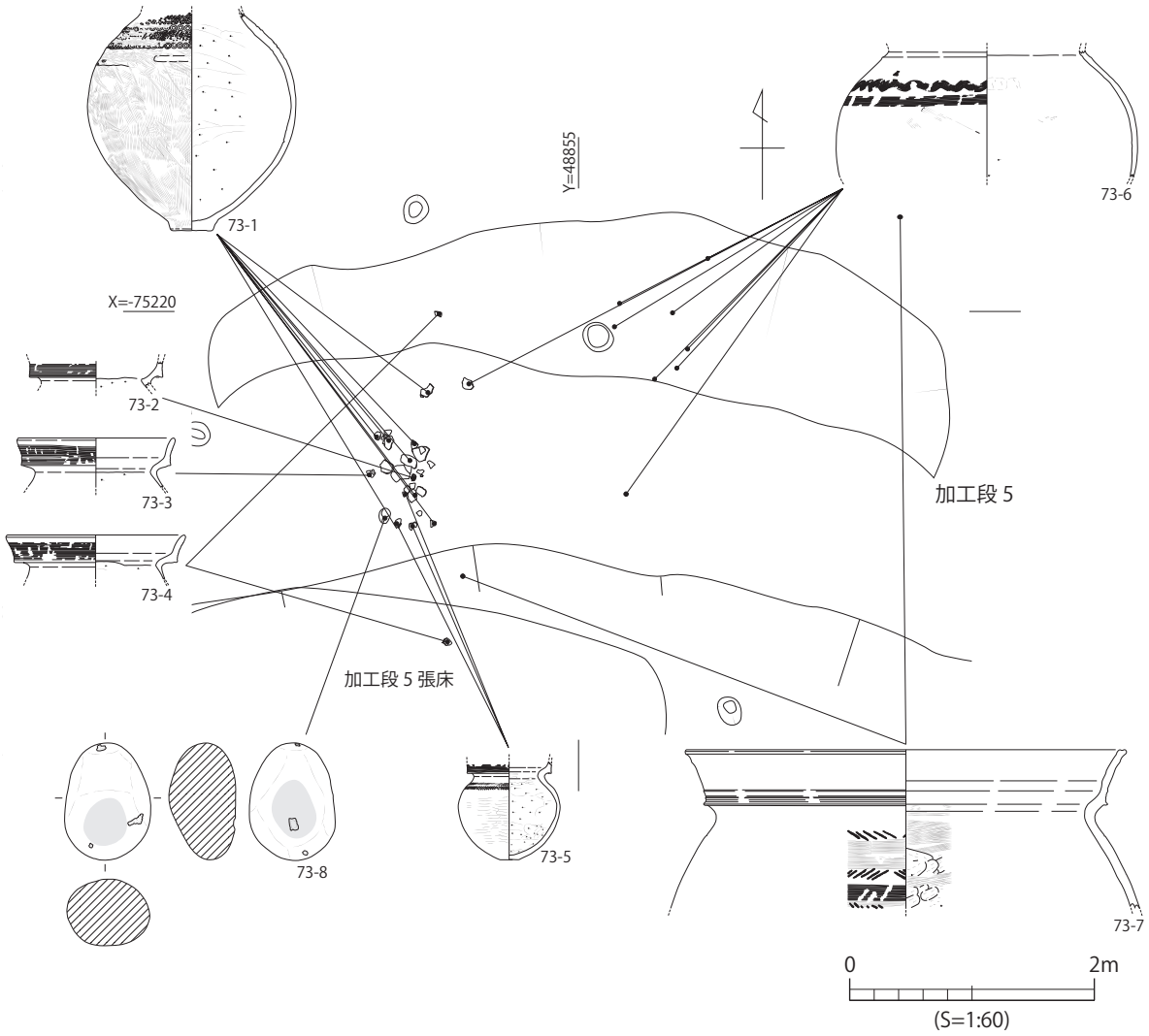
第70図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段４出土遺物実測図

で、口縁部の先端を欠くがほぼ全形が復元できた。現状の口径は9㎝、器高は10.7㎝、平底の底径は2.2㎝を測る。全体的に丁寧に仕上げられており、口縁外面には凹線、肩部に貝殻腹縁による連続刺突文、胴部にはヘラミガキ調整が施される。また胴部下半には煤が付着する。８は磨石とみられる円礫である。表裏面に磨られて平滑になった面が認められるが、顕著なものでなく、数度の使用で廃棄されたようにもみうけられる。石材はデイサイトである。

６は法面の上層で出土した壺の体部である。大型のもので、胴部の最大径は32.8㎝を測る。肩部に波状文やヨコ方向の擬凹線が施される。７はさらに大型の甕である。復元口径は47.7㎝を測り、口縁端部は肥厚して面をもつ。肩部には頸部直下から連続してナナメ方向の連続刺突文と擬凹線が



第71図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段５実測図



第72図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面加工段５遺物出土状況図

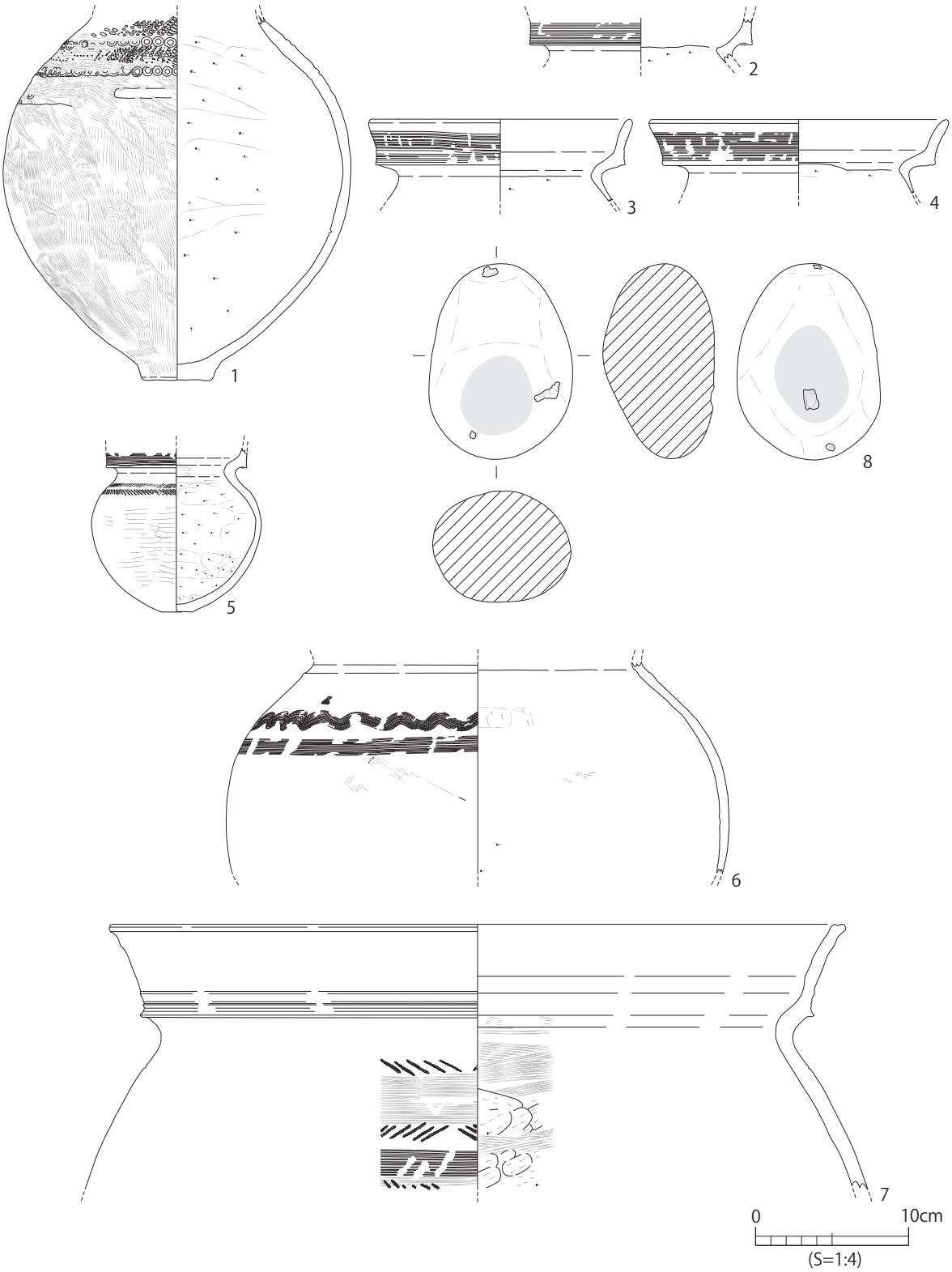
交互に施され、特に刺突文は途中で向きを変化させている。

これらの時期は、１・２が草田２期、３～５が草田３期、６・７が草田４～５期と想定され、１～５が弥生時代後期中葉～後葉、６・７が弥生時代後期後葉～終末期に比定される。出土状況から、遺構に直接伴うものは１～５・８と思われ、加工段５の時期は弥生時代後期中葉～後葉と考えられる。なお、これらの遺物は床面からまとまって出土しているが、口縁部が欠落し肩部にスタンプ文や刺突文で装飾を巡らす壺形土器や、精巧に作られた小型甕、使用頻度の低い磨石など、通常の生産活動で使用され持ち込まれたとは考えにくい資料群といえる。この加工段の性格や遺構内での行為を示唆するようで興味深い。

第２遺構面遺物包含層出土遺物（第74図）

第74図は加工段を検出した斜面の下方で出土した遺物である。層位的には、第58図の西壁土層図の第20層出土遺物に該当する。

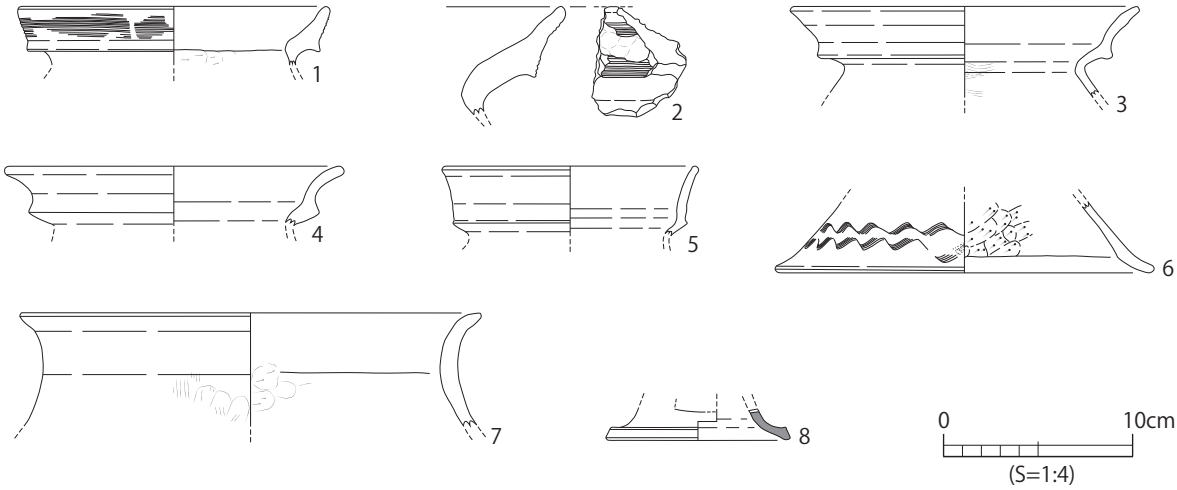
１～５は複合口縁の甕である。１は厚手の口縁で、外面に擬凹線が施される。２は大型品の破片とみられ、外面に擬凹線が確認できる。３・４は口縁が大きく外反し、端部を丸く収める。５は薄手の口縁部の小片で、端部が肥厚して面をもつ。６は鼓形器台の脚部で、外面に波状文が２条施される。



第73図　中上Ⅱ遺跡　1区第2遺構面加工段5出土遺物実測図

7は土師器の甕で、口縁は緩やかに立ち上がり端部が屈曲する。8は須恵器の高坏脚部である。方形状の透かしが入る。

これらの時期は、1・2が草田2期、3・4が草田4期、5・6が草田5～6期に相当するとみられ、1・2が弥生時代後期中葉、3～6が弥生時代終末期～古墳時代初頭、7・8が古墳時代後期以降に比定される。これらの遺物は、遺構から出土する遺物の時期とほぼ同様である。



第74図　中上Ⅱ遺跡　1区第2遺構面遺物包含層出土遺物実測図

土器溜（第 75 図）

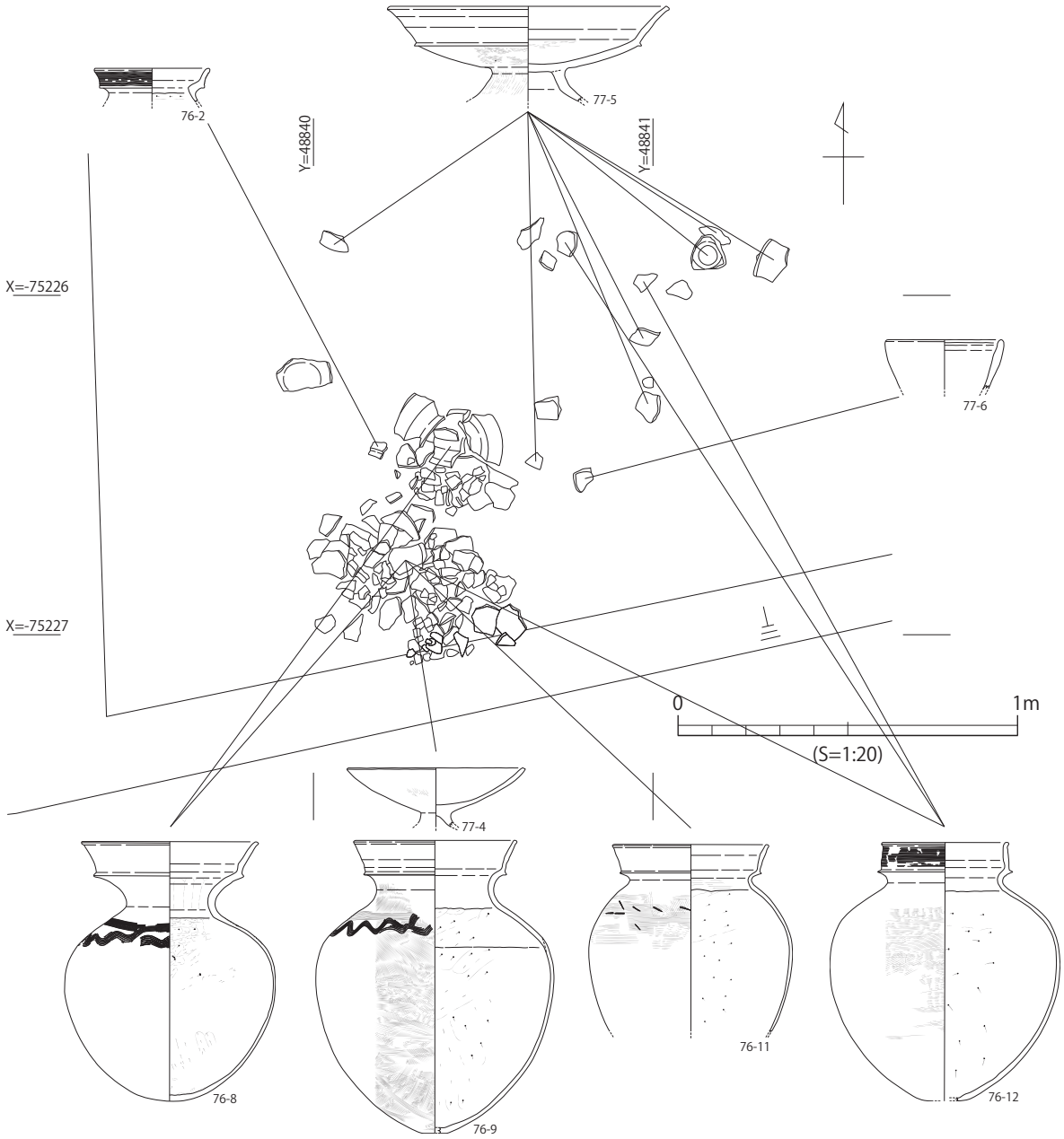
調査区南西隅の斜面で土器片が折り重なるようにまとまって出土ており、この範囲を土器溜として一括で取り上げを行った。完形に復元できる資料も多く含まれており、何らかの理由でまとめて廃棄された可能性もある。

土器溜出土遺物（第 76・77 図）

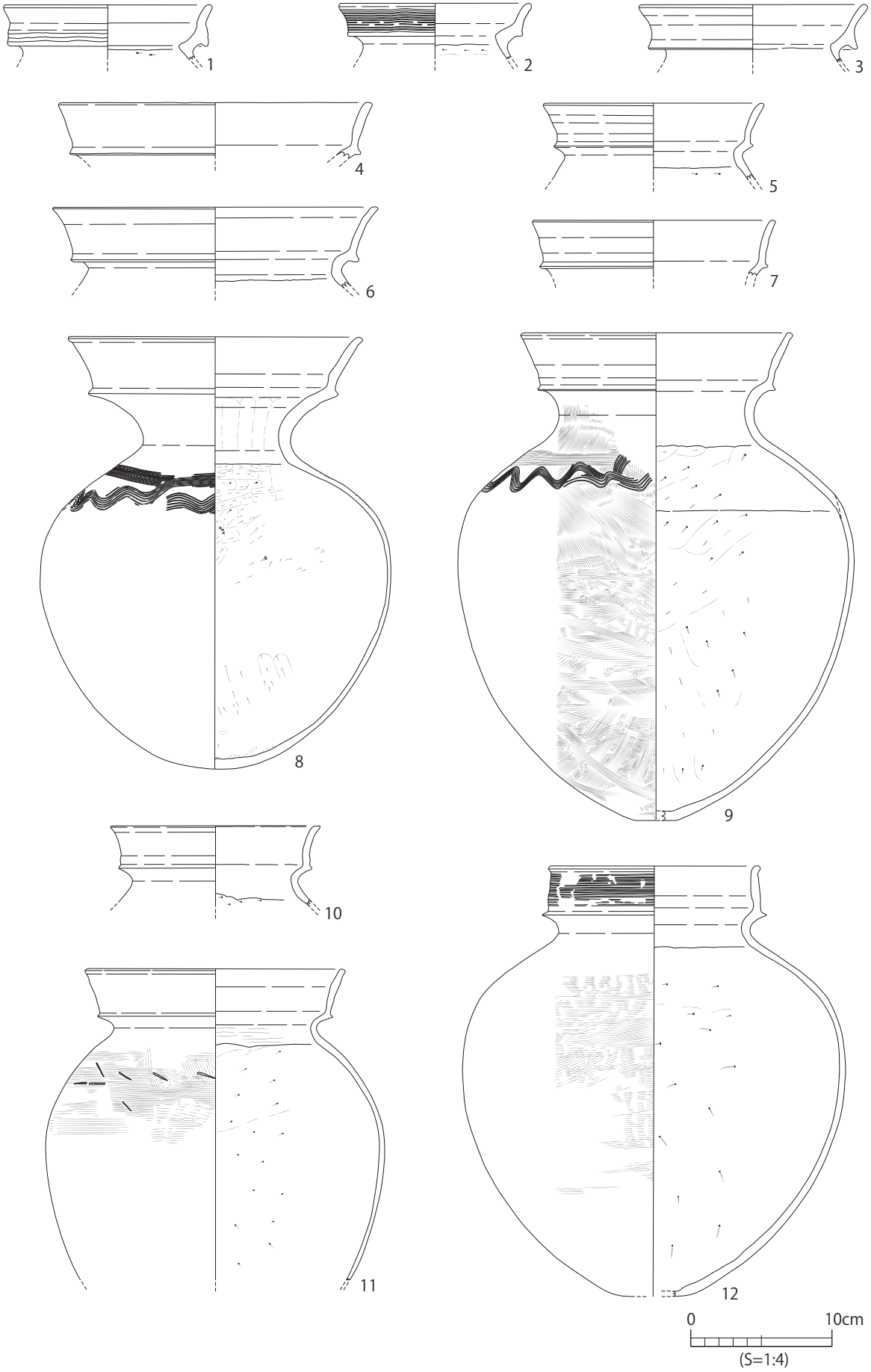
第76図は複合口縁の壺・甕類である。1 ～ 3は器壁が厚手の口縁で、1・2は湾曲する外面に擬凹線が施される。4 ～ 7は口縁部の小片で、4・5・7は端部が丸く収まり、6はやや内傾する面をもつ。8は完形に復元できた壺で、口径は20.5㎝、器高は30.6㎝を測る。口縁は大きく外反し、端部を外側に肥厚させて丸く収めている。肩部には頸部直下に直線文を一周させた後に続けて波状文を巡らせている。胴部は球状に張り出し、底部は丸底に仕上げている。9も完形に復元できた甕で、口径は18.6㎝、器高は34.6㎝、底径は3.0㎝を測る。口縁は逆ハ字状に立ち上がり、端部を丸く収めている。肩部には8と同様にハケ状工具による直線文を巡らせた後、続けて波状文を施す。胴部の上半が張り出し、下半に向かってすぼまり、底部は小さな平底に仕上げている。10は甕の口縁部で、端部が明瞭に屈曲し面をもつ。11は底部を除き全体の形状がうかがえる甕である。復元口径は18.0㎝を測り、口縁端部を屈曲させて面をもつ。ナデ肩の肩部にはハケ状工具によるとみられる連続刺突文が間隔をあけて施される。12は完形に復元できた甕で、口径は14.6㎝、器高は30.5㎝、底径は5.9㎝を測る。口縁は厚手で垂直に立ち上がり、端部を折り曲げ面をもたせている。胴部の上半が大きく張り出し、底部にむかって緩やかにすぼまる。底面は平底である。また肩部にはヨコ方向のハケ目の他、目立った文様は確認できなかった。

第77図1・2は壺・甕類の底部である。平底で、復元底径は1が6.4㎝、2が5.5㎝を測る。3は小片のため器種が判然としないが、高坏の坏部であろうか。4は低脚坏で、脚部の先端を除きほぼ全体の形状のわかる資料である。口径は21.0㎝を測る。5は低脚の高坏で、脚部の先端部を除きほぼ完形に復元できた資料である。口径は32.5㎝を測り、坏部は底面と口縁の境に突起があり、口縁は大きく外反して立ち上がる。内面はヘラミガキで仕上げられる。脚部はハの字状に開き、外面にヘラミガキが施される。6は鉢形土器とみられ、器壁は厚手で口縁端部は丸く収まる。内面には強いナデによる凹みが口縁に沿って施される。口縁外面には煤が付着する。

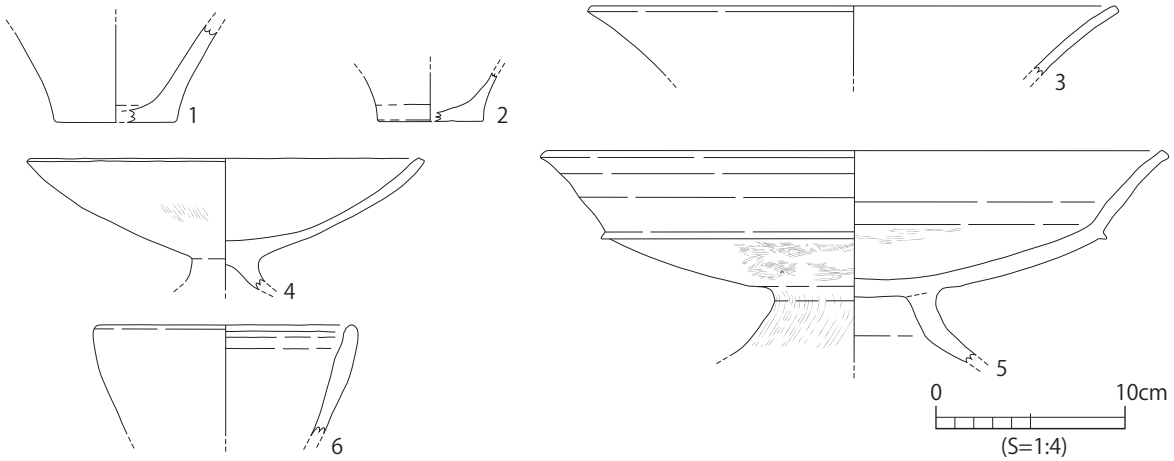
これらの時期は、第76図１～３が草田２～３期、４～９が草田５期、10～12が草田６期、第77図３・４が草田５期、５が草田６期に相当するとみられる。従って第76図１～３が弥生時代後期中葉～後葉、４～９が弥生時代終末期、10～12が古墳時代初頭、第77図１・２は弥生時代中期後葉、３・４が弥生時代終末期、５が古墳時代初頭、６は時期比定が難しいが古墳時代前期頃に比定されると考えられる。また完形に復元できた資料も数多く含まれており、第76図８のように口縁や胴部は草田５期の特徴をもちながら底部は丸底になるなど、細部が特徴的な資料も認められた。



第75図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面土器溜遺物出土状況



第76図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面土器溜遺物実測図（1）



第77図　中上Ⅱ遺跡　１区第２遺構面土器溜遺物実測図（2）

第３節　２区の調査

1.　調査の概略と検出遺構（第 78 図）

２区は１区の水路を挟んだ南側にあたり、谷間奥の南側丘陵斜面に位置する（第30図）。周辺はかなり急峻な斜面が広がっているが、丘陵が窪地状に奥まって小規模な谷状地形を形成しており、その範囲に半月形の平坦地が広がる状況にあった。平坦地の規模は幅約25ｍ、奥行き10ｍの小規模なもので、現状で畑地となっていた。平坦地の上方斜面には滑落崖が広範囲で認められ、下方に崩落土が堆積する。地形の堆積相観察を実施した結果、この平坦地自体もかつての地滑り土塊により形成された可能性も指摘されている（第５章第３節参照）。この平坦地の試掘確認調査を実施したところ、中世の土師質土器の破片が出土したことから、平坦地190㎡を本調査発掘調査の対象範囲とした。

調査は対象範囲が狭小で作業スペースや排土置場を確保する必要があったこと、また時間的な制約から、まずトレンチ状の調査区をいくつか設定し、遺構・遺物が確認できた箇所について調査範囲を面的に拡大することとした。結果、平坦地中央付近の地表下1.2ｍの緩斜面で溝状遺構（SD01～05）やピット群、焼土面を検出した。最終的な調査面積は120㎡である。

2.　基本層序（第 78 図）

厚さ約80㎝の造成土・耕作土である１～５層の下層に遺物包含層である８層が堆積しており、その下面で遺構面である地山を検出した。地山面は背後の山際から４ｍほど緩やかに傾斜するが、その先は急な崖となり谷間に向かって落ち込んでいる。この落ち込みに崩落土とみられる９～12層が厚く堆積しており、そのため地山が崖状に落ち込む北側は10～12層上面で面的な掘り下げを取りやめた。前述したように２区の地盤自体が地滑り土塊と考えられるように、現在の地形は斜面の滑落と土砂の堆積を繰り返して形成されたものであることがうかがえる。

3.　遺構と遺物（第 79・80 図）

（1）　溝状遺構

溝状遺構は幅４ｍほどの緩斜面で４基（SD01～05）検出した。SD04を除き斜面に沿って掘り込まれているが、いずれも規模は同程度で、軸もおおむね揃っているように見受けられる。遺構自体

の残存状況も良好ではないので、縦列するSD02とSD05のように本来同一の遺構であったものが途切れている可能性も考慮される。以下検出順に詳細を述べる。

SD01

SD01は調査区東壁付近で検出した。斜面に沿って東西方向に延びているが、両側で様相が異なる。東側は幅1.2ｍの方形状に掘り込まれ、西側は幅40～60㎝と細長い形状で、深さも東側28㎝、西側10㎝と規模に差がある。溝底は東側に向かって傾斜しており、あたかも東側の方形状の掘り込みに水を溜める機能があったようにも見受けられる。この遺構からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SD02

SD02は緩斜面の中央付近で検出した。東西方向にやや弧状に延びており、規模は長さ4.5ｍ、幅30～60㎝、深さ10㎝を測り、逆台形状に掘り込まれている。溝底は東から西にむかって傾斜する。遺物は出土しておらず時期は不明である。

SD03

緩斜面北側の崖面際で検出した。SD02と並行して東西方向に直線状に延びており、規模は長さ4.5ｍ、幅30～95㎝、深さ10㎝を測り、逆台形状に掘り込まれている。溝底は東から西にむかって傾斜する。遺物は出土しておらず時期は不明である。

SD04

調査区の南壁付近で検出した。他の遺構と異なり斜面に直交して弧状に延びる。規模は長さ２ｍ、幅40～60㎝、深さ10㎝を測り、Ｕ字状に掘り込まれている。溝底は南から北にむかって傾斜する。遺物は出土しておらず時期は不明である。

SD05

SD02の西側に縦列する位置で検出した。最も小規模な溝で、長さ1.5ｍ、幅20～25㎝、深さ10㎝を測り、逆台形状に掘り込まれている。溝底は東から西にむかって傾斜する。遺物は出土しておらず時期は不明である。

（2）　ピット群

ピットは総数16点ほど検出したが、主に崖面の際に集中して分布する。いずれも径15～20㎝、深さ20～30㎝程度の掘方だが、特にSD03北側の崖面に沿って配列する様子は、緩斜面と崖面の境に杭列・柵列状の遺構があったことも想定される。ピット内からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。

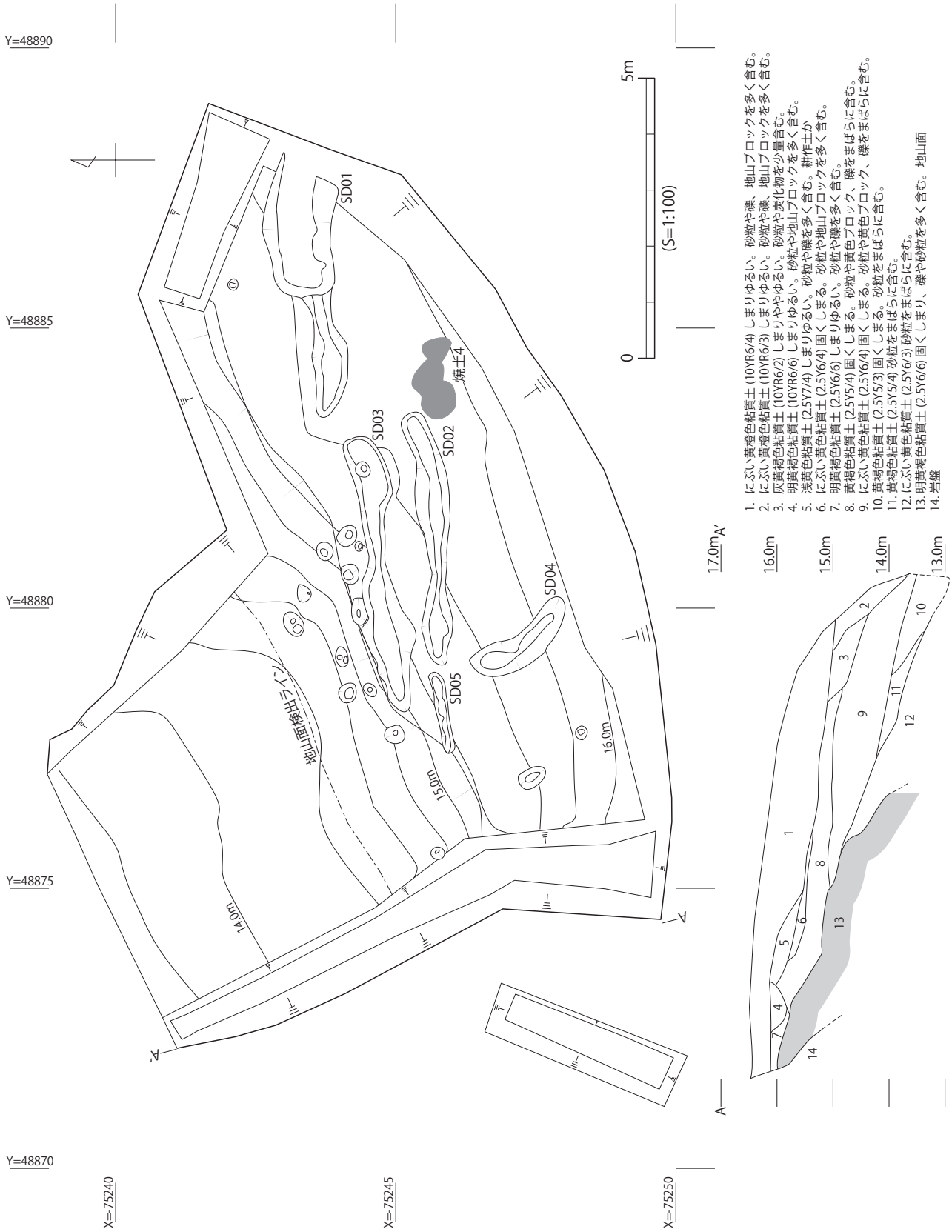
（3）　焼土面

緩斜面山際の調査区南壁沿いで検出した。何度か焼成が行われたとみられ、いくつかの焼土面が連結しているような平面形である。この焼土面から採取した炭化物の年代測定を実施したところ、15～17世紀と、紀元前１世紀～紀元後１世紀の２つの範囲で年代が示された（第５章第４節参照）。

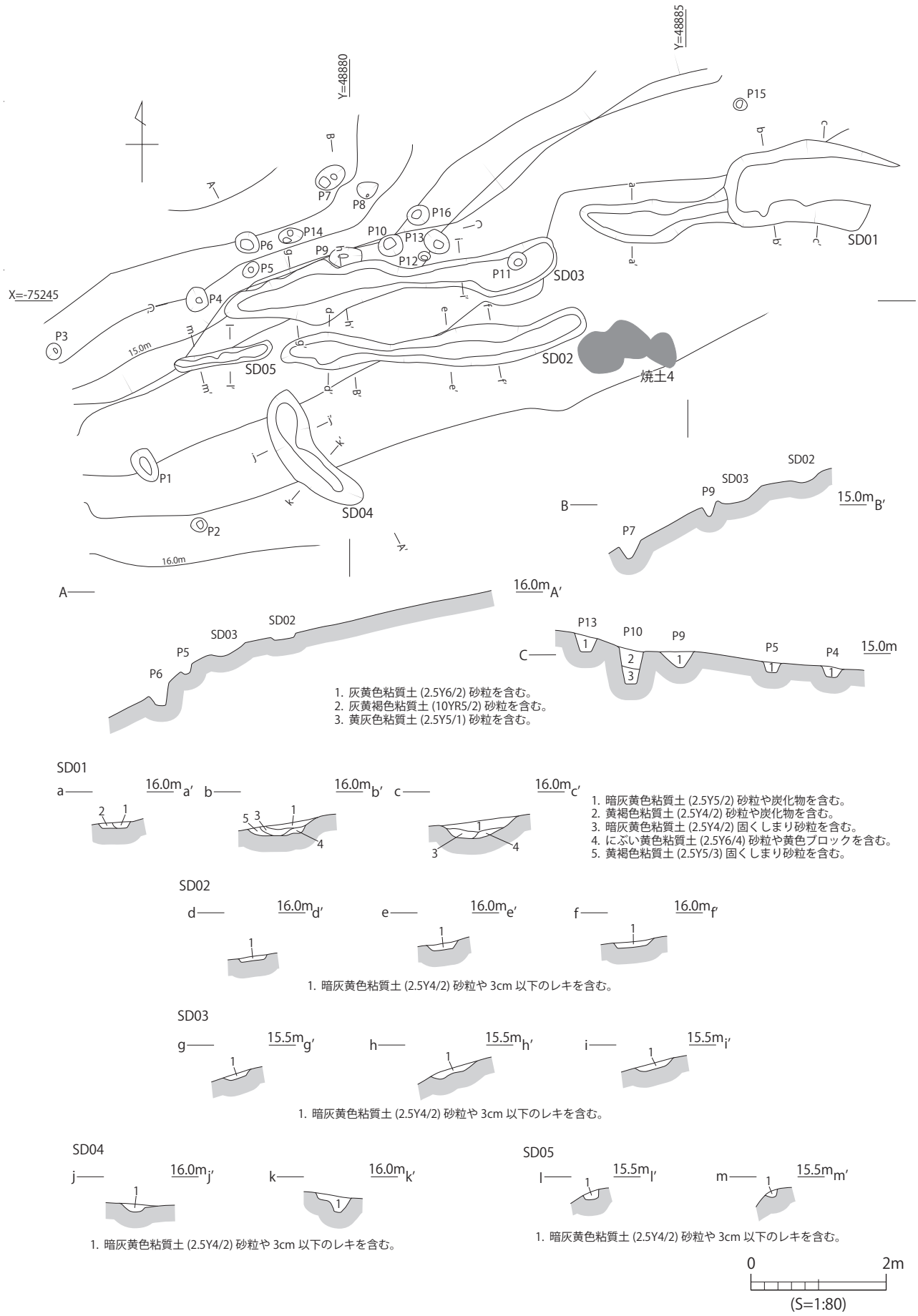
（4）　出土遺物（第80図）

２区では遺構内から遺物は出土しなかったが、遺構面を覆う８層や９層から遺物が出土した。

１は肥前系陶器とみられる擂鉢である。内面に１～2㎝の間隔で擂目が１条ずつ施される。16世紀末頃とみられ、中世末～近世初頭に比定される。2･3は備前焼の甕もしくは鉢とみられる小破片である。4は中国産の白磁壺とみられる。12世紀代に比定される。5は肥前系の陶器皿である。16



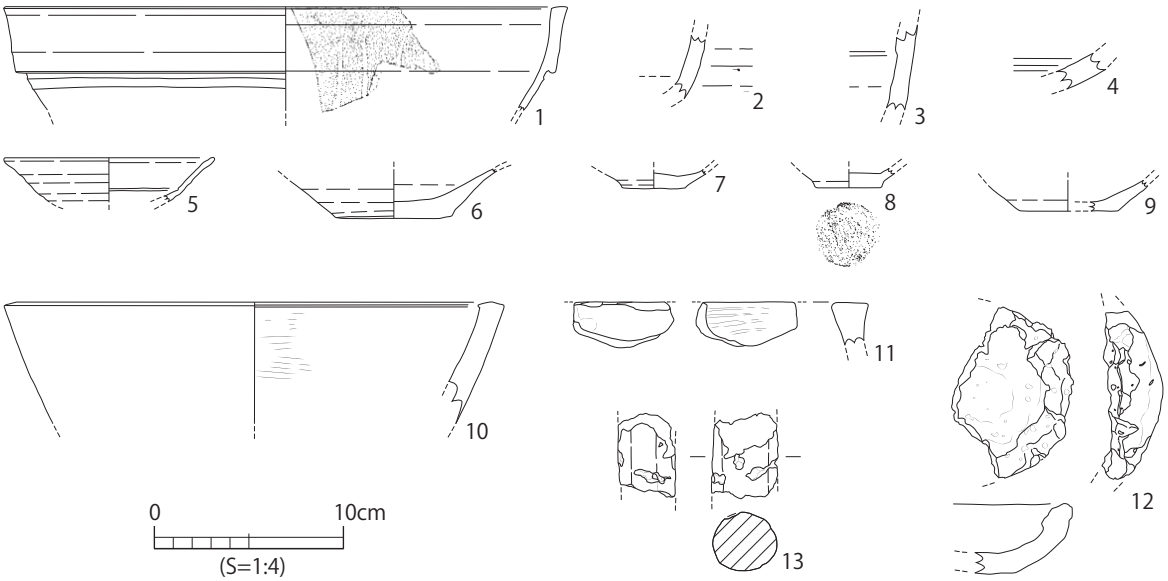
第78図　中上Ⅱ遺跡　2区遺構配置図



第79図　中上Ⅱ遺跡　2区ピット群、SD01 ～ 05実測図

世紀後半頃とみられる。６～９は土師質土器の坏底部である。12世紀代に比定される。10は在地系瓦質土器の鉢である。16世紀後半頃とみられる。12は坩堝である。径9㎝で底面は丸底、内面に被熱のため溶解しており、緑青が付着する。周辺で金属の鋳造作業が行われたことを示唆する。13は性格不明の土製品である。断面楕円形の棒状品で長径3.4㎝を測る。両端部は欠損するが、全体的にかなり高温の被熱のため溶解しており、12に関連する鋳造作業に使用されたとみられる。

以上のように、出土遺物に時期差はあるが、おおむね中世に属するとみられる。また最も新しい遺物の年代が焼土面採取炭化物の測定年代と整合的といえる。従って、２区で検出された遺構の年代は、少なくとも16世紀以前と推定できる。



第80図　中上Ⅱ遺跡　２区遺物包含層出土遺物実測図

第４節　小結

第２・３節で１・２区において検出された遺構や遺物について個別の概略を述べたが、全体的な特徴をまとめて第４章の結びとしたい。

1.　１区について

谷間低地の平坦面にあたる１区では、弥生時代中期末から近世・近代までの多時期に渡る多種多様な遺構・遺物を検出した。まず大きな成果といえるのは、近代以降の造成土の下から、かつて谷間を貫流していた自然河道SR02を検出したことである。これにより、この谷間が埋め立て造成される以前の旧地形が姿を現し、過去の生産活動は主に自然河道北側の河岸段丘状平坦面を舞台に展開することが明らかとなった。

この幅25ｍ、奥行き10ｍ程の平坦面では上下２面の遺構面（第１・２遺構面）を検出したが、地層の堆積相観察により、この平坦面も人為的な盛土造成による地形改変により構築されたものであることも判明した。上面の第１遺構面では性格不明の多数のピットや土坑群SK01～03を検出するのみであったが、遺構面を覆う遺物包含層出土品の下限は12～13世紀代なので、盛土造成の時期は中世前半期頃と推定される。なぜこの時期に丘陵斜面を削平して谷間を埋める大規模な盛土造成が行われたかについては、盛土上面の遺構の様子が不明瞭なこともあり検討材料に乏しいが、第６

章で改めて総括的に検討してみたい。

盛土下層の第２遺構面では加工段状遺構を５基検出した。これらの時期は加工段１が古墳時代終末期で、加工段５が弥生時代後期中葉～後葉とみられる。加工段２～４は遺構の特徴が共通しており、周辺から出土する遺物からいずれも弥生時代終末期～古墳時代初頭と捉えられる。従って幅広い時期にまたがり生産活動が行われたことがうかがえよう。これらの性格については、加工段１は遺構の特徴や出土遺物から住居といえるが、加工段５は広い床面に柱穴がなく、また床面に竹管文で装飾された壺形土器を含む赤色系土器群がまとまって廃棄された様子は、何らかの祭祀行為によるものと考えられる。この他、平坦面東側の最奥部では、SX01・02と称した加工段状の遺構を検出した。遺構は斜面を段状に整形しただけの簡易なものとみられるが、弥生時代終末期～古墳時代初頭の土器が多量に出土する。また特異な立地からも、水辺に関連するような祭祀行為が行われた可能性が高いといえよう。

以上のように、１区としたこの谷間での生産活動は、弥生時代後期中葉～後葉、弥生時代終末期～古墳時代初頭、古墳時代終末期、そして中世前半期に大きな画期があったことが明らかとなった。

2.　２区について

２区では、南側丘陵斜面に広がる小規模な平坦面から、溝状遺構SD01～05とピット群を検出することができた。これらの機能や性格を検討する材料に乏しいが、遺構の時期は遺物包含層出土資料から中世後半期頃と推測される。またピットは平坦面と崖面の境に杭列・柵列状に配置しており、また焼土面も複数面形成されるなど、何らかの生産活動が行われたことがうかがえる。

なお、遺物の出土状況から、平坦面背後の丘陵斜面に未発見の遺構が残存することも考慮された。一方、中上Ⅱ遺跡の九景川を挟んだ西側の丘陵部には中世城郭の神西城跡が存在しており、背後の丘陵尾根筋に曲輪や堀切などの城郭関連施設が存在することも想定される。このため、丘陵部の踏査も改めて実施したが、人為的な地形改変など遺構の痕跡を確認することはできなかった。

【参考文献】

出雲市教育委員会1997『天神遺跡第７次発掘調査報告書』
島根県教育委員会2000『三田谷Ⅰ遺跡（Vol.2）　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』
財団法人鳥取県教育文化財団2002『青谷上寺地遺跡４　一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
島根県教育委員会2006『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書７』

第７表　中上Ⅱ遺跡出土遺物観察表

土器

図	番号	写真	地点層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土		焼成	調整・文様	時期(併行型式)、備考
29	1	49	採集品	土師器	甕	口縁部小片	(15.8)		残3.8	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石多量	良	外：ヨコナデか 内：ヨコナデか	草田6 以降
29	2	49	採集品	弥生土器か 土師器	鼓形器台	受部破片	(19.3)		残7.3	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の長石少量	良	外：ヘラミガキ　ヨコナデ 内：ヘラミガキ　ヘラケズリか	草田5 か6
29	3	49	採集品	土師器	高坏	脚部		(11.0)	残8.3	外：灰白色 にぶい橙色 内：灰白色 暗灰色	やや粗	2mm以下の長石、石英、白色その他の砂粒多量	良	外：ナデか 内：ナデか　ヘラケズリ	小谷3 透かし3 方向円盤充填法による接合　接合部中央に穿孔あり
29	4	49	採集品	土師器	高坏	坏底部1/2			残3.3	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色　灰白色	やや密	2mm以下の石英、長石、白色その他の砂粒、0.5mm以下の角閃石、雲母多量	良	外：調整不明 内：ヘラミガキか	小谷3 円盤充填
29	5	49	採集品	土師器	高坏	坏底部～接合部破片			残2.1	外：浅黄色 内：にぶい黄色	粗	2mm未満の石英、長石、赤色、白色その他の砂粒多量	良	外：調整不明 内：ミガキか	大型高坏 円盤充填法による接合　接合部中央に穿孔か
29	6	49	採集品	土師器	低脚坏	脚部		4.7	残1.7	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の長石　金雲母	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ	
29	7	49	採集品	土師質土器	皿	底部		(3.6)	残0.9	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	微細長石	良	外：調整不明　底面糸切 内：調整不明	
37	1	49	8 層	土師器	甕	口縁部小片	(17.5)		残3.7	外：橙色 内：淡橙色	密	1mm以下の長石多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
37	2	49	8 層	中世須恵器	甕か	胴部小片				外：灰色 内：灰色	密	1mm以下の長石少量	良	外：格子状タタキ 内：ハケ目　指押え	
37	3	49	8 層	中世須恵器	甕	胴部小片				外：暗青灰色 内：白色	密	微細長石少量	良	外：格子状タタキ 内：不明	
37	6	50	9 層	土師器	甕	口縁部小片	(13.9)		残4.0	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石その他の砂粒多量　5mm大の砂礫1 粒　赤色粘土粒	良	外：ナデ　ヘラケズリ 内：ナデ　ヘラケズリ	
37	7	50	9 層	須恵器	甕	頸部小片				外：灰色 内：灰白色	密	微細長石微量	良	外：回転ナデ　波状文　直線文 内：ナデ	
37	8	50	9 層-2	須恵器	坏身	底部1/4		(9.3)	残0.9	外：灰白色 内：灰白色	密	2mm以下の石英、長石少量	やや不良	外：調整不明　底面ヘラ切か 内：調整不明	
37	9	50	10 層上面	須恵器	坏身	底部1/6		(9.0)	残1.1	外：灰白色 内：灰白色	密	2mm以下の長石	良	外：回転ヘラケズリのちナデ 回転ナデ　底面ヘラ切か 内：回転ナデ　ナデ	
37	10	50	9 層	土師質土器	坏	1/3	15.1	5.2	4.8	外：にぶい橙色 内：浅黄橙色	密	微細長石　金雲母	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデのち一部ナデ	
37	11	50	9 層上層	土師器	坏	口縁部小片	(14.0)		残3.1	外：橙色 内：橙色	密	微細雲母、長石その他の砂粒多量	良	外：調整不明 内：調整不明	
37	12	50	9 層上層	土師質土器	坏	口縁部欠く		5.5	残2.5	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色　褐灰色	密	微細長石多量	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ　ナデ	
37	13	50	9 層上	土師質土器	皿か坏	底部破片		(4.4)	残1.1	外：灰白色 内：灰白色	密	0.5mm以下の長石	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ　ナデ	
37	14	50	9 層	土師質土器	皿か坏	底部5/6		4.4	残1.1	外：橙色 内：橙色	密	微細長石その他の砂粒多量	良	外：ナデ　回転糸切 内：ナデ	
37	15	50	9 層上層	土師質土器	足高高台付坏	脚部1/2		(9.0)	残3.1	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の長石その他の砂粒多量	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ　ナデ	
37	16	50	22 層	弥生土器	甕	口縁部破片	(12.8)		残5.6	外：浅黄橙色　黒色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の砂粒多量　金雲母、長石	良	外：ヨコナデ　タテハケ目波状文か 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田3
37	17	50	22 層	土師器	甕	口縁部小片	(14.9)		残5.5	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石その他の砂粒多量　灰白色粘土粒	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
37	18	50	22 層	弥生土器	高坏か低脚坏	口縁部破片	(14.6)		残3.0	外：灰白色 内：暗白色	密	金雲母、微細砂粒	良	外：ヨコナデ　ヘラケズリのちカキ目、ハケ目 内：ヘラミガキ	草田5
37	19	50	23 層	弥生土器	甕	口縁～肩部1/4	(17.2)		残6.7	外：浅黄橙色　灰黄色 内：浅黄橙色　黄灰色	やや密	2mm以下の石英、長石、白色その他の砂粒、1mm以下の角閃石多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目　沈線10 条 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田5
37	20	50	23 層	土師器	坏	口縁部1/4	(13.9)		残4.0	外：浅黄橙色　赤色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の黒雲母、長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ	内外面赤色顔料付着
37	21	51	24 層	弥生土器	鼓形器台	脚部破片		(17.6)	残7.1	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	金雲母、長石、1mm大の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田4
37	22	51	24 層	弥生土器	鼓形器台	脚端部小片		(17.8)	残3.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の金雲母、長石、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　波状文 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田5 か
37	23	51	27 層	弥生土器	甕	口縁部小片	(20.0)		残4.9	外：橙色 内：にぶい黄橙色	やや粗	1.5mm以下の石英、長石、1mm以下の角閃石、雲母、3mm未満の赤色、白色その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　擬凹線7 条 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田2
37	24	51	29 上層	弥生土器	甕	口縁部小片	(14.9)		残4.0	外: 浅黄橙色 灰黄褐色 内：にぶい橙色 褐灰色	密	1mm以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　擬凹線 内：ヨコナデ　ナデ　強いヨコナデかヘラミガキ	草田2 か3
37	25	51	29 上層	土師器	甕	口縁部小片	(14.3)		残4.3	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石その他の砂粒多量　金雲母	良	外：調整不明 内：調整不明	草田6 以降
38	1	51	20 層	弥生土器	甕	口縁部1/5 以下	(17.8)		残7.7	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm大の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田4
38	2	51	20 層	弥生土器	甕	口縁部小片	(14.9)		残5.4	外：浅黄橙色 にぶい黄褐色 内：褐灰色	密	2mm以下の長石多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目　波状文か 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリか	草田5

図	番号	写真	地点層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色　調	胎　土		焼成	調整・文様	時期(併行型式)、備考
38	3	53	20 層	弥生土器	鼓形器台	脚部小片		(19.7)	残6.1	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ヘラミガキ 内：ヘラケズリ　ヨコナデ	草田4
38	4	52	20 層	土師器	壺	口縁～体部破片	(16.8)		残11.0	外：浅黄橙色 内：橙色	密	2mm以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　タテハケ目のち強いヨコナデ　貝殻刺突文か 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリか	草田6
38	5	51	20 層	土師器	甕	口縁～体部1/5 以下	(19.6)		残10.6	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色　褐灰色	密	2mm以下の長石、その他の砂粒多量　赤色粘土粒	良	外：ヨコナデ　タテハケ目のち強いヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
38	6	52	20 層	土師器	甕	1/3 底部欠く	(17.6)		残18.8	外：浅黄色 内：浅黄色	密	1.5mm以下の石英、長石、白色その他の砂粒多量 1mm以下の角閃石微量	良	外：ヨコナデのち一部ナデ　擬凹線10 条　ハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
38	7	51	20 層	土師器	甕	口縁部1/4	(19.0)		残6.2	外：灰白色　褐灰色 内：灰黄褐色	密	1mm以下の黒雲母、長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　タテハケ目のちヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
38	8	51	20 層	土師器	甕	口縁部小片	(12.8)		残3.7	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	微細砂粒多量	良	外：ヨコナデか 内：ヨコナデか	草田6
38	9	52	20 層	土師器	鼓形器台	1/2	(21.2)	(17.6)	12.9	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石その他の砂粒多量　雲母	良	外：波状文　ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラミガキ　ヘラケズリ	草田6
38	10	52	20 層	土師器	鼓形器台	1/4 口縁部欠く		(19.2)	残10.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色　灰黄色	やや密	3mm以下の長石、2mm以下の石英、白色その他の砂粒、1mm以下の雲母、角閃石多量	良	外：ヨコナデ　波状文4 条 内：ヘラミガキか　ヘラケズリ	草田6 か7
38	11	53	20 層	土師器	鼓形器台	口縁部小片	(21.1)		残4.2	外：灰白色 内：灰白色	密	微細砂粒多量　黒雲母、石英	良	外：ヨコナデ　波状文 内：ヘラミガキか	
38	12	52	20 層	土師器	高坏	1/2 口縁部欠く		(13.3)	残4.7	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の石英、長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	
38	13	53	20 層	土師器	台付甕	脚部		12.6	残3.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗	2mm以下の長石、石英、雲母、白色その他の砂粒、0.5mm以下の角閃石多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
42	1	54	SR01 上層	須恵器	坏身	底部1/2		9.6	残0.9	外：灰色 内：灰色	密	5mm大の黒色礫1　1mm以下の長石多量	良	外：回転ナデ　底面ヘラ切後ナデ消し 内：回転ナデ	
42	2	54	SR03	土師器	甕か	口縁部小片			残2.8	外：橙色 内：淡橙色	密	1mm以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデか 内：ヨコナデか　ヘラケズリ	
43	1	54	SR02 3 層	弥生土器	鼓形器台	1/6	(25.5)	(22.0)	13.7	外：灰白色　灰色 内：灰白色	密	1mm以下の金雲母、長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヘラミガキか　ヘラケズリ　擬凹線4 条	草田5 内外面に赤色顔料付着
43	2	53	SR02 青灰砂層	土師器	甕	頸部小片				外：灰白色 内：灰白色	密	1mm以下の長石その他の砂粒多量	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ　ナデ	
43	3	53	SR02 上層	須恵器	坏蓋	天井部1/4			残2.4	外：青灰色 内：青灰色	やや粗	0.5mm以下の石英、長石多量	良	外：回転ヘラケズリのちナデ　回転ナデ 内：回転ナデ	
43	4	53	SR02 上層	土師質土器	皿か坏	底部2/3		6.1	残1.2	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	1mm以下の長石、黒色砂粒多量	良	外：調整不明 内：調整不明	
43	5	53	SR02 青砂層	土師質土器	皿か坏	底部完形		4.6	残1.4	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	微細金雲母、長石微量	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ　ナデ	
43	6	53	SR02 上層	土師質土器	皿	2/3	(7.1)	5.15	1.85	外：橙色 内：橙色	やや密	2mm未満の雲母、1.5mm以下の石英、長石、角閃石、白色その他の砂粒多量	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ	
43	7	53	SR02 上層	土師質土器	皿	1/3	(7.8)	(5.8)	残1.7	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	赤色粘土粒、微細長石少量	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：回転ナデ	
43	8	53	SR02 上層	土師質土器	皿か坏	底部 ほぼ完形		5.3	残1.0	外：浅黄橙色 内：淡橙色	密	1mm以下の長石多量	良	外：回転ナデ　回転糸切 内：ナデ	
43	9	53	SR02 3 層	土師質土器	皿	底部完形		5.4	残1.4	外：浅黄橙色 内：淡橙色	密	赤色粘土粒、1mm以下の長石	良	外：回転ナデ　回転糸切のち板状工具によるナデ 内：回転ナデ　ナデ	
43	10	54	SR02 上層	土師質土器	柱状高台付皿	1/3 口縁欠く		(6.4)	残5.9	外：橙色　浅黄橙色 内：橙色　浅黄橙色	やや密	1mm未満の石英、長石、雲母、角閃石、白色その他の砂粒多量	良	外：回転ナデか　回転糸切 内：回転ナデか	
50	1	55	SX01	弥生土器か	甕	口縁～体部小片	(15.5)		残8.0	外：灰白色　浅黄橙色　灰色 内：灰白色　浅黄橙色	密	3mm大の石英1、微細な雲母やその他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5 か
50	2	55	SX01 上層	弥生土器か	甕	口縁～体部1/4 以下	(18.2)		残6.5	外：橙色 内：浅黄橙色　橙色	密	2.5mm以下の長石、1mm以下の石英、雲母、角閃石、白色その他の砂粒多量	良	外：回転ナデ 内：回転ヘラケズリ	草田5 か
50	3	55	SX01 上層	弥生土器か	甕	口縁～体部小片	(18.0)		残6.2	外：浅黄橙色　灰白 灰黄褐色 内：浅黄橙色　灰白　褐灰色	やや密	2mm未満の長石、白色その他の砂粒、1mm以下の石英、角閃石多量	良	外：回転ナデ　ハケ目　直線文 内：回転ナデ　ヘラケズリ	草田5 か
50	4	58	SX01	弥生土器	甕	9 割 口縁端部と底部欠く	(14.9)		残19.0	外：灰白色 内：にぶい黄橙色	やや密	1mm以下の雲母、2mm以下の砂粒	良	外：二重列点文　ハケ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5
50	5	58	SX01	弥生土器	甕	2/3	22.0		残29.8	外：淡橙色 褐灰色 内：淡橙色 褐灰色	密	1mm以下の金雲母、長石、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　貝殻刺突文　ハケ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5
50	6	58	SX01	弥生土器	甕	2/3	24.2 ～24.9		残32.2	外：浅黄橙色　褐灰色 内：浅黄橙色　褐灰色	密	金雲母少量、1mm以下の長石、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目　波状文 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5
50	7	55	SX01	弥生土器	甕	口縁～体部1/8	(18.4)		残11.9	外：浅黄橙色 内：にぶい黄橙色　浅黄橙色	やや密	2.5mm以下の長石、白色その他の砂粒、1mm以下の石英、雲母多量	良	外：波状文8 条　貝殻刺突文 内：ヘラケズリか	草田5
50	8	55	SX01 上層	土師器か	鉢	底部1/3		(8.8)	残3.6	外：浅黄橙色　黒色 内：淡橙色　黒色	密	1mm以下の長石、その他の砂粒多量	良	外：ハケ目　ナデ 内：ヘラケズリ	草田5 か6

図	番号	写真	地点層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色　調	胎　土		焼成	調整・文様	時期(併行型式)、備考
50	9	56	SX01 上層	弥生土器	鼓形器台	受け部3/10	(25.0)		残7.5	外：にぶい橙色 にぶい黄橙色 灰黄褐色 内：浅黄橙色 灰黄褐色	やや密	3mm未満の長石、その他の砂粒、1mm以下の雲母、角閃石、石英多量	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ　ヘラミガキ	草田5
50	10	56	SX01	弥生土器	低脚坏	坏部1/3	(23.4)		残4.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色 黒色	密	0.5mm以下の長石、その他砂粒	良	外：ハケ目のちナデ消しヨコナデ 内：ハケ目のちヘラミガキ	草田5
50	11	56	SX01	弥生土器	低脚坏	坏部1/4 以下	(22.8)		残3.6	外：灰白色 灰黄褐色 内：灰白色 灰黄褐色	密	雲母、1mm以下の長石含む砂粒	良	外：ヘラミガキ 内：ヨコナデ　ヘラミガキ	草田5
50	12	58	SX01	弥生土器	注口甕か	体部1/4 以下			残4.8	外：灰白色 内：灰白色	密	2mm以下の石英、長石その他の砂粒多量	良	外：貝殻による刺突文 内：強いナデか	草田5 か
50	13	58	SX01 上層	土師器か	注口土器	体部破片	胴部最大径:9.8			外：暗灰色 灰白色 内：灰白色	密	3mm大の石英1、微細な雲母やその他の砂粒	良	外：ナデか　貝殻による刺突文　沈線文 内：指押え　ナデ	
51	1	56	SX01	土師器	甕	口縁～肩部1/4	(18.8)		残7.5	外：淡橙色 褐灰色 内：淡橙色 褐灰色 黒色	密	微細雲母多量　3mm以下の長石、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　カキ目　ハケ目 内：ヨコナデ　ハケ目　ナデ　ヘラケズリ	草田6 内面炭化物付着
51	2	56	SX01	土師器	甕	口縁～肩部小片	(20.6)		残8.8	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の石英、雲母その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　波状文　カキ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
51	3	56	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(21.7)		残6.3	外：灰白色 黄橙色 内：灰白色 黄橙色	密	微細砂粒多量　1mm以下の金雲母、長石	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
51	4	56	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(17.4)		残6.8	外：浅黄橙色 黒褐色 内：浅黄橙色 褐灰色	密	金雲母多量　2mm以下の微細砂粒	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ　強いヨコナデ	草田6
51	5	56	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(17.0)		残5.0	外：灰白色 内：灰白色	密	微細砂粒多量　金雲母1mm以下の長石	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ　強いヨコナデ	草田6
51	6	56	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(16.4)		残6.1	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の石英、金雲母微細砂粒多量	良	外：ヨコナデか 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリか	草田6
51	7	56	SX01	土師器	直口壺か	口縁部破片	(17.4)		残5.5	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
51	8	57	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(13.6)		残4.1	外：浅黄橙色 内：橙色	密	微細な長石、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデか 内：ヨコナデか　ナデか	草田6
51	9	57	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(15.0)		残5.2	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	金雲母、長石　微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
51	10	57	SX01	土師器	甕	口縁部破片	(17.5)		残6.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	微細砂粒多量　黒雲母	良	外：ヨコナデ　縦方向のハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ　強いヨコナデ	草田6
51	11	57	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(15.7)		残5.9	外：橙色 オリーブ灰色 内：オリーブ灰色	密	1mm以下の長石	良	外：ヨコナデか 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリか	草田6 外面一部炭化物付着か
51	12	57	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(19.0)		残4.7	外：灰白色 明褐灰色 内：灰白色 褐灰色	密	0.5mm以下の金雲母、長石	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田6
51	13	57	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(16.8)		残3.9	外：にぶい黄橙色 黒色 内：浅黄橙色	密	金雲母　微細砂粒	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田6
51	14	57	SX01	土師器	甕	頸部破片			残6.5	外：浅黄橙色 褐灰色 内：浅黄橙色 褐灰色	密	微細金雲母、長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　強いヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
51	15	57	SX01 上層	土師器	甕	口縁部小片	(18.6)		残3.9	外：灰白色 内：灰白色	密	1mm大の砂粒微量　微細砂粒多量　雲母	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
51	16	57	SX01	土師器	甕	口縁～体部1/8	(16.6)		残7.9	外：橙色 内：橙色	やや密	2mm以下の長石、白色砂粒　1mm以下の石英、角閃石多量　1mm以下の雲母少量	やや不良	外：ヨコナデ　ハケ目　波状文7 条 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
51	17	61	SX01 上層	土師器	甕	口縁部～体部1/4	(15.6)		残13.2	外：浅黄橙色 橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の長石、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　波状文　ハケ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
51	18	57	SX01	土師器	甕	口縁部破片	(16.8)		残6.0	外：淡橙色 浅黄橙色 内：淡橙色 浅黄橙色	密	2mm以下の長石少量　その他の微細砂粒多量	良	外：ヨコナデか 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリか	草田6 内外面とも黒色物付着
51	19	57	SX01	土師器	甕	口縁部破片	(21.2)		残4.0	外：浅黄橙色 灰色 内：浅黄橙色 褐灰色	密	1mm大の長石その他の砂粒少量　微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田6
51	20	57	SX01 上層	土師器	甕	口縁部小片	(16.8)		残4.8	外：灰白色 褐灰色 内：灰白色 黄灰色	密	微細砂粒多量　微細金雲母	良	外：ヨコナデ　直線文 内：ヨコナデ　ナデ	草田6
51	21	57	SX01 下層	土師器	甕	口縁部破片	(20.2)		残6.3	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	やや密	1mm以下の石英、雲母、長石、3mm未満の赤色、白色その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデのち一部ハケ目のちハケ目を巡らす 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6 外面炭化物付着
51	22	57	SX01 上層	土師器	甕	口縁～胴部1/5	(17.2)		残7.2	外：橙色 浅黄橙色 内：にぶい黄褐色 にぶい赤褐色	やや密	2.5mm以下の長石、白色その他の砂粒、1mm以下の石英、雲母、角閃石多量	良	外：ヨコナデ　直線文か 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
52	1	59	SX01 上層	土師器	甕	口縁部破片	(16.1)		残5.9	外：浅黄橙色 黄灰色 内：浅黄橙色 黄灰色	密	2mm大の石英1　金雲母微細砂粒	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　強いナデ　ヘラケズリ	草田6
52	2	59	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(15.3)		残5.4	外：灰白色 灰黄褐色 内：灰白色 黄橙色	密	2mm以下の長石、金雲母、赤色砂粒少量、微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　強いナデ　ヘラケズリ	草田6
52	3	59	SX01 下層	土師器	甕	口縁部1/8	(18.8)		残4.4	外：褐灰色 灰白色 内：灰褐色 灰白色 灰色	やや密	1mm以下の石英、雲母、角閃石、長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6 被熱している
52	4	59	SX01 上層	土師器	甕	口縁部小片	(14.5)		残4.9	外：灰白色 黒褐色 内：灰白色	密	0.5mm以下の金雲母、長石、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　強いナデ　ヘラケズリ	草田6

図	番号	写真	地点層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土		焼成	調整・文様	時期（併行型式）、備考
52	5	59	SX01	土師器	甕	口縁部小片	(17.4)		残6.2	外：灰白色 浅黄橙色 内：浅黄橙色 褐灰色	密	2mm以下の金雲母、石英微細砂粒	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田6 内外面とも黒色物付着　植物種子痕跡あり
52	6	59	SX01 上層	土師器	甕	口縁部小片	(16.9)		残4.1	外：灰白色 黒色 内：灰白色 褐灰色	密	微細長石多量　金雲母	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
52	7	59	SX01 上層	土師器	甕	口縁部小片	(20.6)		残4.3	外：橙色 明褐灰色 内：橙色 灰褐色	密	1.5mm以下の石英、長石、白色、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
52	8	59	SX01 下層	土師器	甕	口縁部破片	(16.2)		残4.0	外：灰白色 内：灰白色	密	微細雲母少量　微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
52	9	59	SX01 上層	土師器	甕	口縁部小片	(15.4)		残4.2	外：にぶい黄橙色 黒色 内：明褐色	密	微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
52	10	59	SX01 上層	土師器	甕	口縁部小片	(14.3)		残3.5	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の長石多量	良	外：不明 内：不明	草田6
52	11	59	SX01 上層	土師器	甕	口縁部小片	(16.7)		残3.4	外：明黄褐色 浅黄橙色 灰色 内：明黄褐色 浅黄橙色 灰色	密	1mm以下の石英、長石、雲母少量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
52	12	59	SX01	土師器	甕	頸部～体部破片	頸部:(15.8)		残8.2	外：橙色 浅黄橙色 内：にぶい橙色 灰白色	密	2mm未満の長石、白色その他の砂粒、1mm以下の石英、雲母多量	良	外：ヨコナデのちハケ目 櫛描き波状文11条　貝殻刺突文　櫛描き直線文 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
52	13	59	SX01	土師器	甕	口縁～体部破片	(16.4)		残9.0	外：淡黄橙色 暗灰色 内：灰色 橙色 黒色	密	雲母多量　1mm以下の長石、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目か直線文 内：ヨコナデ　ヘラケズリのち一部ナデ	草田6
52	14	59	SX01	土師器	甕	口縁～体部破片	(23.6)		残13.3	外：灰色 褐灰色 内：黒色 灰白色	密	金雲母多量　1mm以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　強いナデ　ヘラケズリ	草田6
52	15	59	SX01 上層	土師器	甕	口縁～体部1/5	(15.2)		残8.6	外：橙色 内：橙色	密	金雲母、石英　2mm大の長石1　1mm以下の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　直線文 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
52	16	60	SX01 上層	土師器	甕	口縁部破片	(20.0)		残5.5	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色 黄橙色	密	雲母　微細長石、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
52	17	60	SX01	土師器	甕	口縁部1/2	(16.6)		残3.9	外：橙色 浅黄橙色 内：橙色 灰白色	密	1mm以下の長石、その他の砂粒多量　雲母、石英	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
52	18	60	SX01 上層	土師器	甕	口縁部破片	(16.6)		残5.3	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の長石、その他の砂粒多量　黒雲母	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
52	19	60	SX01 上層	土師器	鼓形器台	受部1/4	(23.6)		残7.9	外：浅黄橙色 にぶい橙色 内：浅黄橙色 橙色	密	2mm以下の長石その他の砂粒多量　雲母	良	外：ヨコナデ 内：ヘラミガキ	草田6
52	20	60	SX01	土師器	鼓形器台	脚部破片			残4.3	外：浅黄橙色 灰色 内：灰白色	密	微細砂粒多量　金雲母、石英、長石	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
53	1	61	SX01 上層	土師器	高坏	坏部1/3	(25.6)		残6.7	外：灰白色 内：灰白色 黒褐色	やや密	2mm以下の石英、長石その他の砂粒、1mm以下の雲母、角閃石多量	やや不良	外：ヘラミガキ　口唇部に凹線1条 内：ハケ目のちヘラミガキ	草田6 以降 被熱の可能性あり
53	2	60	SX01 上層	土師器	高坏	坏部口縁小片	(28.0)		残4.5	外：褐灰色 灰褐色 内：褐灰色 明褐灰色	密	3mm以下の石英、長石、1mm以下の雲母、白色その他の砂粒多量	やや不良	外：細い工具によるミガキ 内：ヘラミガキ	草田6
53	3	60	SX01	土師器	低脚坏	坏部1/4	(33.5)		残7.7	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色 暗灰色	密	雲母、2mm以下の長石、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ヘラミガキ 内：ヨコナデ　ヘラミガキ	草田6
53	4	61	SX01	土師器	甑形土器	上部を欠く		(17.0)	残26.0	外：浅黄橙色 黒色 内：にぶい橙色 にぶい黄橙色 黒色	密	1mm未満の石英、角閃石、2.5mm以下の長石、白色その他の砂粒多量　3.5mm大長石1	良	外：ハケ目　ヨコナデ 内：ヘラケズリ　ヨコナデ	小谷2（か3）
55	1	62	SX02	弥生土器	壺	口縁部小片	(29.7)		残6.8	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	1mm以下の石英、角閃石、その他の砂粒やや多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田5
55	2	61	SX02	弥生土器	甕	2/3	17.2	4.0	27.0	外：浅黄橙色 黒褐色 黒色 内：浅黄橙色 黒褐色	密	1mm以下の長石、その他の砂粒多量　雲母少量	良	外：ヨコナデ　波状文　カキ目　ハケ目のち強いナデ ヘラミガキか 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田3 ～4
55	3	62	SX02	弥生土器	甕	口縁～体部1/4 以下	(19.2)		残12.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm以下の金雲母、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ナデ　直線文　列点文　ハケ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5
55	4	62	SX02	弥生土器	甕	口縁部1/3	(15.2)		残6.8	外：褐灰色 にぶい橙路 内：褐灰色 浅黄橙色	密	微細長石多量　雲母	良	外：ヨコナデ　擬凹線　刺突文 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田4
55	5	62	SX02	弥生土器	甕	口縁部小片	(20.0)		残3.8	外：橙色 浅黄橙色 内：橙色 浅黄橙色	密	1mm以下の長石少量　雲母	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田4 か5
55	6	62	SX02	弥生土器	甕	口縁部小片	(21.2)		残4.3	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	1mm以下の石英、長石、角閃石、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　ナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田5
55	7	62	SX02	弥生土器	甕	口縁部小片	(21.6)		残4.65	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の石英、その他の砂粒やや多量	やや不良	外：調整不明 内：ヘラケズリ	草田5
55	8	62	SX02	弥生土器	甕	口縁部小片	(16.9)		残4.25	外：浅黄橙色 灰白色 内：浅黄橙色 灰白色	密	1mm以下の石英、角閃石その他の砂粒	やや不良	外：調整不明 内：ヘラケズリ	草田5
55	9	62	SX02	弥生土器	甕	口縁部小片	(19.0)		残5.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の石英、角閃石その他の砂粒やや多量	良	外：ヨコナデ　ナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5
55	10	62	SX02	弥生土器	甕	口縁部小片	(18.9)		残4.5	外：浅黄橙色 灰白色 内：浅黄橙色 淡橙色	密	1.5mm以下の石英その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　ナデ 内：ヨコナデ	草田5
55	11	63	SX02	土師器	甕	口縁部完形	15.2		残9.6	外：浅黄橙色 黒色 内：浅黄橙色	密	微細長石多量　1mm以下の雲母	良	外：ヨコナデ　カキ目　波状文　ハケ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6

図	番号	写真	地点層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土		焼成	調整・文様	時期（併行型式）、備考
55	12	63	SX02	土師器	甕	口縁～体部1/2	(17.3)		残10.2	外：浅黄橙色　灰色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　直線文　列点文　ナデか 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
55	13	62	SX02	土師器	甕	口縁部1/5	(20.0)		残7.7	外：淡橙色　褐灰色 内：浅黄橙色	密	雲母多量　微細長石、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　カキ目　列点文か 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
55	14	62	SX02	土師器	甕	口縁部小片	(19.9)		残3.5	外：にぶい黄橙色　にぶい橙色 内：にぶい黄橙色　灰白色	密	1mm以下の石英、長石、角閃石、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：調整不明	草田6
55	15	62	SX02	土師器	甕	口縁部小片	(18.2)		残3.5	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	1mm以下の石英、その他の砂粒やや多量	良	外：ヨコハケ目のちヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田6
55	16	62	SX02	土師器	甕	口縁部破片	(19.5)		残5.0	外：にぶい黄橙色　灰褐色 内：にぶい黄橙色　灰褐色	密	2～3mm大の砂礫若干　1mm以下の石英、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　ナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田6
55	17	63	SX02	弥生土器	高坏	坏部1/4	(19.7)		残7.0	外：橙色　にぶい黄橙色 内：橙色　にぶい黄色	密	1mm以下の石英、その他の砂粒多量	良	外：調整不明 内：ヘラミガキ	草田5 内面塗あり
55	18	63	SX02	土師器	低脚坏	ほぼ完形	12.3	5.2	4.4	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2mm大の石英　1mm以下の金雲母	良	外：調整不明　ハケ目か 内：調整不明	
55	19	63	SX02	土師器	鼓形器台	脚部破片		(20.8)	残4.1	外：灰白色 内：灰白色	密	微細長石多量　金雲母	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
55	20	63	SX02	土師器	甕	口縁部破片	(17.2)		残6.5	外：浅黄橙色　褐灰色 内：灰黄色　黄灰色	密	1mm以下の石英、角閃石、その他の砂粒若干	良	外：ヨコナデ　ナデ　波状文 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	小谷3
55	21	63	SX02	土師器	坏	1/5	(12.0)	9.5	4.2	外：にぶい黄橙色　浅黄橙色 内：赤色	密	1mm以下の長石少量	良	外：回転ナデか　ナデか 底面ヘラ切か 内：回転ナデか　ナデか	古代 内外面に赤色顔料付着
62	1	64	加工段1	弥生土器	甕	口縁～体部1/6	(13.4)		残10.0	外：灰黄褐色　黒色 内：浅黄橙色　黒褐色	密	黒雲母、長石少量　1mm以下の砂粒多量	良	外：凹線　ヨコナデ　ハケ目のちヨコナデ　列点文 内：ヨコナデ　ハケ目　ヘラケズリ	Ⅳ-2 外面一部炭化物付着
62	2	64	加工段1	弥生土器	甕	口縁部1/6	(14.5)		残3.4	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗	2.5mm以下の長石、0.5mm未満の石英、雲母その他の砂粒多量　1mm以下の角閃石微量	良	外：ヨコナデ　凹線7条 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田2
62	3	64	加工段1	弥生土器	甕	口縁部破片	(16.0)		残3.5	外：にぶい黄橙色　褐灰色 内：にぶい黄橙色　灰黄褐色	密	1mm以下の石英、角閃石、その他の砂粒	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田2か3
62	4	64	加工段1	弥生土器	甕	口縁～体部1/3	(16.6)		残8.0	外：浅黄橙色　橙色 内：浅黄橙色	やや粗	2.5mm以下の石英、長石その他の砂粒、1mm以下の雲母、角閃石多量	やや不良	外：ヨコナデ　擬凹線6条以上　直線文11条以上 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田5
62	5	64	加工段1	土師器	甕	口縁部小片	(16.0)		残4.6	外：灰白色　灰色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリか	草田6
62	6	64	加工段1	土師器	甕	口縁部小片	(14.8)		残5.3	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石、微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
62	7	64	加工段1	弥生土器	鼓形器台	受部破片	(22.2)		残6.0	外：淡橙色 内：淡橙色　浅黄橙色	密	1mm以下の長石、金雲母多量	良	外：調整不明 内：調整不明	草田5
62	8	64	加工段1	弥生土器	鼓形器台	受部破片			残6.8	外：灰白色 内：灰白色	密	1mm以下の砂粒多量	良	外：調整不明 内：調整不明	草田5
62	9	64	加工段1	弥生土器	鼓形器台	受部1/4	(25.0)		残6.3	外：浅黄橙色　灰白 内：浅黄橙色　灰白	やや密	2mm以下の長石、石英、白色その他の砂粒、1mm以下の雲母、角閃石多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラミガキ	草田5
62	10	65	加工段1	土師器	坏	1/4	(14.2)		4.5	外：橙色　浅黄色 内：浅黄橙色	やや粗	1mm以下の長石、石英、白色その他の砂粒多量　0.5mm以下の角閃石少量	良	外：ナデか 内：ナデか	6c後半～古代 内外面一部に赤色顔料付着
62	11	65	加工段1	土師器	坏	1/3	(11.5)		4.1	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗	2mm未満の石英、長石、白色その他の砂粒多量	良	外：ハケ目のちナデ 内：ナデ	6c後半～古代 内外面に赤色顔料付着
62	12	65	加工段1	土師器	坏	口縁部1/4	(18.0)		残4.3	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	微細砂粒多量　白色粘土粒、1mm以下の雲母、長石	良	外：ヨコナデ　ヘラケズリ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	6c後半～古代 内外面に赤色顔料付着 隅丸方形の口縁
62	13	68	加工段1	土師器	鉢	1/3	(17.0)	4.0	11.7	外：橙色　にぶい黄橙色 内：にぶい橙色　にぶい黄橙色	やや密	2mm以下の石英、長石、白色その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目のちナデ　ナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
62	14	65	加工段1	土師器	甕	口縁部小片	(28.5)		残6.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1mm以下の長石少量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	外面一部炭化物付着
62	15	65	加工段1	土師器	甕	口縁部破片	(16.7)		残5.8	外：にぶい黄褐色　黒色 内：黄灰色　黒色	密	1mm以下の長石少量　微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ヨコナデのちハケ目、カキ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
62	16	65	加工段1	土師器	甕	1/3	(20.4)		残9.7	外：橙色　にぶい黄橙色 内：にぶい橙色　褐灰色	やや粗	1.5mm以下の石英、長石、白色その他の砂粒多量　微細角閃石、雲母を少量	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
62	17	65	加工段1	土師器	甕か壺	頸～体部1/4			残7.8	外：橙色 内：にぶい橙色	粗	1mm以下の石英、長石、1.5mm以下の砂粒多量　1mm以下の角閃石少量	やや不良	外：ナデか 内：ヘラケズリ	
62	18	66	加工段1	土師器	甕	口縁～体部1/8	(23.0)		残12.8	外：にぶい褐色　黒褐色 内：にぶい褐色　黒褐色	やや密	1.5mm未満の石英、長石、白色その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目のちナデ 内：ヨコナデ　ケズリ	
62	19	65	加工段1	土師器	甕	口縁部破片	(20.2)		残5.5	外：にぶい黄橙色　黒褐色 内：にぶい黄橙色　黒褐色	密	2mm大の石英1粒　長石その他の微細砂粒多量	良	外：ヨコナデのち一部タテナデ 内：ヨコナデのち一部タテナデ　ヘラケズリ	

図	番号	写真	地点層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色　調	胎　土		焼成	調整・文様	時期(併行型式)、備考
63	1	66	加工段1	土師器	甕	1/4 底部欠く	(18.7)		残19.8	外：にぶい黄橙色　黒褐色 内：にぶい黄橙色　黒褐色	密	3㎜大の赤色礫1 粒　1㎜以下の長石、微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
63	2	66	加工段1	土師器	甕	1/3 底部欠く	(23.6)		残17.7	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	3㎜大の礫　微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ指押え	
63	3	67	加工段1 床面上面	土師器	甕	口縁部1/6	(18.4)		残7.6	外：にぶい褐色 内：にぶい褐色	密	雲母　1㎜以下の長石、微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目か 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
63	4	67	加工段1	土師器	甕	1/3 以下	(22.3)		残14.8	外：にぶい黄橙色　褐灰色 内：浅黄橙色	密	8㎜大の赤色土塊　1㎜以下の長石、微細砂粒多量	良	外：ヨコナデ　強いヨコナデ　ハケ目のちナデ消し　ハケ目条痕の幅が広い 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
63	7	68	加工段1 床面上面	土師器	甑	1/2	(27.2)	(14.3)	27.4	外：浅黄橙色　黄灰色　黒色 内：浅黄橙色　黄灰色　橙色	密	微細砂粒多量　2㎜以下の石英、雲母、長石、赤色砂粒	良	外：ヨコナデ　ハケ目　ナデ　縄状の圧痕(焼成前) 内：ヨコナデ　ヘラケズリのちナデ	穿孔あり
63	8	69	加工段1	土師器	甑	1/2	25.6	11.3	26.3	外：橙色　浅黄橙色　灰色 内：浅黄橙色	密	2㎜以下の長石多量	良	外：ヨコナデ　ナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリか	底部付近に穿孔3 箇所
63	9	67	加工段1	土師器	甑	把手部	把手部径:4.0			外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の石英、長石多量	良	外：ハケ目のちナデ 内：ヘラケズリ	
64	1	68	加工段1	須恵器	坏蓋	口縁部小片	(12.6)		残3.2	外：明青灰色 内：明青灰色	密	1㎜以下の長石少量	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
64	2	70	加工段1	須恵器	坏身	完形	10.9	5.4	3.8	外：青灰色 内：青灰色	蜜	3㎜台の砂礫少量	良	外：回転ナデ　回転ヘラケズリのちナデ　底面ヘラ切後ナデ調整 内：回転ナデ　ナデ	
64	3	68	加工段1	須恵器	坏身	口縁部1/7	(11.7)		残2.5	外：青灰色 内：灰色	やや密	2㎜未満の石英、長石多量	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
64	4	68	加工段1	須恵器	高坏	坏部小片	(13.5)		残2.4	外：青灰色 内：青灰色	蜜	微細長石	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
64	5	68	加工段1	須恵器	高坏	坏部1/4 底部を欠く	(16.0)		残4.5	外：灰黄色 内：灰黄色	密	1㎜以下の石英、長石、その他砂粒多量	良	外：回転ナデ化 内：回転ナデのち一部ナデ	
64	6	68	加工段1	須恵器	高坏	脚部	(9.9)		残3.0	外：灰白色 内：灰白色	蜜	1㎜以下の長石少量	やや不良	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
64	7	68	加工段1	須恵器	高坏	脚端部小片	(9.4)		残1.2	外：青灰色 内：青灰色	蜜	微細長石、黒色砂粒	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ	三角形又は四角形の透かし
64	8	68	加工段1	須恵器	直口壺	口縁部小片	(6.4)		残3.5	外：暗青灰色 内：暗青灰色	蜜	微細長石少量	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
64	9	68	加工段1	須恵器	瓶	口縁部1/5	(10.0)		残3.5	外：灰色 内：暗青灰色	やや密	2㎜以下の長石その他の砂粒	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ	
64	10	68	加工段1	須恵器	提瓶か横瓶？	頸～肩部小片				外：青灰色 内：明青灰色	蜜	1㎜以下の長石少量	良	外：回転ナデのちカキ目 内：回転ナデ	
64	11	68	加工段1	須恵器	提瓶か横瓶？	胴部破片				外：明青灰色 内：明青灰色	密	1㎜以下の長石少量	良	外：カキ目のち一部ナデ 内：回転ナデ	
65	1	68	加工段2	弥生土器	甕	口縁部破片	(17.0)		残4.6	外：にぶい橙色　灰色 内：浅黄橙色	密	微細雲母、石英、長石	良	外：擬凹線　ヨコナデ　ハケ目 内：ヘラミガキ横方向のち一部斜め方向　強いヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田1 か2
65	2	68	加工段2	土師器	甕	口縁部小片	(18.0)		残4.0	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	1㎜以下の砂粒	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田6
68	1	69	加工段3	弥生土器	壺	口縁部小片	(39.6)		残4.6	外：灰白色 内：浅黄橙色	密	雲母少量　長石4㎜大1、2㎜以下微量	良	外：凹線　ヨコナデ　ハケ目のちナデ 内：凹線　ヨコナデ	弥生中期 Ⅳ-2
68	2	69	加工段3	弥生土器	甕	口縁部小片	(18.0)		残4.4	外：明褐灰色 内：明褐灰色	やや粗	0.5㎜以下の砂粒やや多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田4
68	3	69	加工段3	弥生土器	甕	口縁部小片	(20.0)		残4.4	外：灰白色 内：灰白色	やや粗	2㎜以下の砂粒やや多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田4
68	4	69	加工段3	弥生土器	甕	口縁部小片	(15.9)		残5.2	外：灰白色 内：灰白色	粗	1㎜以下の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田4
68	5	69	加工段3	弥生土器	甕	口縁部小片	(18.6)		残6.15	外：にぶい橙色 内：橙色	密	1㎜以下の雲母その他の砂粒	良	外：ヨコナデ　タテハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田4
68	6	69	加工段3	弥生土器	甕	口縁部小片	(17.6)		残3.8	外：灰白色 内：明褐灰色	粗	2㎜以下の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田5
68	7	69	加工段3	弥生土器	甕	口縁部小片	(14.8)		残5.1	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	やや粗	1㎜以下の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田5
68	8	69	加工段3	弥生土器	甕	頸～体部破片			残6.5	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色　褐灰色	やや粗	1㎜以下の石英、長石その他の砂粒多量　3㎜大の赤色粘土粒	良	外：ヨコナデ　ハケ目　貝殻刺突列点文 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田5 外面炭化物付着
68	9	70	加工段3	弥生土器か土師器	甕	口縁部1/4	(16.6)		残7.5	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の砂粒	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
68	10	69	加工段3	土師器	甕	1/8	(14.2)		残7.85	外：橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の砂粒	良	外：ヨコナデ　ハケ目 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
68	11	70	加工段3	土師器	甕	口縁部小片	(14.4)		残4.6	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の砂粒少量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
68	12	70	加工段3	土師器	甕	口縁部小片	(17.6)		残4.3	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の砂粒	良	外：沈線　ハケ目　ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
68	13	70	加工段3	土師器	甕	口縁部小片	(18.5)		残5.4	外：灰白色 内：灰白色	密	金雲母	良	外：ヨコナデ　直線文 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田6
68	14	70	加工段3	土師器	甕	口縁部破片	(13.8)		残6.3	外：黄橙色　灰白色 内：黄橙色　灰白色	密	1㎜以下の金雲母多量	良	外：ヨコナデ　カキ目 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	小谷3
68	15	70	加工段3	弥生土器	鼓形器台	受部破片	(21.0)		残4.9	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	粗	2㎜以下の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田5

図	番号	写真	地点層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色　調	胎　土		焼成	調整・文様	時期(併行型式)、備考
68	16	70	加工段3	弥生土器	鼓形器台	脚部破片		(22.0)	残3.8	外：灰白色 内：灰白色	やや粗	0.5㎜以下の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田4
68	17	70	加工段3	弥生土器	鼓形器台	脚部 1/4 以下		(22.4)	残5.6	外：灰白色 内：灰黄褐色　灰色	密	雲母、1㎜以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田5
68	18	70	加工段3	弥生土器	低脚坏	ほぼ完形	10.9	4.9	3.8	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の長石、黒色砂粒極めて多量	良	外：ヨコナデか 内：調整不明	草田5
68	19	70	加工段3	弥生土器	低脚坏	口縁部破片	(14.5)		残4.4	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	2㎜大の石英1 粒　雲母少量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ヘラミガキ	草田5
68	20	70	加工段3	土師器	高坏	受部小片	(23.1)		残3.8	外：淡黄色 内：淡黄色	密	1㎜以下の砂粒	良	外：ナデ　口唇部沈線 内：ヘラミガキ	
68	21	70	加工段3	弥生土器	短頸壺か	胴部破片	胴部最大径:(15.2)		残5.9	外: 橙色 内：淡黄色	やや粗	3㎜以下の砂粒やや多量	良	外：沈線　貝殻刺突文　ヘラミガキ 内：ヘラミガキ	草田2
68	22	71	加工段3	弥生土器か土師器	台付直口壺	1/3 底部欠く	(6.2)		残8.9	外：にぶい黄橙色 にぶい橙色 内：にぶい橙色	密	1㎜以下の雲母、石英、角閃石、2.5㎜以下の長石、2㎜以下の白色その他の砂粒多量　4㎜大の長石	良	外：ナデ　貝殻文様　直線文　刺突文 内：ナデ　粗いナデ　指頭圧痕　ハケ目のち一部ナデ	草田5 か6
70	1	71	加工段4	弥生土器	鼓形器台	受部破片			残6.9	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の雲母、石英、長石少量　その他の砂粒多量	良	外：調整不明 内：調整不明	草田4
70	2	71	加工段4	弥生土器	低脚坏	坏部2/3	(21.8)		残5.0	外：にぶい橙色 内：浅黄橙色	密	雲母、長石、微細砂粒	良	外：ハケ目のちヨコナデ 浅い沈線口唇部 内：ナデ	草田5
70	3	71	加工段4	土師器	甕	口縁部破片	(14.4)		残3.7	外：灰白色 内：灰白色	粗	2㎜以下の砂粒多量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田7
73	1	71	加工段5	弥生土器	壺	2/3 口縁を欠く		4.3	残23.8	外：橙色 にぶい黄橙色 灰褐色 内：橙色	やや密	1㎜以下の石英、長石、角閃石、3㎜以下の白色その他の砂粒多量	良	外：貝殻による刺突文　竹管文　ハケ目　のち細いミガキ 内：ヘラケズリ	草田2
73	2	72	加工段5	弥生土器	甕	口縁～頸部小片			残3.0	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色 にぶい橙色	やや密	1㎜以下の長石、石英、2㎜以下の白色、赤色、黒色その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　貝殻凹線7条 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田2
73	3	72	加工段5	弥生土器	甕	口縁部破片	(17.0)		残5.4	外：橙色 内：橙色	やや密	2㎜以下の石英、長石、白色その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　貝殻凹線11条 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田3
73	4	72	加工段5	弥生土器	甕	口縁部破片	(11.2)		残4.8	外：橙色 内：橙色	やや粗	2㎜以下の長石、石英、白色その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　凹線11 条 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田3
73	5	72	加工段5	弥生土器	小型甕	1/4 口唇部を欠く		2.2	残10.7	外：にぶい黄橙色 にぶい黄褐色 橙色 黒褐色 内：にぶい黄橙色 灰黄色 黒褐色	密	2㎜以下の長石、石英、白色その他の砂粒、1㎜以下の角閃石多量	良	外：ヨコナデ　ヘラミガキ　貝殻凹線6 条以上 内：ヨコナデ　ヘラミガキか　ヘラケズリ	草田3 外面炭化物付着
73	6	72	加工段5	弥生土器	壺	体部 1/3 以下	胴部最大径:(32.8)		残13.8	外：浅黄橙色 内：淡橙色	やや粗	5㎜以下の白色粘土粒、2㎜以下の砂粒多量　雲母	良	外：波状文　疑凹線　ハケ目 内：ヘラケズリか	草田4 ～5
73	7	72	加工段5	弥生土器	大甕	口縁～体部破片	(47.7)		残17.3	外：にぶい黄橙色 灰色 内：にぶい黄橙色 灰色	密	1㎜以下の雲母、石英、長石多量	良	外：ヨコナデ　疑凹線　貝殻刺突列点文 内：ヨコナデ　ハケ目のちヘラケズリ	草田4 ～5
74	1	73	西壁20 層	弥生土器	甕	口縁部小片	(16.2)		残3.1	外：浅黄橙色 褐灰色 内：浅黄橙色	密	微細雲母、4㎜大の礫微量　1㎜以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　擬凹線 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田2
74	2	73	西壁20 層	弥生土器	甕	口縁部小片			残5.7	外：にぶい黄橙色 橙色 内：灰褐色 橙色	やや密	2.5㎜以下の長石、石英、白その他の砂粒多量 1.5㎜以下の角閃石、0.5㎜以下の雲母少量	良	外：ヨコナデ　擬凹線9 条以上 内：ヨコナデ　ハケ目　ヘラケズリ	草田2
74	3	73	西壁20 層	弥生土器	甕	口縁部破片	(18.2)		残4.8	外：灰黄褐色 にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	1㎜以下の石英、2㎜以下の白色、赤色その他の砂粒多量　1㎜未満の角閃石、長石少量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ　ハケ目	草田4
74	4	73	西壁20 層	弥生土器	甕	口縁部破片	(17.5)		残3.2	外：にぶい黄橙色 内：にぶい橙色	やや密	2㎜以下の長石、石英、3㎜未満の白色その他の砂粒、0.5㎜以下の雲母多量　0.5㎜以下の角閃石少量	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田4
74	5	73	西壁20 層	土師器	甕	口縁部小片	(13.2)		残3.7	外：灰白色 内：灰白色	密	微細金雲母その他の砂粒多量	良	外：調整不明 内：調整不明	草田5 ～6
74	6	73	西壁20 層	土師器	鼓形器台	脚端部小片		(19.7)	残3.8	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	金雲母、1㎜以下の長石その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　波状文のち一部強いナデ 内：ヘラケズリ　ヨコナデ	草田5 ～6
74	7	73	西壁20 層	土師器	甕	口縁部小片	(24.2)		残5.9	外：橙色　灰白色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の長石その他の砂粒多量　赤色粘土粒	良	外：ヨコナデ　ハケ目のちナデ 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	
74	8	73	西壁20 層	須恵器	高坏か	脚部1/6		(9.6)	残1.65	外：灰色 内：灰色	やや密	0.5㎜以下の石英、長石、その他砂粒	良	外：回転ナデ 内：回転ナデ	三角または四角の透かし
76	1	73	土器溜	弥生土器	甕	口縁部小片	(14.5)		残3.7	外：にぶい黄橙色 黒褐色 内：にぶい黄橙色	密	1㎜以下の石英、その他の砂粒多量	良	外：ナデ　疑凹線 内：ナデ　強いナデ　ヘラケズリ	草田2
76	2	73	土器溜	弥生土器	甕か壺	口縁部小片	(13.4)		残4.0	外：橙色 内：橙色	やや密	1.5㎜未満の長石、白色、その他の砂粒多量　1㎜以下の石英、角閃石多量	良	外：ヨコナデ　疑凹線 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田2 か3
76	3	73	土器溜	弥生土器	甕	口縁部小片	(15.8)		残4.1	外：にぶい黄橙色 褐灰色 内：にぶい黄橙色 橙色	密	1㎜以下の石英、長石、その他の砂粒	良	外：条痕または板状工具小口によるナデのちゆるいナデ消し　ナデ 内：ナデ　ヘラケズリか	草田3
76	4	73	土器溜	弥生土器	甕	口縁部小片	(22.0)		残4.0	外：灰白色 内：灰白色	密	微細石英、角閃石、その他の砂粒多量　1㎜大の砂粒若干	良	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	草田5
76	5	73	土器溜	弥生土器	甕	口縁部小片	(15.4)		残5.5	外：にぶい黄橙色 褐灰色 内：にぶい黄橙色 橙色	密	1㎜以下の石英、角閃石、その他の砂粒	良	外：条痕または板状工具小口によるナデのちナデ消しナデ 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5

図	番号	写真	地点層位	種別	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土		焼成	調整・文様	時期(併行型式)、備考
76	6	73	土器溜	弥生土器	甕	口縁部小片	(22.8)		残5.6	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色 褐灰色	密	1.5㎜以下の石英、角閃石、その他の砂粒やや多量	良	外：ヨコナデ　ナデ 内：ナデ　ヘラケズリ	草田5
76	7	73	土器溜	弥生土器	甕	口縁部小片	(16.8)		残4.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の石英、長石、その他の砂粒多量	良	外：貝殻条痕または板状工具小口によるナデのちナデ消し　ナデ 内：ヨコナデ　ナデ	草田5
76	8	74	土器溜	弥生土器	壺	4/5	20.5		30.6	外：浅黄橙色 橙色 暗灰色 内：にぶい黄橙色 橙色 暗灰色	密	5㎜以下の赤色、白色砂礫	良	外：ヨコナデ　強いナデ 直線文続けて波状文 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5
76	9	74	土器溜	弥生土器	甕	1/3	(18.6)	(3.0)	(34.6)	外：浅黄橙色 灰白色 灰黄褐色 黒色 内：浅黄橙色 灰白色 黄灰色	密	2㎜以下の石英、長石、白色、その他の砂粒多量 1㎜以下の角閃石多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目　ハケ状工具による直線文　波状文 内：ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	草田5
76	10	73	土器溜	土師器	甕	口縁部1/5	(14.8)		残5.4	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜大の石英、長石、角閃石、その他の砂粒やや多量	良	外：ヨコナデか 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6
76	11	74	土器溜	土師器	甕	1/4 底部欠く	(18.0)		残22.0	外：浅黄橙色 灰黄褐色 内：浅黄橙色 にぶい黄橙色	やや密	2.5㎜未満の長石、白色、その他の砂粒、2㎜以下の石英多量　2㎜以下の角閃石、1㎜以下の雲母少量	良	外：ヨコナデ　ハケ目　ハケ状工具による刺突文 内：ヨコナデ　ヘラミガキ ヘラケズリ	草田6
76	12	74	土器溜	土師器	甕	1/2	(14.6)	(5.9)	(30.5)	外：灰黄色 浅黄色 黒色 内：灰白色 浅黄橙色	密	1.5㎜以下の石英、長石、1㎜以下の雲母、角閃石、2㎜未満の白色、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目　櫛描き直線文14 条以上 内：ヨコナデ　ヘラケズリ	草田6 外面胴部炭化物付着
77	1	75	土器溜	弥生土器	甕	底部1/4		(6.4)	残4.7	外：にぶい黄橙色 灰色 内：黄灰色	密	1.5㎜大や微細石英、長石その他の砂粒少量	良	外：ナデ　ハケ状工具によるナデ 内：調整不明	平底
77	2	75	土器溜	弥生土器	甕	底部1/3		(5.5)	残2.4	外：にぶい黄橙色 灰色 内：浅黄橙色 灰黄褐色	密	微細砂粒多量　雲母、長石	良	外：ナデか 内：ナデか	平底
77	3	75	土器溜	弥生土器	高坏	坏部口縁小片	(27.6)		残3.6	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	1㎜以下の石英、角閃石、その他の砂粒やや多量	良	外：口唇部ミガキか 内：調整不明	草田5
77	4	75	土器溜	弥生土器	低脚坏	坏部1/2	21.0		残6.5	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	微細石英、角閃石、その他の砂粒多量　1～3㎜大の砂礫少量	良	外：ハケ目のちヘラミガキかナデ 内：ヘラミガキかナデ　ヨコナデ	草田5
77	5	74	土器溜	弥生土器か 土師器	低脚高坏	1/3 脚端部を欠く	(32.5)		残11.2	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	密	2㎜未満の長石、石英、角閃石、白色、その他の砂粒多量	良	外：ヨコナデ　ハケ目のちヘラミガキ 内：ヨコナデ　ヘラミガキ	草田6
77	6	75	土器溜	土師器	鉢	口縁部破片	(13.4)		残5.8	外：にぶい黄橙色 橙色 内：灰黄褐色	密	1㎜以下の石英、その他の砂粒多量	やや不良	外：ヨコナデ　ナデ 内：ヨコナデ　ナデ	古墳前期か 外面口縁部炭化物付着
80	1	75	2 区 8～9 層	肥前系陶器	擂鉢	口縁部1/6	(29.8)		残5.5	外：黒褐色 内：黒褐色	緻密	1㎜以下の長石多量	良	外：回転ナデ 内：回転ナデのちカキ目	
80	2	75	2 区 8～9 層	備前焼	甕か	胴部小片				外：にぶい橙 内：青灰色	緻密	1㎜以下の長石多量	良	外：回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	
80	3	75	2 区 8～9 層	備前焼	甕か鉢	胴部小片				外：にぶい赤褐色 内：にぶい橙色	緻密	1㎜以下の長石、黒色粘土粒多量	良	外：ナデ 内：回転ナデ	
80	4	75	2 区 8～9 層	白磁	壺か	胴部小片				外：灰白色 内：灰白色	精緻	灰白色(5Y8/1)　砂粒含まず	良	外：施釉 内：施釉　直線文か	
80	5	75	2 区 8～9 層	肥前系陶器	皿	口縁～胴部破片	(11.0)		残2.3	外：灰オリーブ色 にぶい黄色 内：灰オリーブ にぶい黄色	緻密	0.5㎜未満の白色砂粒	良	外：回転ナデ　施釉 内：回転ナデ　施釉　鏡あり	
80	6	75	2 区 8～9 層	土師質土器	坏	底部1/2 口縁部欠く		6.1	残2.6	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	微細長石、金雲母少量	良	外：回転ナデか　回転糸切 内：回転ナデか	
80	7	75	2 区 8～9 層	土師質土器	坏	底部完形		3.3	残1.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	1㎜以下の長石少量　金雲母微量	良	外：調整不明 内：調整不明	
80	8	75	2 区 8～9 層	土師質土器	坏か皿	底部完形		3.4	残1.0	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	0.5㎜未満の雲母、1.5㎜未満の長石、石英その他の砂粒多量	良	外：回転ナデか　回転糸切 内：回転ナデか	
80	9	75	2 区 8～9 層	土師質土器	坏	底～胴部小片		(5.3)	残1.6	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	密	微細金雲母、長石微量	良	外：調整不明 内：調整不明	
80	10	75	2 区 8～9 層	瓦質土器	鉢	口縁部破片	(25.1)		残6.3	外：にぶい黄橙色 内：浅黄色	密	微細砂粒　赤色粘土粒	良	外：不明 内：カキ目	16c 後半 在地系　口唇部～内面炭化物付着
80	11	75	2 区 8～9 層	瓦質土器	鉢	口縁部破片			残2.5	外：橙色 内：橙色	やや密	1㎜未満の石英、長石、角閃石その他の砂粒多量	良	外：ナデ 内：カキ目のちナデか	16c 後半

土製品

図	番号	写真	地点	層位	器種	遺存	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調	胎土		焼成	調整・文様	時期(併行型式)
63	5	67	加工段1		土製支脚	突端部破片	残長:4.9	幅:3.45	厚:3.05	外：橙色	やや粗	1㎜以下の石英、長石、白色その他の砂粒多量	良	外：ナデ	
63	6	67	加工段1		土製支脚	胴部1/2	胴部径:5.5		残6.2	外：橙色 褐灰色	粗	2㎜未満の長石、石英、白色その他の砂粒多量　0.5㎜以下の角閃石少量	良	外：ナデ　ケズリ	6c 後半～古代
80	13	76	2 区	8～9 層	不明		長: 残4.2	幅:3.4	厚:2.6	外：橙色 内：褐灰色（被熱により変色）					鋳造作業時の支持台か

石器

図	番号	写真	地点	層位	器種	石材	計測値（cm・g）				備　　考
							長さ	幅	厚さ	重量	
29	8	49	採集品		磨石	安山岩	9.5	9.4	5.9	873	
43	11	54	SR02	上層	砥石	頁岩	7.7	7.4	0.9	71	施溝分割
43	12	54	SR02	上層	砥石か板状石製品	流紋岩	6.5	6.8	0.8	72	施溝分割
43	13	54	SR02	上層	砥石	頁岩	4.0	4.6	0.6	19.5	施溝分割
53	5	58	SX01		敲石	砂岩	11.2	8.5	7.3	1050	
53	6	58	SX01		砥石	安山岩	7.0	3.1	2.3	40.5	
55	22	63	SX02		磨石	流紋岩	7.1	6.8	1.65	117.7	石錘の可能性あり
55	23	63	SX02		敲石	デイサイト	10.8	7.1	6.5	614.3	
64	12	70	加工段1		磨石	デイサイト	11.9	6.5	3.5	346.3	
73	8	70	加工段5		磨石？	デイサイト	13.8	9.2	7.3	1050	

金属関連遺物

図	番号	写真	調査区	地点	層位	器種	計測値（cm・g）				備考
							長さ	幅	厚さ	重量	
37	4	76	1 区		8 層	釘	4.6	0.4	0.4		
37	5	76	1 区		8 層	不明工具	5.9	1	0.8		
43	14	55	1 区	SR02	上層	簪	16.8	0.98	0.1	7.1	先端は耳かきになっている
43	15	55	1 区	SR02	上層	簪	3.15	2.12	0.25	2.7	先端は耳かきになっている
43	16	76	1 区	SR02	上層	釘	10.9	0.6	0.7		
43	17	76	1 区	SR02	3 層	釘	4.3	0.5	0.6		
43	18	76	1 区	SR02	上層	釘	3.7	0.9	0.5		
80	12	76	2 区	2 区	8 ～9 層	坩堝	9		3.7		内面に緑青付着

銭貨

図	番号	写真	地点	層位	名称	鋳年	計測値（mm・g）					備考
							銭径（A）/ 銭径（B）	内径（C）/ 内径（D）	孔径	銭厚	量目	
43	19	55	SR02	上層	寛永通宝		23.96/23.97	20.04/19.85	6.3	1.06~1.37	2.09	新寛永か
43	20	55	SR02	上層	一銭	大正7 年	22.97/22.97	21.30/21.46		1.3	3.44	

第５章　自然科学分析

第１節　京田遺跡における樹種同定

一般社団法人 文化財科学研究センター
金原美奈子　金原裕美子

1.　はじめに

本報告では、遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

2.　試料と方法

試料は、２調査区より出土した施設部材の板、田下駄、杭である。なお、杭は縄文時代後期後葉に属する。試料は結果第８表に記す。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって40 ～ 1000倍で観察した。切片をマウントクイックアクエオス（Mount-Quick“Aqueous”：大道産業）で封入し、プレパラートを作製する。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

3.　結果

表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

１）カヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が２本対で存在する。放射組織が単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。材は均質緻密で堅硬、弾性が強く水湿にも耐え、保存性が高く、弓などに用いられる。

２）スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～ 14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径２ｍに達する。

4.　所見

同定の結果、京田遺跡の木製品はスギ２点、カヤ１点であった。

スギは施設部材の板、田下駄に利用されている。材は加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。島根県におけるスギの利用例は多く、同様に三田谷Ⅰ遺跡（古墳時代末～平安時代）では田下駄の報告例がある。なお、中部日本海側では古くからスギを多用する傾向にある。カヤは杭に利用されている。材は耐久・保存性が高く水湿に耐える材であり、加工が容易であり、杭に適材である。しかし縄文時代の杭であることから樹木の性質から選材したのではなく、比較的近隣に生育する樹木を伐採し利用したものと考えられる。

同定された樹種は温帯から暖温帯に生育する樹木である。スギは温帯中間域の積雪地帯で純林を形成し、カヤは適潤な谷側や谷合いに好んで生育する。どちらの樹木も当時遺跡周辺に生育していたと考えられ、地域的な流通によって近隣地域よりもたらされたと推定される。

【参考文献】

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.
吉田生物研究所(2000)出土遺物観察表２（木製品），三田谷I遺跡（Vol.2）斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VIII，島根県教育委員会，p.155.

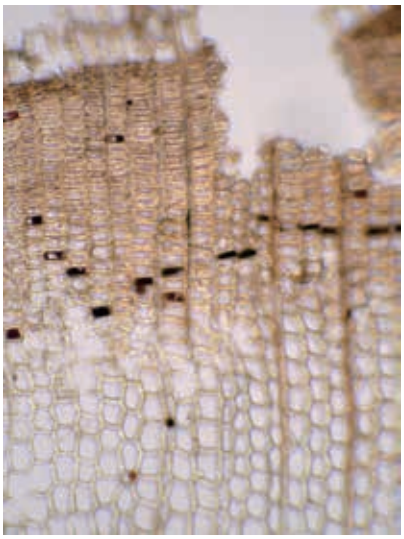
第８表　京田遺跡における樹種同定結果

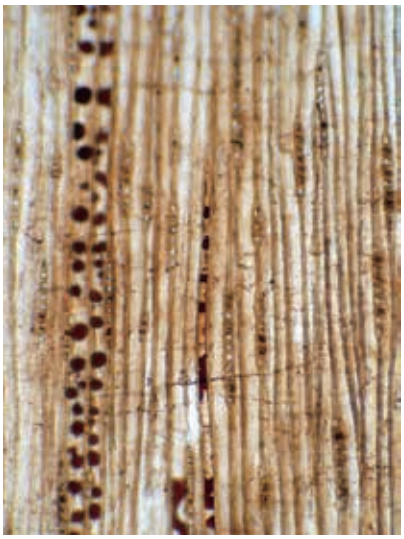
顕微鏡写真	遺物名	調査区	備考	結果（学名／和名）	
写真２	施設部材　板	２区	ホゾ穴有り	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
写真１	田下駄	２区		*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
写真３	杭	２区	縄文後期後葉	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	カヤ

京田遺跡の木材

横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

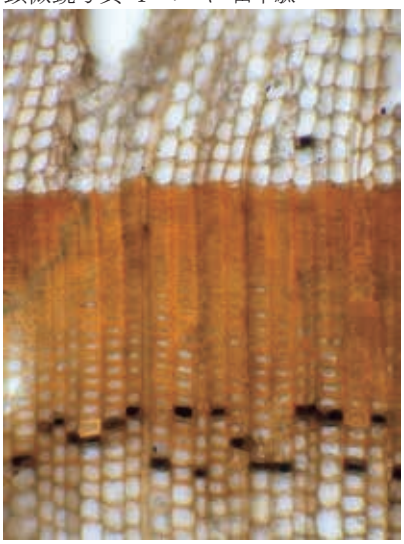
顕微鏡写真 3　カヤ 杭





横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

顕微鏡写真 1　スギ 田下駄



横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

顕微鏡写真 2　スギ 施設部材 板

第２節　京田遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳：文化財調査コンサルタント(株)

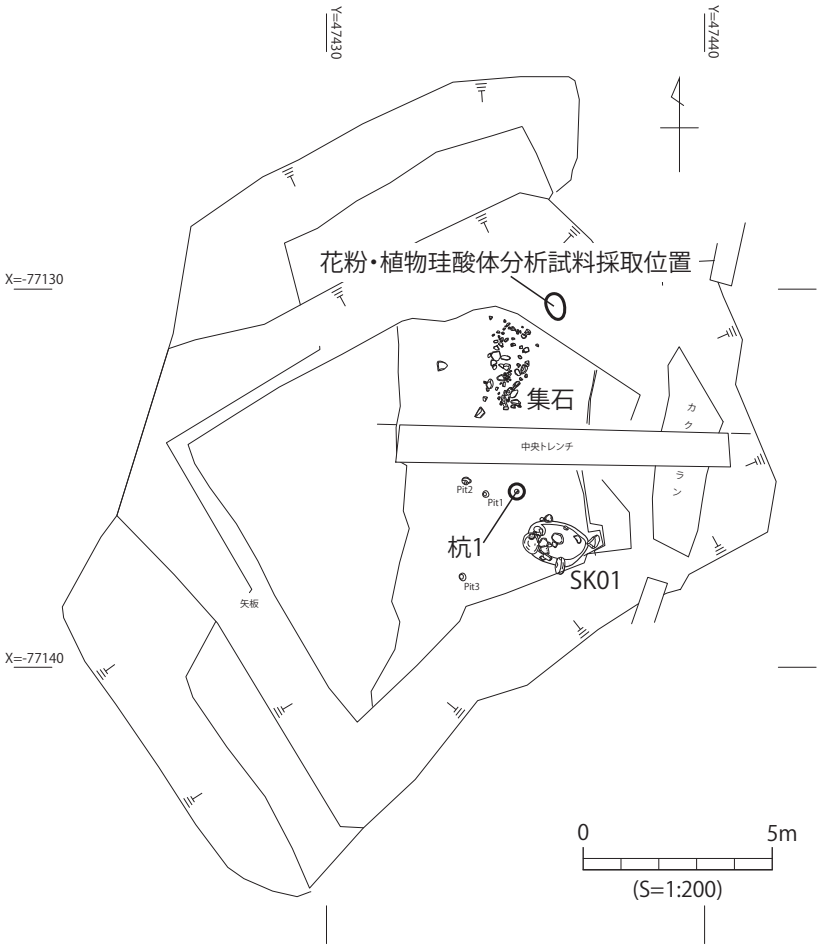
はじめに

京田遺跡は、島根県東部の出雲市湖陵町常楽寺地内に位置し、常楽寺川の沖積平野縁辺部に立地する。

本報は「遺跡内及び遺跡周辺での植生変遷を明らかにする」、「炭化種実の分類群を明らかにする」、「遺構の時期を明らかにする」などの目的で、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定及びAMS年代測定報告書を再編集したものである。

分析試料について

花粉分析、植物珪酸体分析試料及び年代測定試料「杭１」は、島根県教育庁埋蔵文化財センターと協議の上、第81図に示す地点で文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。種実分析試料は島根県教育庁埋蔵文化財センターにより採取・保管されていた試料から御提供を受けた。また、以下に示す平面図及び断面図は、島根県教育庁埋蔵文化財センターより御提供を受けた原図をもとに作成した。



第81図　試料採取地点

調査区平面図（第81図）中に、試料採取地点を示す。SK01内でAMS年代測定試料№.2、3が採取されていたほか、種実分析試料が集石遺構付近ほかから採取されていた。調査区東壁断面図（第82図）中に、花粉・植物珪酸体分析試料採取位置を示す。「●1」～「●7」で7試料を採取した。

また、4-2層からAMS年代測定試料№.1が採取されていた。

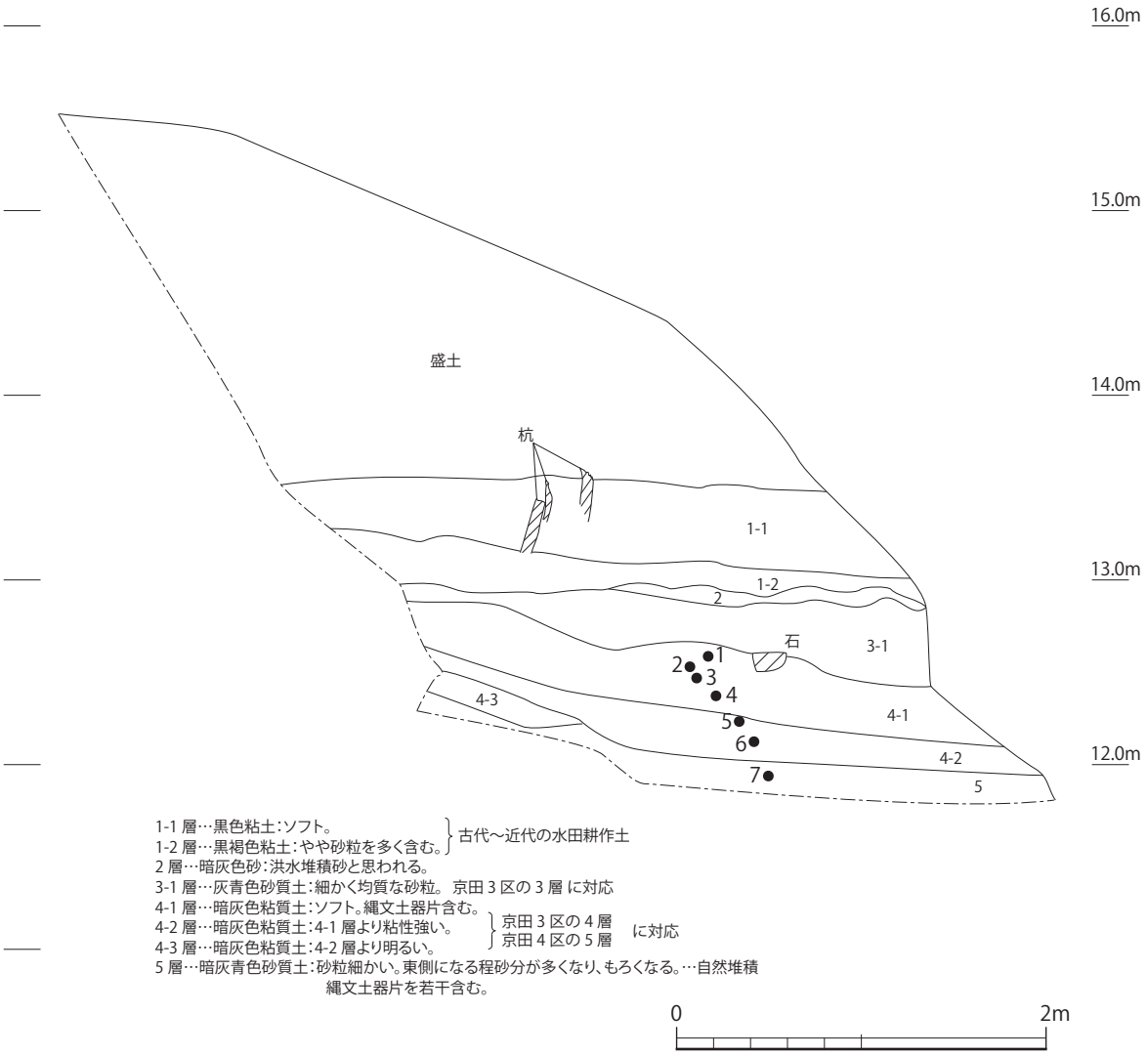
分析方法

1) 種実同定方法

水洗・選別を終え、地点ごとに一括した袋詰めの状態で同定試料の御提供を受けた。また、全て炭化試料で、多くは炭化材片であった。同定作業は種実を対象として肉眼及び実体顕微鏡下にて現生標本及び図鑑類と対比して行い、同時に計数を行った。同定結果は、試料ごとに分類群別、部位別に計数し、同定・計数結果を表形式にまとめた。同定後の試料は、調査地点ごとに分類群別にチャック付きポリ袋に入れ、標本とした。

2) 微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を５段階で示した。



第82図　試料採取位置

3) 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ﾐｸﾛﾝ未満) に細分した。

第９表　同定対象分類群

同定レベル	コード	分類群	対応する栽培植物
1	1	イネ	イネ
3	3	イネ籾殻（穎の表皮細胞）	イネ
栽培植物との対応が明らかな分類群	21	ムギ類（穎の表皮細胞）	コムギ・オオムギ
	41	オヒシバ属（シコクビエ型）	シコクビエ
	61	キビ族型	ヒエ・アワ・キビ
	62	キビ属型	キビ
	64	ヒエ属型	ヒエ
	66	エノコログサ属型	アワ
	84	ウシクサ族Ｂ	サトウキビ
	91	モロコシ属型	モロコシ
	93	ジュズダマ属型	ハトムギ
4	11	サヤヌカグサ属	サヤヌカグサ・アシカキ
母植物との対応が明らかな分類群	13	マコモ属	マコモ
	31	ヨシ属	ヨシ
	33	ダンチク属	ダンチク
	35	ヌマガヤ属型	ヌマガヤ
	51	シバ属型	シバ属
	71	トダシバ属	トダシバ属
	81	ススキ属型	ススキ属
	83	ウシクサ族Ａ	チガヤ属など
	201	メダケ節型	メダケ節
	203	ネザサ節型	ネザサ節
	205	チマキザサ節型	チマキザサ節・チシマザサ節
	207	ミヤコザサ節型	ミヤコザサ節
	209	マダケ属型	マダケ属
	350	カヤツリグサ科（スゲ属など）	スゲ属
	390	シダ類	シダ類
	501	ブナ科（シイ属）	シイ類
	503	ブナ科（アカガシ亜属）	カシ類
	510	クスノキ科	バリバリノキなど（クスノキ以外）
	520	マンサク科（イスノキ属）	イスノキ属
	530	アワブキ科	アワブキ科
	540	モクレン属型	モクレン属
	570	マツ科型	マツ科
	580	マツ属型	マツ属

4) 植物珪酸体分析

藤原（1976）のグラスビーズ法に従って実施した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかな、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群（第９表）を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで計数を行った。

5) AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。^{14}C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期:5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.3（Bronk Ramsey, 2009）を用い、INTCAL13 (Reymer et al., 2013) を利用した。

分析結果

1) 種実同定結果と記載

第10表に分析結果を示した。また、以下に分類ごとの記載を行うとともに、P132に代表的な標本の写真を示した。

(1) オニグルミ：内果皮表面には不規則なおうとつがあり不規則な線刻が分布する。内果皮壁は固く緻密で壁内部 に空隙がある。

(2）クヌギ近似種：炭化した子葉はやや角ばった球形で上下はやや平たんになる。カシワにもかなり近似しているが、カシワの方が球に近いことからクヌギ近似種とした。

(3）コナラ属：果実基部の着点破片は平らな盤状で、褐色でざらつき短線状の道管痕が同心円状に配列する。炭化した子葉は楕円形２分割型で分割面は平だが中央が少しくぼむ。外面が残っているものは縦方向に浅い溝がある。

(4）カラスザンショウ：内果皮は楕円形で丸く一端にあるへそは細長い溝状、表面は黒色で深く比較的大きさがやや揃った粗い網目模様がある。

(5）ムクロジ：半分に割れた種子は径 10mm 程度、球形扁平で黒色、不規則なしわがあり一端に線形のへそがある。種子壁の外層は柵状。

第10表　種実同定結果

整理番号	取り上げラベル	オニグルミ	ブナ科	コナラ属			クヌギ近似種	カラスザンショウ	ムクロジ	トチノキ	エノコログサ属	イボクサ	不明A	不明B	不明C	炭化材	その他
		内果皮破片	子葉(片)	子葉(片)	果皮(片)	果実基部	子葉(片)	内果皮(片)	種子(片)	種皮(片)	穎果	種子	果皮(片)	種皮?(片)	種子？(片)		
1	4-2層 181211															++++	
2	4-2層 181211																礫
3	4-2層（土器一括） 181213	4+		6		1							5	3		++++	
4	4-2層（土器一括） 181213			+++			2		1					2		++	
5	4-2層（土器一括） 181213		3											1	6	+++	
6	4-2層（土器一括） 181213																滓?
7	集石(石敷) 周り 181227									2	1	1				++++	
8	集石(石敷) 周り 181227															++	
9	集石(石敷) 周り 181227															++++	
10	集石(石敷) サブトレ内5層Pno.1内 181227															++++	
11	集石(石敷) サブトレ内5層Pno.1内 181227							1								+++	
12	集石(石敷) 5層 181227									1						++++	
13	集石(石敷) 5層 181227															+++	
14	杭1付着 5層面検出				3											++++	
15	SK01 181227									1						++++	
16	SK01下層 181218															++++	
17	SK01下層 181218															2	礫
18	SK01 181227															+++	
19	SK01 181227																カタツムリ

(6) トチノキ：出土した種皮はやや薄く固く光沢があり黒色である。種皮の断面は３層からなり、互いにやや異なる方向に割れる。種皮表面は大変微細な網目模様があり、焼けて平滑になっている部分もある。

(7) エノコログサ属：穎は２面の楕円形で膜質、褐色で縦方向に細かい筋があり更に波状のしわがある。

(8) イボクサ：種子は膜状表面はロウ質で扁平、片側は切形もう一端は丸く全面に網目がある。片面の中央に溝状の筋となるへそがある。

(9) 不明Ａ：曲面を持つ果皮と思われる破片で、表面に方向性がある筋がある。壁断面は３層からなり外層と中層は柵状組織で内層は柔細胞が無構造に並ぶ。

(10) 不明Ｂ：曲面を持つ果皮か種皮で表面は平滑で光沢は無し。壁断面は１層に見え無構造で割れ面はガラス光沢がある。

(11) 不明Ｃ：均一で無構造な細胞配列の炭化破片である。出土状態としては子葉と考えられるが、種皮や表面が残っていない。

2) 微化石概査結果

微化石概査結果を第11表に示す。ほとんどの試料で微粒炭の検出量が極めて多く、植物珪酸体、火山ガラスはやや少なかった。一方花粉化石、植物片、珪藻化石の検出量は極めて少なかった。埋積後の酸化作用により微化石が分解・消失した可能性があるほか、洪水による堆積を繰り返していたことから耕作期間が短く、十分な量の微化石が蓄積されなかった可能性が指摘できる。

3) 花粉分析結果

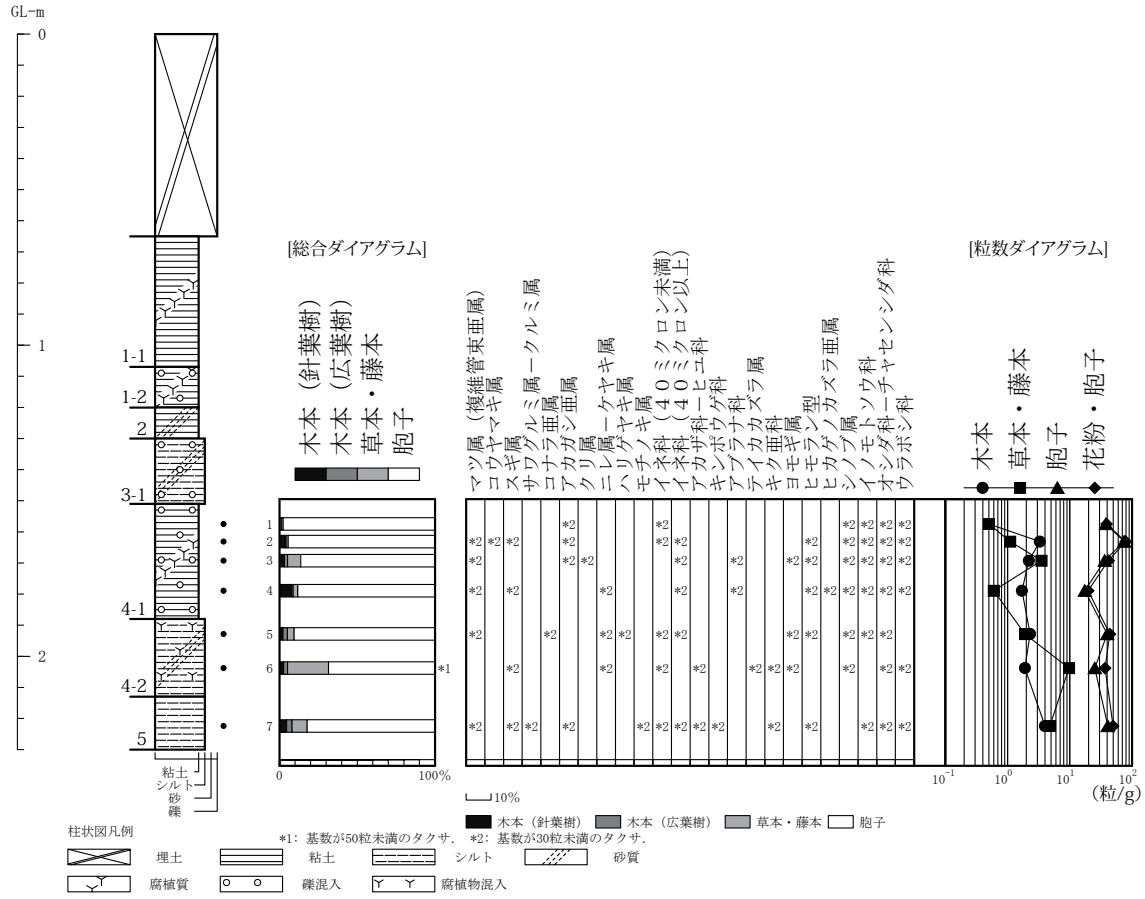
分析結果を花粉ダイアグラム（第83図）、花粉（含有量）ダイアグラム（第84図）と花粉組成表（第12表）に示す。花粉・胞子化石の含有量が100粒/gと少なく、かつ多量の微粒炭による希釈効

第11表　微化石概査結果

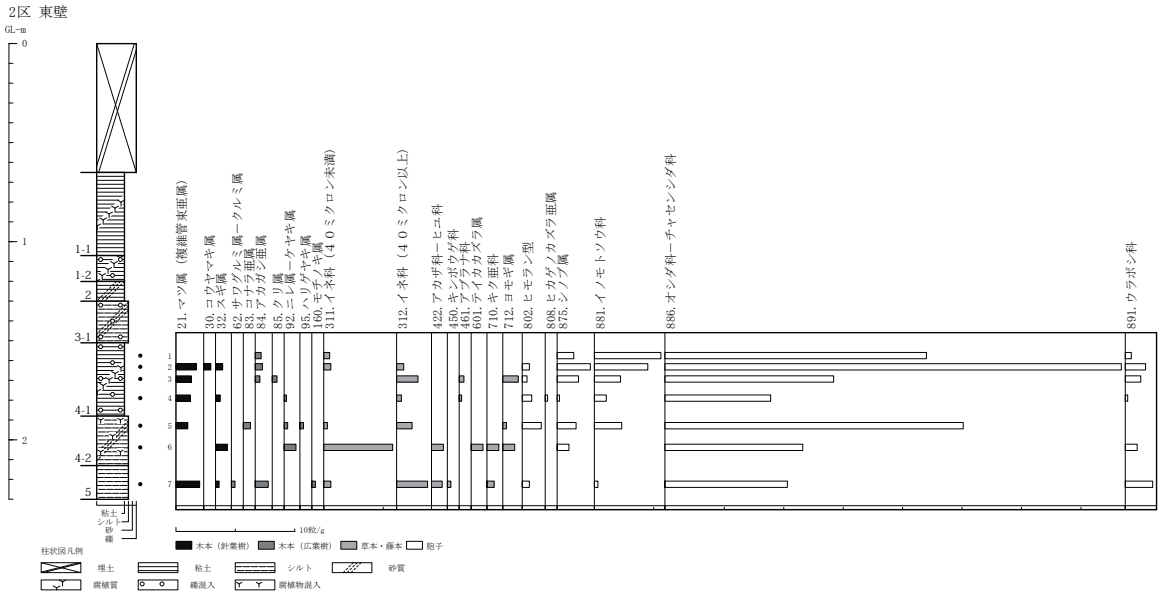
試料No.	花　粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
1	△×	◎	△×	×	△	△×
2	△×	◎	△×	×	○	△×
3	△×	◎	△×	×	○	△×
4	△×	○	△×	×	◎	△
5	△×	○	△×	×	○	△×
6	△×	○	△×	×	◎	△
7	△	○	△×	×	◎	△

凡例 ◎ ：十分な数量が検出できる　○ ：少ないが検出できる　△ ：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　× ：検出できない

果のために、花粉・胞子化石の検出量が極めてすくなかった。このことから花粉ダイアグラムでは、検出できた分類群を「・＊2」で示した。[総合ダイアグラム]では「木本（針葉樹）」、「木本（広葉樹）」、「草本•藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示した（木本（針葉樹）は黒、木本（広葉樹）は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した。）。[ダイアグラム]では「木本」、「草本・藤本」、「胞子」「花粉・胞子（全ての合計）」ごとに含有量（湿潤試料1g中の粒数）の変化を示している。



第83図　花粉ダイアグラム



第84図　花粉（含有量）ダイアグラム

第12表　花粉化石組成表

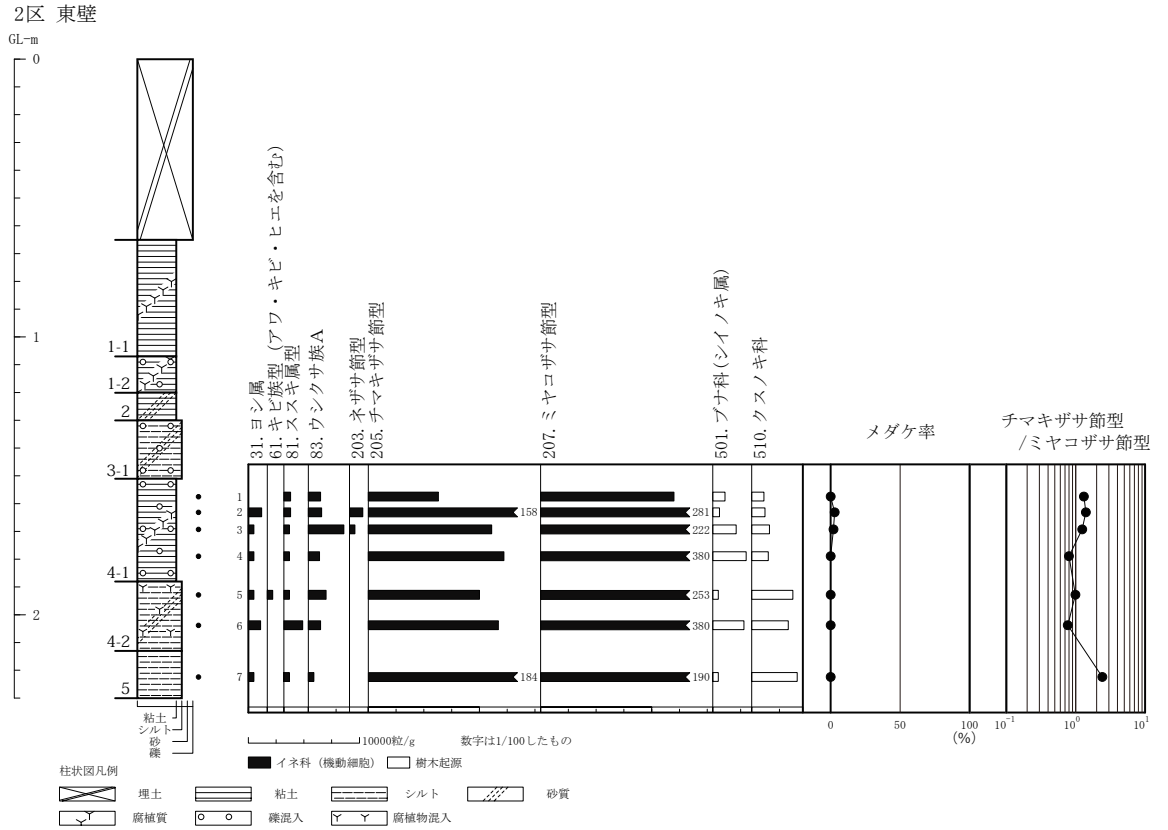
試料番号		1			2			3			4			5			6			7		
21 *Pinus(Diploxylon)*	マツ属：複維管束亜属				3	50%	1.7	3	60%	1.3	6	67%	1.2	3	43%	1				7	50%	2
30 *Sciadopitys*	コウヤマキ属				1	17%	0.6															
32 *Cryptomeria*	スギ属				1	17%	0.6				2	22%	0.4				1	50%	1	1	7%	0.3
62 *Pterocarya-Juglans*	サワグルミ属−クルミ属																			1	7%	0.3
83 *Querucus*	コナラ亜属													2	29%	0.6						
84 *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属	1	100%	0.5	1	17%	0.6	1	20%	0.4										4	29%	1.1
85 *Castanea*	クリ属							1	20%	0.4												
92 *Ulmus-Zelkova*	ニレ属−ケヤキ属										1	11%	0.2	1	14%	0.3	1	50%	1			
95 *Hemiptelea*	ハリゲヤキ属													1	14%	0.3						
160 *Ilex*	モチノキ属																			1	7%	0.3
311 Gramineae(<40)	イネ科（４０ミクロン未満）	1	100%	0.5	1	17%	0.6							1	14%	0.3	6	300%	5.8	2	14%	0.6
312 Gramineae(>40)	イネ科（４０ミクロン以上）				1	17%	0.6	4	80%	1.8	2	22%	0.4	4	57%	1.3				9	64%	2.6
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科																1	50%	1	3	21%	0.9
450 Ranunculaceae	キンポウゲ科																			1	7%	0.3
461 Cruciferae	アブラナ科							1	20%	0.4	1	11%	0.2									
601 *Trachelospermum*	テイカカズラ属																1	50%	1			
710 Carduoidae	キク亜科																1	50%	1	2	14%	0.6
712 *Artemisia*	ヨモギ属							3	60%	1.3				1	14%	0.3	1	50%	1			
802 *Urostachys sieboldii* type	ヒモラン型				1	17%	0.6	1	20%	0.4	4	44%	0.8	5	71%	1.6				2	14%	0.6
808 Subgenus *Lycopodium*	ヒカゲノカズラ亜属										1	11%	0.2									
875 *Davallia*	シノブ属	3	300%	1.4	5	83%	2.8	4	80%	1.8	1	11%	0.2	5	71%	1.6	1	50%	1			
881 Pteridaceae	イノモトソウ科	12	1200%	5.6	8	133%	4.5	5	100%	2.2	5	56%	1	7	100%	2.3				1	7%	0.3
886 Aspid.-Asple.	オシダ科−チャセンシダ科	47	4700%	22	69	1150%	38.4	32	640%	14.2	46	511%	8.9	78	1114%	25.1	12	600%	11.6	36	257%	10.3
891 Polypodiaceae	ウラボシ科	1	100%	0.5	3	50%	1.7	3	60%	1.3	1	11%	0.2				1	50%	1	8	57%	2.3
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	10	1000%	4.7	31	517%	17.3	12	240%	5.3	14	156%	2.7	18	257%	5.8	6	300%	5.8	23	164%	6.6
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	8	800%	3.7	17	283%	9.5	25	500%	11.1	18	200%	3.5	11	157%	3.5	6	300%	5.8	73	521%	20.8
木本花粉総数		1	1%	0.5	6	4%	3.5	5	5%	2.1	9	9%	1.8	7	5%	2.2	2	5%	2.0	14	8%	4.0
草本・藤本花粉総数		1	1%	0.5	2	1%	1.2	8	8%	3.5	3	3%	0.6	6	4%	1.9	10	26%	9.8	17	10%	5.0
胞子総数		81	98%	37.9	134	94%	74.8	82	86%	36.3	90	88%	17.5	124	91%	39.9	26	68%	25.2	143	82%	40.9
総数		83		38.9	142		79.5	95		41.9	102		19.9	137		44	38		37.0	174		49.9

左よりカウント粒数、百分率、粒数

花粉(含有量)ダイアグラムでは、分類群ごとに含有量（湿潤試料1g中の粒数）を算出し、スペクトルで表している（木本（針葉樹）は黒、木本（広葉樹）は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した。)。

花粉・胞子化石群集の特徴として胞子が68 ～ 98％を占め、木本花粉の割合は10％未満であった。高率を示した胞子のうち、オシダ科-チャセンシダ科が多くを占め、イノモトソウ科が続いた。木本花粉ではマツ属（複維管束亜属)、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属の検出量が多かった。草本・藤本花粉では、イネ科（40ﾐｸﾛﾝ未満)、イネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）の検出量が多かった。

また、花粉分析では、得られた木本花粉化石群集の特徴から局地花粉帯を設定（花粉分帯を行い）し、古植生、古環境を復元する。今回の分析ではほとんどの試料で木本花粉の検出量が数～ 10粒



第85図　植物珪酸体ダイアグラム

第13表　植物珪酸体化石組成表

地点	2区 東壁						
試料No.	1	2	3	4	5	6	7
31 ヨシ属	–	2	1	1	1	2	1
	–	12	5	5	5	11	5
	–	0.74	0.33	0.32	0.33	0.70	0.32
61 キビ族型(アワ・キビ・ヒエを含む)	–	–	–	–	1	–	–
	–	–	–	–	5	–	–
	–	–	–	–	–	–	–
81 ススキ属型	1	1	1	1	1	3	1
	6	6	5	5	5	17	5
	0.07	0.07	0.07	0.06	0.07	0.21	0.06
83 ウシクサ族A	2	2	6	2	3	2	1
	11	12	32	10	16	11	5
	–	–	–	–	–	–	–
203 ネザサ節型	–	2	1	–	–	–	–
	–	12	5	–	–	–	–
	–	0.06	0.03	–	–	–	–
205 チマキザサ節型	11	27	21	24	19	21	36
	63	158	111	122	100	117	184
	0.47	1.18	0.83	0.91	0.75	0.88	1.38
207 ミヤコザサ節型	21	48	42	75	48	68	37
	120	281	222	380	253	380	190
	0.36	0.84	0.67	1.14	0.76	1.14	0.57
501 ブナ科(シイノキ属)	2	1	4	6	1	5	1
	11	6	21	30	5	28	5
	–	–	–	–	–	–	–
510 クスノキ科	2	2	3	3	7	6	8
	11	12	16	15	37	33	41
	–	–	–	–	–	–	–
プラント・オパール総数	39	85	79	112	81	107	85
カウントガラスビーズ数	431	429	472	474	451	452	463
カウント総数	470	514	551	586	532	559	548
試料重量(×0.0001g)	8630	8560	8660	8890	8910	8760	8970
ガラスビーズ重量(×0.0001g)	233	235	237	234	232	242	233
メダケ率(%)	0.0	2.9	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0
チマキザサ節型/ミヤコザサ節型	1.31	1.40	1.24	0.80	0.99	0.77	2.42

上段　検出粒数
中段　検出密度(単位;×100粒/g)
下段　推定生産量(単位;kg/㎡・cm)

程度と極めて少なく、統計処理ができなかったことから、花粉分帯が行えなかった。

4) 植物珪酸体分析結果

植物珪酸体分析の結果を、植物珪酸体ダイアグラム（第85図）と植物珪酸体化石組成表（第13表）に示す。

植物珪酸体ダイアグラムでは、検出量を1gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。

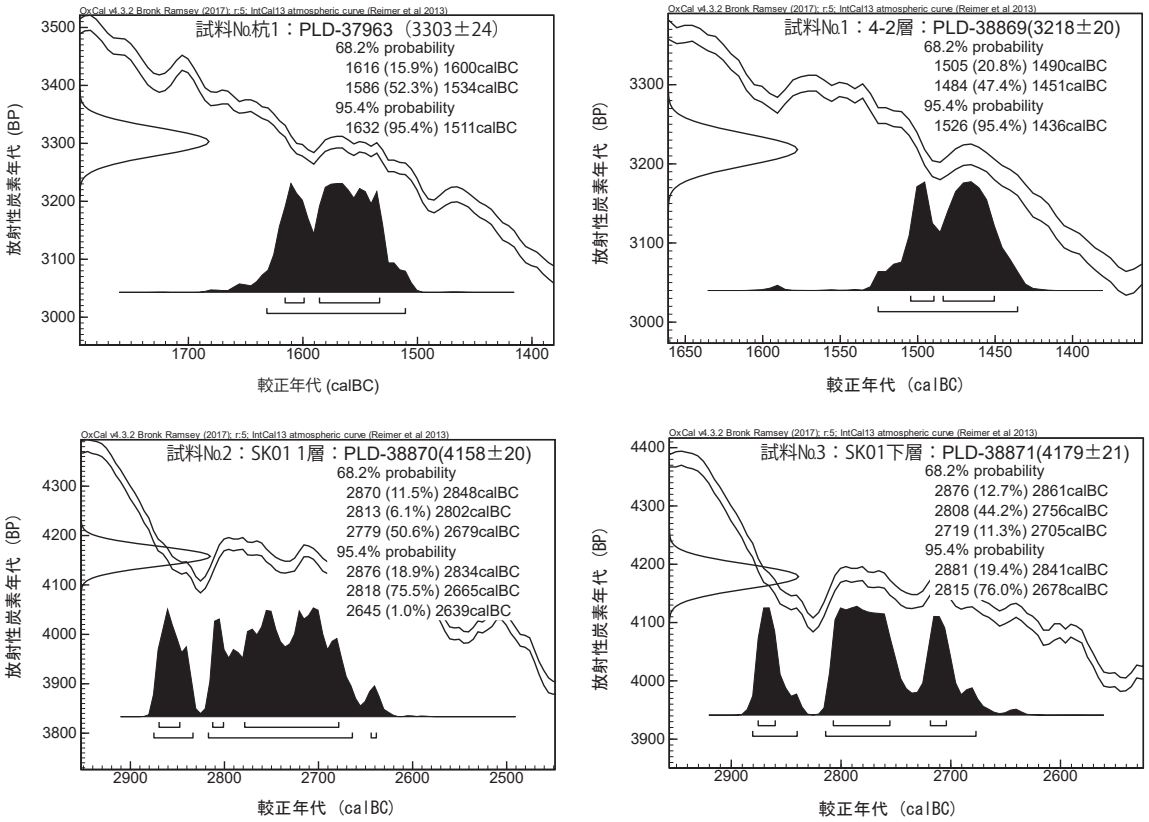
植物珪酸体化石群種の特徴としてシイノキ属、クスノキ科などの樹木由来の植物珪酸体が全試料から検出された。ササ類ではミヤコザサ節型の検出密度が高く、チマキザサ節型が次いだ。一方ネザサ節型の検出密度は低く、メダケ節型は全く検出できなかった。この外、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａ型がほとんどの試料から検出された。

5) AMS 年代測定結果

測定結果を第14表、第86図に示す。また第14表には、試料の詳細、前処理方法、δ^{13}C値と測定年代など４種類の年代を示している試料ごとに確率分布と２σの校正範囲を示している。第86図

第14表　年代測定結果

試料				前処理	δ^{13}C (‰)	δ^{13}C補正無年代 (yrBP±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		測定番号
試料No.	出土地点(遺構ほか)	状況	重量(g)						1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
杭1	4-2層 杭1	木材（杭材）	6.7795	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)	-25.77 ±0.21	3316±25	3303±24	3305±25	1616-1600 cal BC (15.9%) 1586-1534 cal BC (52.3%)	1632-1511 cal BC (95.4%)	PLD-37963
1	4-2層	炭化材	0.2823	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)	-27.77 ±0.17	3264±21	3218±20	3220±20	1505-1490 cal BC (20.8%) 1484-1451 cal BC (47.4%)	1526-1436 cal BC (95.4%)	PLD-38869
2	SK01 1層	炭化材	1.5121	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)	-26.74 ±0.22	4187±21	4158±20	4160±20	2870-2848 cal BC (11.5%) 2813-2802 cal BC (6.1%) 2779-2679 cal BC (50.6%)	2876-2834 cal BC (18.9%) 2818-2665 cal BC (75.5%) 2645-2639 cal BC (1.0%)	PLD-38870
3	SK01 下層	炭化材	0.0278	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L,水酸化ナトリウム:1.0 mol/L,塩酸:1.2 mol/L)	-26.83 ±0.22	4209±21	4179±21	4180±20	2876-2861 cal BC (12.7%) 2808-2756 cal BC (44.2%) 2719-2705 cal BC (11.3%)	2881-2841 cal BC (19.4%) 2815-2678 cal BC (76.0%)	PLD-38871



第86図　暦年較正結果

には、OxCal ver. 4.3（Ramsey, 2009）による試料ごとの暦年較正図で示した。

花粉化石が含まれなかった原因について

花粉分析の結果、ほとんどの試料で花粉・胞子化石含有量が100粒/g以下と少ないことが明らかになった。一方、微化石概査では微粒炭、植物珪酸体の含有量は多く、植物片は少なかった。また、珪藻化石は全く検出できなかった。

花粉化石の含有量が少ない原因について、一般には以下のようなことが考えられており、今回の微化石検出傾向と比べると、以下のようになる。

1．堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。

今回の分析層準（試料）では、砂質、あるいは礫混じりの層（試料）があるものの、シルト～粘土が主体であり、このことが原因とは考えにくい。

2．堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石の含有量が少ない。

花粉の生産量が毎年ほぼ一定であると仮定すると、堆積速度が速いほど花粉化石の含有量は少なく、遅いほど含有量は多くなる。また、花粉化石に限らず、堆積中に付加される微化石の量は、堆積速度が遅いほど多くなる。

微粒炭、植物珪酸体の含有量が多かったことから、このことが原因とは考えにくい。

3.「土壌生成作用」の及ぶ期間が短く、花粉の付加量が少なかった。

「土壌生成作用」に伴って花粉粒が、炭片、植物片などの有機物とともに、堆積面から地中に取り込まれる場合もある。年間「付加量」が一定と仮定すると、「土壌生成作用」を受けた期間の長短に

よって、含有量の多少が決まる。

微粒炭、植物珪酸体の含有量が多かったことから、このことが原因とは考えにくい。

4．堆積の過程で、花粉粒が紫外線により消滅した。

一般に、花粉化石は紫外線によって劣化・消滅する。花粉粒は、地表面に落下した直後から、紫外線の影響下に置かれる（例えば畑作環境）が、水中で堆積した場合（例えば水田環境）、紫外線が遮断され、影響は軽減される。花粉分析結果では、コウヤマキ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属の外、胞子などが、選択的に高率を示す傾向にある。また、後述の「堆積後の化学変化による劣化・消滅」との区別は困難である。

今回の花粉分析結果では、コウヤマキ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属の検出量も少ないが、胞子の割合が極めて高い。また、紫外線の影響を受けにくい微粒炭や植物珪酸体分析の含有量が相対的に多いことなど、紫外線の影響で花粉粒が劣化・消滅した可能性が指摘できる。

5．花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。

花粉粒や植物片などの有機物、珪藻や植物珪酸体など鉱物質のものも、グライ化などの化学変化に伴い（程度に差があるものの）分解してしまう（堆積後の化学変化は酸化鉄や酸化マンガンの沈着として現れ、多くは水田耕作における灌漑によるグライ化（鉄、マンガンの還元作用）と落水による鉄、マンガンの酸化作用の結果と考えられる。）。一方炭片は化学的に安定しており、堆積後に消滅することがない。花粉分析結果では、コウヤマキ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属の外、胞子などが、選択的に高率を示す傾向にある。また、前述のように「紫外線による劣化・消滅」との区別は困難である。

今回の分析層準（試料）のうち、5層ではグライ化が認められた。一方、花粉分析結果では胞子の割合が高く、堆積後の化学変化（あるいは紫外線）による影響を示唆する結果が得られている。さらに、化学変化に安定な炭片の含有量が多く、堆積後の化学変化の影響で花粉粒が劣化・消滅した可能性が指摘できる。

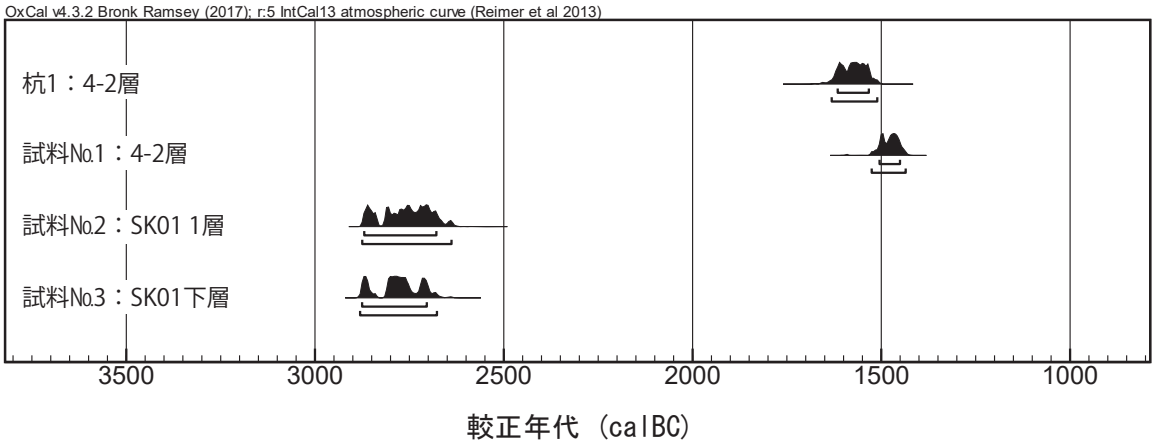
6．有機物に極めて富む堆積物で、花粉以外の有機物（微粒炭、植物片など）が多く、希釈効果により花粉化石が回収できなかった。

多くの試料で花粉分析プレパラート内での微粒炭の含有量が多かった。一方、花粉・胞子化石含有量は数粒/g以下になるような極端に含有量の少ない試料は少なかった。これらのことから、花粉化石と比重の近い炭片や植物片が多量に含まれていたことによって花粉粒の濃縮が進まなかったことにより、花粉・胞子の検出量が少なかったと考えられる。

以上のことを整理すると、本来多量に含まれていたであろう花粉・胞子化石が堆積後のグライ化（あるいは堆積中に受けた紫外線）、の影響により分解・消滅した。さらに、グライ化（あるいは堆積中に受けた紫外線）の影響を受けない微粒炭による希釈効果により、花粉・胞子化石の相対的量が減少したと考えられる。

古植生及び土地利用（堆積環境）について

出雲平野南西部に位置する神西湖周辺では、近年山陰道建設に伴う発掘調査の際に花粉分析等自然科学分析が行われている。京田遺跡でも島根県教育庁埋蔵文化財センター、出雲市による発掘調査に伴い、花粉分析が実施されている。これらの結果を概観すると、中世以降の堆積物では花粉・



第87図　暦年較正結果一覧

胞子化石の含有量が多い。一方、今回と同層準の堆積物では花粉･胞子化石の含有量が少なかった。また、京田遺跡３区では今回の分析層準での花粉分析が実施されており、やはり花粉・胞子化石の含有量が少なかった。

年代測定値について

第87図に示したように、4-2層を対象とした杭1、試料№1から3,305±25yrBP（1,632-1,511calBC）、3,220±20yrBP（1,526-1,436calBC）：縄文時代後期の年代が得られた。4-2層から縄文時代後期の遺物が出土しており、妥当な値と考えられる。またSK01を対象とした試料№2：1層、試料№3：下層から4,160±20yrBP（2,876-2,639calBC）、4,180±20yrBP（2,881-2,678calBC）：縄文時代中期と、ほぼ一致する年代が得られた。SK01は4-2層の下位、5層上面の遺構であり、4-2層とSK01との関係も、矛盾のないデータが得られたことになる。

古植生について

植物珪酸体分析結果・花粉分析結果を基に、調査地周辺の古植生について考察する。

植物珪酸体分析結果では、分析を行った地層間での顕著な差は認められなかった。また、含有量が少なかった花粉分析結果でも同様である。

水辺にはヨシ類が、やや離れるとススキ類やチガヤ類が繁茂していたと考えられる。また、シイノキ属、クスノキ科の植物珪酸体が検出される。花粉分析では僅かであるがアカガシ亜属も検出され、これらの樹種を要素とする照葉樹林が、周囲の丘陵に分布していたと考えられる。また、花粉分析ではマツ属（複維管束亜属）も僅かであるが検出される。森林内のギャップや崩壊地などにアカマツが分布していたと考えられる。あるいは時期的に、常楽寺川が成す沖積平野が今ほど広がっておらず、今より海岸（湖岸？）が近かった可能性もあり、海岸（湖岸？）に分布したクロマツ海岸林の影響とも考えられる。

検出量の多いササ類は、ササ草原を成していたか、照葉樹林の林縁に分布していたと考えられる。また、メダケ率が低いことからやや冷涼な気候が推定できる。

胞子で多量に検出されたオシダ科-チャセンシダ科のうちオシダ類は、陽当たりの良い湿地を好むことから、水辺に近くに生育していたと考えられる。また、イノモトソウ属は崖面でよく生育する種類であり、調査地背後の崖面に生育していた可能性がある。

まとめ

京田遺跡において、種実同定、花粉分析、植物珪酸体分析、AMS 年代測定を実施した。この結果、以下の事柄が明らかになった。

1) AMS 年代測定値として 4-2 層から縄文時代後期、下位の遺構（SK01）から縄文時代中期の年代値が得られた。これらの値は、検出層準の出土物から推定される堆積時期あるいは上下関係と一致していた。

2) 種実同定の結果、8 分類群 11 部位の種実と、同定不能の 3 分類群を識別する事が出来た。

3) 花粉・胞子化石含有量が少なかった原因について考察した。この原因として堆積後のグライ化（あるいは、堆積中の紫外線）の影響が強いと考えられる。また、微粒炭による希釈効果も強く影響していると考えられる。

4) 花粉分析結果、植物珪酸体分析結果から、縄文時代後期の古植生を推定した。特筆すべき点は、以下の事柄である。

周辺の丘陵にはカシ類、シイ類、クスノキ類を主要素とする照葉樹林で覆われていた。また、神西湖の湖岸線（あるいは日本海の海岸線）が現在より近く、クロマツ海岸林が分布していた可能性がある。

調査地近辺ではヨシ類が生育していたほか、オシダ類の生育も予想される。やや離れたススキ類やチガヤ類、ササ類が草地を形成しいた。また、崖面にイノモトソウ類が生育していた。

【引用文献】

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

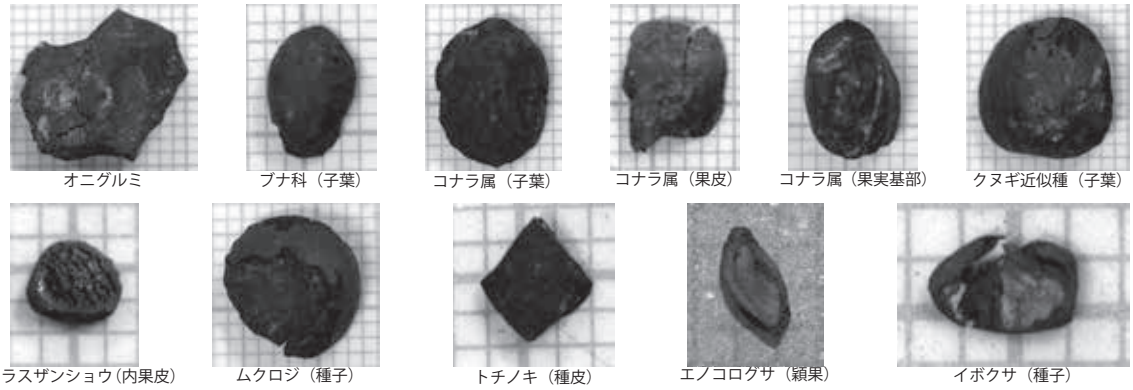
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15-29

中村　純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として. 第四紀研究, 13,187-197.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

渡辺正巳（2010）花粉分析法．必携 考古資料の自然科学調査法，174-177. ニュー・サイエンス社.

渡辺正巳（2018）京田遺跡発掘調査に係る花粉分析及び種実同定．のの子谷横穴墓群・京田遺跡3区 一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，3，95-98，島根県教育委員会.



種実写真　※背景は 1㎜方眼

第３節　中上Ⅱ遺跡における堆積相観察

渡辺正巳：文化財調査コンサルタント (株)

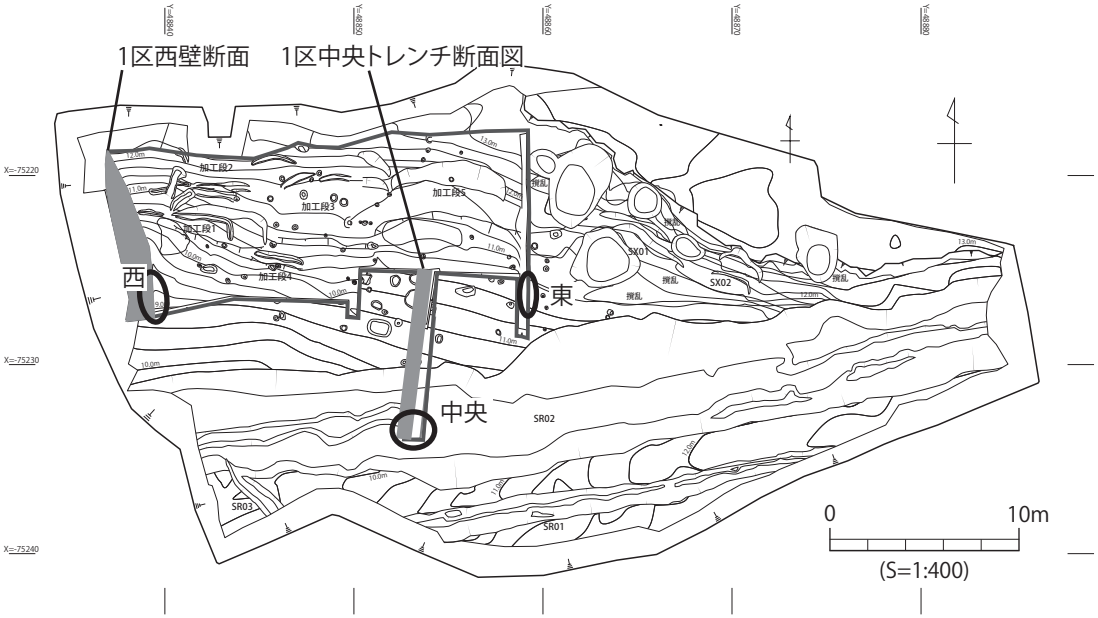
はじめに

中上Ⅱ遺跡は島根県東部の出雲市東神西町麓に位置し、中国山地北縁の丘陵を下刻する小谷が盆地に差し掛かる直前の位置に立地する。本報は、中上Ⅱ遺跡内の堆積環境を明らかにする目的で、遺跡の堆積相観を行った。また、堆積物の給源を知る目的で、遺跡近辺の現地踏査を行った。

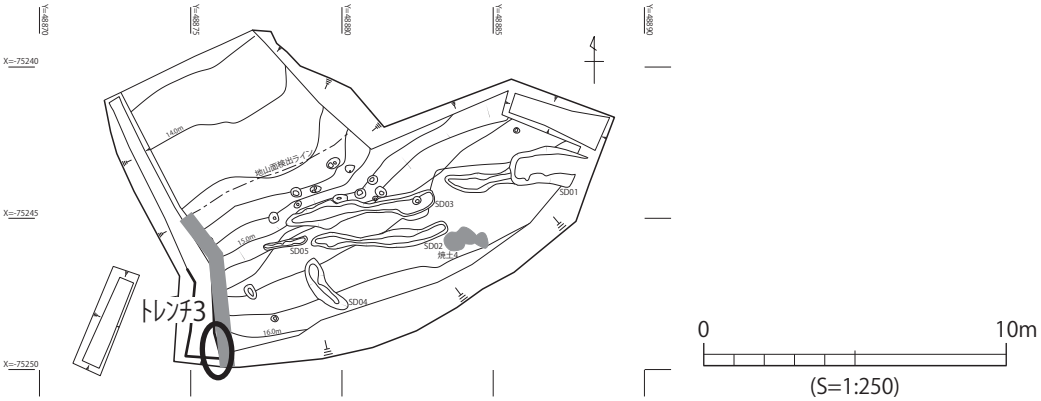
現地踏査・層相観察位置について

現地踏査は、中上Ⅱ遺跡を起点とし遺跡が立地する谷の上流（ため池）までの範囲とした。層相観察地点については、第88図(トレンチの配置：１区)、第89図2(トレンチの配置：2区) 中に示した。また、以下に示す平面図及び断面図は島根県教育庁埋蔵文化財センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

１区のトレンチ配置図を第88図に、2区のトレンチ配置を第89図に 示す。1区では「西」、「中央」、「東」の３地点で堆積相観察を行った。2区ではトレンチ3で、地滑り跡の「滑り面」を観察した。



第88図　トレンチの配置（1区 層相観察地点）



第89図　トレンチの配置（2区 層相観察地点）

現地踏査結果

発掘調査地の立地する谷筋沿いにため池までの間で、発掘調査地に土砂をもたらした可能性のある地滑り跡、土砂崩れ跡を探索した。この結果、２箇所の土砂崩れ跡と、１箇所の地滑り跡が見つかった。また、地滑りの可能性がある地形が１箇所あったが、現状が「墓地」であり、造成された可能性も指摘できる。以下に、４地点の状況を示す。

(1) 土砂崩れ１

第90図に「土砂崩れ１地点：ため池～滝間」の現状写真(左）と解析結果（右）を示す。

(2) 土砂崩れ２

第91図に「土砂崩れ２地点：滝～発掘地点間」の現状写真(左）と解析結果（右）を示す。

(3) 地滑り跡

第92図に「地滑り地点：２区南側」の現状写真(上）と解析結果（下）を示す。

半円形の地形を成し上部に滑落崖を持つ、典型的な地滑り地形である。２区そのものが「地滑り土塊」と考えられる。２区上面にはほぼ水平な遺構面が検出されており、その後動いた形跡はない。ただし、崩落土（地滑り土塊とは異なる）上に根元から曲がる木々が認められることから、この部分の土砂が崩落してから数年以上が経過していると推定できる。

また、水路の石垣が地滑りの防止効果を併せ持った構造である可能性がある。

２区南側で認められた地滑り(第92図)の「滑り面」が､２区トレンチ３において観察できた(第93図)。ここでは、地山と地滑り土塊が接する面（滑り面）に「擦痕:地滑り土塊と地山が接した面に、地滑り土塊が滑り落ちる際に形成された線状の痕跡」と考えられる痕跡を認めることができた。

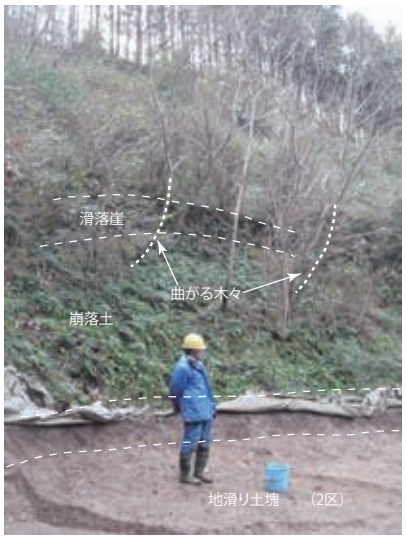
(4) 地滑りの可能性がある場所

第94図に「地滑りの可能性がある場所：１区北側 墓地」の現状写真を示す。

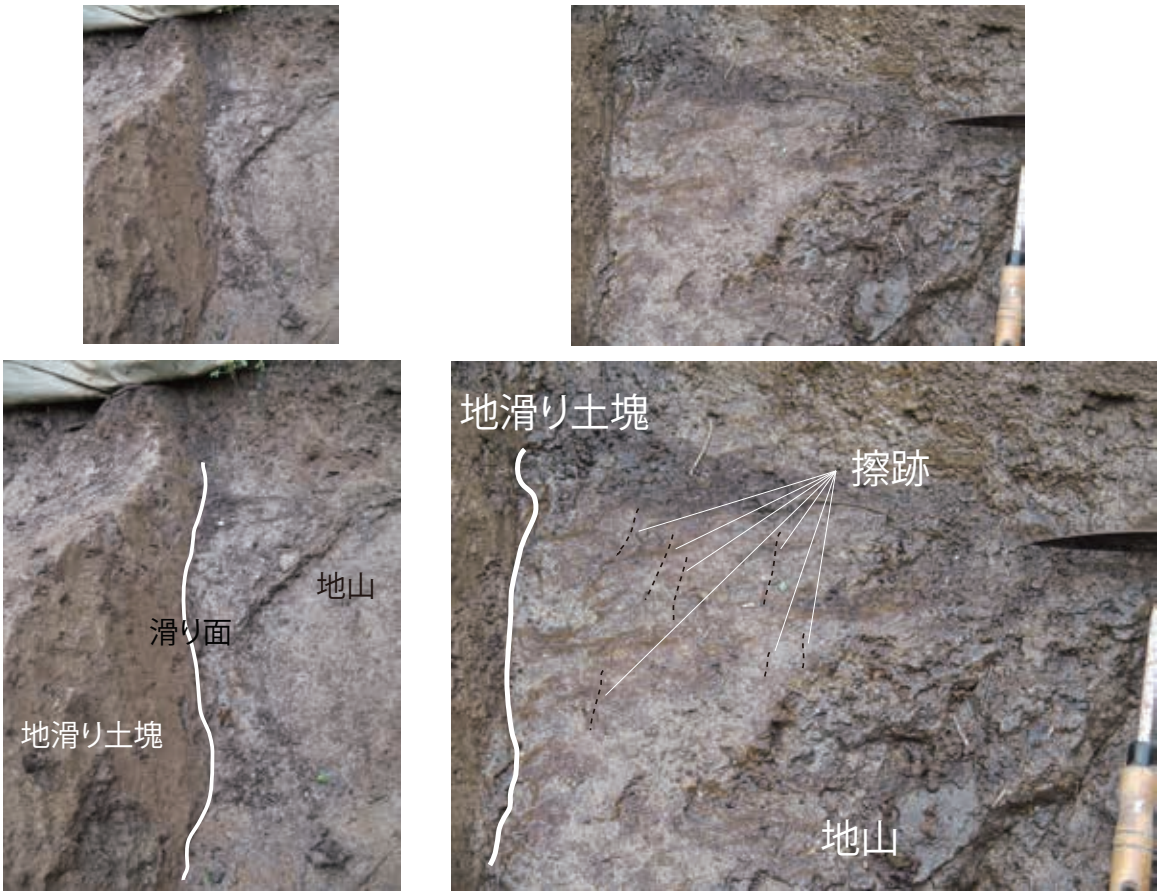
半円形の地形を成し、滑落崖の可能性のある段差がある。同様の地形は造成に寄っても容易に形成されることから、地滑り跡と判断できなかった。

第90図　土砂崩れ1（ため池～滝間：左岸の小谷）

第91図　土砂崩れ2（滝～発掘地点間：右岸　左：拡大　右：遠景）



第92図　2区南側に認められた地滑り跡１（左：遠景　右：拡大）



第93図　2区南側に認められた地滑り跡２（2区 トレンチ3　左：遠景　右：拡大）

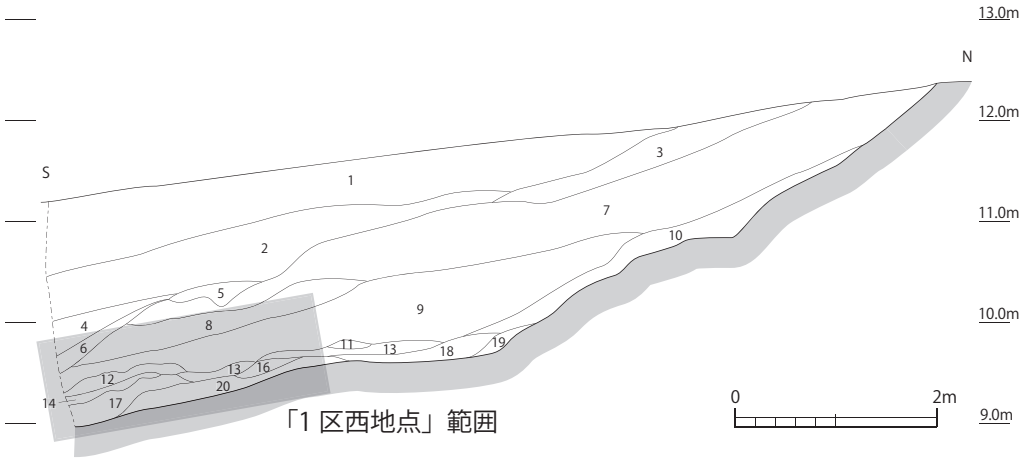
第94図　トレンチ壁面観察結果1区北側墓地

トレンチ壁面観察結果

(1) １区西地点

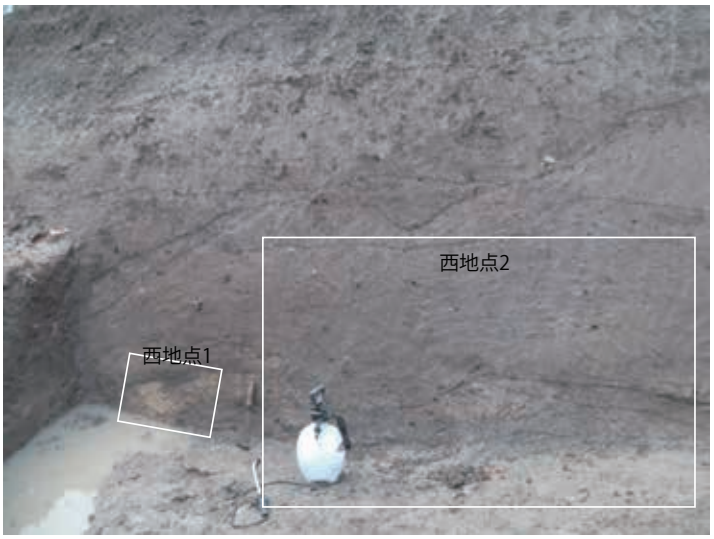
１区西壁断面図（第９５図 ）中に、「１区西地点」として詳細観察を実施した範囲 を示す。更に第９６図に、１区西地点１、２の位置を示す。

「自然堆積物」では、堆積した場所を問わず粒径が揃う傾向にある。また河川など緩やかな流れのある場所では、堆積物粒子が配列する傾向にある。例外的に「土石流堆積物」や「崩落土」などで

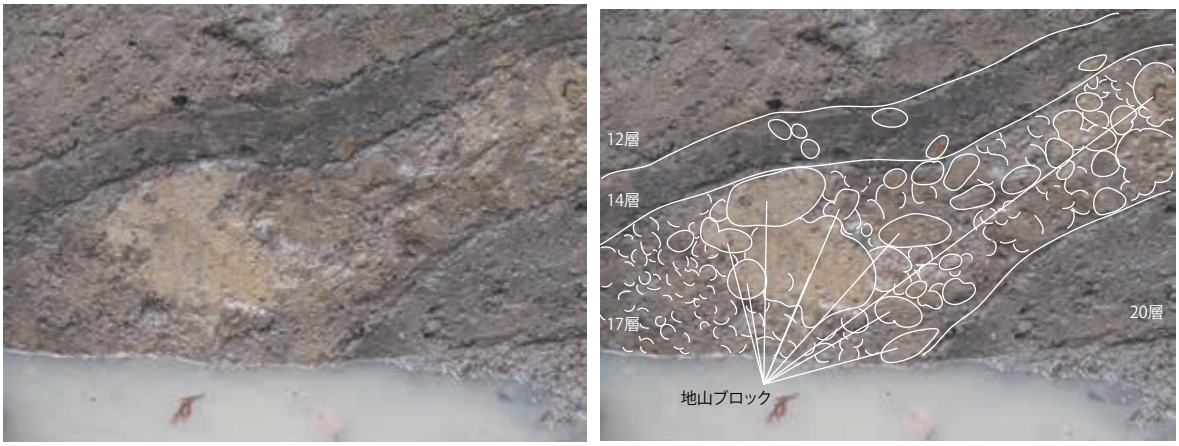


1. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) しまりゆるい。砂粒をまばらに含む。
2. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) しまりややゆるい。砂粒や地山ブロックをまばらに含む。
3. 黄褐色粘質土 (10YR5/6) しまりややゆるい。砂粒をまばらに含む。
4. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 固くしまる。砂粒や地山ブロックをまばらに含む。
5. 褐色粘質土 (10YR4/4) 固くしまる。砂粒や黄色ブロックをまばらに含む。
6. 褐灰色粘質土 (10YR4/1) 固くしまり粘性強い。砂粒を少量含む。
7. 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/6) 固くしまる。砂粒や黄色ブロックをまばらに含む。
8. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) 固くしまり、砂粒や黄色ブロック、炭化物をまばらに含む。
9. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/4) 固くしまり、砂粒や黄色ブロック、炭化物をまばらに含む。
10. オリーブ褐色粘質土 (2.5Y4/4) 固くしまり、砂粒や黄色ブロック、炭化物をまばらに含む。
11. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y4/2) 黄色ブロックを多く含む。
12. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 砂粒や黄色ブロック、炭化物を多く含む。
13. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) 砂粒や黄色ブロック、炭化物を多く含む。
14. 黒褐色粘質土 (2.5Y3/1) 砂粒や黄色ブロック、炭化物を多く含む。
15. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 黄色ブロックがつまる。
16. 明黄褐色粘質土 (2.5Y6/8) 黄色粘土ブロックや礫、炭化物を含む。
17. 黄褐色粘質土 (2.5Y7/8) 黄色粘土ブロックや礫、炭化物を含む。
18. 暗灰黄色粘質土 (2.5Y5/2) 砂粒や黄色ブロック、炭化物をまばらに含む。
19. 黄褐色粘質土 (2.5Y5/3) 砂粒や黄色ブロックを多く含む。
20. 灰オリーブ色粘質土 (5Y5/2) 砂粒や黄色ブロック、礫、炭化物を多く含む。固くしまる。

第95図　1区西壁断面図(観察範囲：西地点の位置)

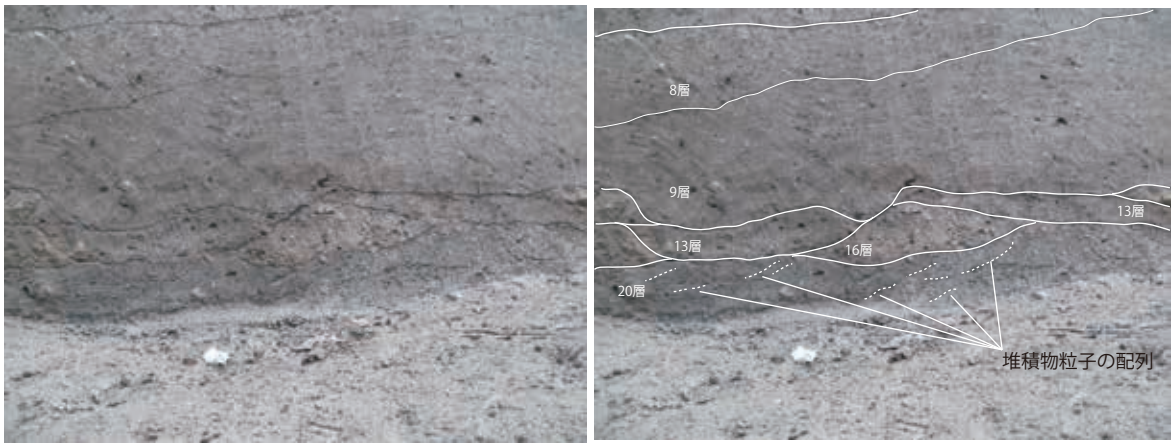


第96図　1区西地点(詳細観察範囲)

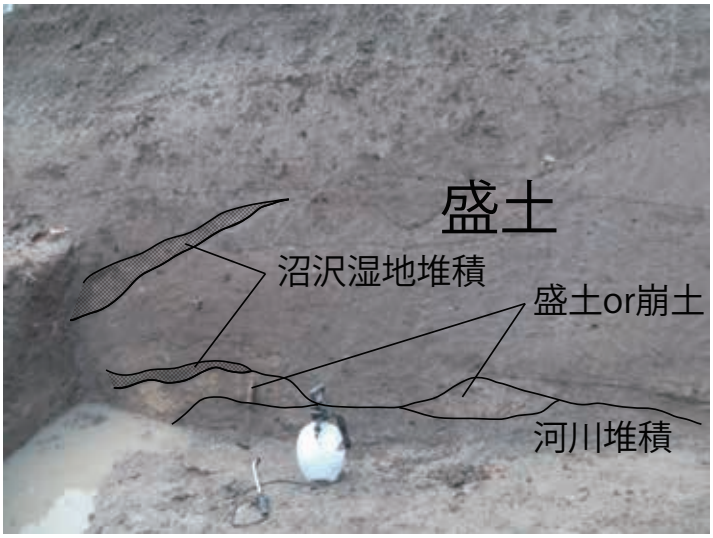


第97図　西地点1

は、大小様々な径の礫や粘土粒子が混在する。これに対し人工的な「盛土」では様々な大きさの礫やブロックが混在し、堆積物粒子の配列も認められない。時には土砂の運搬に用いたブロックや土嚢の痕跡が認められることもある。



第98図　西地点2



第99図　西地点まとめ

以下では、写真（第97図～）に各層の特徴を示すとともに、層ごとに特徴を記し、堆積環境を示す。

① 西地点 1(14 層、17 層）

14層:小ブロック、砂粒を含む が、腐植（有機物）に富む粘土が主体を成す。腐植（有機物）に富む粘土は、一般に安定した水域（沼沢湿地）での「自然堆積物」を示唆する。小ブロック、砂粒は、根や底生生物による擾乱、あるいは上位の12層を造成する際の擾乱と考えられる。観察地点から外れるが、同様の特徴は6層でも認められる。

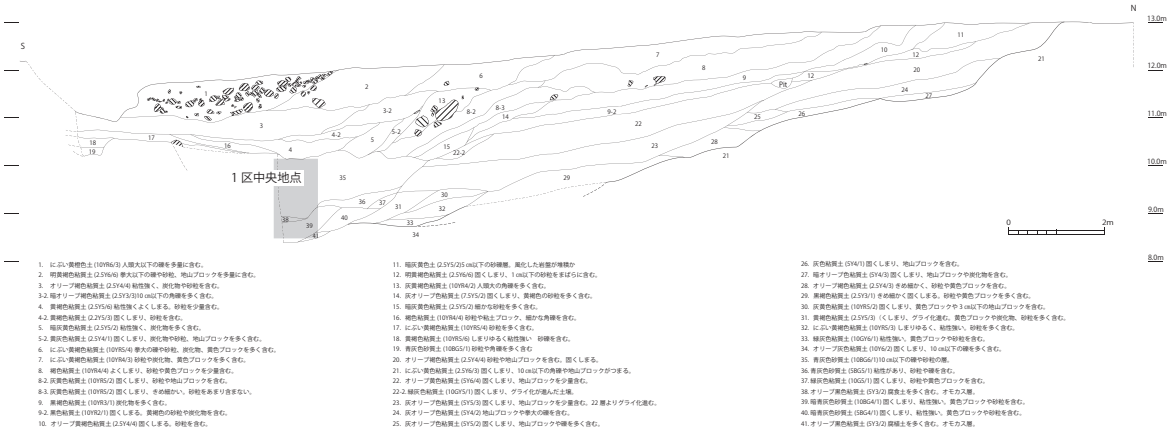
17層:多くの大小地山ブロックや礫から成る。盛土の可能性のほか、何らかの原因で北側斜面が崩れ、堆積したものと考えられる。

② 西地点 2(8 層、9 層、13 層、16 層、20 層）

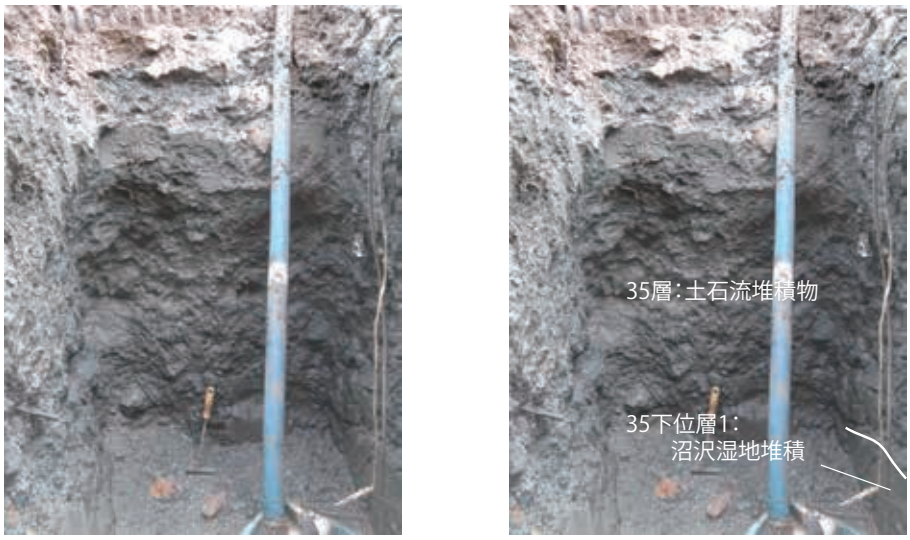
8層:粘土主体で粗砂～小礫を含み、堆積物粒子の配列も認められないことから、「盛土」の可能性が最も高い。

9層：粘土主体で粗砂～小礫を含み、堆積物粒子の配列も認められない。前述の8層の特徴とも重なり、「盛土」の可能性が最も高い。

13層：8、9層に比べ粗粒であるが、堆積物粒子の配列も認められない。盛土であるが、下位の16層との間で擾乱が起こった可能性がある。



第100図　1区中央トレンチ断面図(観察範囲：1区中央地点の位置)



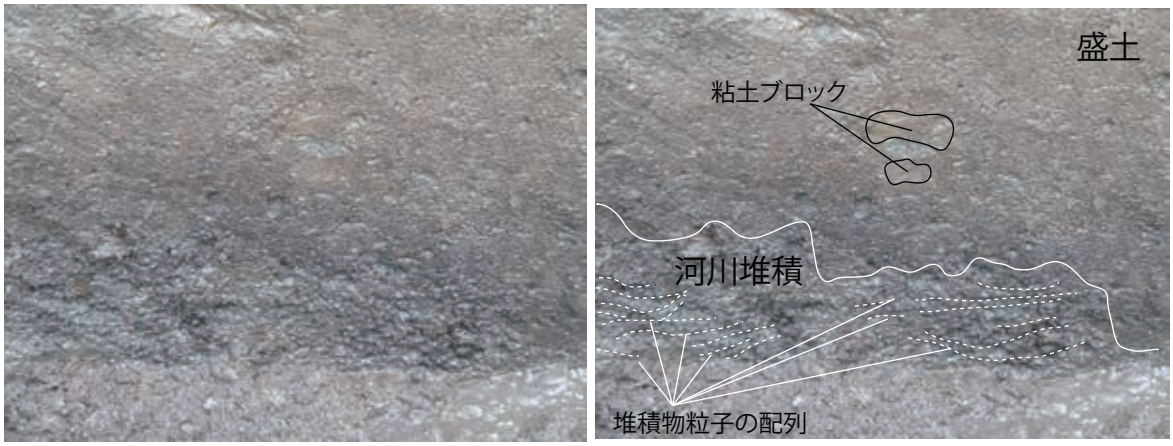
第101図　1区中央地点(トレンチ南壁)

第102図　1区 中央地点(トレンチ西壁南側)

16層：13層に比べ粗粒であるが、堆積物粒子の配列も認められない。盛土の可能性のほか、何らかの原因で北側斜面が崩れ、堆積したものと考えられる。

20層：小ブロック、砂粒から成り、堆積物粒子の配列が認められることから、緩やかな流れのある水域（河川）で堆積したと考えられる。

第103図　1区東トレンチ(詳細観察範囲：1区東地点)



第104図　1区東地点

(2) 1 区中央地点

1区中央トレンチ断面図（第100図）中に､｢1区中央地点」として詳細観察を実施した範囲を示す。

ここでは、トレンチ突き当たりの断面と、西壁の一部を観察した。ただし、第100図中の地層番号との対応が一部ではできたが、できなかった部分もあった。

35層:大小の礫からなり、礫と礫の間を細粒堆積物が埋めることから、土石流堆積物と考えられる。

35下位層1：断面図（第100図）内で対応する層は不明。有機質粘土からなり、安定した水域（湖沼や湿地）での「自然堆積物」を示唆する。

35下位層2：断面図（第100図）内で対応する層は不明。大小の礫からなり、礫と礫の間を細粒堆積物が埋めることから、土石流堆積物と考えられる。

(3) 1 区東地点

第103図に、1区東地点の位置を示す

上部:粘土主体で粗砂～小礫、粘土ブロックを含み、堆積物粒子の配列も認められないことから、「盛土」の可能性が最も高い。

下部:砂粒から成り、堆積物粒子の配列が認められることから、緩やかな流れのある水域（河川）で堆積したと考えられる。

第４節　中上Ⅱ遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1.　測定対象試料

中上Ⅱ遺跡は、島根県出雲市東神西町中上に所在する。河川に面した狭長な谷間の平坦面に１区、丘陵斜面に２区がそれぞれ位置する。測定対象試料は、１区の焼土面（焼土面１～３）、焼土土坑（SK03）、２区の焼土面（焼土面４）の５つの遺構からそれぞれ３点ずつ採取した炭化物および木炭の合計15点である（第15表）。１区で検出された遺構は、中世前半期とみられる盛土造成面及びその周辺部に形成されているが、焼土面付近からは弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器が出土している。

2.　測定の意義

遺構の年代を特定することで盛土造成および遺構面の時期を明らかにする。

3.　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 15 表に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4.　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5.　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第 15 表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 15 表に、補正していない値を参考値として第 16 表に示した。^{14}C 年代と誤差は、

下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（3）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を第 15 表に、補正していない値を参考値として第 16 表に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ＝ 68.2％）あるいは 2 標準偏差（2 σ＝ 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.3 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については､特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 16 表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6.　測定結果

測定結果を第15表、16表に示す。

1区焼土面1 ～ 3から出土した試料9点（試料1-1 ～ 3-3）の ^{14}C年代は、2040 ± 20yrBP（試料1-3）から1800 ± 20yrBP（試料3-3）の間にまとまっている。暦年較正年代（1 σ）は、最も古い試料1-3が2037 ～ 1949cal BPの間に2つの範囲、最も新しい試料3-3が1808 ～ 1705cal BPの間に3つの範囲でそれぞれ示され、弥生時代中期から後期頃に相当する（藤尾2009、小林 2009）。盛土が造成されたとされる中世前半期より古く、焼土面周辺で出土した土器の年代とおおむね一致する結果となった。

1区SK03（焼土土坑）から出土した試料3点の ^{14}C年代は、試料4-1が630 ± 20yrBP、試料4-2が640 ± 20yrBP、試料4-3が650 ± 20yrBPである。暦年較正年代（1 σ）は、試料4-1が653 ～ 561cal BP、試料4-2が655 ～ 562cal BP、試料4-3が659 ～ 564cal BPの間にいずれも2つの範囲で示される。13世紀末から14世紀末頃で中世の前半期頃に相当し（佐原 2005）、推定された盛土造成期を含むまとまった年代値となった。

2区焼土面4から出土した試料3点の ^{14}C年代は、試料5-1、5-3が380 ± 20yrBP、試料5-2が2040 ± 20yrBPである。暦年較正年代（1 σ）は、試料5-1が497 ～ 335cal BP、試料5-2が2037 ～ 1947cal BP、試料5-3が498 ～ 335cal BPの間にいずれも2つの範囲で示される。試料5-1、5-3が15世紀半ばから17世紀前葉頃（中世から近世頃）、試料5-2が弥生時代中期から後期頃に相当する（佐原 2005、藤尾2009、小林 2009）。

なお、今回測定した試料はいずれも木炭か木炭とみられる炭化物の小片であることから、以下に

記述する古木効果に注意する必要がある。樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す（古木効果）。今回測定された試料はすべて樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

また、試料1-1、1-2、2-1 ～ 2-3、3-1 ～ 3-3の８点が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜2009、坂本2010など）。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料８点の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は、試料1-2、1-3、3-3、5-1を除く11点で58％を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。上記11点を除く試料４点の炭素含有率は、試料1-2が10％、試料1-3が2.7％、試料3-3が15％、試料5-1が24％と炭化物としてはいずれも低い値となっている。土が多く混入しており、測定された炭素の由来に注意する必要がある。

第15表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C(‰) (AMS)			δ ^{13}C 補正あり					
								Libby Age（yrBP）			pMC (%)		
IAAA-190293	1-1	１区　焼土面１	炭化物	AAA	-28.25	±	0.19	1,930	±	20	78.66	±	0.23
IAAA-190294	1-2	１区　焼土面１	炭化物	AaA	-28.56	±	0.20	1,860	±	20	79.32	±	0.22
IAAA-190295	1-3	１区　焼土面１	炭化物	AaA	-25.91	±	0.22	2,040	±	20	77.57	±	0.21
IAAA-190296	2-1	１区　焼土面２	炭化物	AaA	-27.77	±	0.24	1,930	±	20	78.69	±	0.22
IAAA-190297	2-2	１区　焼土面２	炭化物	AaA	-26.05	±	0.18	1,880	±	20	79.09	±	0.21
IAAA-190298	2-3	１区　焼土面２	炭化物	AAA	-25.56	±	0.19	1,880	±	20	79.13	±	0.22
IAAA-190299	3-1	１区　焼土面３	炭化物	AaA	-25.14	±	0.19	1,880	±	20	79.17	±	0.23
IAAA-190300	3-2	１区　焼土面３	炭化物	AAA	-26.15	±	0.21	1,940	±	20	78.55	±	0.21
IAAA-190301	3-3	１区　焼土面３	炭化物	AaA	-21.97	±	0.26	1,800	±	20	79.88	±	0.23
IAAA-190302	4-1	１区　SK03	木炭	AAA	-26.24	±	0.18	630	±	20	92.46	±	0.25
IAAA-190303	4-2	１区　SK03	木炭	AAA	-26.70	±	0.20	640	±	20	92.40	±	0.25
IAAA-190304	4-3	１区　SK03	木炭	AAA	-28.21	±	0.18	650	±	20	92.26	±	0.25
IAAA-190305	5-1	２区　焼土面４	炭化物	AaA	-25.20	±	0.21	380	±	20	95.39	±	0.25
IAAA-190306	5-2	２区　焼土面４	炭化物	AAA	-26.74	±	0.18	2,040	±	20	77.59	±	0.22
IAAA-190307	5-3	２区　焼土面４	炭化物	AAA	-24.59	±	0.17	380	±	20	95.37	±	0.25

[IAA 登録番号：#9653]

第16表　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C未補正値、暦年較正用 ^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし						暦年較正用 (yrBP)			1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)			pMC（%）							
IAAA-190293	1,980	±	20	78.13	±	0.22	1,928	±	23	1898calBP - 1863calBP (51.5%) 1846calBP - 1829calBP (16.7%)	1926calBP - 1823calBP (95.4%)
IAAA-190294	1,920	±	20	78.74	±	0.21	1,861	±	22	1861calBP - 1850calBP (7.5%) 1827calBP - 1774calBP (43.5%) 1760calBP - 1738calBP (17.2%)	1867calBP - 1728calBP (95.4%)
IAAA-190295	2,060	±	20	77.42	±	0.21	2,040	±	22	2037calBP - 2025calBP (9.6%) 2006calBP - 1949calBP (58.6%)	2102calBP - 2091calBP (1.7%) 2061calBP - 1928calBP (93.7%)
IAAA-190296	1,970	±	20	78.24	±	0.22	1,925	±	22	1895calBP - 1863calBP (49.6%) 1846calBP - 1829calBP (18.6%)	1924calBP - 1908calBP (7.7%) 1903calBP - 1822calBP (87.7%)
IAAA-190297	1,900	±	20	78.92	±	0.21	1,884	±	21	1868calBP - 1820calBP (68.2%)	1883calBP - 1773calBP (89.6%) 1761calBP - 1738calBP (5.8%)
IAAA-190298	1,890	±	20	79.04	±	0.21	1,880	±	21	1872calBP - 1816calBP (68.2%)	1879calBP - 1737calBP (95.4%)
IAAA-190299	1,880	±	20	79.15	±	0.22	1,875	±	22	1872calBP - 1811calBP (60.3%) 1790calBP - 1785calBP (2.3%) 1754calBP - 1743calBP (5.6%)	1875calBP - 1735calBP (95.4%)
IAAA-190300	1,960	±	20	78.36	±	0.21	1,939	±	21	1923calBP - 1910calBP (14.4%) 1902calBP - 1868calBP (53.8%)	1933calBP - 1825calBP (95.4%)
IAAA-190301	1,750	±	20	80.38	±	0.22	1,804	±	22	1808calBP - 1795calBP (8.8%) 1783calBP - 1755calBP (21.2%) 1741calBP - 1705calBP (38.2%)	1819calBP - 1694calBP (89.4%) 1652calBP - 1632calBP (6.0%)
IAAA-190302	650	±	20	92.23	±	0.24	629	±	21	653calBP - 634calBP (26.2%) 597calBP - 561calBP (42.0%)	660calBP - 623calBP (38.0%) 609calBP - 555calBP (57.4%)
IAAA-190303	660	±	20	92.08	±	0.24	635	±	21	655calBP - 635calBP (25.6%) 595calBP - 562calBP (42.6%)	663calBP - 626calBP (38.5%) 606calBP - 556calBP (56.9%)
IAAA-190304	700	±	20	91.65	±	0.24	647	±	21	659calBP - 642calBP (26.5%) 589calBP - 564calBP (41.7%)	666calBP - 631calBP (41.0%) 600calBP - 559calBP (54.4%)
IAAA-190305	380	±	20	95.35	±	0.25	379	±	21	497calBP - 456calBP (52.6%) 349calBP - 335calBP (15.6%)	504calBP - 428calBP (69.9%) 375calBP - 327calBP (25.5%)
IAAA-190306	2,070	±	20	77.32	±	0.22	2,037	±	23	2037calBP - 2026calBP (7.7%) 2005calBP - 1947calBP (60.5%)	2103calBP - 2089calBP (1.9%) 2062calBP - 1925calBP (93.5%)
IAAA-190307	370	±	20	95.44	±	0.24	381	±	20	498calBP - 456calBP (53.9%) 349calBP - 335calBP (14.3%)	505calBP - 428calBP (72.8%) 375calBP - 366calBP (1.3%) 360calBP - 328calBP (21.3%)

［参考値］

【文献】

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり　第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54

小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり　第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82

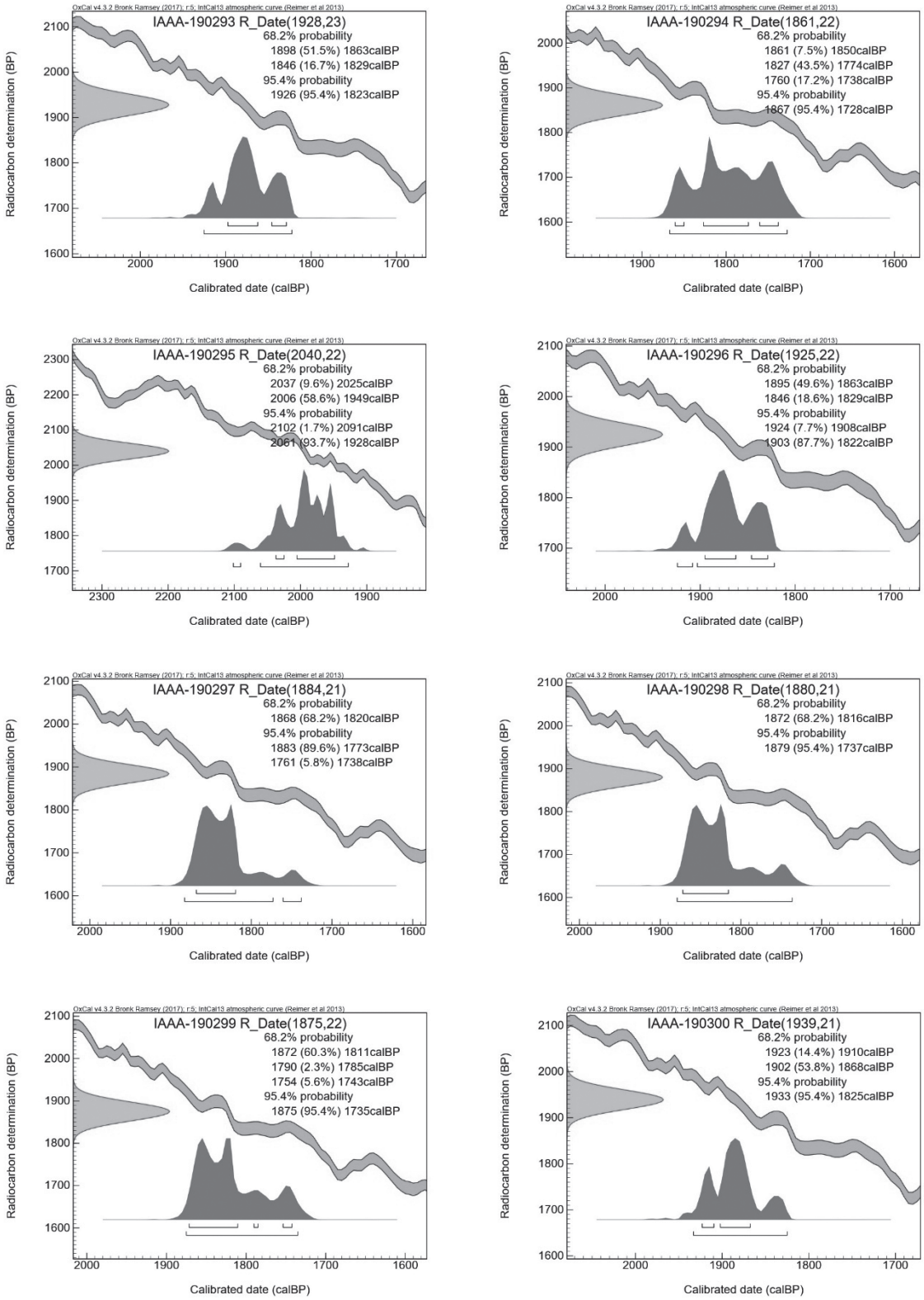
尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎,松木武彦編弥生時代の考古学1　弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

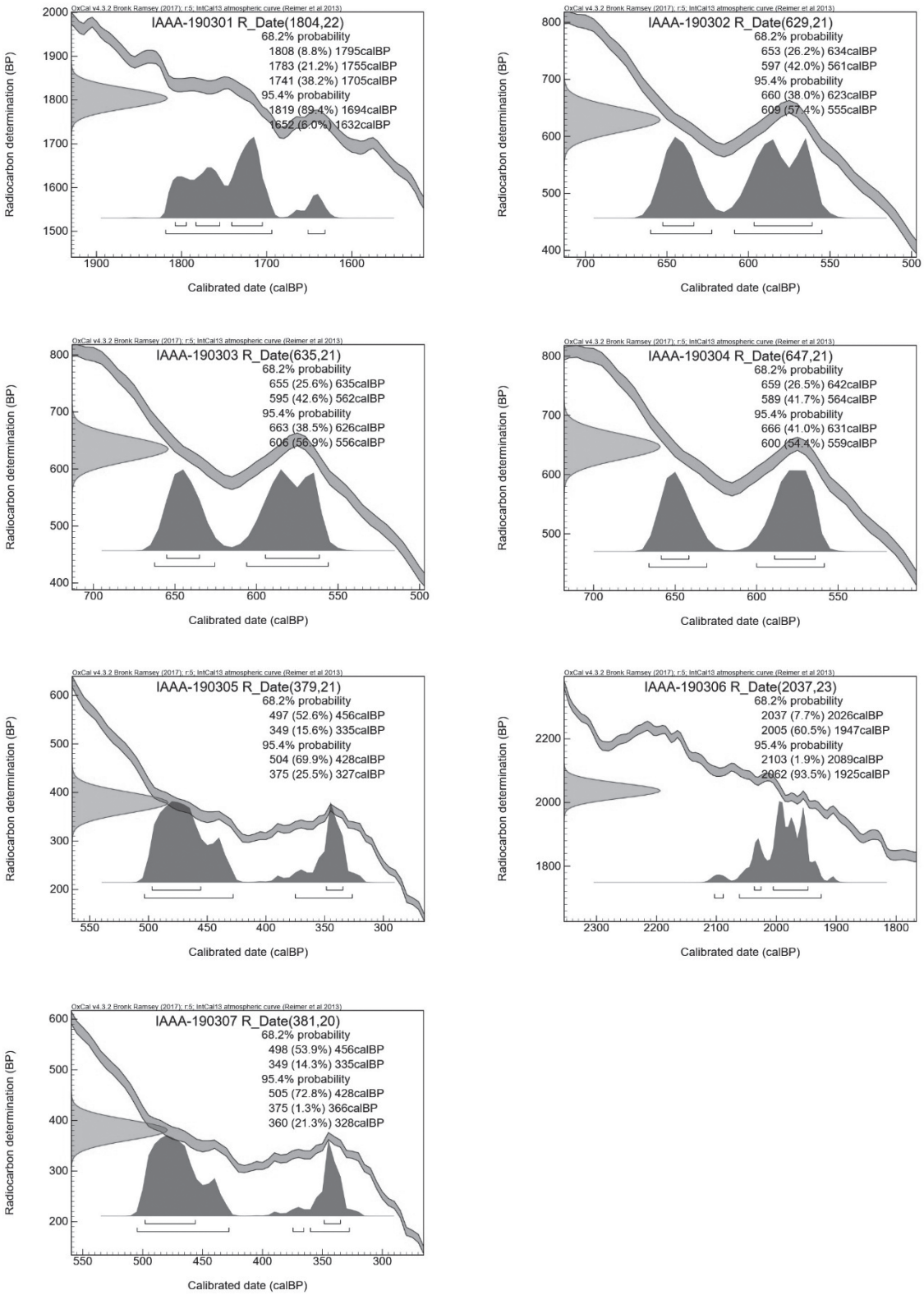
佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集, 日本の考古学上　ドイツ展記念概説, 学生社, 14-19

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木ー弥生から古墳へー, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, （株）加速器分析研究所, 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363



第105図　暦年較正年代グラフ（参考）(1)



第106図　暦年較正年代グラフ（参考）(2)

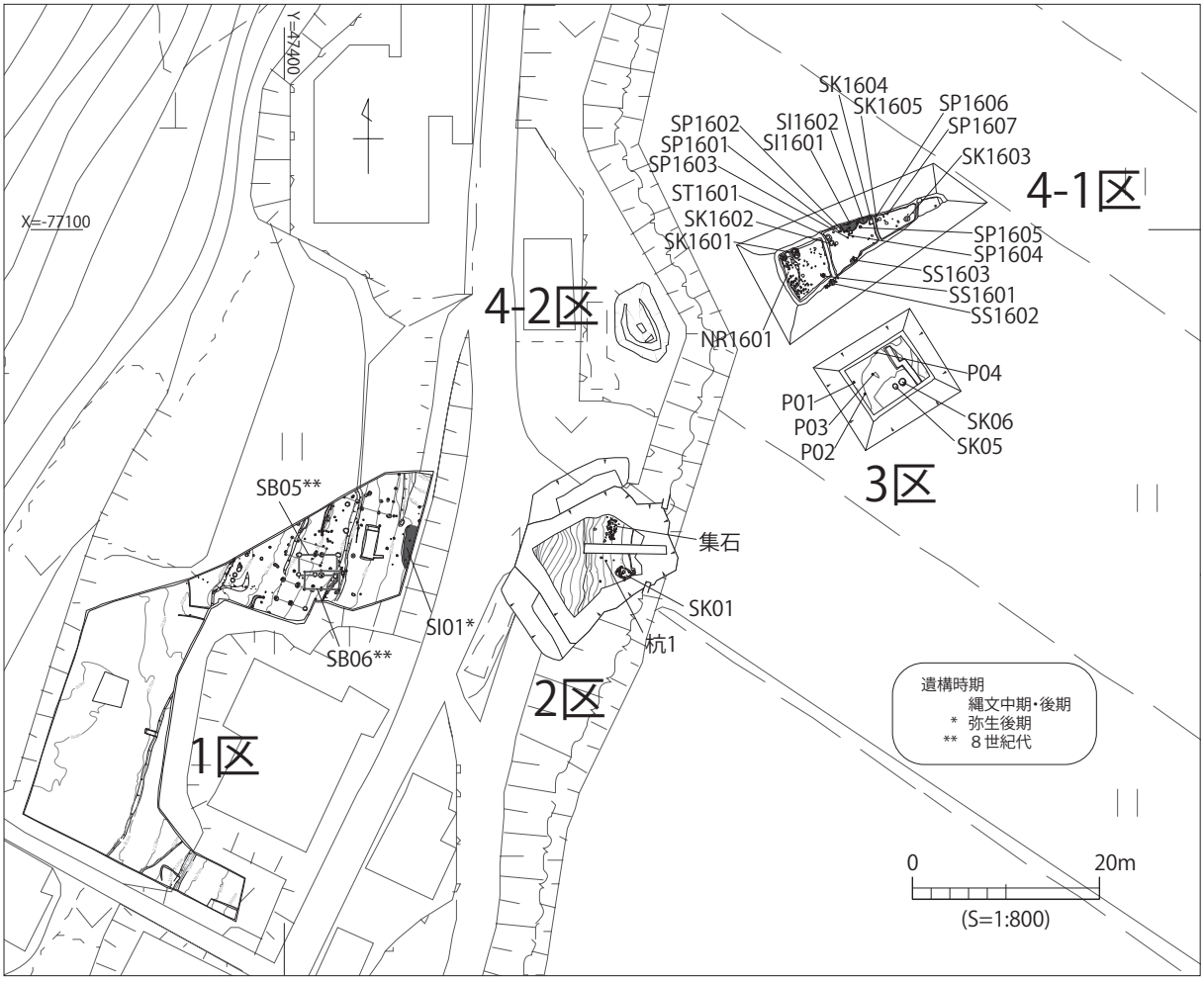
第６章　総括

第１節　京田遺跡２区

京田遺跡２区の成果は第３章でまとめたとおりである。今回の調査で確認された遺構・遺物からは、丘陵裾際における様相をうかがい知ることができ、遺跡の性格や縄文集落の広がりを検討するうえで貴重な資料となった。ここでは、これまで実施された１区（島根県2017）、３区（島根県2018）、４区（出雲市2019）の調査と合わせ、京田遺跡の様相と位置づけを行う。

1.　京田遺跡の様相

これまでの調査で京田遺跡では、縄文時代中期末から古代までの遺構が確認されているが、多数の遺構と遺物を検出した縄文時代後期を中心に述べる。京田遺跡出土の縄文土器については、幡中光輔氏によって後期中葉の土器編年が京田１～７期として示されている（出雲市2019）。出土土器の様相からは、２区の4-1層、４-2層に対応する３区の４層では、後期中葉でも前半の北白川上層式３期（京田１～３期）が主体を占め、4-1区ではそれに続く一乗寺Ｋ式と元住吉山Ⅰ式期（京田４～７期）の土器が目立つ。一方、今回調査した２区では前者の型式もわずかに認められるも、それらに後続する元住吉山Ⅱ式期や宮滝併行、滋賀里Ⅰ式併行が主体となることから、後期後葉～末まで



第107図　京田遺跡１～４区遺構配置図

丘陵裾際で集落が継続することがわかった。

京田遺跡で最も古い時期の遺構は、丘陵裾際の２区で確認した配石墓の可能性があるSK01で、中期末とされる。２区の５層を基盤とする当該期の生活面があったものと考えられるが、３区、4-1区では遺構が検出されないため、集落の様相は判然としない。これに続く中期末～後期初頭の遺構としては、２区の集石がみられる程度で、前葉にかけては遺物の出土量も少ないことから、居住域からやや離れていた可能性が考えられる。京田遺跡の主体と考えられる時期は後期中葉で、３区と4-1区で多くの遺構・遺物が確認されている。特に４-1区では、竪穴建物２棟をはじめ、墓と推定される配石土坑ST1601を含む多数の土坑の他、集石遺構や柱穴が確認されている。また、後期中葉の中でも、北白川上層式３期から一乗寺Ｋ式期までは、３区の廃棄土坑や４-1区の竪穴建物などにみる居住域が、後には４-1区ST1601などの葬送や祭祀に関わる遺構・遺物が集中する空間へと変遷していく様相が示され、遺構の広がりから周辺に集落が展開していることが指摘されている。（出雲市2019）。

第108図　縄文～弥生時代における京田遺跡と周辺の遺跡

以上のように、今回の調査によって京田遺跡は、丘陵縁辺部で縄文時代中期末～後期末まで継続して集落が営まれることがわかった。また、弥生時代後期と古代には丘陵上（1区）が居住域となり、遺跡内でも時期とともにその主体が変動していく様子がうかがえる（第107図）。

第17表　縄文～弥生時代における京田遺跡と周辺の遺跡消長表

		縄文時代							弥生時代		
	検出標高(m)	前期	中期	後期 初頭	後期 前葉	後期 中葉	後期 後葉	晩期	前期	中期	後期
京田１区	20~21										SI01
京田２区	12.0~12.2		SK01	集石							
京田３区	11.6					SK05 SK06					
京田4-1区	11.6~11.8					SI1601 SI1602 SK1601 SK1602 SK1604 SK1605 SP1606 SP1607 SS1601 ～1603 ST1601 SK1603					
御領田	12				SI01						
奥ノ谷	10~11										
庭反Ⅰ・Ⅱ	16~22										
三部竹崎	4.0~6.0										

※アミかけの濃淡は遺構・遺物の検出割合の大小を示す

2.　京田遺跡とその周辺（第 108 図）

京田遺跡が立地するこの谷部で最初に縄文集落の存在が示されたのは、常楽寺川を挟んで約150ｍ東の丘陵縁辺部で後期前葉の竪穴建物が確認された御領田遺跡の調査である（湖陵町 1994）。続いて、御領田遺跡から300ｍ下流側の奥ノ谷遺跡において、包含層から後期初頭の土器がまとまって出土し、集落の広がりが予想された（湖陵町 1995）。その後、京田遺跡３区、４区の調査によって、後期中葉を中心とする集落が確認され、常楽寺川流域の谷部全体に広がる様相が示された（島根県2017、出雲市2019）。このような状況をもとに、周辺の遺跡を含めた変遷の様相を大まかにまとめたのが第17表である。

常楽寺川を中心とする谷部における最初の遺跡として捉えられるのは京田遺跡である。４-1区で前期前葉の土器が出土したことによって、この時期の集落が存在する可能性が示された（出雲市2019）。明確な遺構は中期末になって丘陵裾際の京田遺跡２区で確認される墓と考えられる配石土坑で、この時期、集落の様相は判然としないものの、葬送の場としての生活域があったものと考えられる。中期末～後期初頭の京田遺跡では、２区の集石のほか遺構は確認されないが、いずれの調査区においても土器が散見されることから、引き続き生活域にあったものと考えられる。この時期、常楽寺川を挟んで対岸に位置する御領田遺跡では竪穴建物が確認され、奥ノ谷遺跡でまとまった土器が出土していることから、当該期の集落は常楽寺川の東側に中心があったか拡張した可能性が考えられる。後期中葉になると、京田遺跡が集落の主体となるものと考えられる。３区で北白川上層式３期の土坑が確認された後、中心は北側の４-1区に移るようで、一乗寺Ｋ式～元住吉山Ⅰ式期には竪穴建物や柱穴などの居住域の形成をはじめ、土坑や集石遺構が確認される。さらに、４-1区では配石土坑や赤彩土器などの検出から、墓域としての性格が優位となっていく（出雲市2019）。反対に、御領田遺跡や奥ノ谷遺跡では当該期の遺構・遺物ともみられなくなることから、４区の調査で示されたように、この谷部に展開する集落の中心が京田遺跡に移ったかあるいは集約された可能性が考えられる。このように、京田遺跡の変遷は周辺遺跡の消長と連動することが提示でき、集落を構成する集団の推移が関係するものと思われる。また、そこには集落の立地環境が影響しているものと考えられる。

ここで縄文時代の遺構面または包含層の標高をみると、丘陵裾際の京田遺跡２区は12ｍ前後で、その東側の平坦部にあたる３区は11.6ｍ、４-1区は11.6 ～ 11.8ｍである。常楽寺川の対岸に位置する御領田遺跡が12ｍ前後で、その下流側の奥ノ谷遺跡が10 ～ 10.4ｍを測る。京田遺跡から約1㎞北に下る三部竹崎遺跡は４ ～ ６ｍの低地で、縄文晩期から弥生時代前期にかけての遺跡である。

遺跡の立地するこの谷部を概観すると、丘陵上に縄文時代の遺跡は確認されず、縄文中期末～後期にかけて京田遺跡、御領田遺跡、奥ノ谷遺跡など標高が10 ～ 12ｍに位置する丘陵縁辺部に生活域があったものと考えられる。当時の京田遺跡周辺の環境は、後背の丘陵にカシ・シイ・クスノキ類を主とする照葉樹林が広がっていたようで、そこから主な生活資源を得ていたものと思われる。それは、磨石や敲石（凹石を含む）、石皿や台石など堅果類の加工を主とする石器が多数出土したことや、３区、４-1区でイノシシ･ニホンジカなどの動物骨が検出されたことからも理解されよう。今回の２区の調査においても、コナラ・トチノキ・オニグルミなどの種実が検出されている。２区周辺ではヨシ類やオシダ類、ススキ類やササ類が生育する環境にあったと考えられ、マツ属の分布から神西湖の湖岸線が現在より南寄りにあった可能性が指摘されている（第５章第２節を参照）。京田

遺跡では、サメやタイ、ナマズなどの骨が検出され、海と河川で漁撈活動を行っていたことが分かっている（島根県2018、出雲市2019）。このように、丘陵縁辺部に生活基盤をおきながら山林と海・川に糧を得る集落の姿が復元でき、御領田遺跡や奥ノ谷遺跡でも同様の様相が想像される。

京田遺跡や御領田遺跡などが立地する谷部は常楽寺川の沖積作用によって形成されてきたが（第2章第1節を参照）、当時の常楽寺川が現在のように谷の中心を流れていたとは考えられず、時期により東へ西へと様々な流路をなしていたことは容易に想像できる。

京田遺跡では縄文時代晩期後葉～弥生時代前期にかけてと縄文時代後期中葉以前の洪水堆積層が確認されており、出雲湖陵道路事業予定地内の試掘調査でも多量の礫を含む洪水堆積層が常楽寺川付近のトレンチで確認されている。幾度となく繰り返される川の氾濫と流路の変動が生活面の形成に影響を及ぼし、集落の移動や変遷に関わった可能性は大きいと考える。前述したように、常楽寺川の沖積作用によって谷部の平地化が進んだことによって、縄文時代晩期以降は下流域に位置する三部竹崎遺跡のような低地に進出し、活動域が移るものと考えられる。その後、弥生時代後期には丘陵上に庭反Ⅰ・Ⅱ遺跡や京田遺跡（1区）などの集落が形成されることから、以降、丘陵上の開発が進んだものと思われる。このような周辺遺跡の変遷をみると、常楽寺川沿いの谷部に展開する集落は、縄文時代中期末～後期末にかけて営まれた京田遺跡を中心とする集落を母体として派生し広がった可能性が考えられる。

今回の京田遺跡2区の調査では、鳥取県や岡山県との交流がうかがえる縄文時代中期末の深鉢（第17図10）が出土した。3区では搬入品と考えられる九州系の小池原上層式の深鉢が出土し、関東系の加曾利B1式系のバケツ形土器がみられた（島根県2017）。4-1区では関東由来の赤彩された後期中葉の異形土器が出土し、東日本文化圏との交流が指摘されている。また、この異形土器の赤彩に用いられた水銀朱は北海道産と報告されている（出雲市2019）。赤彩土器は3区でもみられ、ベンガラや水銀朱が用いられている。石器では、隠岐島産の黒曜石や香川県産のサヌカイトの特徴を持つ安山岩が出土している。これらの遺物からは、他地域と繋がり交流や交易を行っていたことがうかがえ、3区及び4区の調査でも指摘されたように、陸域と水域に接する環境にある京田遺跡の人々が広域的な縄文ネットワークに組み込まれ活動していたことがわかる。

以上、京田遺跡と周辺遺跡の様相を述べてきた。今回は、常楽寺川沿いの谷部という範囲の中での検討を行ったが、時代とともに変動する環境のなかで京田遺跡が丘陵縁辺部に展開する集落形成において主体的な位置を有する可能性を提示した。出雲平野ではこれまで、縄文集落の構造やその変遷をとらえることができた遺跡はほとんどなく、縄文時代中期末～後期末にかけての集落構造を示す遺構や多様な遺物を内包する京田遺跡は、この地域における縄文集落の解明と復元に向けての貴重な資料を提供する遺跡と言える。

第２節　中上Ⅱ遺跡

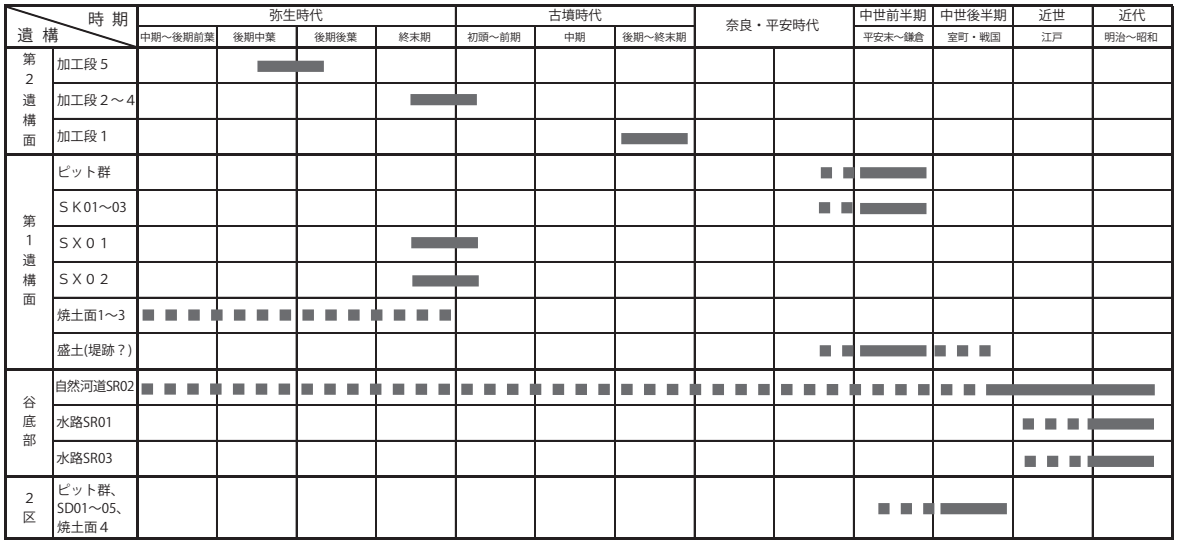
中上Ⅱ遺跡は、第４章第４節小結でも述べたように、１区の自然河道北岸の平坦面を中心に、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が断続的に検出された。特に弥生時代後期中葉～後葉、弥生時代終末期～古墳時代初頭、古墳時代終末期、古代～中世前半期、中世後半期（２区）、加えて近世～近代に大きな画期が認められる（第18表）。ここでは遺跡の画期について、各時期の遺構の特徴や周辺遺跡の様相を含め検討し、遺跡の変遷や全体像を明らかにしたい。

1.　中上Ⅱ遺跡の遺構と変遷

（1）　弥生時代後期中葉～後葉

当遺跡で出土した最古の土器の年代は、第２遺構面の加工段１上層や加工段３で出土した弥生時代中期末（第62図1･第68図1）のものである。これらは調査区外からの流れ込みと思われ、谷間の北側丘陵斜面に当該期の遺構が存在していたと想定される。遺構として最古のものは、第２遺構面の加工段５である。この遺構は床面幅６ｍ、奥行き４ｍの規模があり、一部で張床が残存する他は柱穴や壁帯溝などの施設は検出されなかった。従って明確な建物跡や住居跡とは断定できず、床面を浅く掘り窪めて柱を立てた簡易な小屋状の構造物が存在していた可能性もあるが、斜面に掘り込まれた何らかの露天の作業場的な機能も想定される。一方で、床面から土器片があたかも廃棄された状態でまとまって出土しているが、赤色系の甕片の他、口縁を欠き頸部～肩部を刺突文や竹管文などいわゆるスタンプ文で密に装飾した壺形土器や小型で精緻な甕形土器、さらに磨石状の円礫が１点含まれることも注目される。こういった点から、加工段５において何らかの祭祀行為が行われていたと理解するのが妥当といえよう。なお、現状で土器の出土量は後述するSX01・02と比較して極めて少量であり、数次にわたる土器廃棄が行われたとは考え難い。また加工段自体も祭祀のために構築されたものである可能性も残るが、現状では定かではない。同時期の他の遺構は調査区内で確認できていないが、同時期の土器は第２遺構面でもいくつか出土しており、調査区外に関連する遺構が点在していたとみられる。以上のことから、加工段５は集落の縁辺部で行われた集落内祭祀の一端を示唆するものといえる。

第18表　中上Ⅱ遺跡検出遺構一覧表



(2)　弥生時代終末期～古墳時代初頭

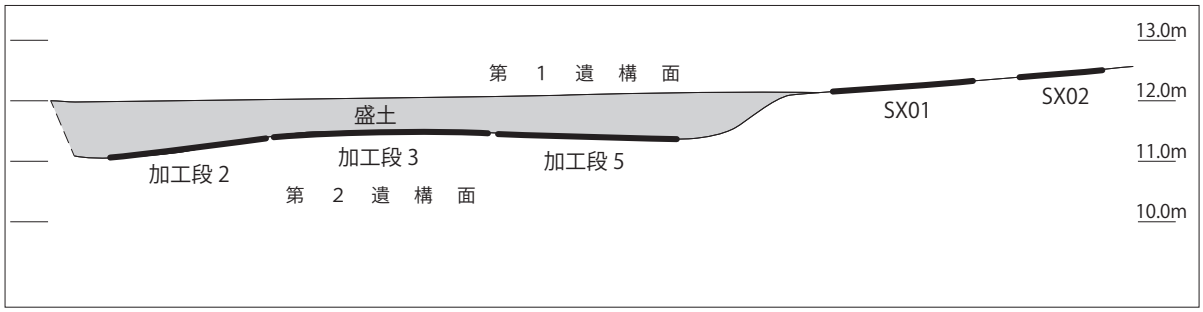
遺跡では当該期の土器が最も多く出土しており、確認できた遺構としても第２遺構面の加工段２～４や、第１遺構面の谷最奥部で検出したSX01・02など複数の遺構がみられる。なお、加工段２～４とSX01・02は当初、遺構面を違えて検出したと認識していたが、これは中世前半期の盛土の範囲が谷奥部まで及ばないためで、層位的には同一面に形成された遺構と捉えられる（第109図）。この時期に平坦面の広い範囲で遺構が展開していたといえるが、その内容は大きく異なる。加工段２・３は床面に壁帯溝とみられる溝が数条認められ、特に加工段３は掘立柱構造の建物が存在していたと考えられる。一方、谷最奥部で検出したSX01・02は加工段状の掘り込みや平坦面が広がるが、柱穴や溝は有しない。また床面から土器が多量に折り重なって出土するといった状況は、土器の廃棄行為が数度にわたり繰り返されたことを示すものといえよう。

SX01・02で確認できた土器の廃棄行為が祭祀行為であるかは検討を要するが、出雲平野で検出された同時期の集落遺跡では、いわゆる井戸祭祀が明らかとなっている。出雲市・姫原西遺跡（島根県1999）や下古志遺跡（出雲市2001）、矢野遺跡（出雲市2010）などで、いずれも井戸状の大型土坑を廃棄する際に完形土器を数個体収めた状態で検出されている。中でも姫原西遺跡や下古志遺跡では敲石状の礫が共伴し、矢野遺跡では胴部に円孔を施した甕が出土するといった特徴をもち、この時期、集落内では井戸の廃絶に関わる祭祀が一般的に行われたことがうかがえる。中上Ⅱ遺跡のSX01・02は井泉に関わる場所ではないが、平坦面が最も狭まった最奥部に位置し、眼前には自然河道SR02があり、川のすぐ上流には滝が控えているという立地状況は極めて特異なものを感じさせる。また廃棄された土器は甕が大半ではあるが、刺突文で装飾された注口土器や小型の壺形土器、あるいは敲石など祭祀にかかわるとみられる資料が含まれるのも見逃せない。こういった点からも、居住域の最奥部で、川を意識したいわゆる水辺の祭祀的な土器供献行為が行われた可能性が示唆されるといえる。

なお、水辺の祭祀では、祭祀具の河道への投棄行為が一般的と思われる。しかしながら、SR02の調査では、一部をトレンチで川底下層部の掘削も試みたが、同時期の土器類は確認できなかった。いずれにせよ、SX01・02の在り方は前述した加工段５と共通しており、集落の縁辺部で同じような祭祀行為が継続していたことを示すものといえよう。

(3)　古墳時代終末期

遺跡内では、古墳時代前期に継続する遺構・遺物が検出できていない。次に遺構が確認できるのは第２遺構面の古墳時代終末期とみられる加工段１なので、中上Ⅱ遺跡での生産活動が一旦途絶え



第109図　中上Ⅱ遺跡１区遺構面模式図

たように見受けられる。ただし、隣接する麓Ⅱ遺跡では古墳時代中期の土器が一定程度出土している。また近隣の当該期の遺構としては、丘陵や山麓に立地する九景川遺跡（島根県2008）・玉泉寺裏遺跡（島根県2017）・御崎谷遺跡（島根県2009）などでも数多く確認されており、少なくとも今回の調査範囲である谷間の利用が低調になったことを示すものと思われる。

この加工段1は遺構の残存状況は不良だが、床面に直角に屈曲する壁帯溝を有し、張床や並列するピットも認められる。単独での存在だが、出土遺物は通常の建物跡のものに類似しており、祭祀的な要素は無いので住居である可能性が高く、この時期の集落の縁辺部に相当するものと考えられる。

また、第2遺構面でこの時期に継続するとみられる遺構は認められず、少なくともこの時期以降に自然河道SR02の北岸で大規模な盛土造成が行われ、第1遺構面が形成されたことになる。

(4)　古代～中世前半期

前述したように、盛土造成が行われたのは古代以降とみられるが、第1遺構面の遺構は不明瞭で、盛土造成の時期を特定することは困難といえる。遺跡内での古代の様相としては、第1遺構面を覆う遺物包含層に古代の須恵器も含まれることから、周辺で何らかの生産活動が行われた痕跡がうかがえる程度である。また、遺物包含層出土遺物の下限は12～13世紀代であり、第1遺構面の焼土土坑SK03採取炭化物のAMS年代測定は13～14世紀代を示しているので、現状で盛土造成は中世前半期を中心とした時期に行われた可能性を指摘しておきたい。

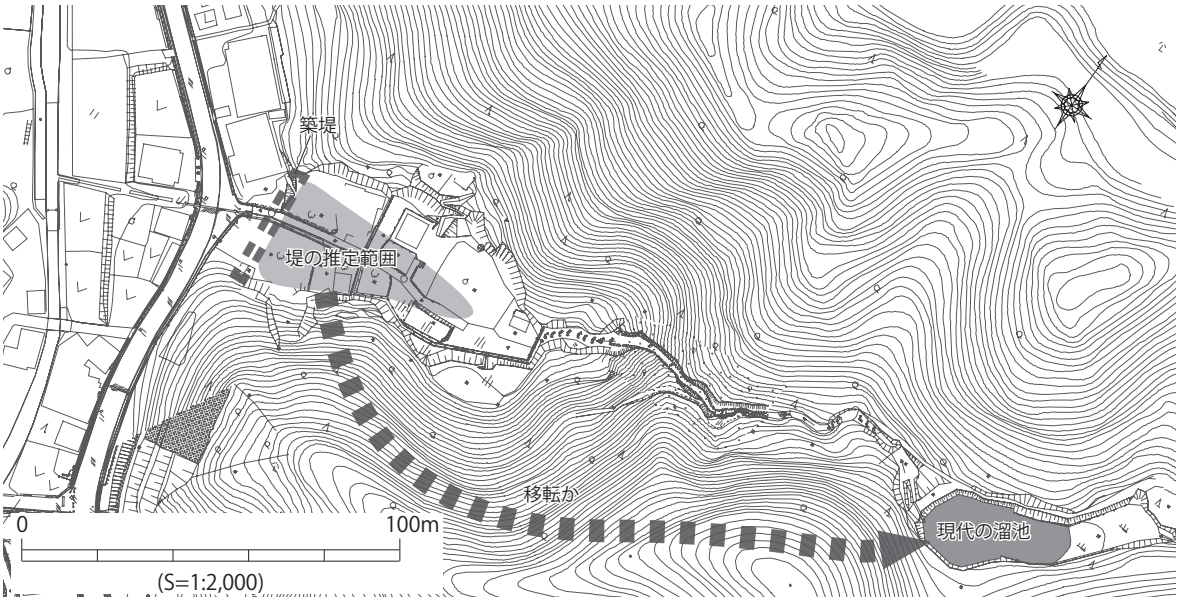
それでは、なぜこの時期に何の目的で川の北岸を嵩上げする大規模な盛土造成が行われたのであろうか。盛土層上面に形成された第1遺構面の遺構の性格が判然とせず、この課題を解明する材料を乏しくしているが、地層の堆積相観察結果から検討してみたい。第2遺構面の調査区西壁の堆積層（第58図）のうち、8・9層は粘土主体で粗砂～小礫を含み、堆積物粒子の配列が認められないことから「盛土」の可能性が最も高いことが指摘されている。また、調査区東壁の上層も同様の堆積が認められるので、第2遺構面の上層を盛土層が覆うことが明らかとなった所以である。一方で、西壁の6層と14層は腐植（有機物）に富む粘土が主体を成し、一般に安定した水域での「自然堆積物」を示唆することから、沼沢湿地堆積との評価が得られているのは特に注目される。この特徴を積極的に評価すると、盛土以前に堆積した14層から、第2遺構面の斜面下方にはSR02由来の沼沢が広がっていたことが推測される。もう一つの6層は層位的に盛土後の堆積なのは明らかで、盛土の法面を覆うように堆積することがうかがえる。この状況は盛土後にSR02の水嵩が増して沼沢が広がったことを示しているが、6層は安定的な水域での堆積物の層であることから洪水等とは考えにくく、SR02が何らかの要因で一定期間堰き止められた結果、水嵩が増したことを示しているのではないだろうか。これらの状況から突き詰めれば、この谷間の出口を堰堤で塞いだ人工的な池・堤が構築された可能性が推測されるといえよう。従って、今回検出した盛土は堤を構築する際の側面部分の整地土と捉えられ、このように考えると盛土上面の遺構が貧弱であるのも理解し易いといえる。

『出雲国風土記』神門郡条には、「宇加池」、「来食池」、「笠柄池」、「刺屋池」と4つの池が記載されている。その推定地は出雲平野南岸の丘陵沿いの低湿地や平野に面した狭長な谷間にあたり、位置的に中上Ⅱ遺跡の東方に点在するなど距離も近く、周辺は古くから開発への関心が高かったことがうかがえる。これらのうち、「笠柄池」は発掘調査が行われた浅柄Ⅲ遺跡（島根県2017b）の立地する谷間に比定されており（加藤1981、関1999）、谷の入り口付近の丘陵裾部の張り出し部が

築堤痕跡である可能性が指摘されている（仁木2017）。また試掘トレンチで検出された低湿地由来と考えられるシルト層が、谷奥へ行くほど標高の高い位置で確認されている。このことから、時期により池が谷奥へ移動している可能性が高く、時代が下がるにつれ平野部の耕作地を拡大する志向があったと想定されている（仁木2017）。一方、中上Ⅱ遺跡の谷間筋には、現在でも溜池が存在する（第110図）。場所は1区の谷奥にある滝から、さらに丘陵谷間の川筋を遡った上流約80ｍの位置に人工の堰堤で構築された溜池が整備されている。この溜池の堰堤は一部に洗堀・崩壊が生じており、既に機能は損なわれているとみられるが、近年まで川及び水路の流水量調整として機能していたと考えられる。なぜこのような奥まった丘陵上方の谷筋に造られたかについても、元々谷間低地に堤が存在していたとすれば理解し易い。低地を耕作地の拡大などで広く利活用する必要が生じたため、低地の堤を廃し谷奥に移転した可能性が推測できよう。ただし、現在の位置に整備された時期は、現状で不明と言わざるを得ない[(1)]。

なお発掘調査で堤跡が検出された例としては、安来市・陽徳寺遺跡（島根県1996）がある。堰堤部は未確認だが、平野部に面した谷間で幅20m、長さ45m以上、深さ２ｍの堤跡が確認され、出土遺物から奈良時代から平安時代末まで機能していたことが想定されている。中上Ⅱ遺跡の堰堤は、調査区外で谷の出口付近の谷間が最も狭まった位置が候補となる。ここに築堤され、盛土範囲まで貯水されたと仮定すれば、堤の規模は幅約15ｍ、長さ約55ｍが復元できる（第110図）。

さて、中上Ⅱ遺跡の谷間での盛土造成及び築堤の時期を12 ～ 13世紀代とした場合に注目されるのは、中上Ⅱ遺跡の九景川を挟んだ対岸に存在する神西城跡である。神西城の築城時期は不明だが、承久の乱（1221）の後に小野（古荘）高通が新補地頭として神西新荘に入部したのがはじまりとされている（山根2013、寺井2018）。このような大規模な地形改変行為は一農村による自主的な開発であったとは考え難い面もあり、想像を逞しくすれば、或いは神西氏の関与・主導による戦略的な普請であった可能性も暗示されよう。なお神西城跡に隣接する麓Ⅱ遺跡でも、中世期の建物群が検出されており、周辺に農村集落が展開していた様子がうかがえる。いずれにせよ遺跡内で盛土及び築堤が行われた理由としては、こういった周辺での人口増や交通要衝の地としての生産・流通活

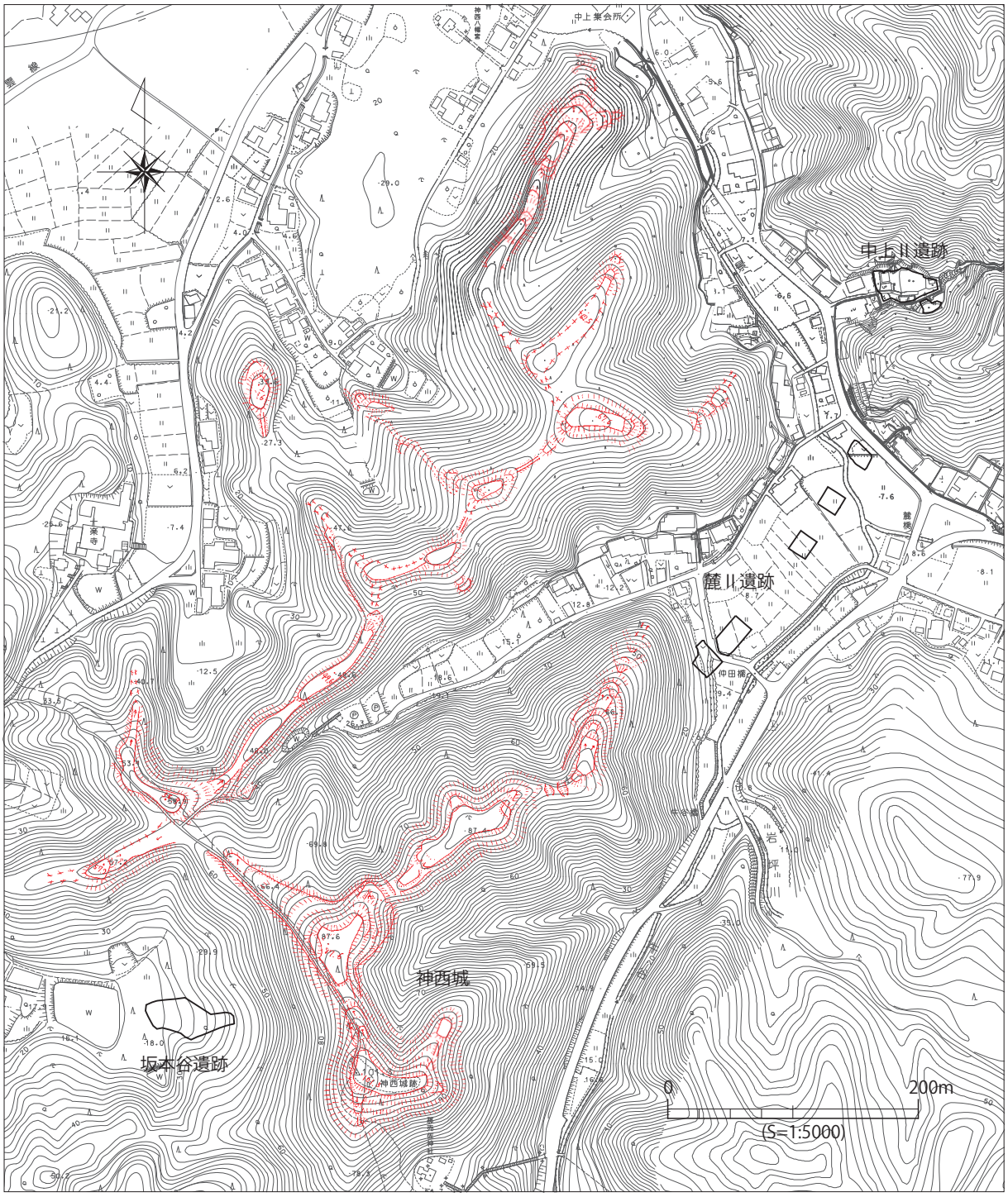


第110図　堤跡の推定復元図

動の活性化により、九景川流域の沖積地や神門水海南岸部での開発行為が活発になったことが背景にあると考えたい。

（5）　中世後半期

この時期の遺構は１区で確認できていないが、遺物は谷間南側丘陵の２区で16世紀後半～末頃の陶器類や瓦質土器が少量ではあるがまとまって出土している。２区の遺構の時期は判然としないが、これらの遺物は２区の遺構面を覆う遺物包含層出土遺物の下限を示すもので、焼土面のAMS年代測



※原図提供　山根正明氏

第111図　神西城縄張り・発掘調査区配置図

定結果からも概ねこの時期に遺構が形成されたと推測される。遺構は溝状遺構SD01～05と平坦面と崖面の境でピット列が検出され、ピットは間隔や形態、規模が不揃いであるが、状況から崖面の際に掘り込まれた杭列・柵列としての機能が想定されるものである。

参考までに、中上Ⅱ遺跡に隣接する麓Ⅱ遺跡や坂本谷遺跡でも、比較的急勾配な丘陵斜面の傾斜変換点に掘り込まれたピット列が検出されている。両遺跡とも中世城郭神西城跡の東西側の麓に位置しており、歪な掘方をもつピット列が4～5列並ぶ様は、神西城の逆茂木や柵など防御施設としての機能が推測されている。加えて神西城での戦闘は文明元年（1469）の石見国勢力との戦や雲芸攻防戦（1562-1566）が知られており、これらの防御施設もいずれかの時期に普請された可能性も指摘されている（島根県2017a）。中上Ⅱ遺跡は神西城跡の東側を流れる九景川を挟んだ丘陵谷間に立地し、また麓Ⅱ遺跡のピット列の上方にはピット列に並列または直交する溝状の落ち込みも検出されており、中上Ⅱ遺跡2区の遺構群と共通点が多いことも注目される。

これらの特徴を積極的に検討すれば、2区の遺構も神西城の防御に関連する曲輪状の施設である可能性も考慮されるが、2区背後の丘陵部の踏査では城郭関連施設とみられる人為的な地形改変の痕跡は確認できておらず、現状でそこまでの評価は判断材料が無く根拠に乏しいと言わざるを得ない。なお、神西城の近年の踏査・研究によれば、神西城の曲輪群は丘陵先端や周辺の丘陵部にもさらに拡大することが判明しつつある（第111図　山根2013）。神西城跡の実態は、発掘調査が行われていないこともあり明らかではないが、城域や関連施設の周辺部への広がりを検討するにあたり、今後こういった調査例も踏まえ注視する必要がある。

(6)　近世～近代

その後の中上Ⅱ遺跡の姿としては、谷間の中央には川が依然として存在し、川から分水させて下流の水田に導水するための水路SR01が掘削されたとみられる。SR01がいつ掘られたかは不明だが、谷間に堤が存在していた時点でSR01があったとは考えにくいので、堤が丘陵谷筋奥に構築された際に新たに掘り込まれたと考えられる。最終的に谷間の自然河道SR02や水路跡SR01は完全に埋め立てられるが、この埋め立て造成が行われた時期や状況もある程度推測することができる。SR02の埋土や川底からは、大量の陶磁器類が出土した。一定程度回収して鑑定した結果、16世紀に遡る備前の擂鉢や壺や、18世紀代の陶胎染付や肥前系の青磁や染付の碗類、唐津焼の甕などもみられたが、大半は明治期の磁器類で、最も新しいものは昭和10年代の磁器碗類であった。埋土からは大正七年銘の一銭硬貨が出土していることからも、SR02が埋め立てられた年代は昭和初期であった可能性が高い[(2)]。

また、埋土内の下層から川底にかけては人頭大以上の巨大な岩盤塊が集積しており、その上方に地表面を削平して埋め立てられたとみられる土砂が厚く堆積する状況にある。このことから、当初は川岸に近世以来の居住域があり、それを一旦廃棄すると同時に丘陵斜面の岩盤や地表面を削平し、平坦面を拡大しつつ不要となった廃材や生活道具とともにSR02を埋め立てたことが想定される。また必然的に川筋を移動させる必要があり、滝からの渓流を堰き止め、平坦部南端に新たに設置した水路に迂回させ、埋め立て前と同様に九景川沿いの水田に導水していたことがうかがえよう。

2.　まとめ

以上のように、今回の調査により明らかとなった中上Ⅱ遺跡の変遷と画期を、推測も交え検討してみた。これらは大きく分けて2つの成果があったといえる。1つは弥生時代後期と弥生時代終末期～古墳時代初頭における集落形態の一端を垣間見ることができたことである。中上Ⅱ遺跡の今回の調査区は、九景川に面した狭長な丘陵谷間にあたる。しかしながら、同時期の遺物は九景川西岸の山麓でも採集されていることから、この時期における集落の本体は九景川沿いの山麓～沖積地に展開していたことは想像に難くない。しかも谷間には自然河道SR02が流れており、利用できる平坦部は限られていることからも、今回は集落の縁辺を対象に調査したと言っていいだろう。遺構は自然河道SR02の北岸に点在するが、特に谷最奥部の川岸で土器を大量に廃棄するといった状況は、滝や川を意識した祭祀行為が想定され、この時期における集落構造や集落内での祭祀形態を検討する上で貴重な資料を提供したといえる。

もう1つは、中世前半期頃とみられる大規模な盛土造成が明らかになったことである。自然河道SR02の北岸平坦面のほぼ全域が最大厚1mの盛土で嵩上げされたことになるが、これを基に、谷間の出口に堰堤を設け人工的な池・堤が構築された可能性を指摘することができた。しかしながら、この推測は地層の堆積相観察結果から導いたものであり、堰堤も検出されておらず、十分に考古学的な根拠を重ねたものではなく仮説の域を出ない。従って、隣接する神西城跡との関連や、周辺での中世期遺構の展開、また堰堤検出の可能性も含め、今後も検証を進める必要がある。特に神西城跡は築城時期や城域、居館跡や関連施設などが十分明らかになっているとは言い難く、今回のような周辺部の調査成果を細かく検討することで、その実態解明に寄与できるものと思われる。今後の調査・研究の進展に期待したい。

第112図　神西村地籍図（明治22年）

最後に、今回の調査成果は、いずれも谷間を流れる自然河道の「治水」に関わるものといえる。通常は生活用水や農業用水として利用される一方、時には洪水や土石流を引き起こし下流域に大きな被害を及ぼす存在であり(3)、そのような恩恵や畏怖の対象として祭祀行為が営まれ続けたことは想像に難くない。その後、中世には築堤の可能性もある大規模な盛土造成が行われ、その後も滝を遡った丘陵上に溜池を整備し、新たに水路を通すなど、遺跡内での生産活動はこの自然河道とともに培われてきたといっても過言ではない。これは近代以降、自然河道を完全に埋め立てた後も、別の水路に流路を付け替えて利用され続けたことからもうかがえる。

現在は農業用水としての機能は停止したようであるが、高速道路が敷設される際に、この谷間は新たに調整池として機能することになる。まさに未来に向けても谷間での自然と人との関わりが永劫に続くことを、この小さな川が物語っているといえる。

【註】

(1) 溜池を長年管理してこられた地主の方からの聞き取りでは、少なくとも昭和20年代には当該地に溜池が存在していたとの証言を得ることができた。また、戦後（昭和22年）の米軍による航空写真も確認したが、この時点で現在の位置に溜池があったことがわかる。

(2) 明治22年の地籍図も確認することができたが、谷間の中央に川があったことが表現されており、少なくともこの時期までは谷間に川が存在していたことがうかがえる。また地籍図には川から分水する九景川東岸部への導水路も表現されている。

(3) 元地主の方から、昭和39年の集中豪雨により溜池の水が溢れ、当時谷間にあった民家が浸水するなど下流域に被害があったとの証言を得た。谷間の南端を流れる現コンクリート水路は、その際に破損した水路に替えて設置されたものとのことである。

【参考文献】

加藤義成1981『修訂 出雲国風土記参究 改訂第三版』
湖陵町教育委員会1994『神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　御領田遺跡　三部竹崎遺跡』
湖陵町教育委員会1995『一般廃棄物処理施設管理道新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－奥ノ谷遺跡－』
湖陵町教育委員会1995『湖陵町誌研究４』
島根県教育委員会1996『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡　一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』
出雲市教育委員会1997『遺跡が語る古代の出雲-出雲平野の遺跡を中心として-』
高尾浩司1997「第２節　鳥取県におけるスタンプ文について」『天萬土井前遺跡　会見団地宅地造成事業に係る遺埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人鳥取県教育文化財団
関　和彦1999「『出雲国風土記』註論その四　神門郡」『古代文化研究７』
島根県教育委員会1999『姫原西遺跡　一般国道９号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１』
湖陵町誌編纂委員会2000『湖陵町誌』
湖陵町教育委員会2000『湖陵町遺跡地図』
出雲市教育委員会2001『下古志遺跡　一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
岩橋孝典2004「装飾壺・スタンプ文土器からみた弥生時代後期の出雲地域」『古代文化研究12』
島根県教育委員会2008『九景川遺跡　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
島根県教育委員会2009『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西Ⅱ遺跡・間谷西古墳群　一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
出雲市教育委員会2010『矢野遺跡　新内藤川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
山根正明2013「32神西城跡」『出雲の山城　山城50選と発掘された城館』ハーベスト出版
島根県教育委員会2013『古志本郷遺跡Ⅵ　斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ』
島根県教育委員会2017a『麓Ⅱ遺跡・坂本谷遺跡・京田遺跡（1区）一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』
島根県教育委員会2017『浅柄Ⅲ遺跡　一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書４』
島根県教育委員会2017『のの子谷横穴墓群　京田遺跡３区』
仁木　聡2017「『出雲国風土記』神門郡記載の「池」と大念寺古墳の時代」『季刊文化財140』
寺井　毅2018「19神西城」『尼子氏の城郭と合戦』戎光祥出版
出雲市教育委員会2019『京田遺跡４区』

京田遺跡２区
写真図版

１．京田遺跡２区　遠景（南から）

２．京田遺跡２区　空撮（上部が南東）

図版２　京田遺跡２区

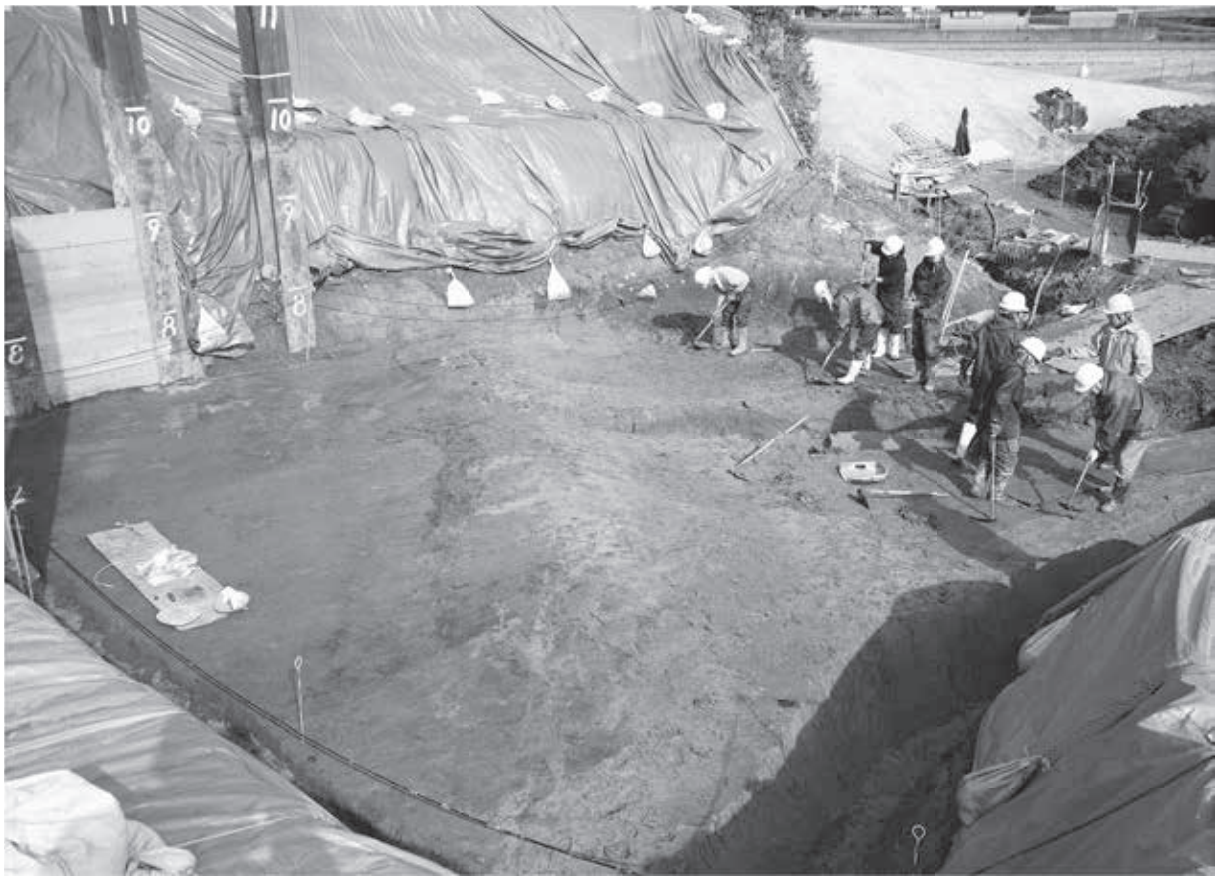
１．京田遺跡２区　調査前状況（東から）

２．京田遺跡２区　調査区（南から）

１．京田遺跡２区　中央トレンチ（西から）

２．京田遺跡２区　杭列検出状況（南から）

図版 4　京田遺跡 2 区



1．京田遺跡 2 区　3 層検出状況（南から）

2．京田遺跡 2 区　5 層上面検出状況（東から）

１．京田遺跡２区　５層上面検出状況（北から）

２．京田遺跡２区　P1 半裁状況（南から）

３．京田遺跡２区　P2 完掘状況（北東から）

４．京田遺跡２区　P3 完掘状況（南から）

５．京田遺跡２区　杭１半裁状況（南から）

図版６　京田遺跡２区

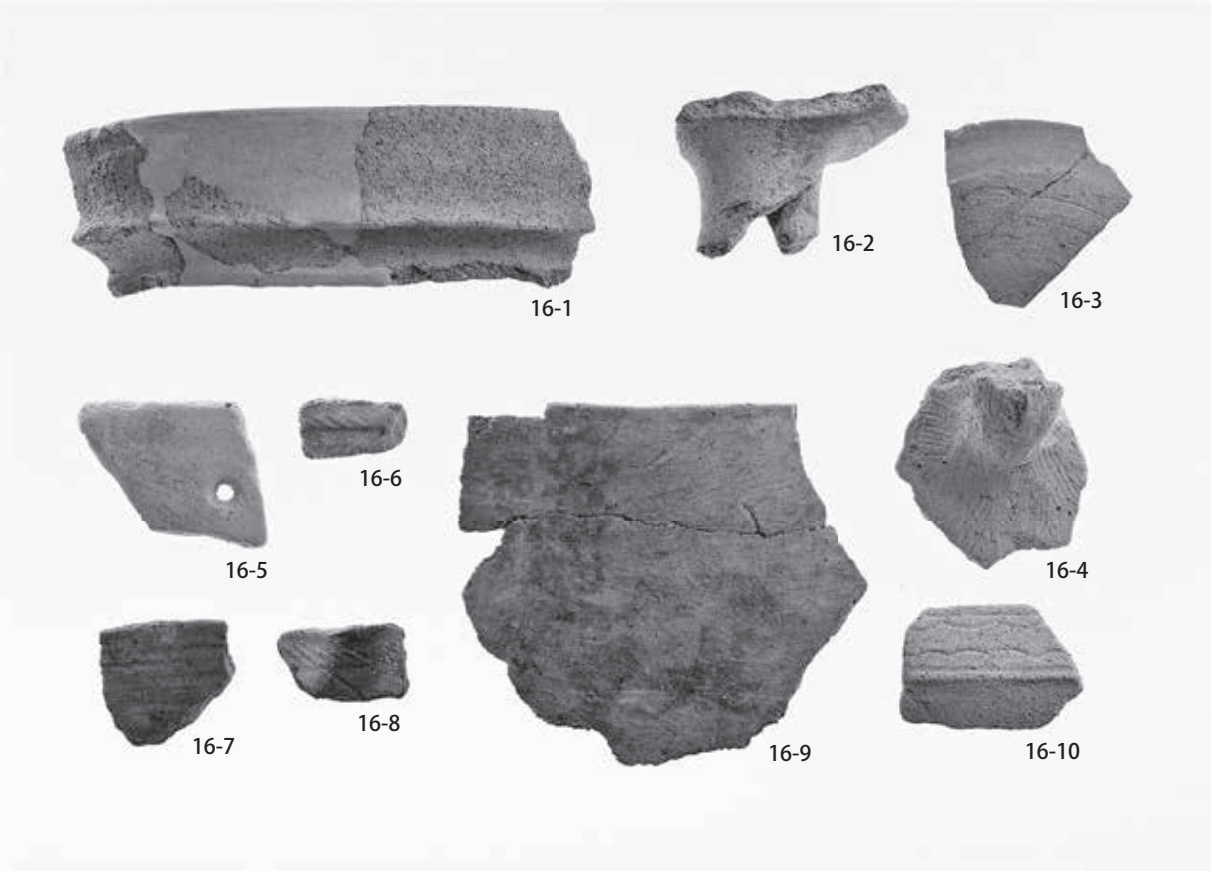
１．京田遺跡２区　SK01 検出状況（東から）

２．京田遺跡２区　SK01 完掘状況（南東から）

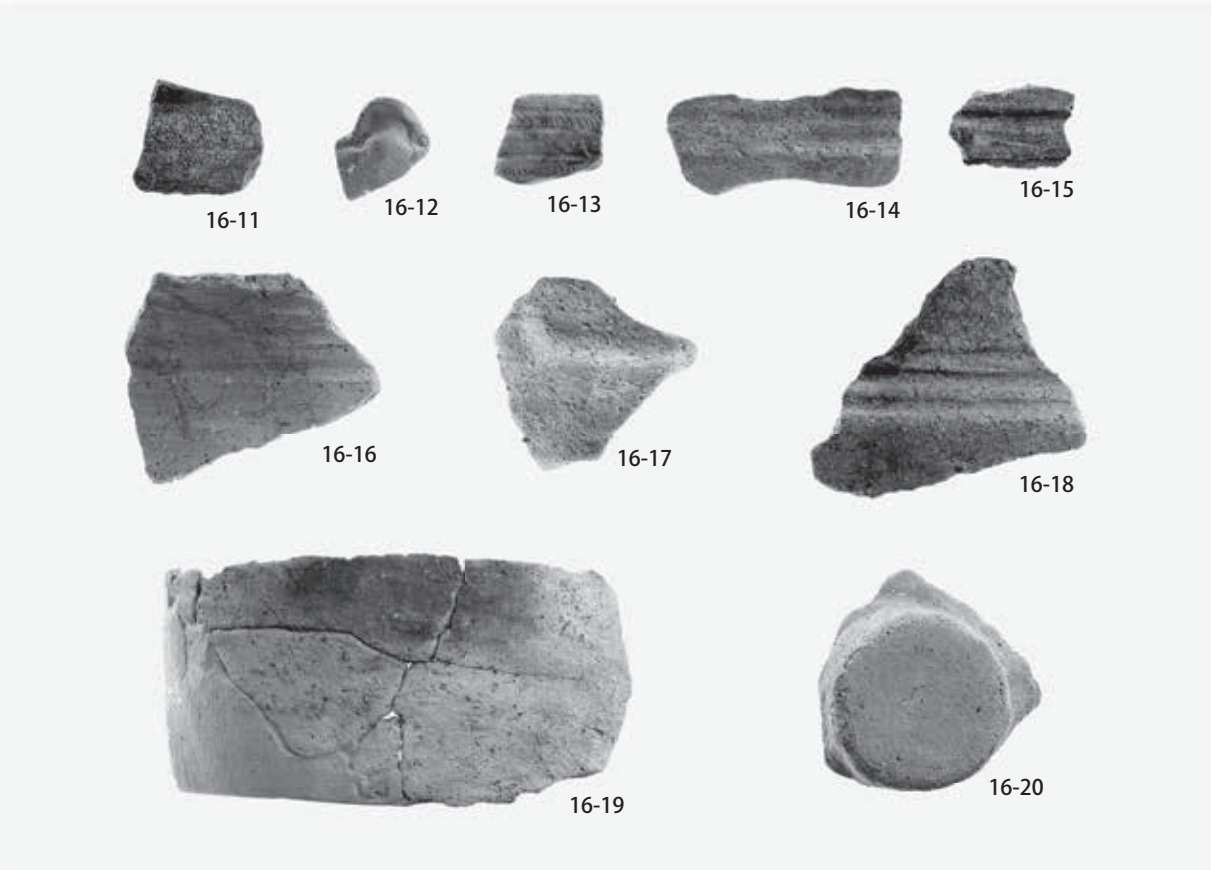
１．京田遺跡２区　集石検出状況（北から）

２．京田遺跡２区　５層上面調査状況（東から）

図版８　京田遺跡２区



１．京田遺跡２区　1・3・4-1 層出土土器

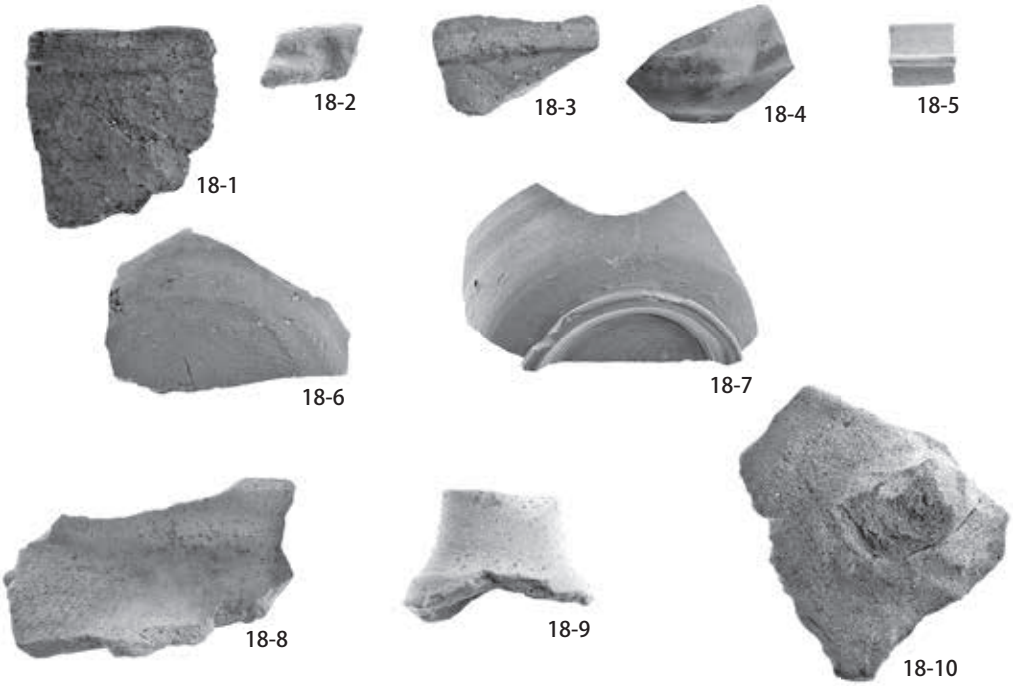


２．京田遺跡２区　4-1 層出土土器

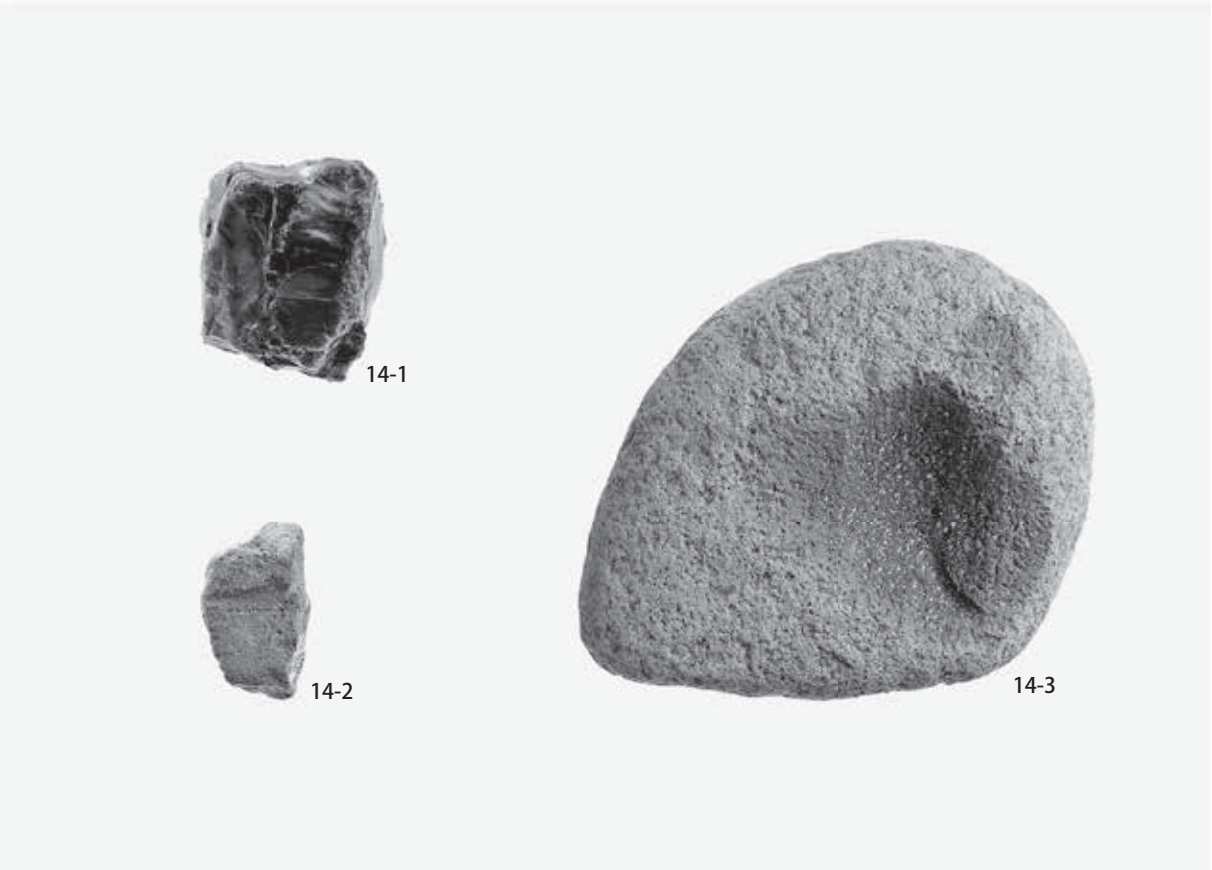
１．京田遺跡２区　4-2・4-3・5 層出土土器

２．京田遺跡２区　5 層出土土器

図版 10　京田遺跡 2 区

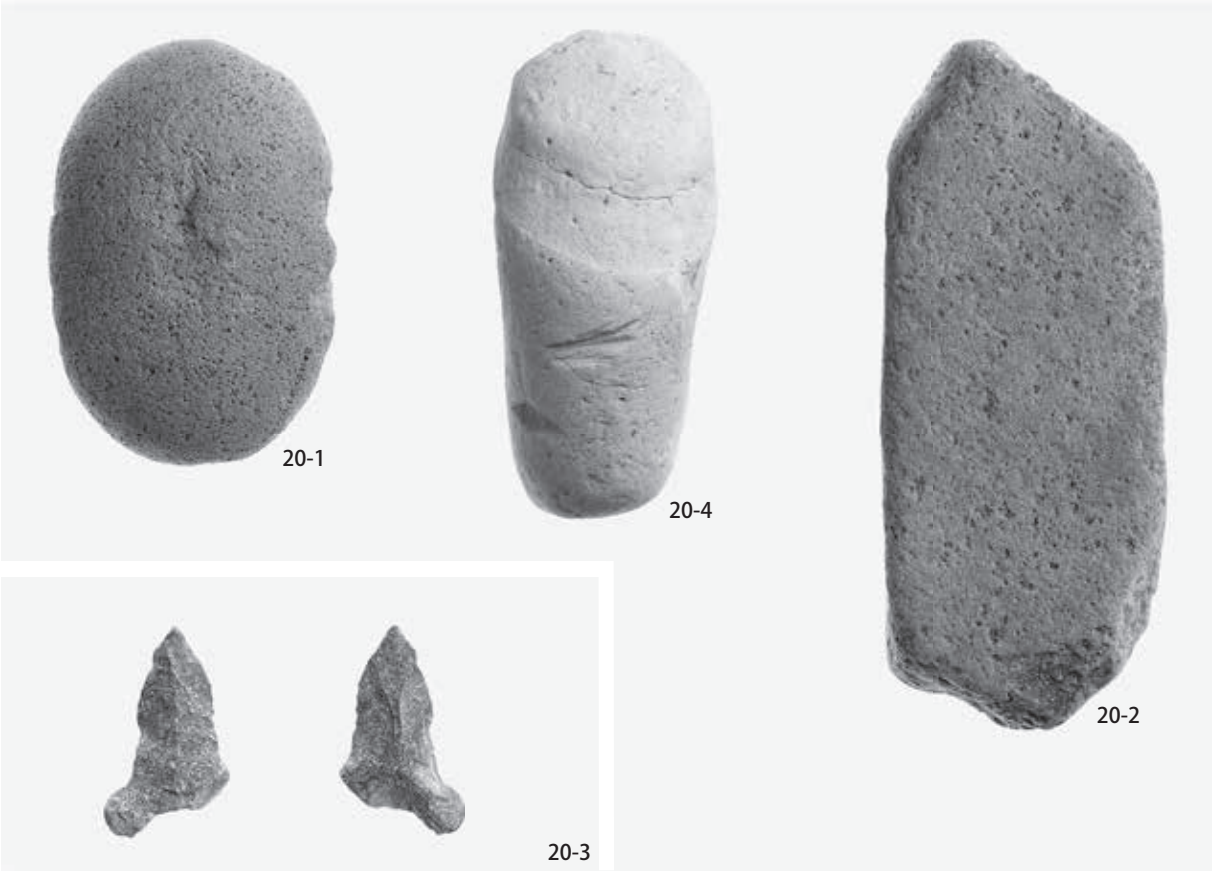


1．京田遺跡 2 区　その他の遺構外出土土器



2．京田遺跡 2 区　SK01 出土石器

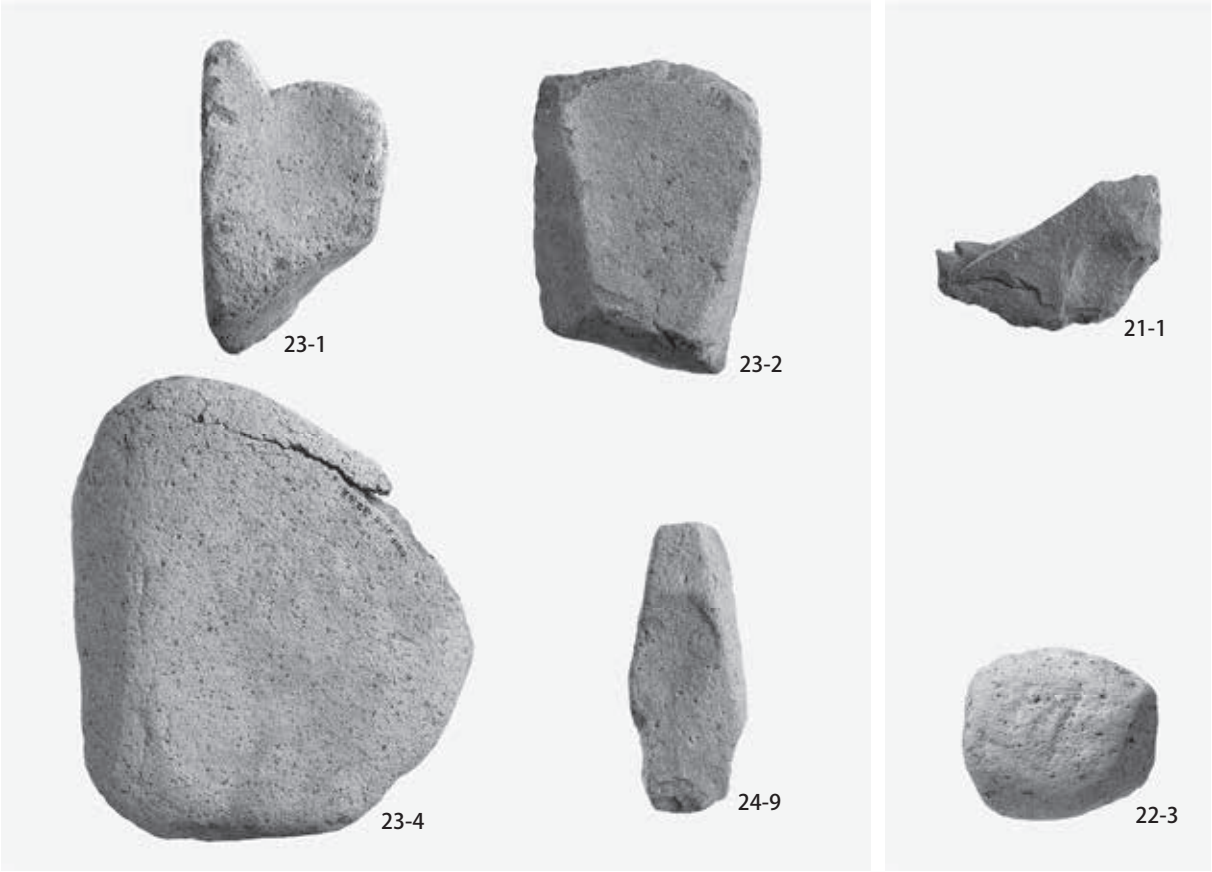
１．京田遺跡２区　SK01 検出礫（標石）



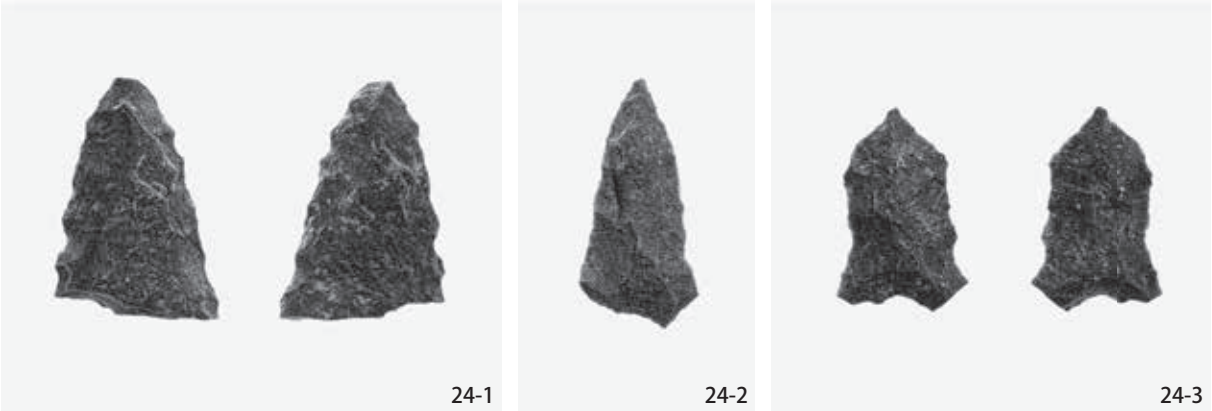
２．京田遺跡２区　1・1-1・3・4 層出土石器

1．京田遺跡 2 区　4-1・4-2 層出土石器

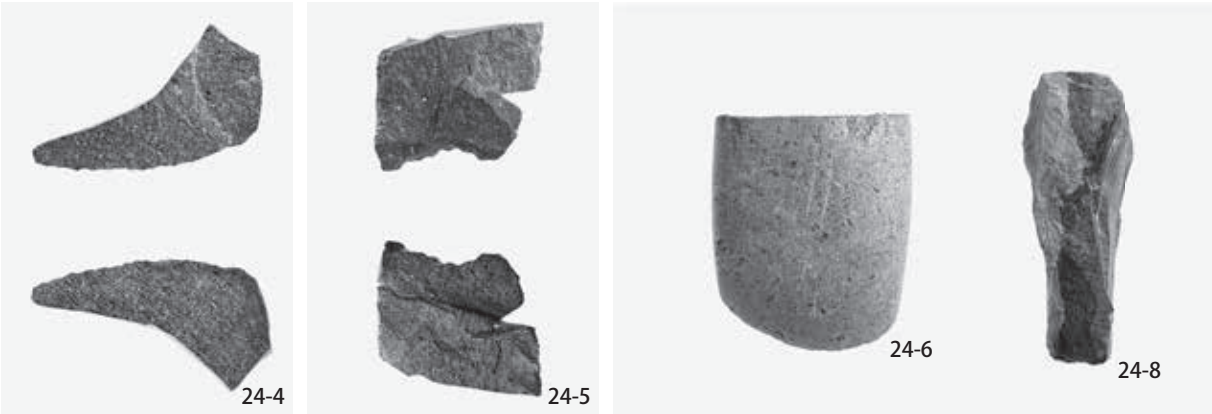
2．京田遺跡 2 区　4-1 層出土石器



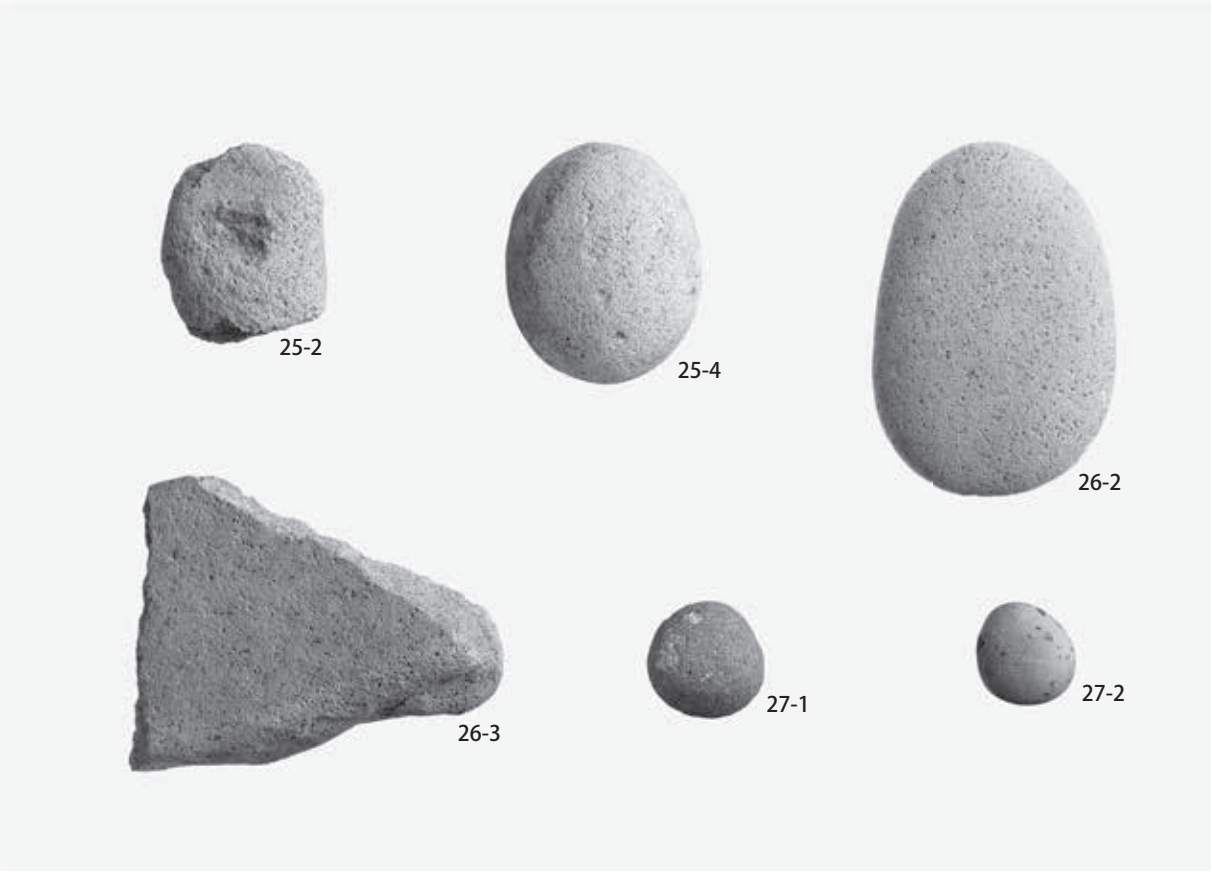
１．京田遺跡２区　4-1・4-2 層出土石器



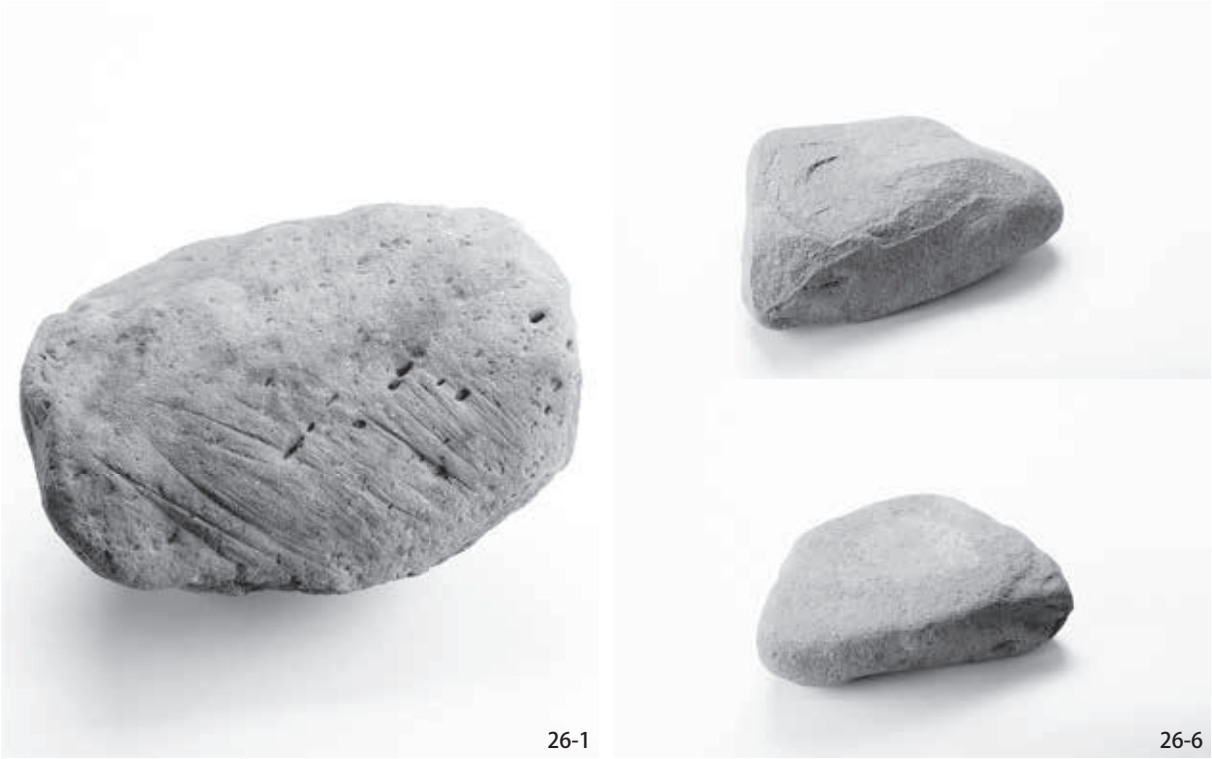
２．京田遺跡２区　4-2 層出土石器



３．京田遺跡２区　4-1・4-2 層出土石器



1．京田遺跡 2 区　3 層以下・4-2 層・その他の遺構外出土石器



2．京田遺跡 2 区　4-2 層出土石器

24-7

25-5

25-1

26-4

25-3

26-5

1．京田遺跡２区　4-1・4-2 層出土石器

1．京田遺跡 2 区　出土木製品

中上Ⅱ遺跡
写真図版

1．中上Ⅱ遺跡　遠景（北から）

2．中上Ⅱ遺跡　遠景（南から）

図版 18　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡　遠景（西から）

2．中上Ⅱ遺跡　遠景（東から）

1．中上Ⅱ遺跡１区　調査前（西から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　調査前（東から）

図版 20　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 3 区　調査前（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 3 区　調査区 3 完掘後（西から）

1．中上Ⅱ遺跡１区　表土掘削後（東から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　表土掘削後（西から）

図版 22　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡１区　北側岩盤検出状況（東から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　SR01・02 検出状況（東から）

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR01 検出状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR01 セクション（西から）

図版 24　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR01 完掘状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR01 完掘状況（東から）

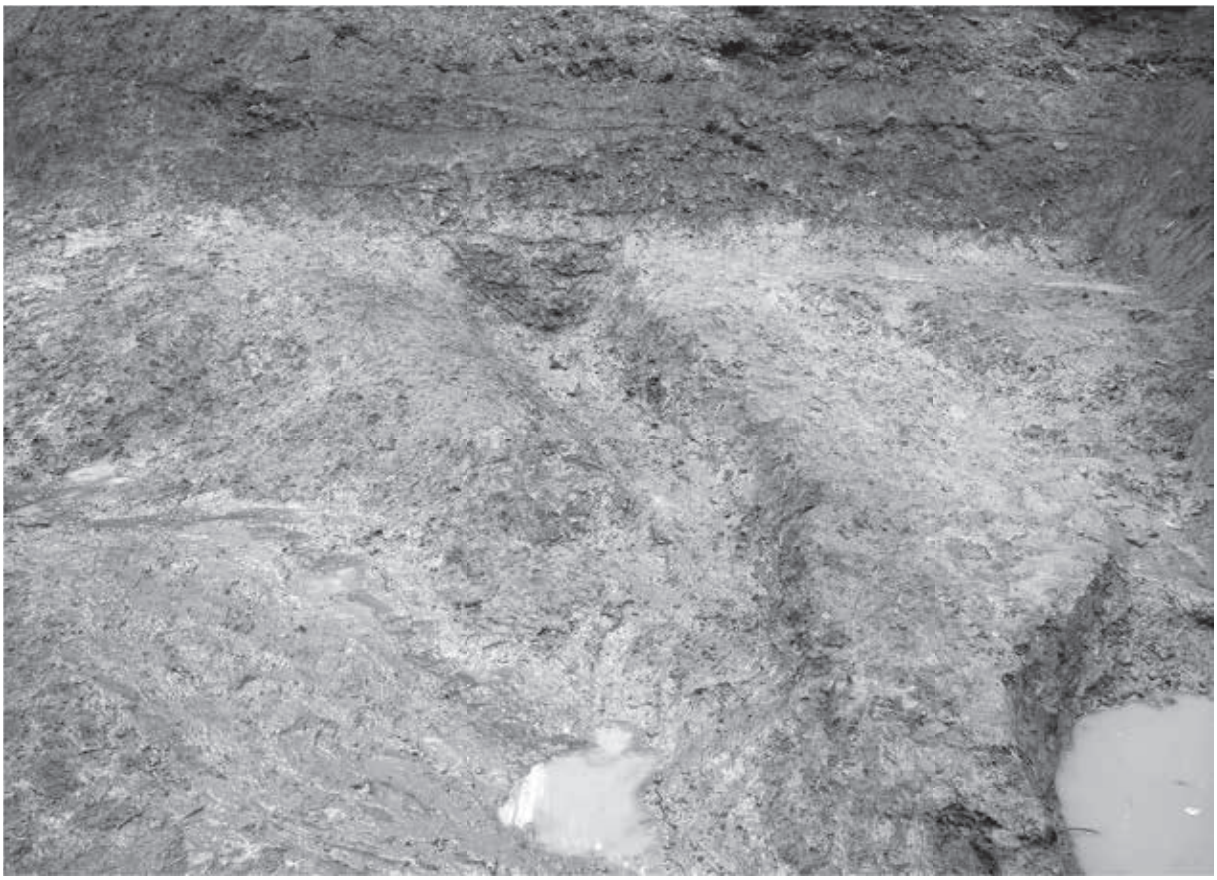
1．中上Ⅱ遺跡１区　SR02 セクション（西から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　SR02 セクション（東から）

図版 26　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR02 完掘状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR01・02 完掘状況（西から）



1．中上Ⅱ遺跡１区　SR03 完掘状況（北から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　南壁セクション（北から）

図版 28　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 遺物出土状況（東から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 遺物出土状況（西から）

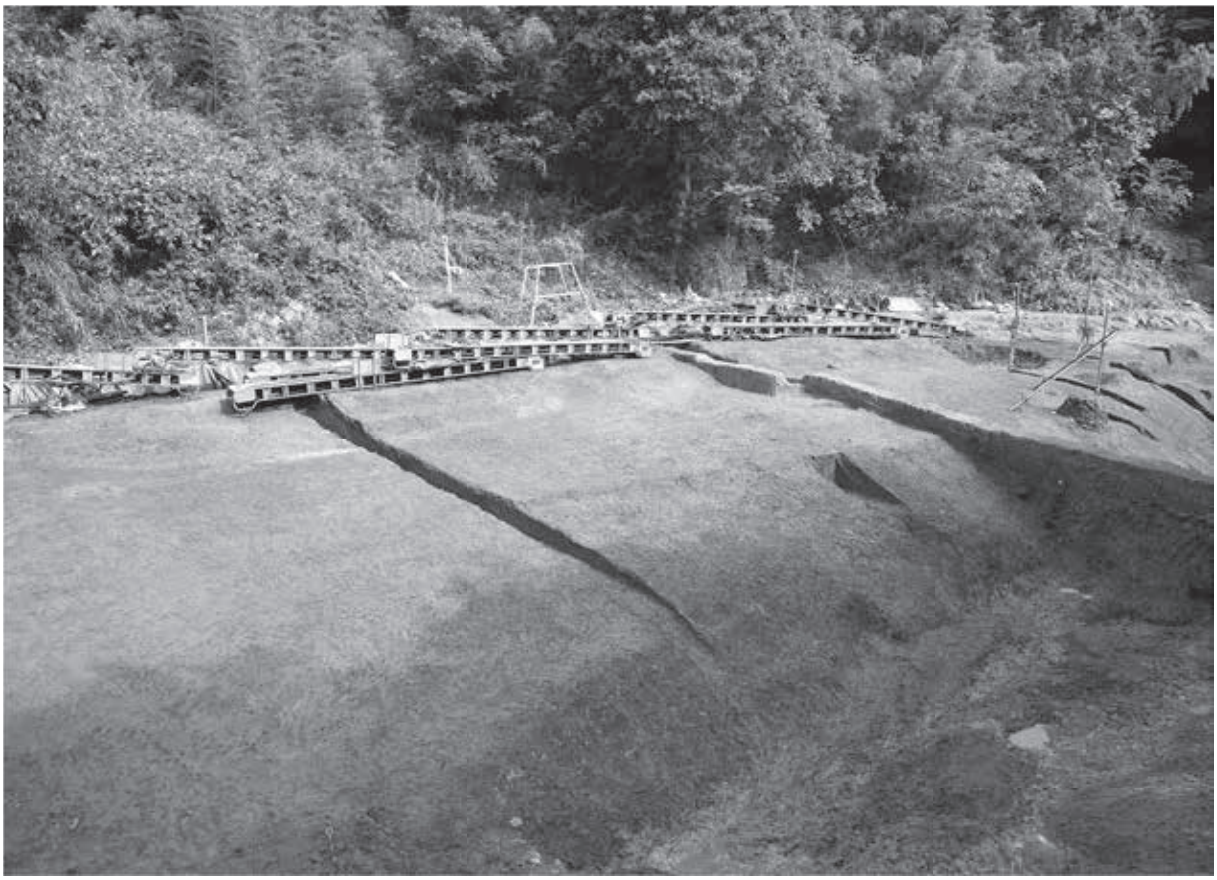
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 完掘状況（東から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 完掘状況（西から）

図版 30　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX02 遺物出土状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX02 完掘状況（西から）



1．中上Ⅱ遺跡１区　第１遺構面検出状況（南から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　第１遺構面検出状況（西から）

図版 32　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 1 遺構面 SK02 セクション（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 1 遺構面 SK01 セクション（西から）

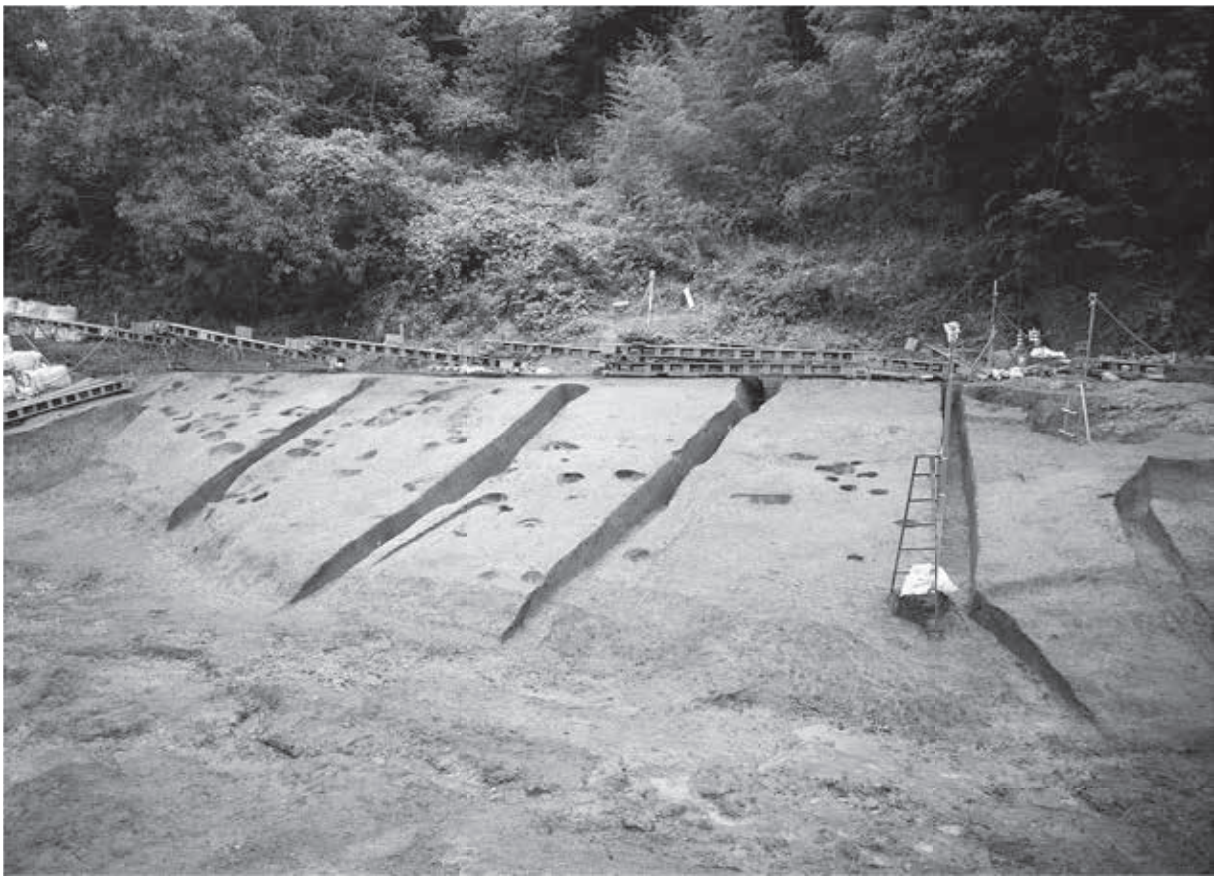
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 1 遺構面 SK01・02 完掘状況（南から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 1 遺構面 SK03 セクション（北から）

図版 34　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 1 遺構面 SK03 完掘状況（南西から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 1 遺構面完掘状況（南西から）



1．中上Ⅱ遺跡１区　第１遺構面完掘状況（南から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　第２遺構面西壁セクション（東から）

図版 36　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 1 遺物出土状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 1 遺物出土状況（東から）

1．中上Ⅱ遺跡１区　第２遺構面加工段１セクション（東から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　第２遺構面加工段１完掘状況（西から）

図版 38　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 2 完掘状況（東から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 3 完掘状況（西から）

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 3 完掘状況（東から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 4 完掘状況（西から）

図版 40　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 5 遺物出土状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 5 セクション（東から）

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 5 床面検出状況（東から）

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　第 2 遺構面加工段 5 完掘状況（西から）

図版 42　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡１区　第２遺構面土器溜遺物出土状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡１区　第２遺構面完掘状況（西から）

1．中上遺跡 1 区　第 2 遺構面完掘状況（東から）

2．中上Ⅱ遺跡 2 区　調査前（北東から）

図版 44　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 2 区　調査前（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 2 区　調査前（東から）

1．中上Ⅱ遺跡 2 区　遺構面検出状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 2 区　西壁セクション（東から）

図版 46　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 2 区　SD01 完掘状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 2 区　SD02・03 完掘状況（西から）

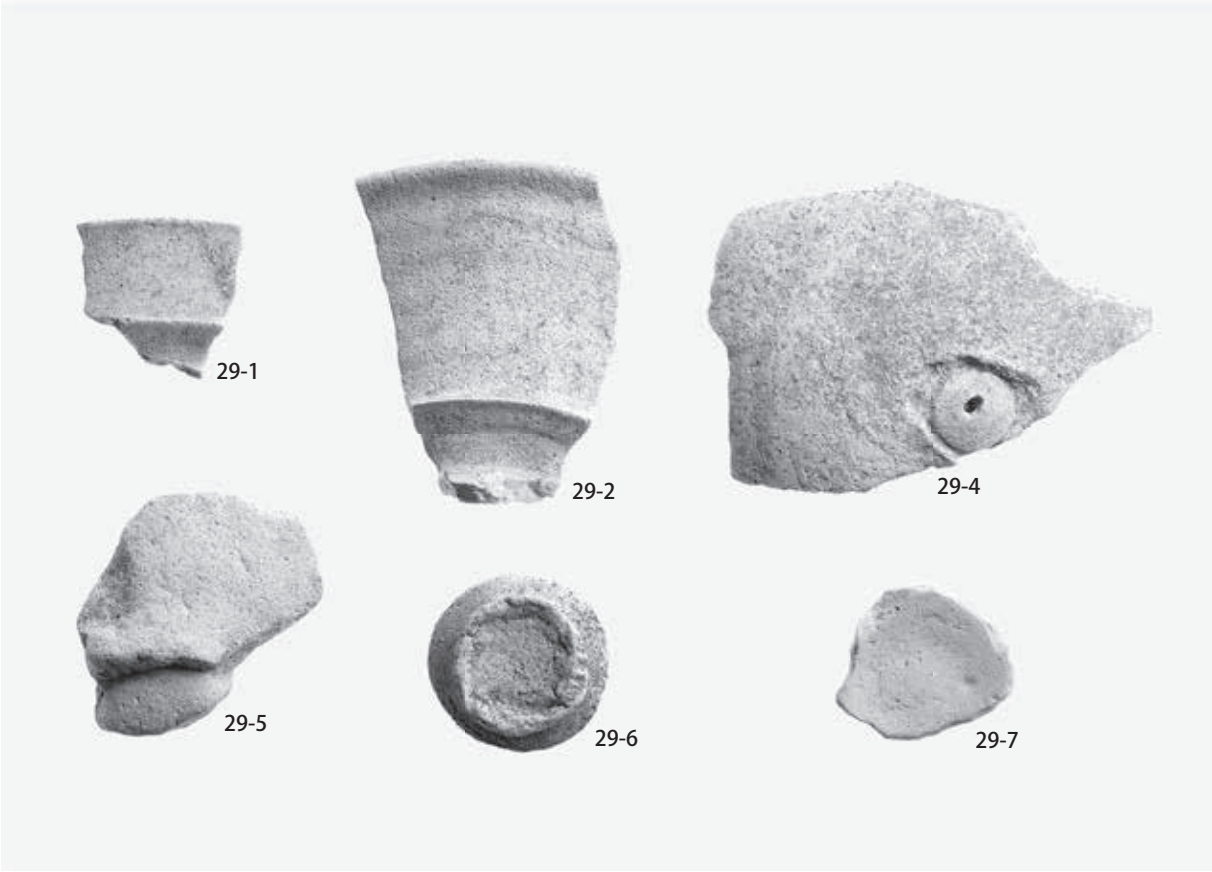
1．中上Ⅱ遺跡 2 区　SD 群、ピット群完掘状況（北東から）

2．中上Ⅱ遺跡 2 区　SD 群、ピット群完掘状況（北西から）

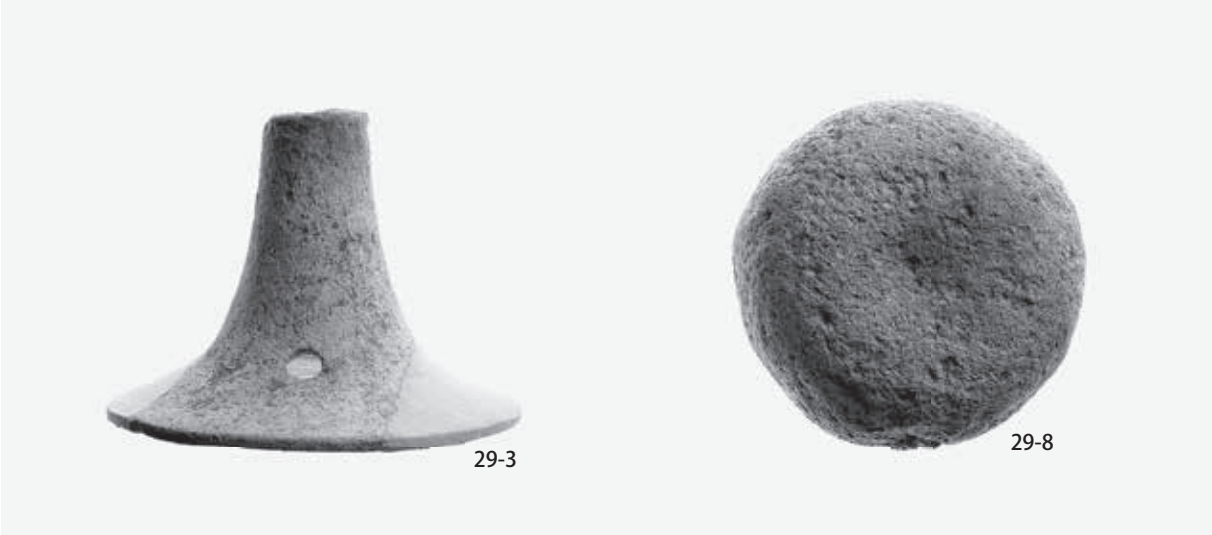
図版 48　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 2 区　完掘状況（西から）

2．中上Ⅱ遺跡 2 区　完掘状況（東から）

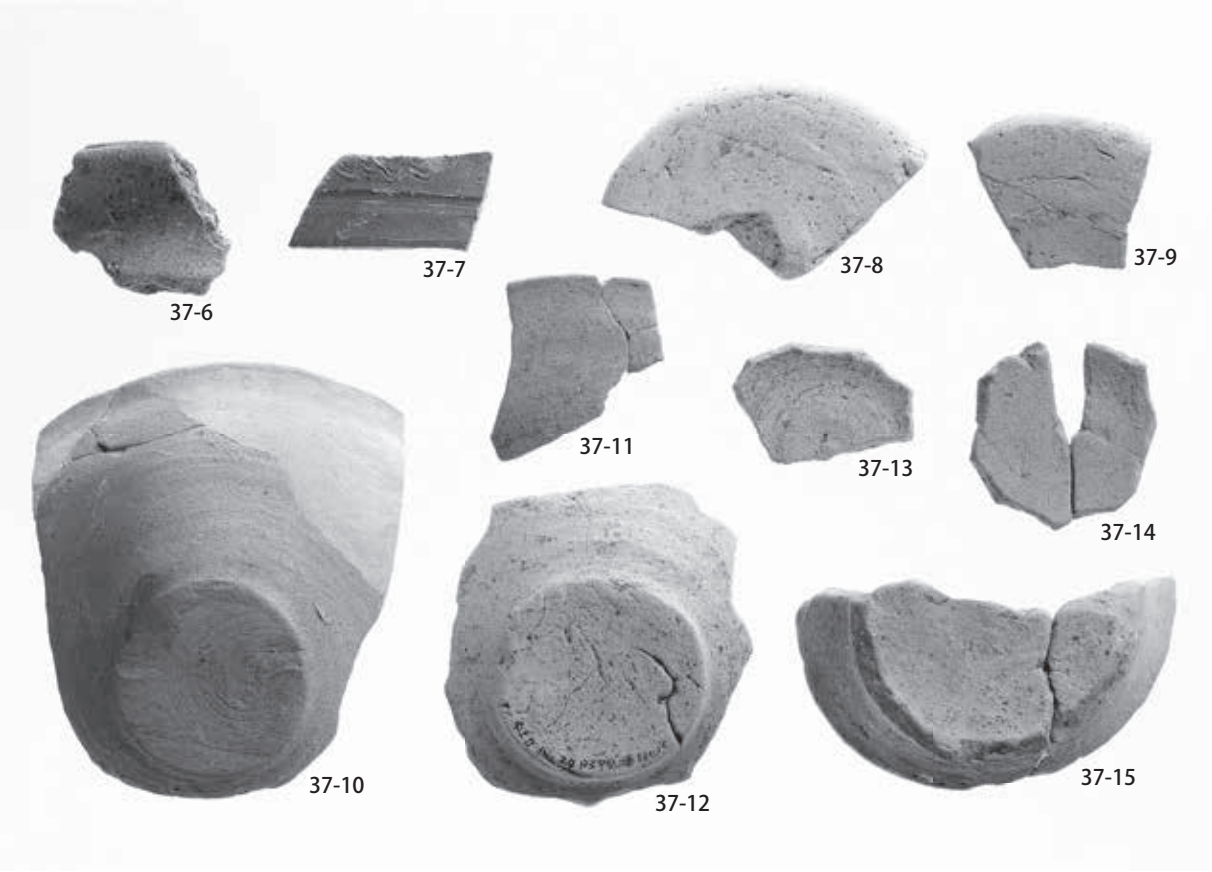


1．中上Ⅱ遺跡　調査区外採集品

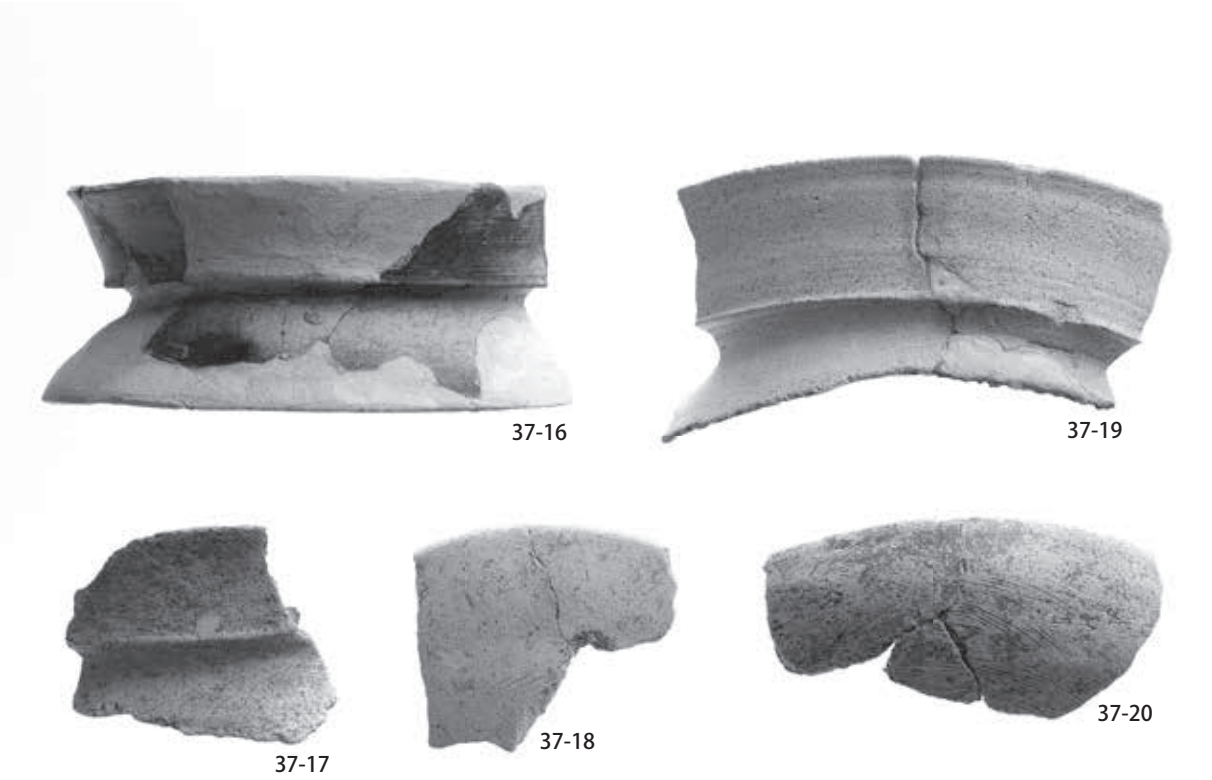


2．中上Ⅱ遺跡　調査区外採集品

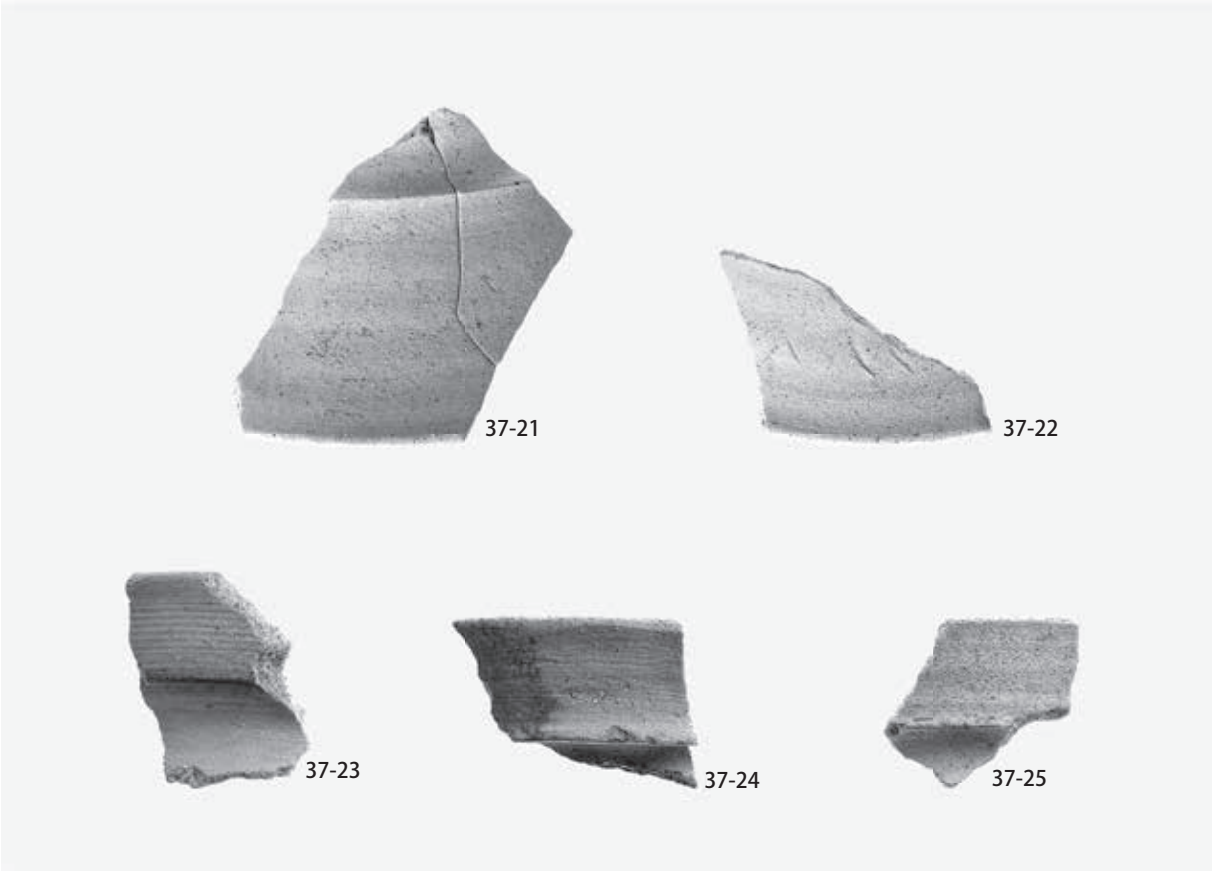
3．中上Ⅱ遺跡１区　遺物包含層出土遺物



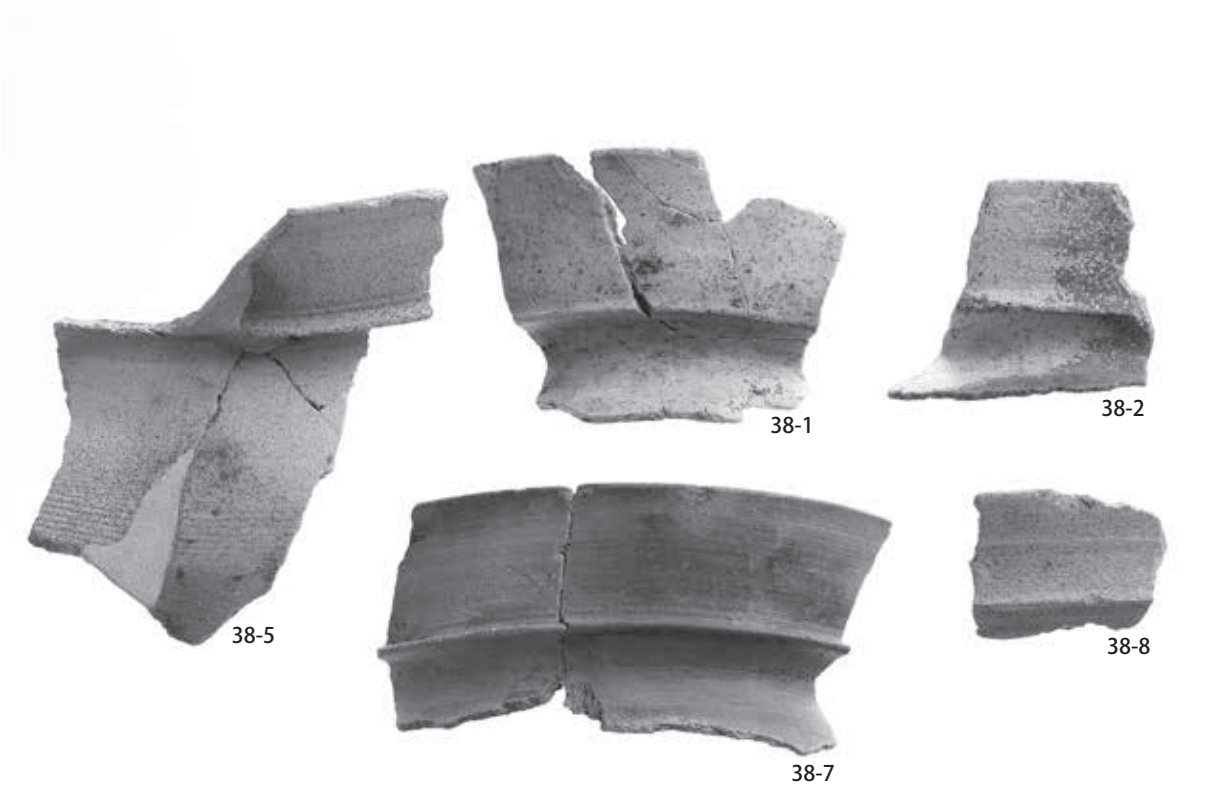
1．中上Ⅱ遺跡１区　遺物包含層出土遺物



2．中上Ⅱ遺跡１区　遺物包含層出土遺物



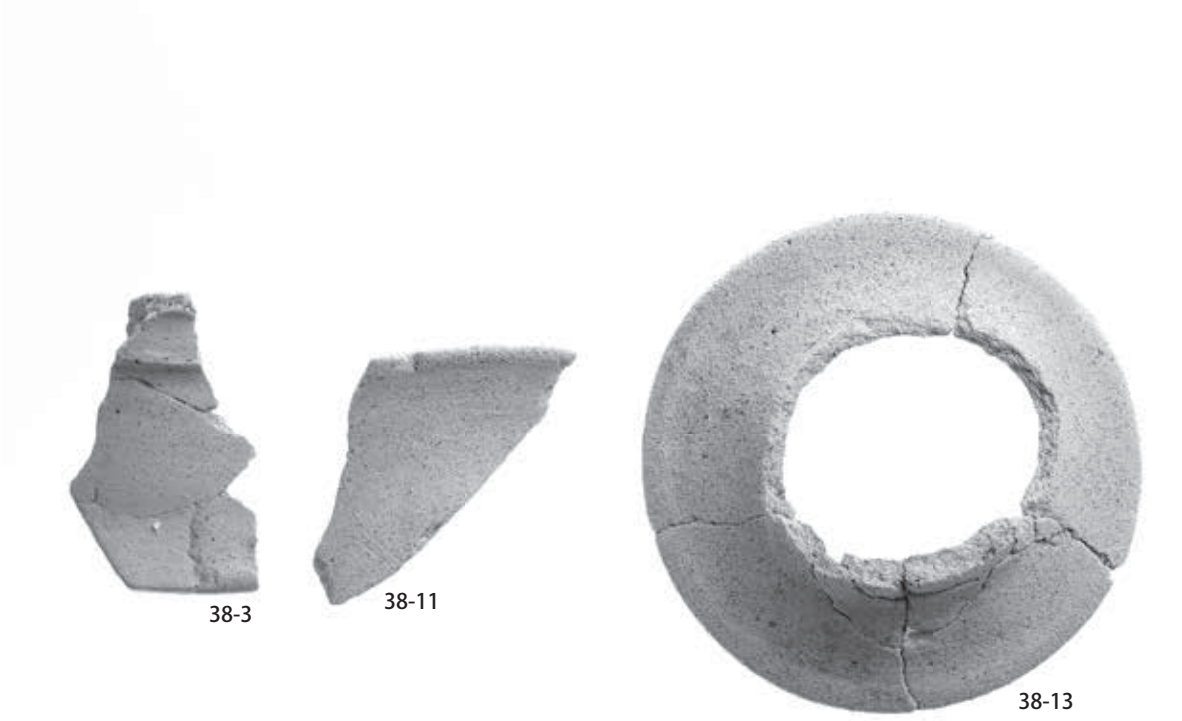
1．中上Ⅱ遺跡１区　遺物包含層出土遺物



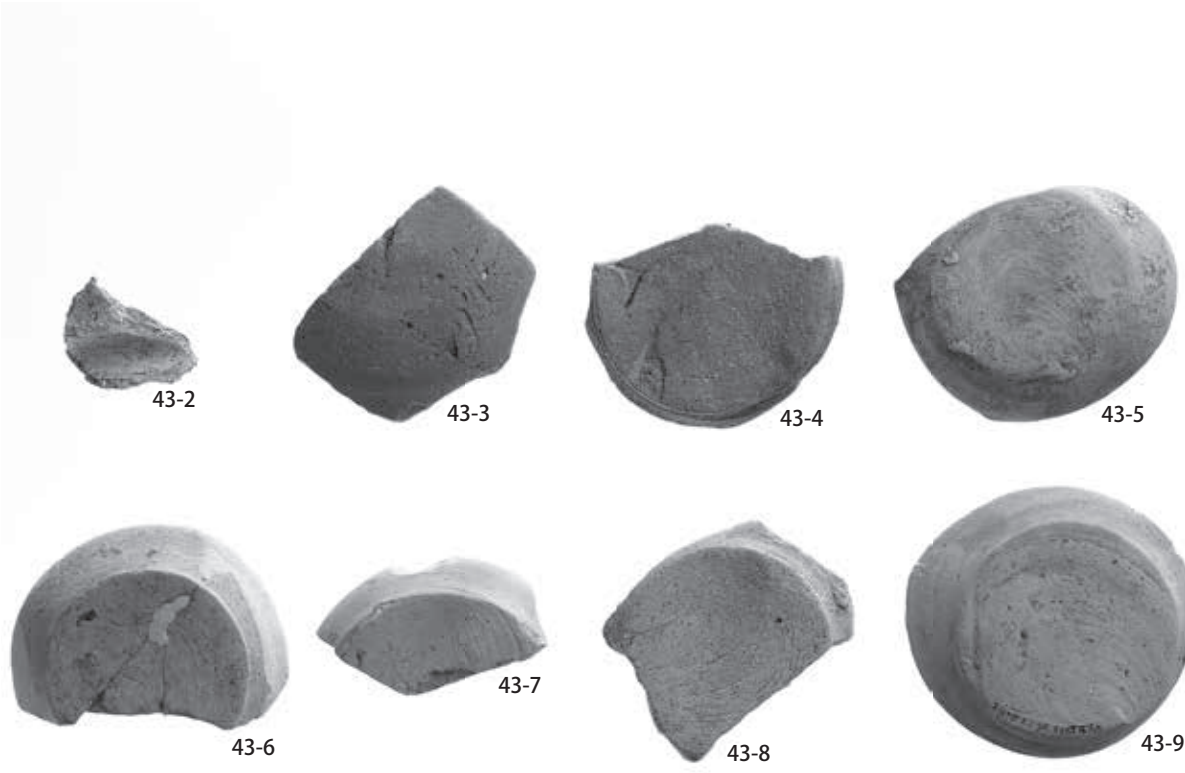
2．中上Ⅱ遺跡１区　遺物包含層出土遺物

1．中上Ⅱ遺跡１区　遺物包含層出土遺物

2．中上Ⅱ遺跡１区　遺物包含層出土遺物



1．中上Ⅱ遺跡 1 区　遺物包含層出土遺物

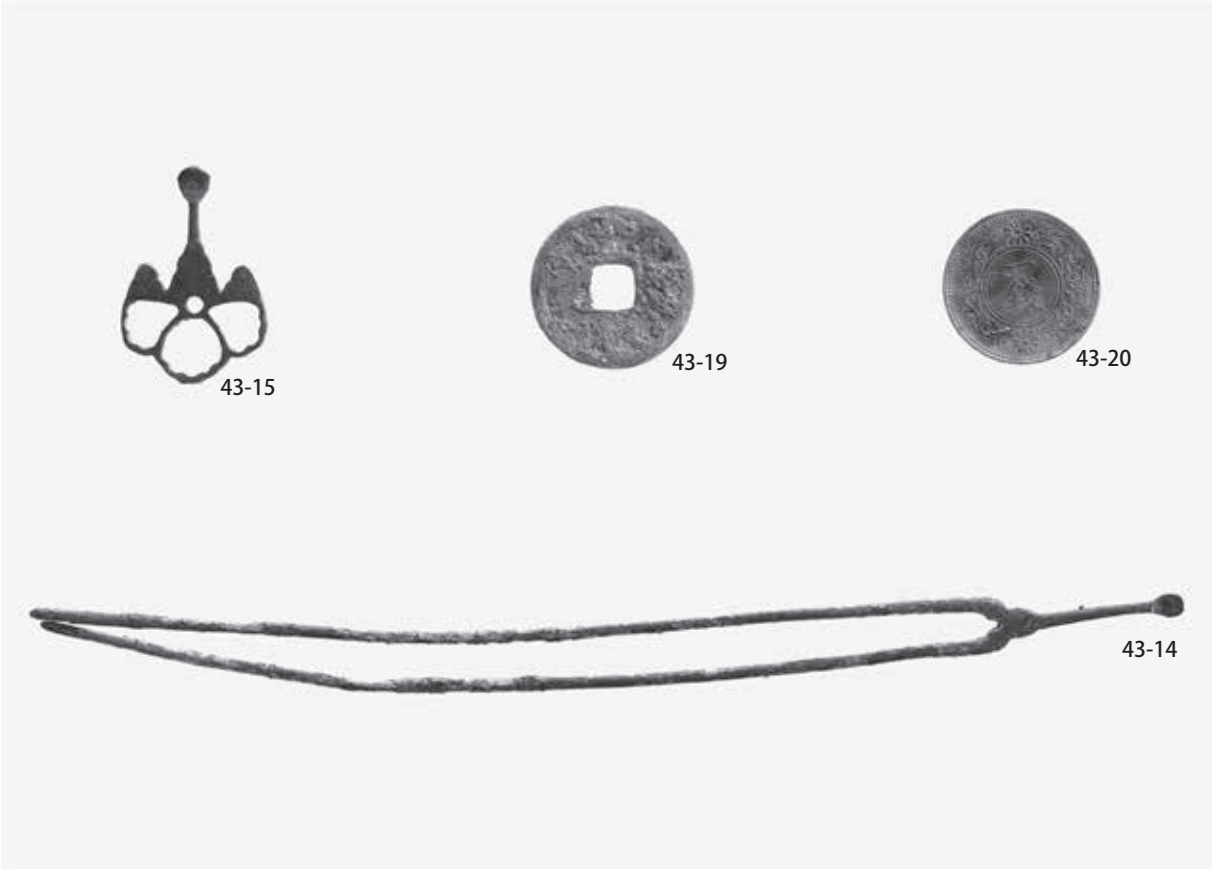


2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR02 出土遺物

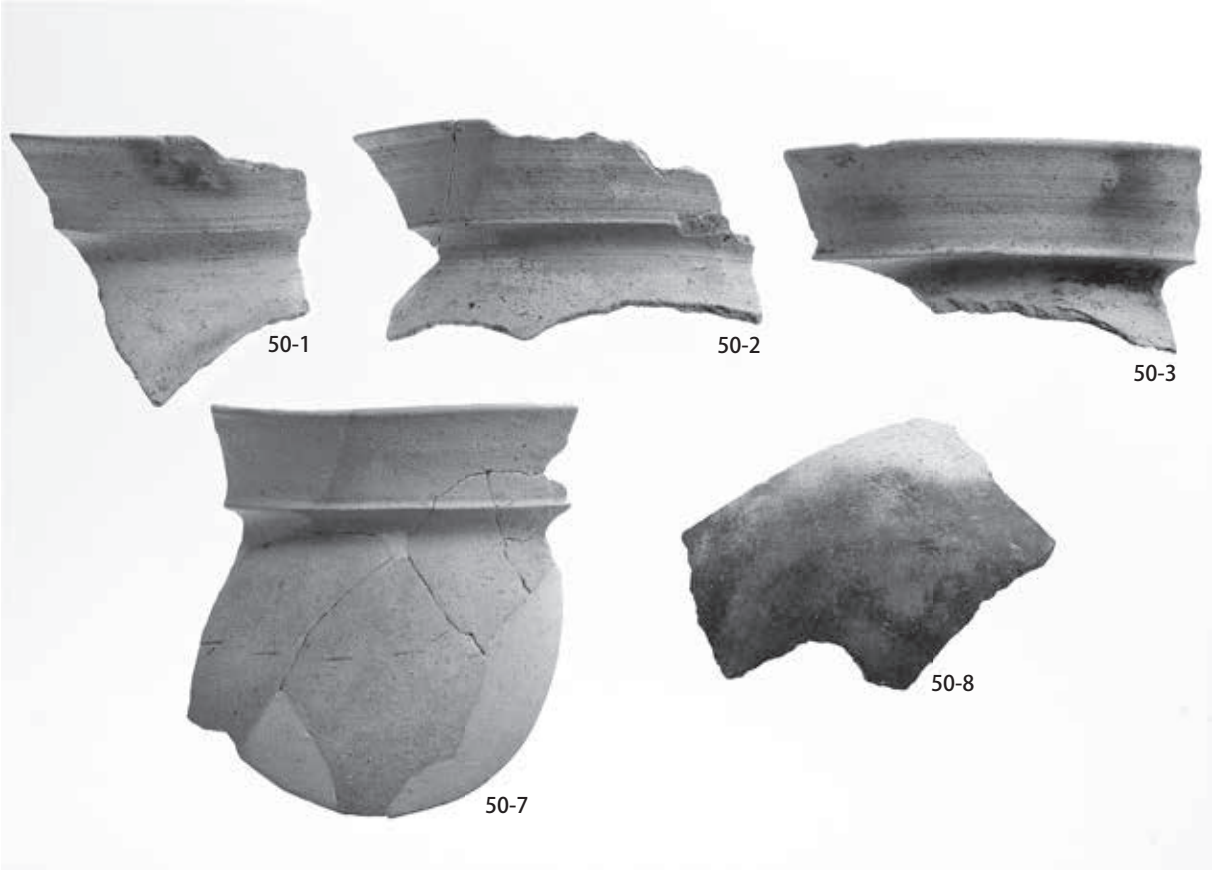
図版 54　中上Ⅱ遺跡

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR01・02・03 出土遺物

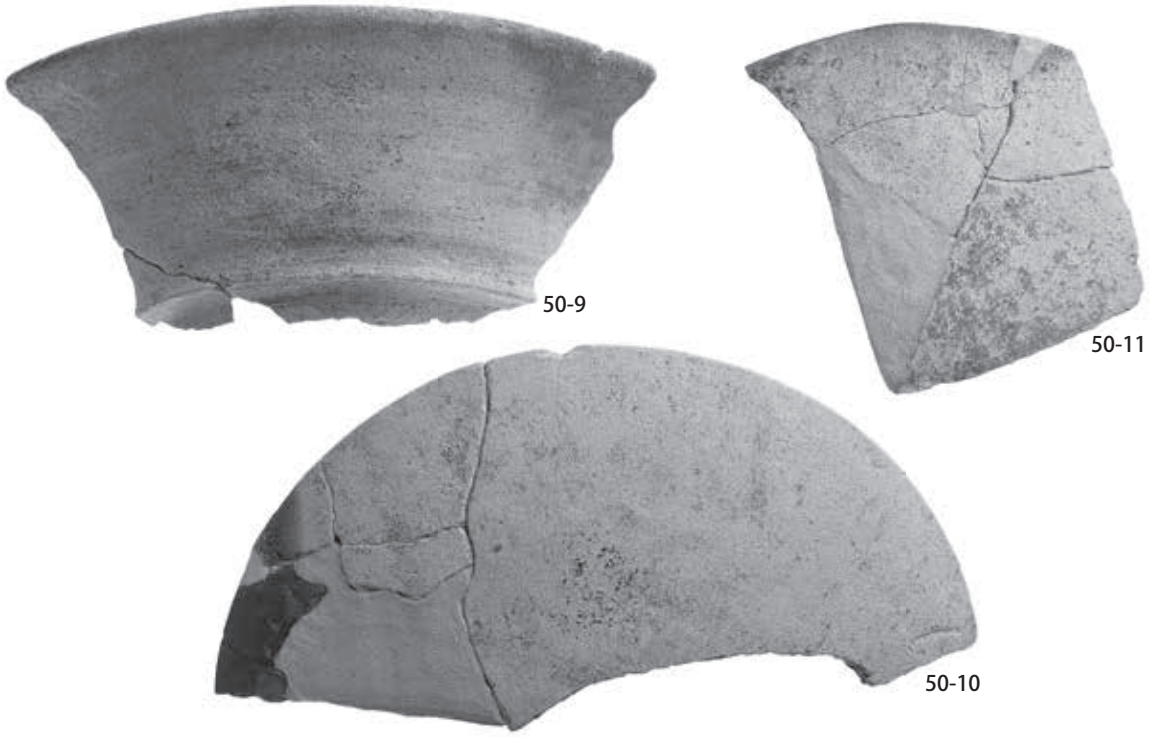
2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR02 出土遺物



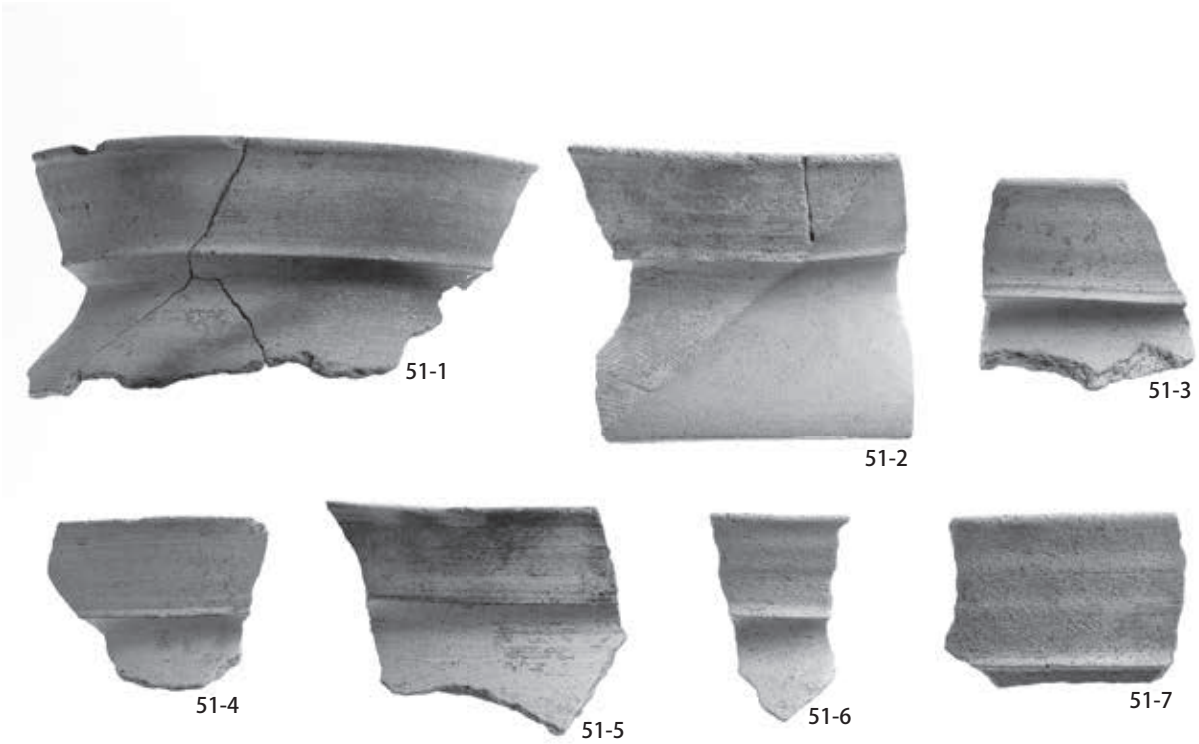
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR02 出土遺物



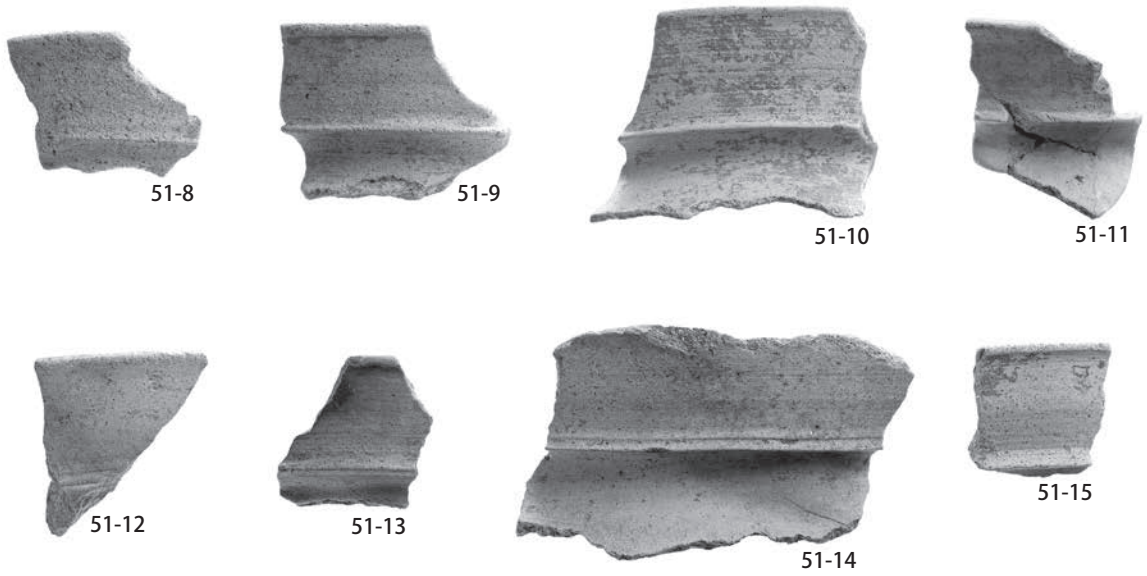
2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物



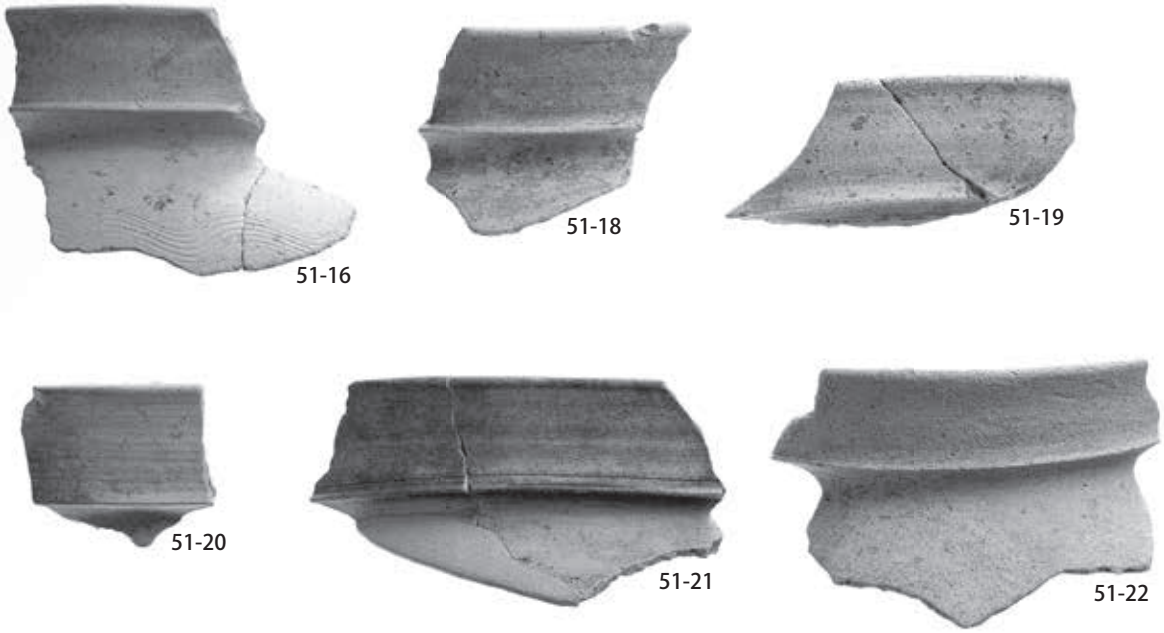
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物



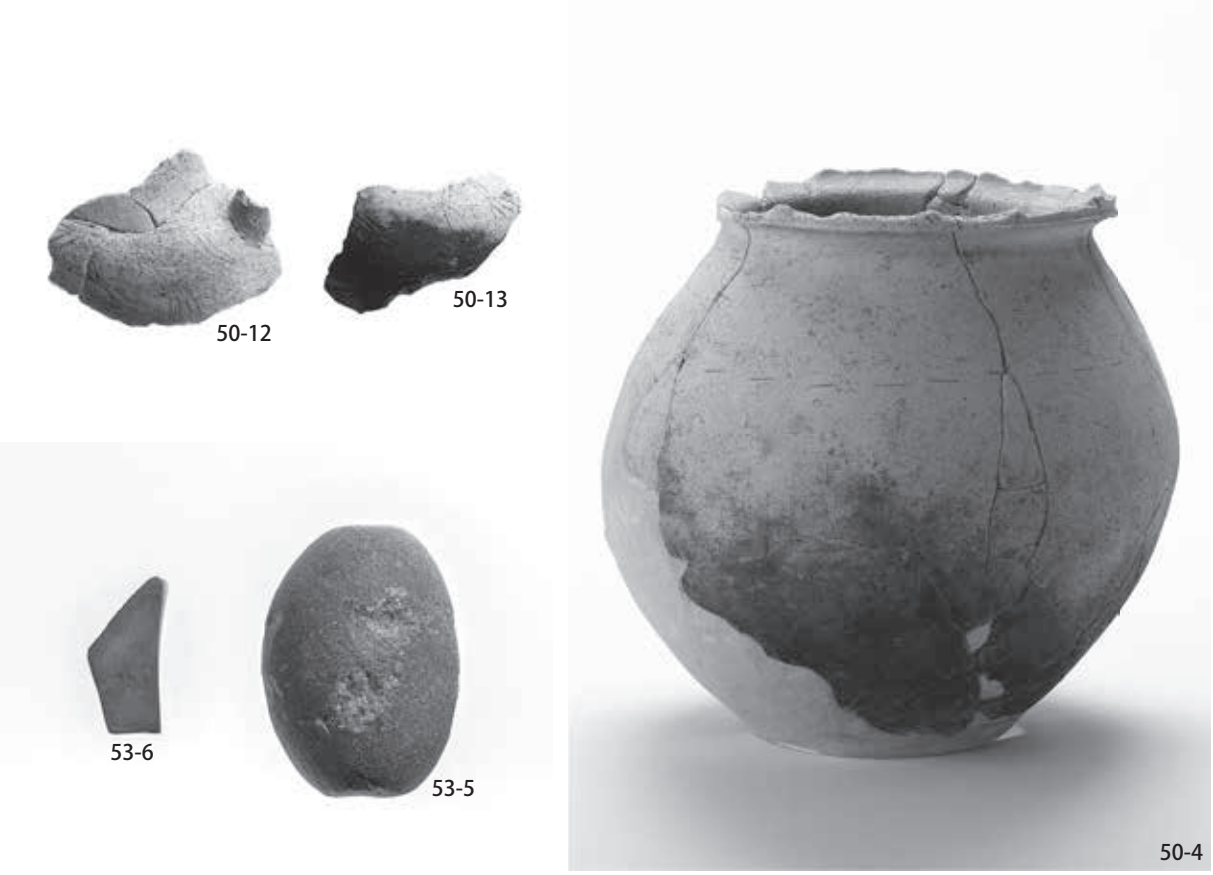
2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物



1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物

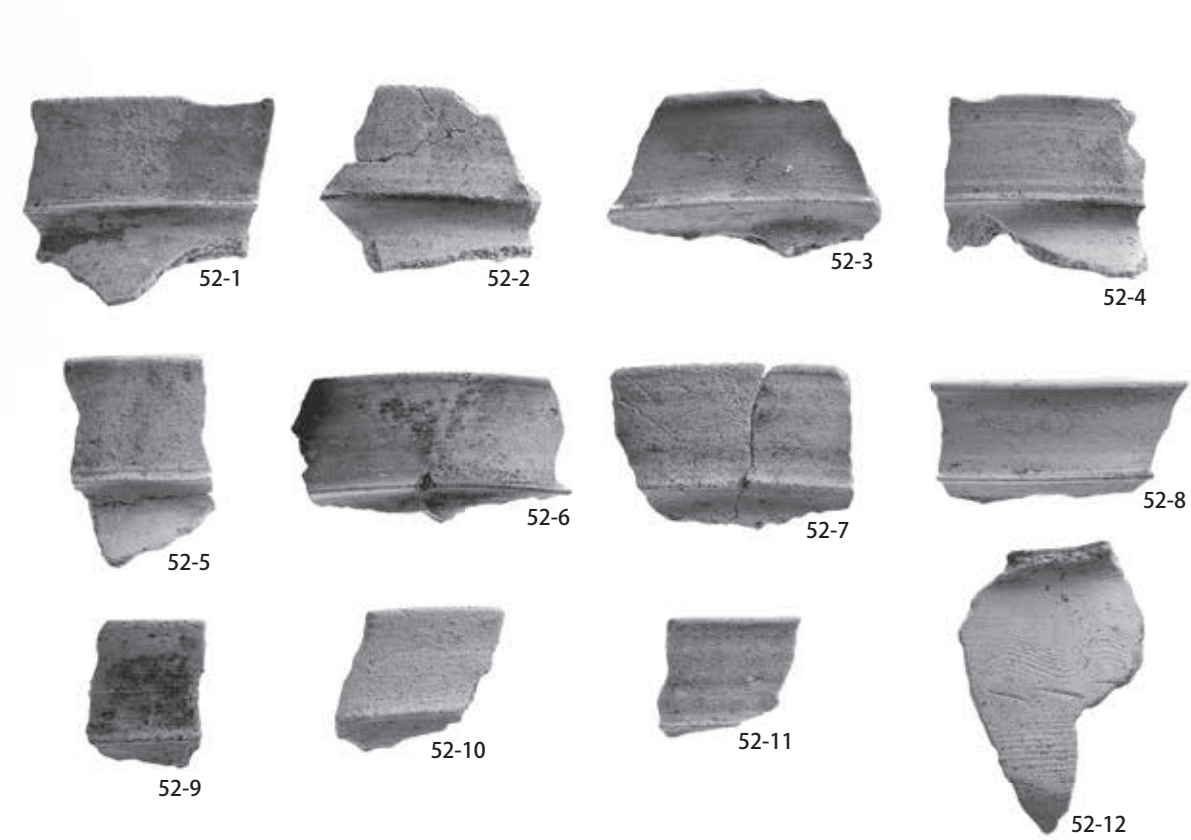


2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物

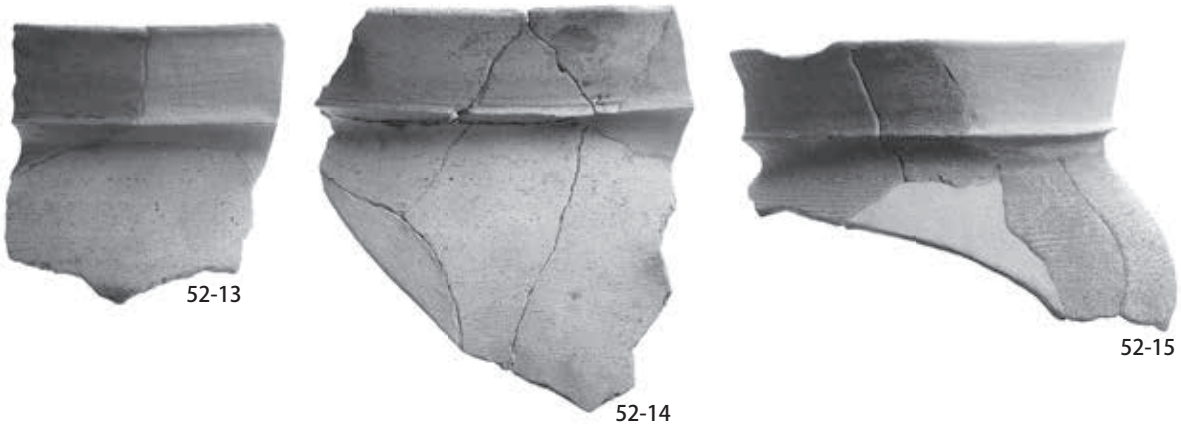


1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物

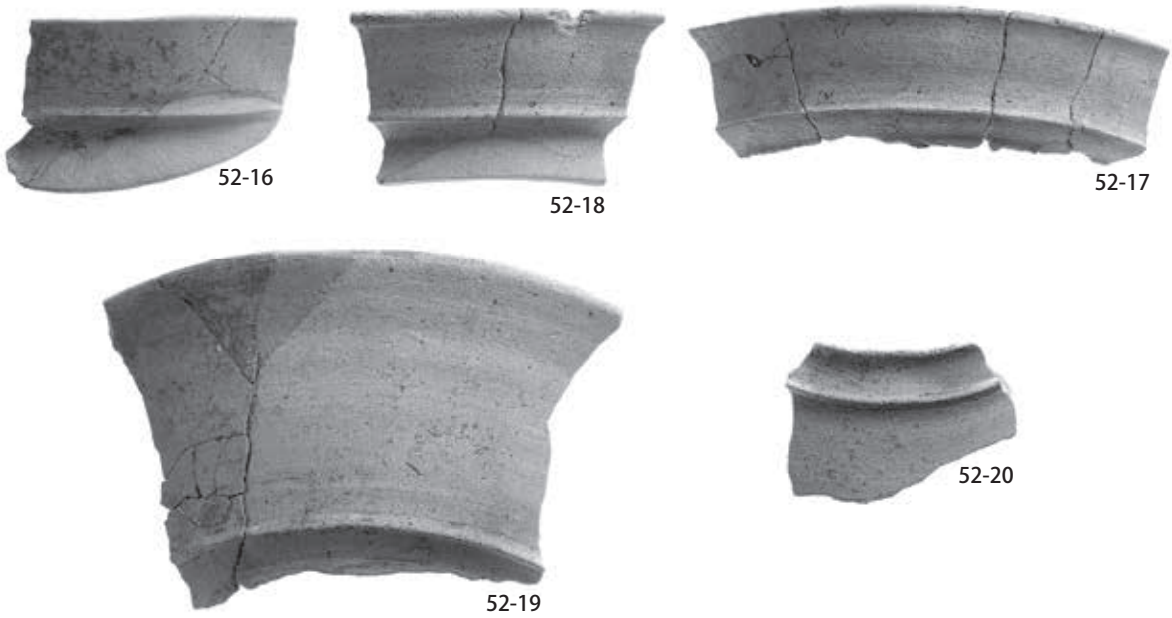
2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物



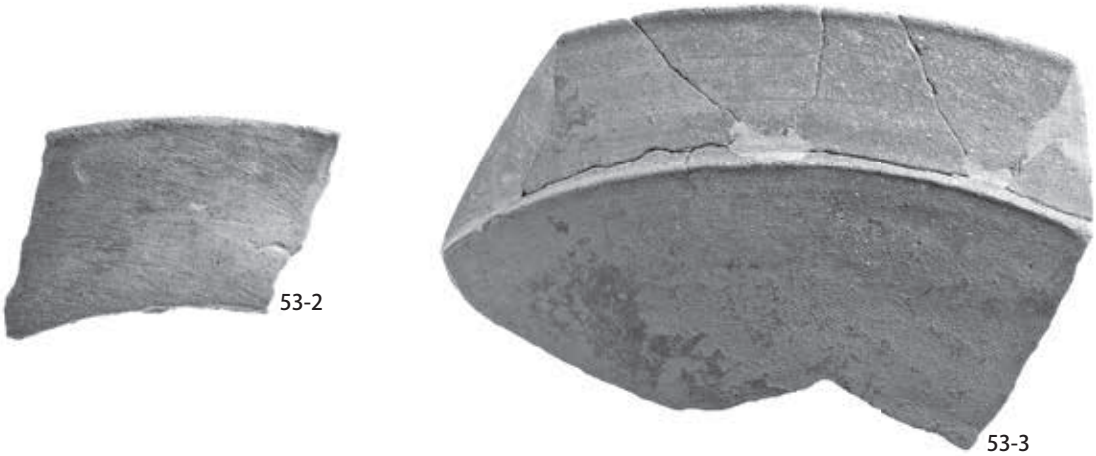
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物



2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物



1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物

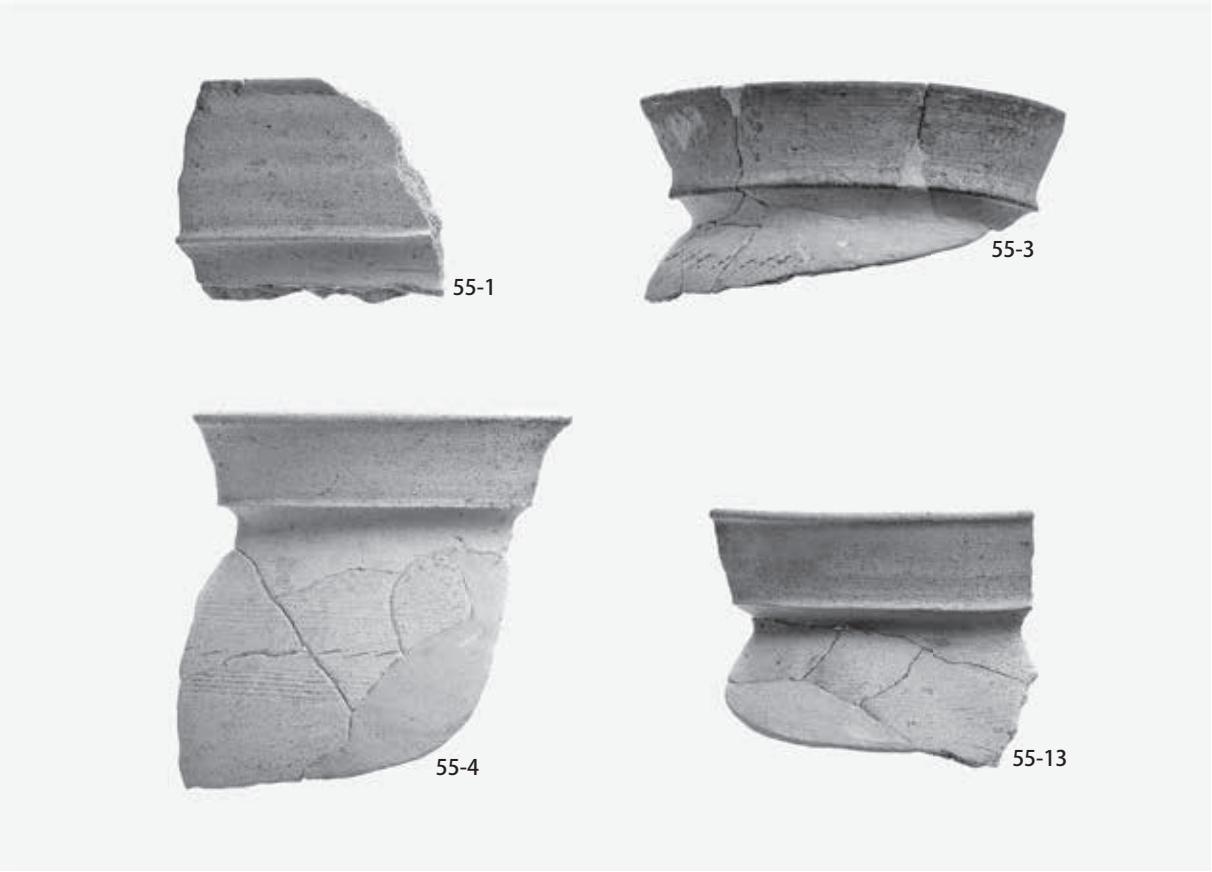


2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物

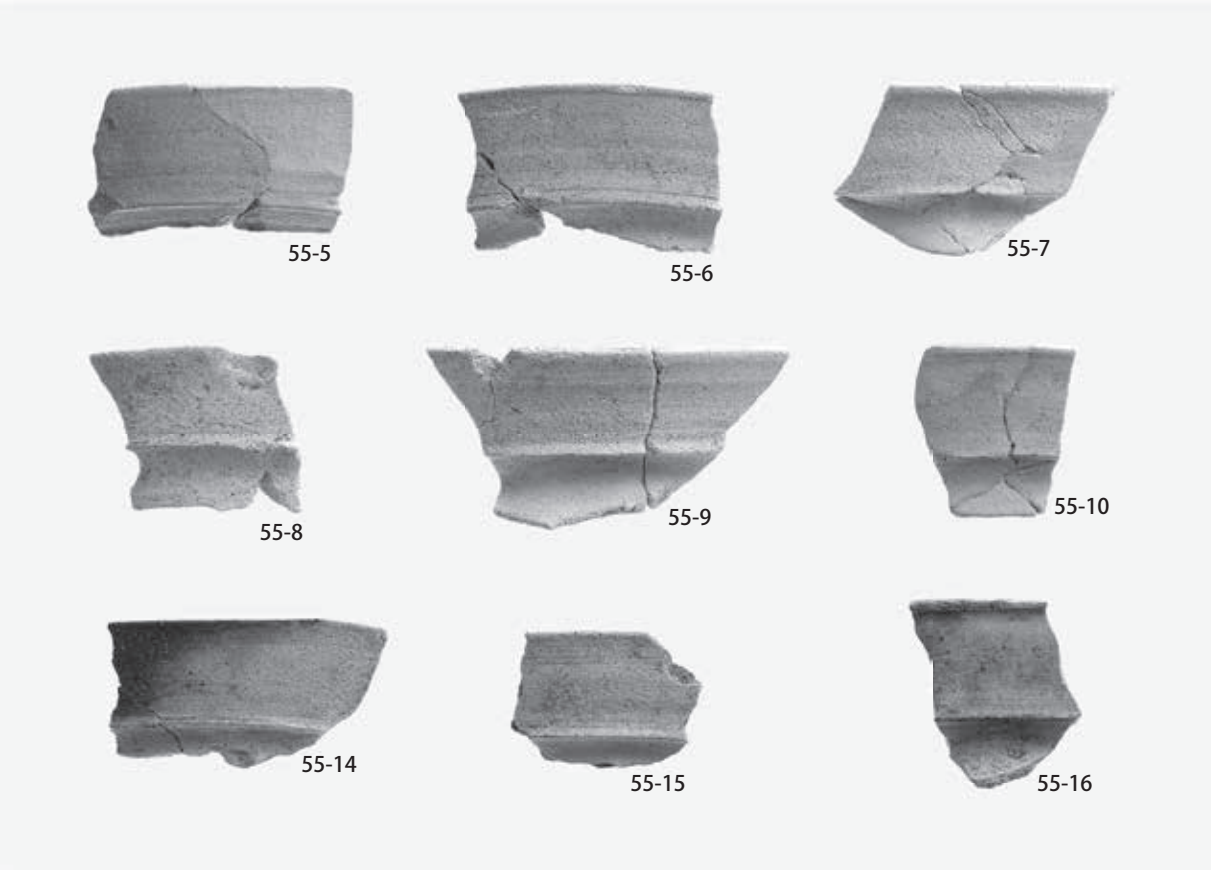
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物

2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX01 出土遺物

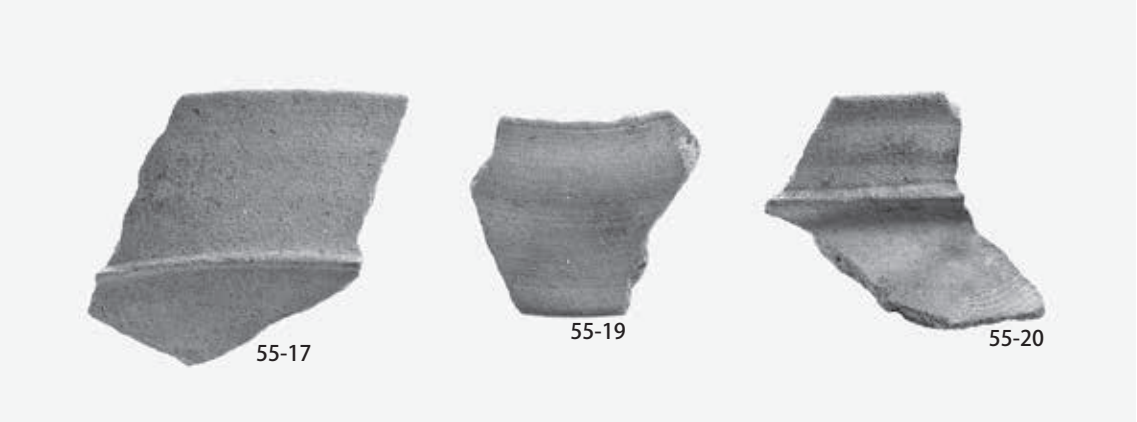
3．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX02 出土遺物



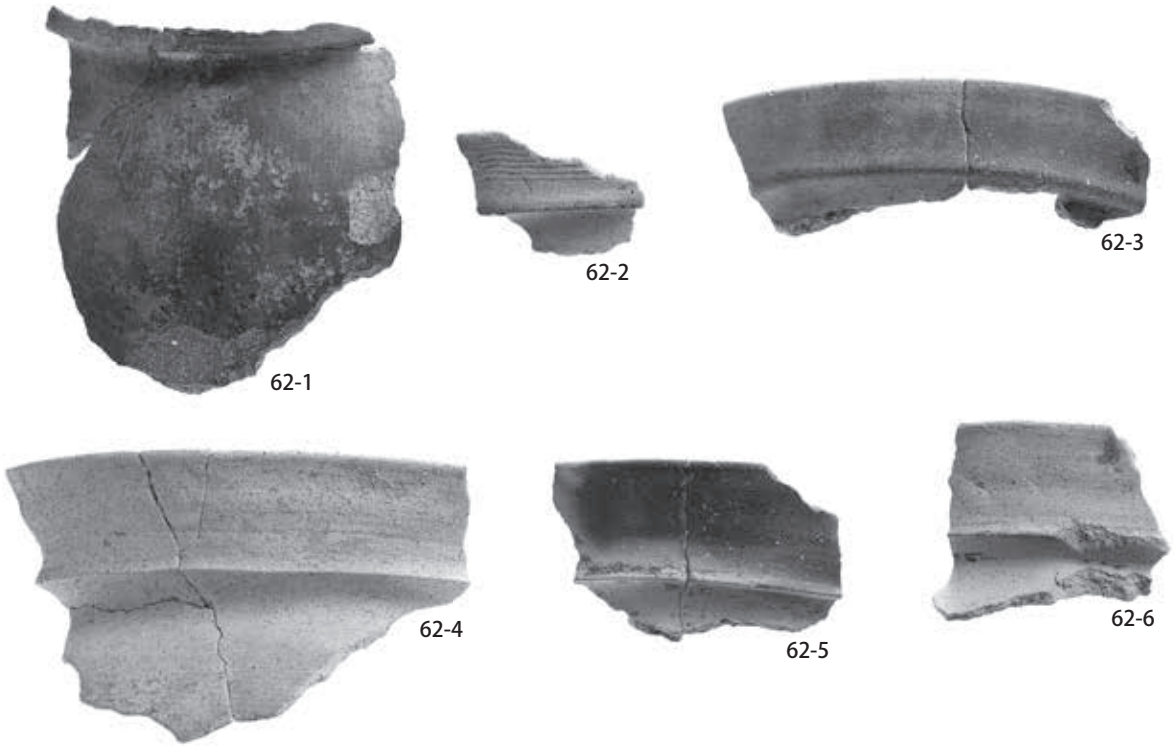
1．中上 II 遺跡 1 区　SX02 出土遺物



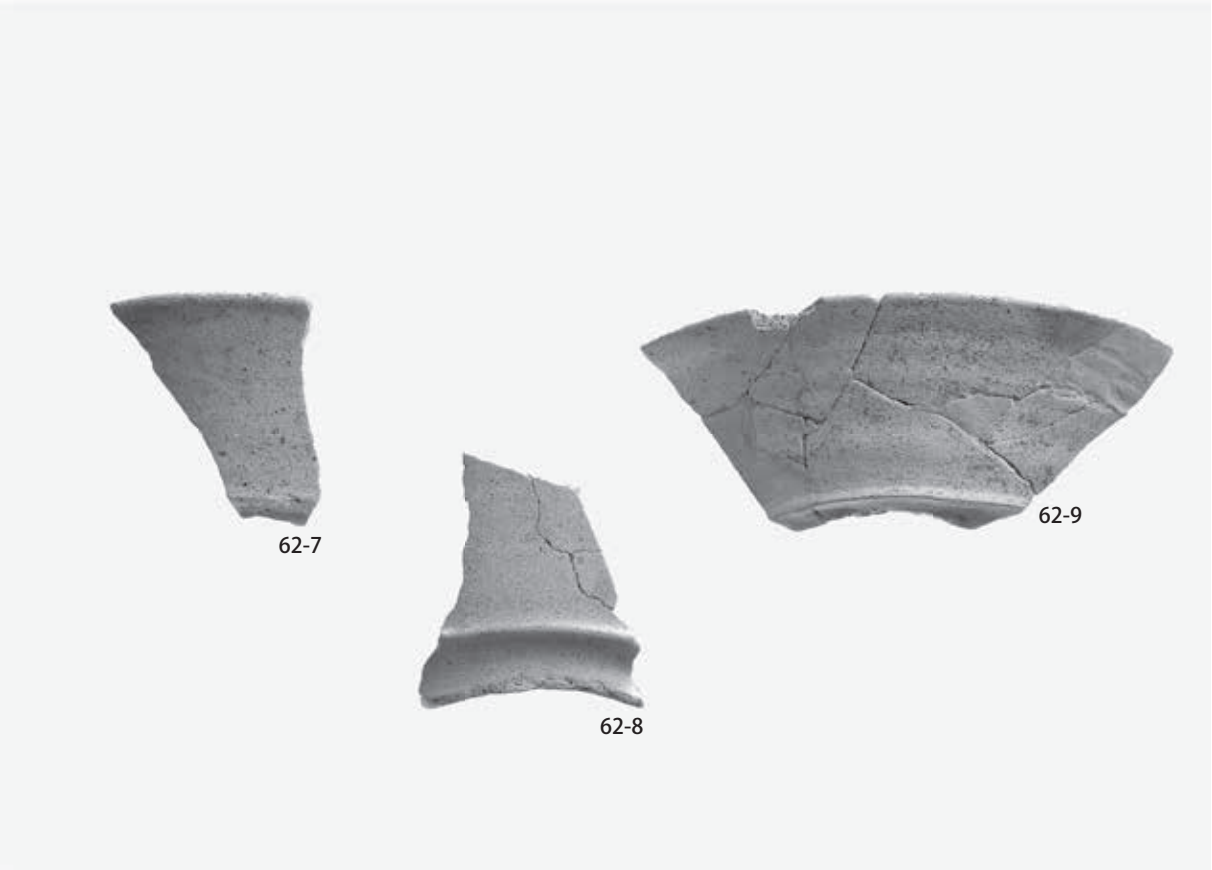
2．中上 II 遺跡 1 区　SX02 出土遺物



1．中上Ⅱ遺跡 1 区　SX02 出土遺物

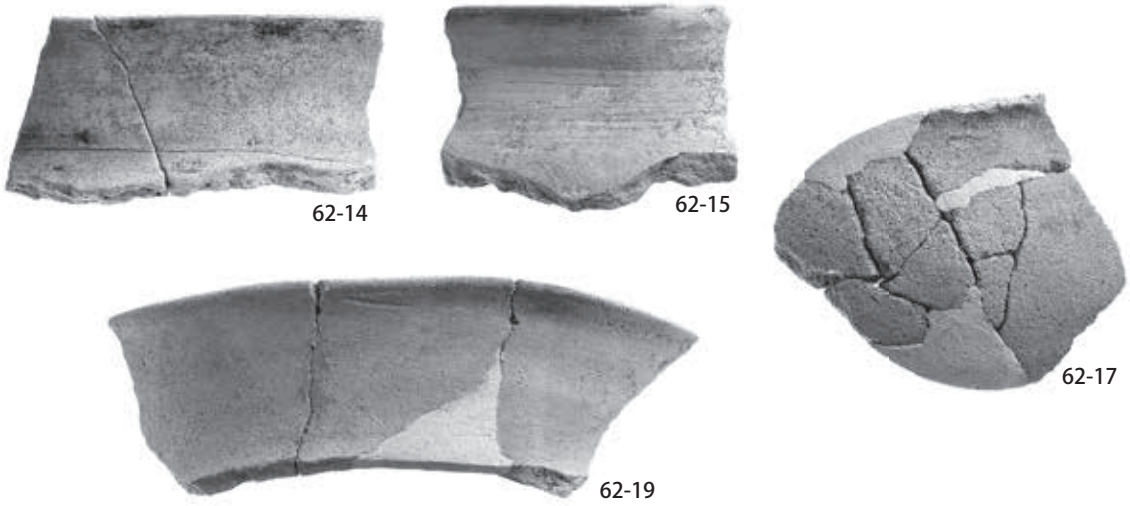


1．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 1 出土遺物

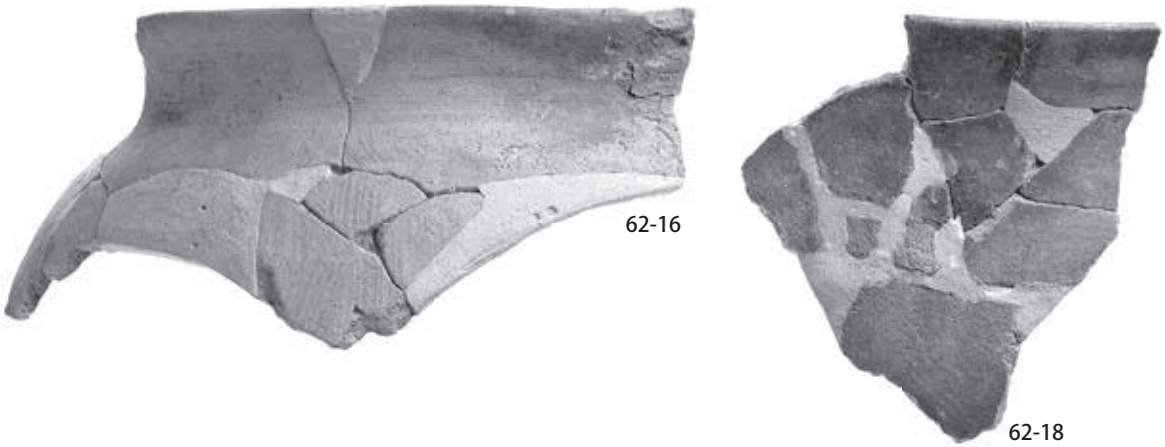


2．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 1 出土遺物

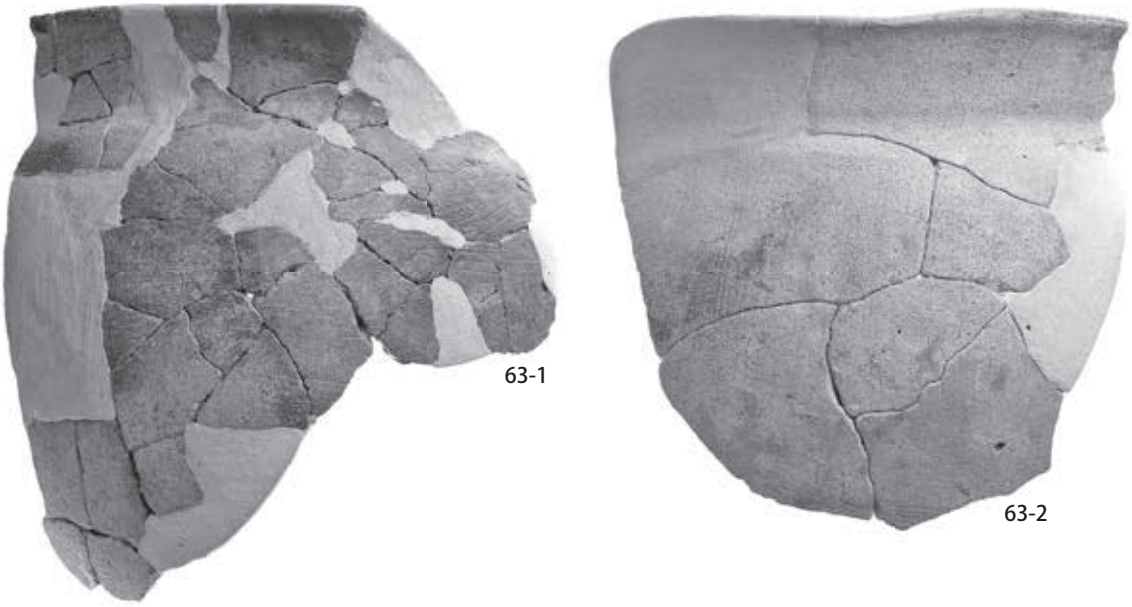
1．中上Ⅱ遺跡１区　加工段１出土遺物



2．中上Ⅱ遺跡１区　加工段１出土遺物

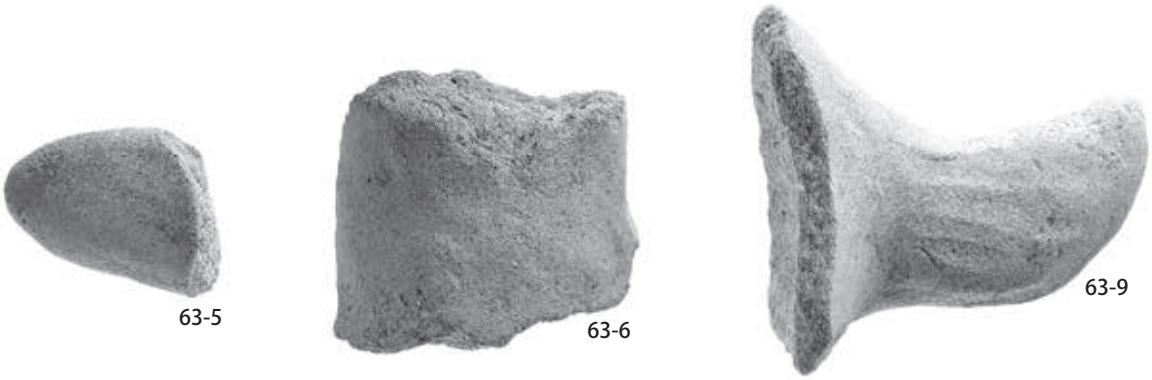


1．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 1 出土遺物

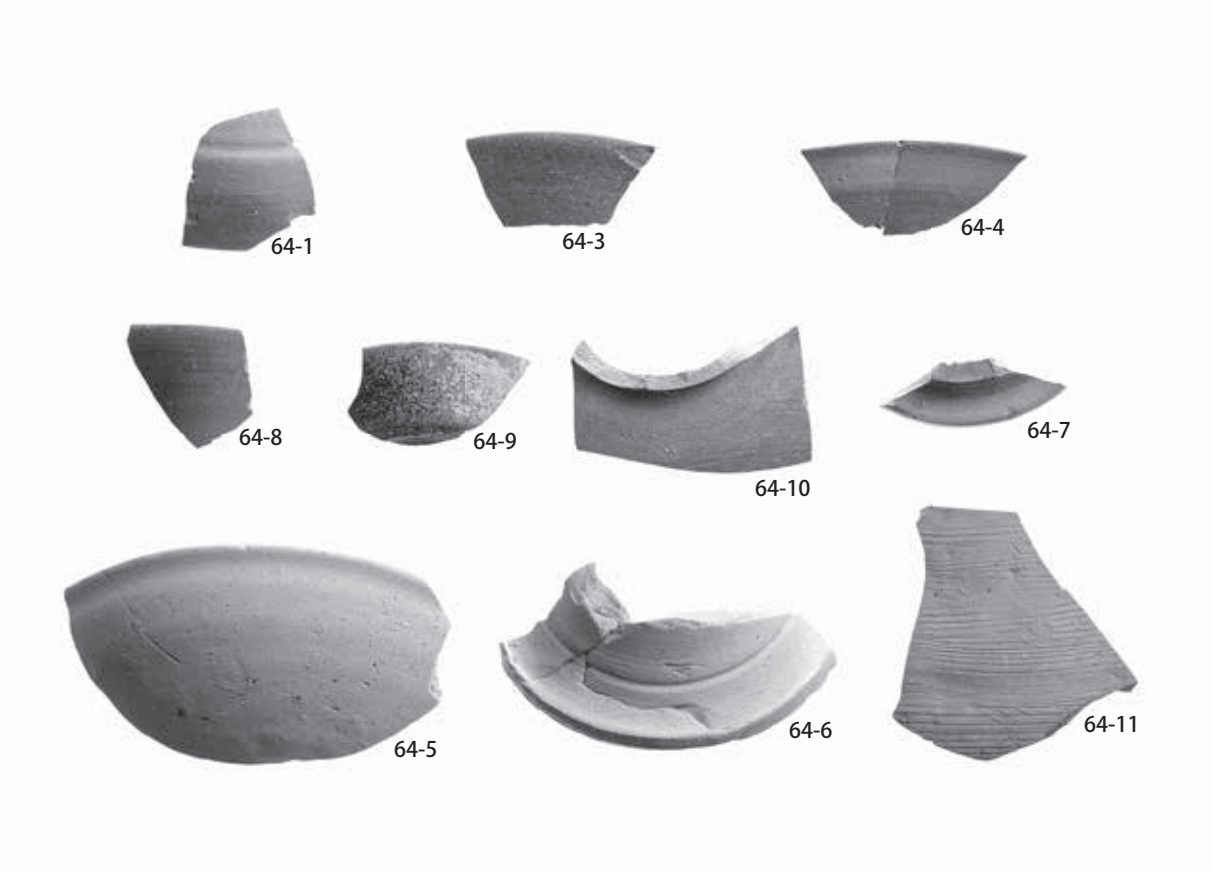


2．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 1 出土遺物

1．中上Ⅱ遺跡１区　加工段１出土遺物



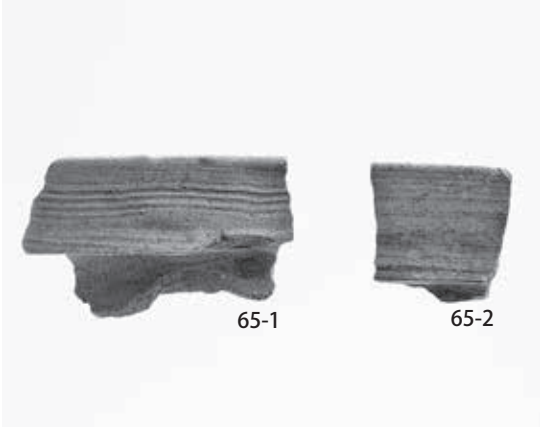
2．中上Ⅱ遺跡１区　加工段１出土遺物



1．中上Ⅱ遺跡１区　加工段１出土遺物

63-7

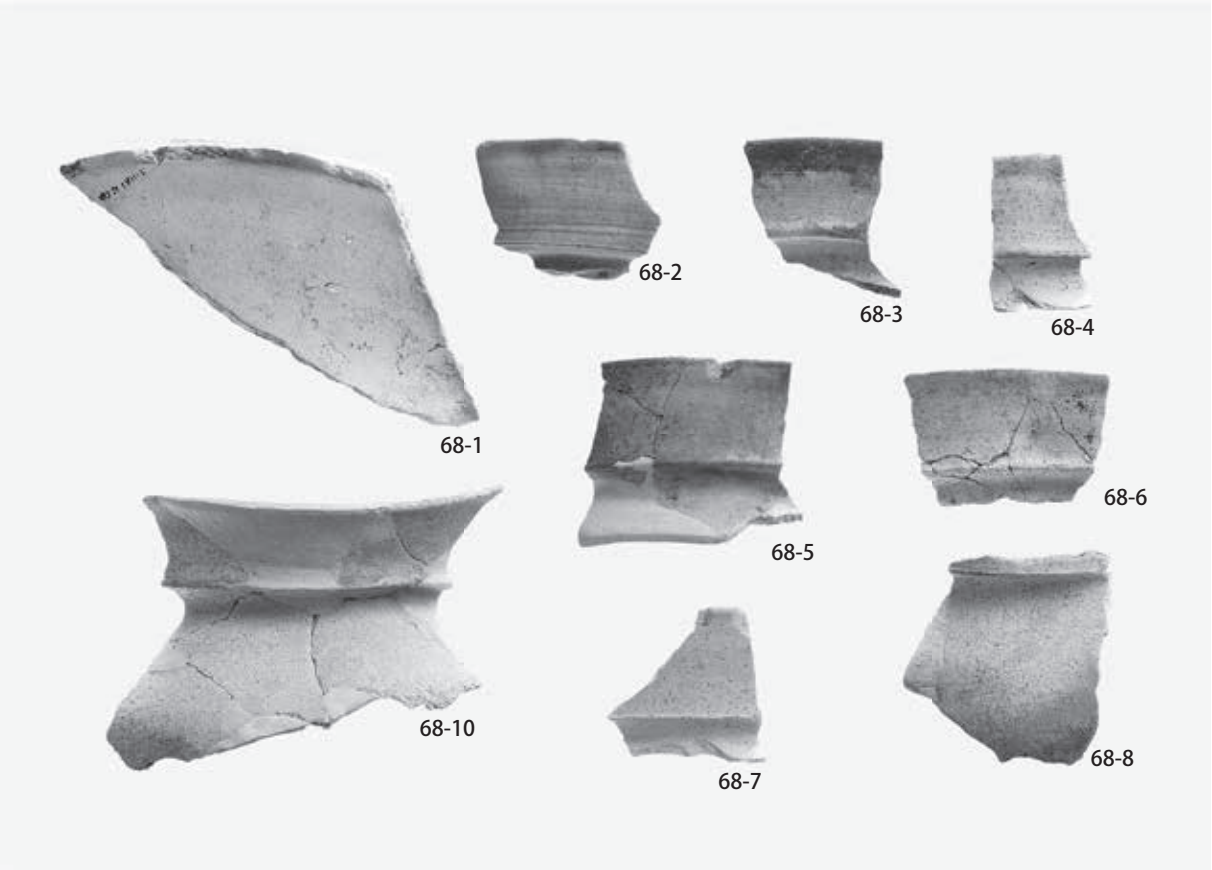
62-13



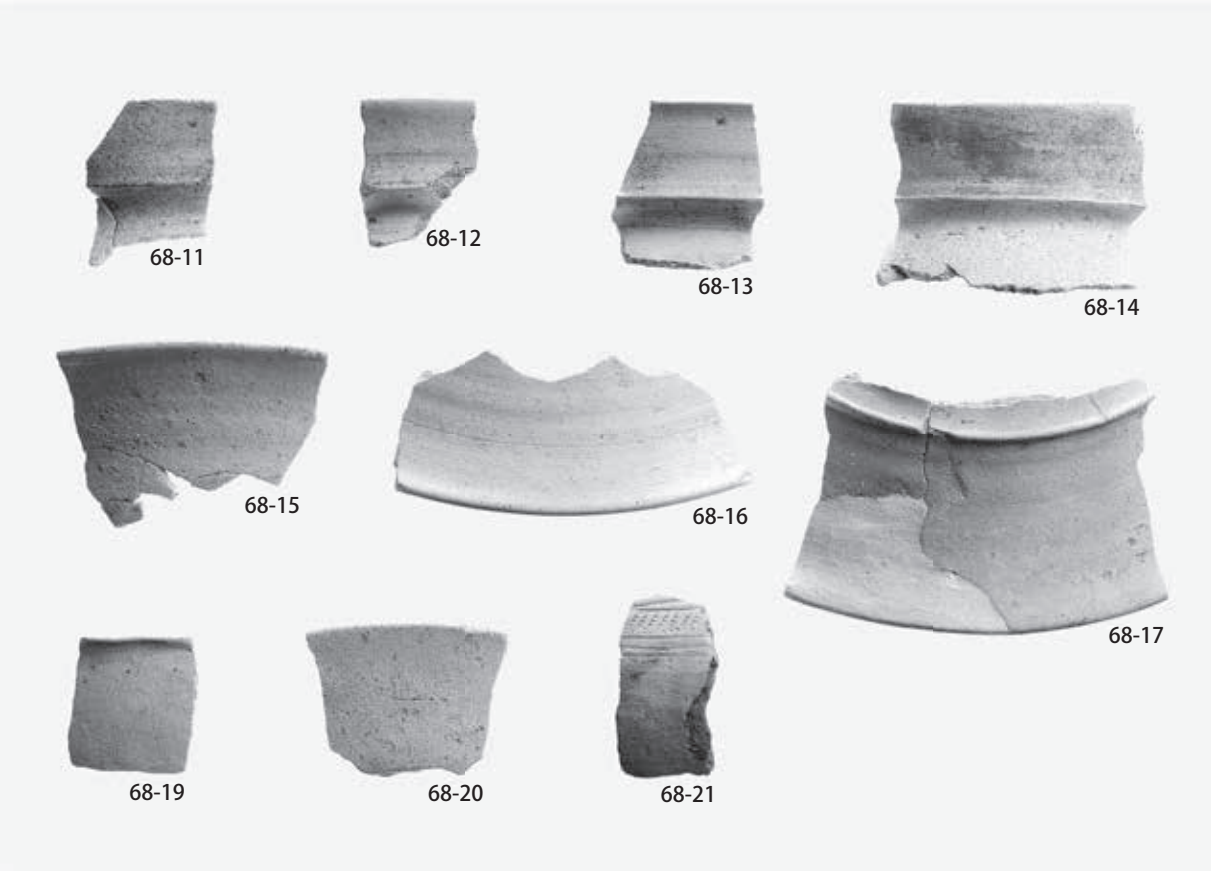
65-1　65-2

2．中上Ⅱ遺跡１区　加工段１・２出土遺物

1．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 1 出土遺物

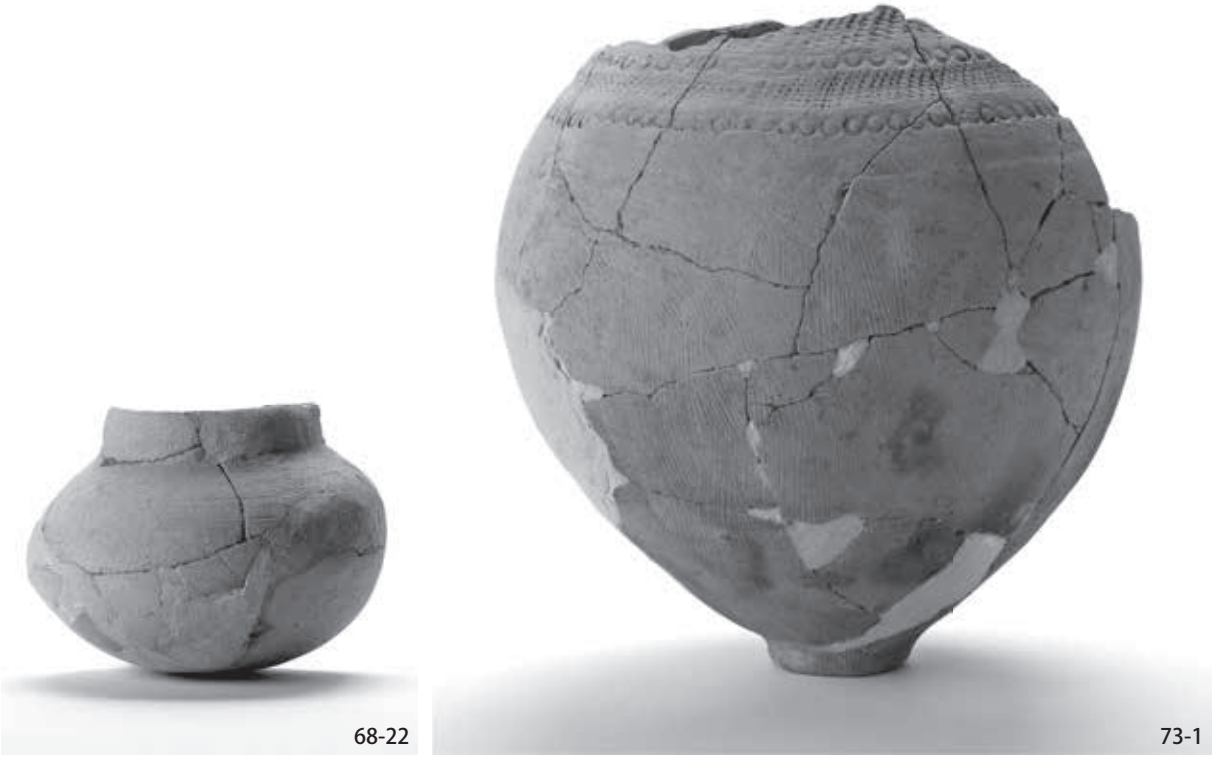


2．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 3 出土遺物

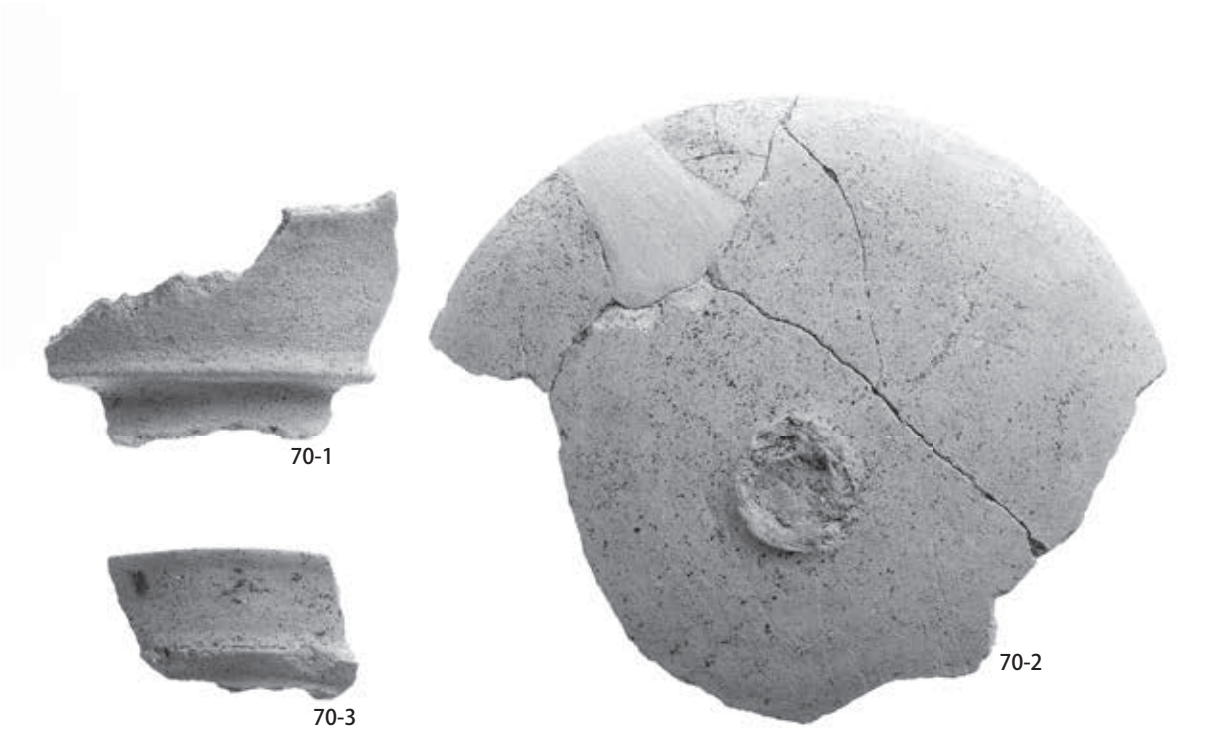


1．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 3 出土遺物

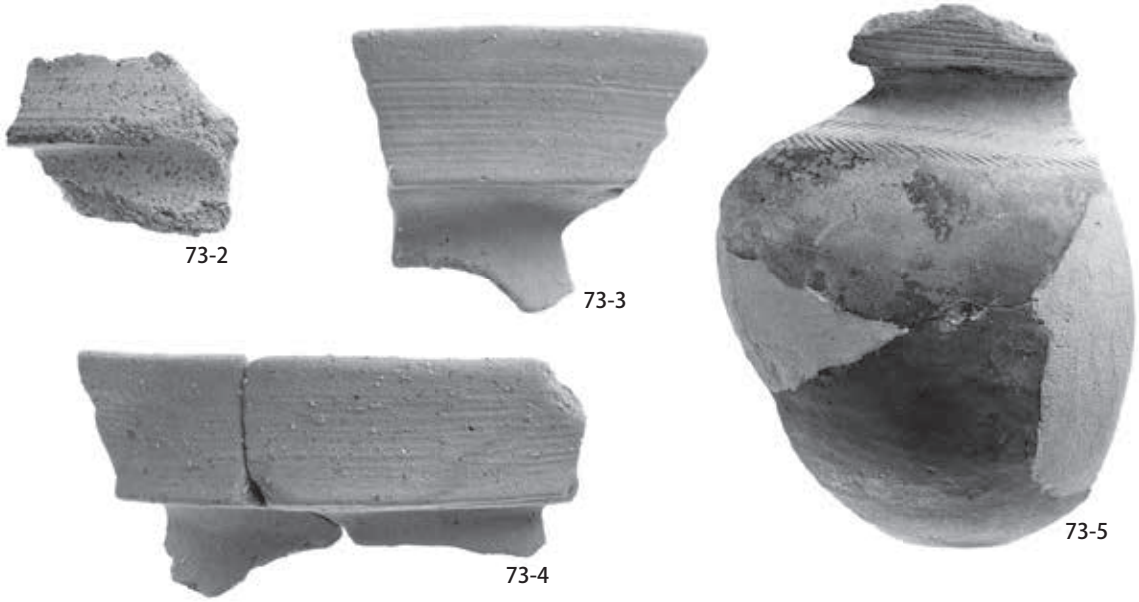
2．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 1・3・5 出土遺物



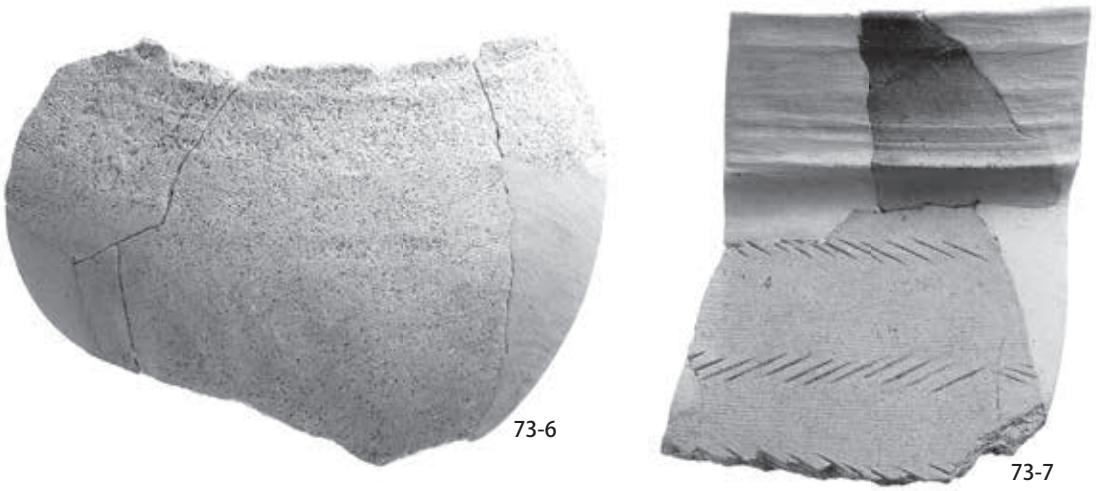
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 3・5 出土遺物



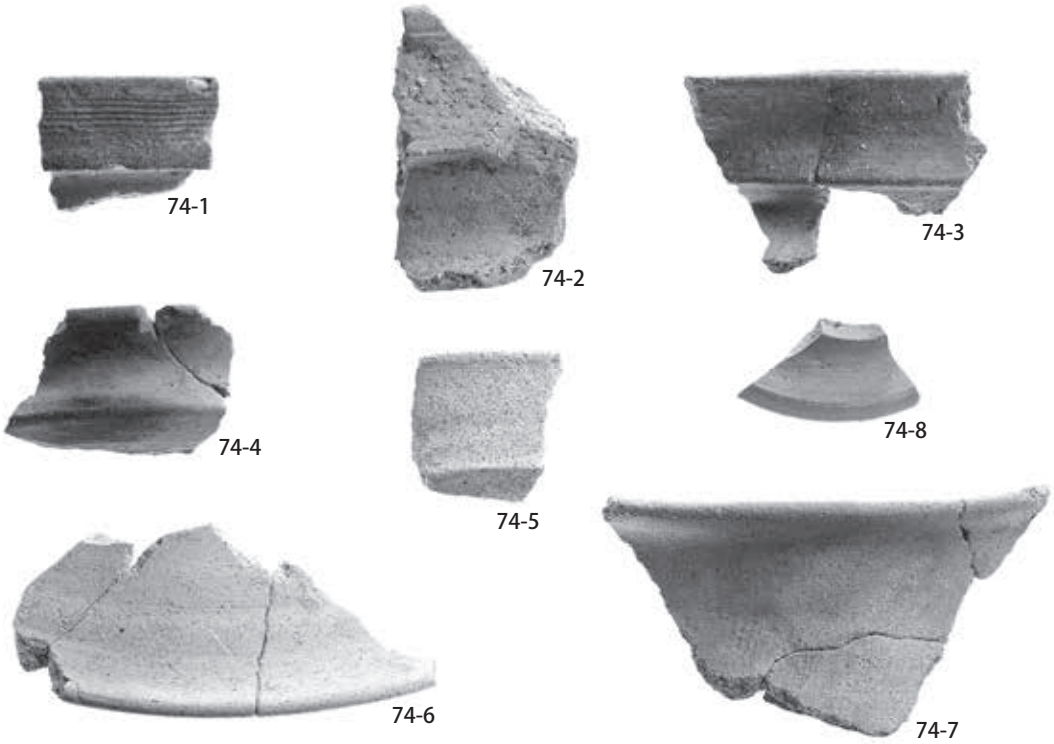
2．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 4 出土遺物



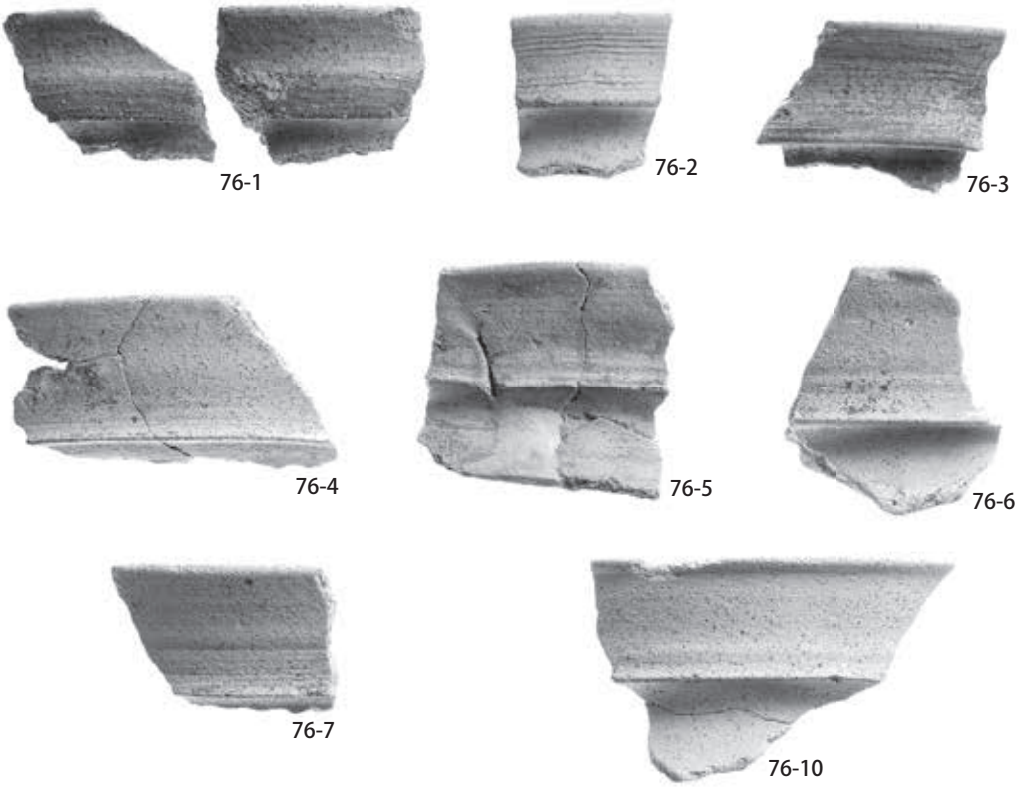
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 5 出土遺物



2．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 5 出土遺物



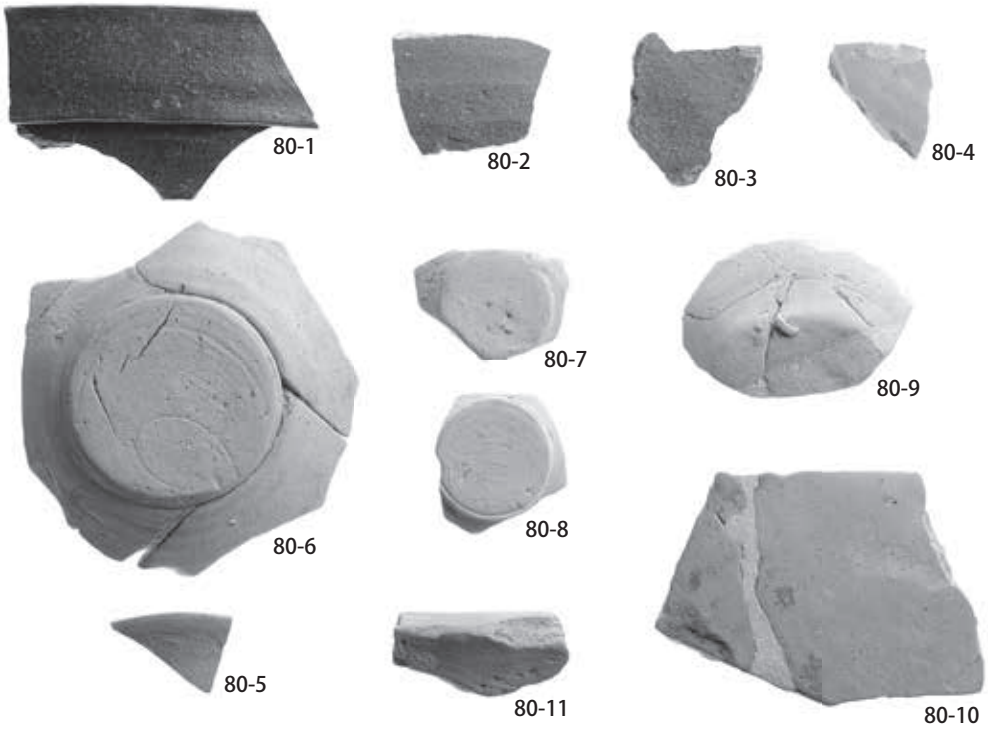
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 4 出土遺物



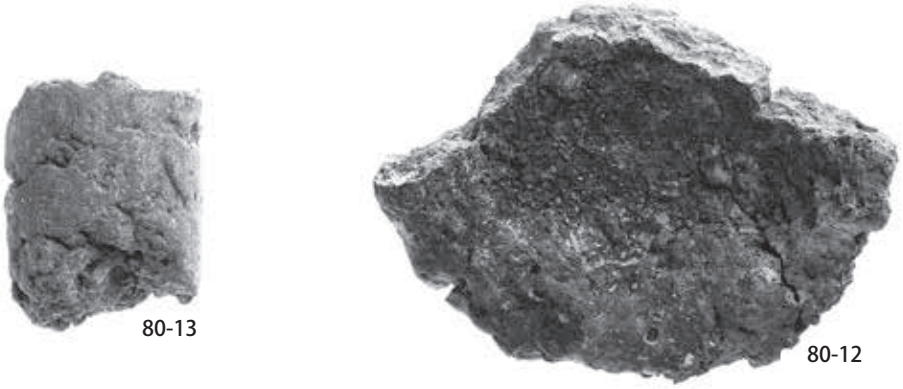
2．中上Ⅱ遺跡 1 区　加工段 4 出土遺物

1．中上Ⅱ遺跡１区　土器溜出土遺物

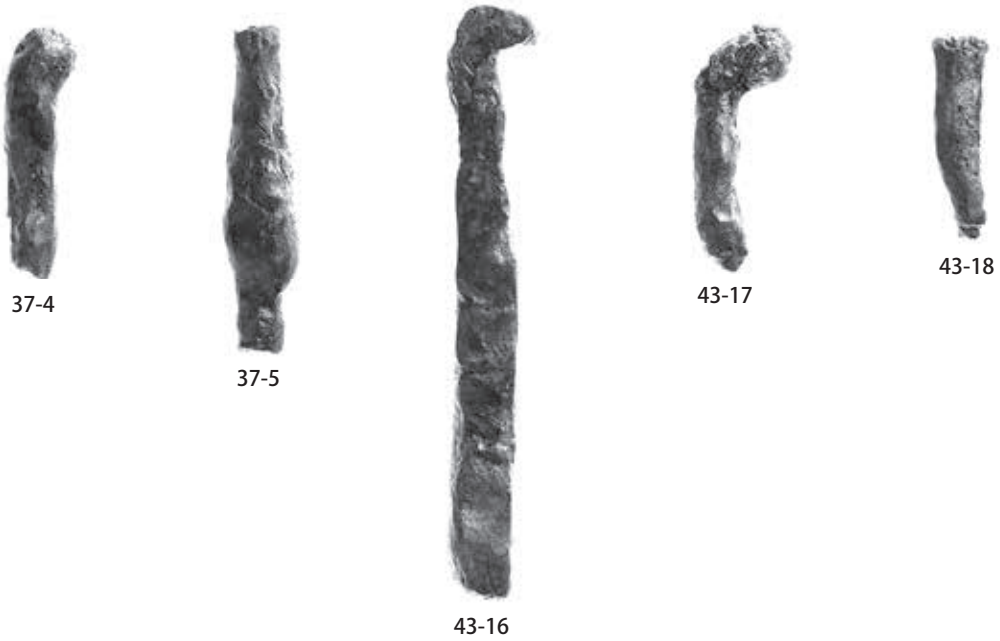
1．中上Ⅱ遺跡 1 区　土器溜出土遺物



2．中上Ⅱ遺跡 2 区　遺物包含層出土遺物



1．中上Ⅱ遺跡 2 区　遺物包含層出土遺物



2．中上Ⅱ遺跡 1 区　SR02、遺物包含層出土遺物

報　告　書　抄　録

フリガナ	キョウデンイセキ・ナカガミニイセキ
書名	京田遺跡２区・中上Ⅱ遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	6
編著者名	深田　浩・園山　薫（編）、金原美奈子、金原祐美子、渡辺正巳、（株）加速器分析研究所
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒690-0131　島根県松江市打出町33番地　TEL：0852-36-8608　FAX：0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp　http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
発行年月日	令和２年３月16日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
きょうでんいせき 京田遺跡	しまねけんいずもしこりょうちょう 島根県出雲市湖陵町	32203	b 51	35°18′13″	132°41′18″	2018 0919 ～ 2018 1227	150	道路建設
なかがみにいせき 中上Ⅱ遺跡	しまねけんいずもしひがしじんざいちょう 島根県出雲市東神西町	32203	W201	35°19′15″	132°42′15″	2018 0724 ～ 2018 1217	1,200	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
京田遺跡	集落	縄文時代	配石土坑・集石（縄文時代）	縄文土器、木製品、石器	縄文時代中期末の配石土坑と土器を検出、縄文時代後期後葉を主とする土器や石器が出土
中上Ⅱ遺跡	集落	弥生時代後期・弥生時代末～古墳時代初頭・古墳時代末・鎌倉時代・室町時代	加工段１（弥生時代後期）、加工段５（弥生時代末～古墳時代初頭）、加工段１（古墳時代末）、盛土跡・ピット群・土坑３（鎌倉時代）、ピット群・溝５（室町時代）	弥生土器、土師器、須恵器陶磁器、石器、金属器	弥生時代後期～古墳時代末の集落跡、中世前半期の大規模な盛土、谷間を流れる自然河道

要約

京田遺跡２区では、縄文時代中期末の配石土坑を検出し、縄文時代後期後葉を主とする土器や石器が出土したことにより、丘陵裾部が生活圏域にあったことがわかる。

中上Ⅱ遺跡では、丘陵谷間を流れる自然河道北岸の平坦面で弥生時代後期～古墳時代終末期の加工段を５基検出し、谷奥側でも加工段状に構築された土器集中箇所を２箇所で検出した。これらは川岸付近に位置しており、川辺で何らかの祭祀が行われた可能性がある。また加工段の上層には中世前半期に造成されたとみられる盛土が厚く堆積しており、築堤に伴う盛土の可能性も含め谷間北岸を整地する大規模な開発が行われたことを示唆している。

印刷仕様

紙　　質	表　紙	レザック四六判　220kg
	本　文	上質紙Ａ判　57.5kg
		上質コート紙Ａ判　70.5kg
	写真図版	上質コート紙Ａ判　70.5kg
Ｄ　Ｔ　Ｐ	Windows 10 Pro	
	Adobe　InDesign CC　Photoshop CC　Illustrator CC	
画像原稿	階調画像線数　175線（AMスクリーン）	

京田遺跡２区
中上Ⅱ遺跡

一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書６

発　行　2020（令和2）年３月
発行者　島根県教育委員会
編　集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒690-0131　島根県松江市打出町33番地
電話　0852-36-8608
印　刷　株式会社　クリアプラス